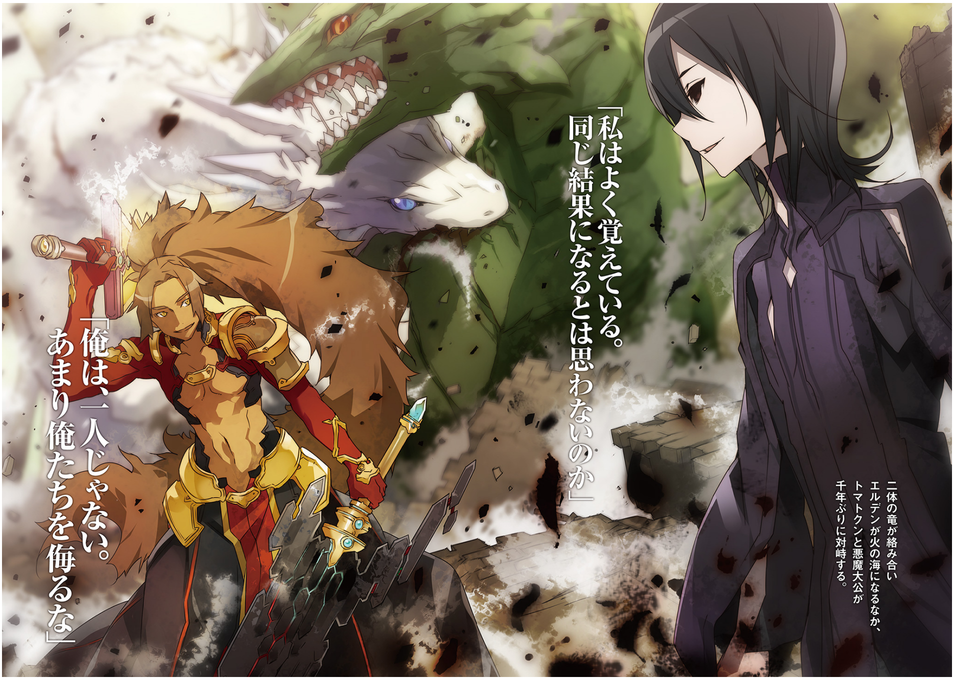

薔薇のマリア
19. たとえ明日すべてを失うとしても
十文字青
Ao Jyumonji
A BRAVE HEART OF RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.
角川スニーカー文庫


本物だ。キミが、そこにいる。キミの唇が動く。
何か言おうとしている。声にならない。
だけれど唇の動き方でわかる。
アジアン
ああ。それだけでキミは破壊してしまう。
ボクは打ち砕かれる。粉々になる。
キミがあふれる。全世界がキミ一色に染まる。
A BRAVE HEART OF RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.
薔薇のマリア
19. たとえ明日すべてを失うとしても


二体の竜が絡み合い
エルデンが火の海になるなか、
トマトクンと悪魔大公が
千年ぶりに対峙する。
「私はよく覚えている。
同じ結果になるとは思わないのか」
「俺は、一人じゃない。
あまり俺たちを侮るな」


その名を知る者なら、一目でわかるだろう。
男は生まれながらの王だ。正真正銘の魔導王、
〝原子の極大魔術士〟――
「キング・グッダー……」

薔薇のマリア

19．たとえ明日すべてを失うとしても

十文字　青

角川スニーカー文庫

A BRAVE HEART OF RED ROSE 19

Everything but tomorrow

Ao Jyumonji

First published 2013 in Japan
By
Kadokawa Shoten Publishing Co.,Ltd.

illustration : BUNBUN
design work : design CREST

A BRAVE HEART OF RED ROSE

19

CONTENTS

CONTENTS

A BRAVE HEART OF REDROSE

19

MAIN CHARACTERS



Azian
アジアン

クラン《昼飯時(ランチタイム)》の頭領(マスター)。



Mariarose
マリアローズ

主人公。美貌の侵入者(クラッカー)。



Katari
カタリ

トラブル＆ムードメーカー。



Pimpernel
ピンパーネル

元暗殺者(アッサシン)。



Tomatokun
トマトクン

クラン《ZOO》の園長(マスター)。



Honeymerry
ハニーメリー

脱走機術師。



Yurika Snow-white
ユリカ白雪

最強伝説。



Safinia
サフィニア

魔術士。不幸。



Rom Four
ロム・フォウ

深い森の黒真珠。



Fei Yang
飛燕（フェイヤン）

クラン《S＊K》（シリアル・キラーズ）の頭目。



Q'bell-Adrus
きゅー

キューベルアドラス。



SIX
シックス

幽閉者。



Johann Sunrise
ヨハン・サンライズ

《秩序の番人》（モラル・キーパーズ）の総長。



Jean-Jacques de Joker
ジャン・ジャック・ド・ジョーカー

でたらめ貴族。

and the others

Twaning
トワニング

Ciro Pancaro
チーロ・パンカロ

Funny Frank
ファニー・フランク

Beartricea
ベアトリーチェ

Jing Wang
荊王

and etc.

Calamitage 003 "deathroll"

二巡月三十番日　城塞都市シャッコー

「こっちだこっち！　急げ急げ急げ！　急がねえと置いてっちまうぞゥラッ！」と列の先頭で禿とく頭とうの男が怒ど鳴なっている。強こわ面もてで身体からだも態度も大きくてめちゃくちゃおっかない。でもあの男は、置いてっちまうぞ、と言いながら、そんなことはしないと誰だれもが知っている。チーロ・パンカロ。どこからどう見ても混じりっけなしの極ごく悪あく人にんなのに、中身はそうじゃない。彼と彼の率いるパンカロ・ファミリーの男たちがシャッコー市民のために払はらってきた犠ぎ牲せいを知らない者はいないだろう。

　アルフレッド・ロウストーンは、だから、祖母の手を握にぎりしめて懸けん命めいに駆かける。家族と故郷を守るべくジョーカー軍に志願したアルフレッドの父はもういない。防衛戦のさなかに命を落とした。母はアルフレッドの妹たちを連れて先に避ひ難なんしている。アルフレッドは年老いた祖母を連れて、なんとか母たちと合流しないといけない。チーロ・パンカロについていけば大丈夫だ。アルフレッドはそう信じた。母と妹たちもきっと無事だ。心配なんかするな。したってしょうがない。

「……くそ、煙けむりが！」目にしみる。祖母が死体につまずいてよろめいた。とっさに支えると、誰かに背中を押された。「──おうっ、すまん……おまえ、アルフレッドか!?」見知った髭ひげ面づらだ。この戦争が起こる前はパン屋だった。最近は何をしていたのか。片かた腕うでがない。戦傷だろう。「平気です、ベルウッドさん！　こっちこそ、ごめんなさい！」「謝るこたあない！　おばあちゃん連れて一人か!?　よければ手を貸すぞ！」言われて、アルフレッドは少し考えた。祖母はだいぶ疲つかれている。強がっている場合じゃない。「ありがとう、お願いします！」「よし、任せろ！」

　ベルウッドと二人がかりで、祖母を担かつぐようにして走る。気の強い祖母も文句を言わない。口を開く元気もないのだ。精神的にもだいぶ参っているだろう。ショックを受けてもしょうがない。

　だって、街が。

　シャッコー。北の雄ゆうモトローリィの玄げん関かん口に立ちふさがって、長らく外敵を寄せつけなかった難なん攻こう不落の城じよう塞さい都市が、崩ほう壊かいしつつある。

　市民はこの街に、愛着を抱いだいていただけじゃない。ツァール峡きよう谷こくの北側斜しや面めんに築かれた人の手によるものとは思えないほど壮そう大だいで美しいこの街は、市民の誇ほこりだった。それが今まさに打ち砕くだかれようとしているのだ。まだ十三年しか生きていないアルフレッドでも胸が引き裂さかれそうな思いを味わわされているのだから、ここで六十年以上暮らしてきた祖母はもっとつらいだろう。

　だけど、逃にげないと。ぐずぐずしていたら死んでしまう。そこらじゅうに、黒い汚よごれみたいに、こびりつくみたいに転がっている死体と同じように、死んでしまう。自分が死にたくないというよりも、家族や友人が死ぬのはいやだ。すでに大勢死んだし、これからも死ぬだろう、死はひどくありふれていて、次の瞬しゆん間かん、自分自身が死んでもたぶん驚おどろかない、それでも身近な人の死にはできるだけ接したくない。それがアルフレッドの素す直なおな気持ちだった。死にたくない、よりも、死なせたくない。死んでほしくない。本当は知っている人だけじゃなくて、誰も死んでほしくない。この戦争が早く終わればいい。

「チィークソッ！　敵がいんじゃねえか！」チーロが不ふ穏おんなことを言った。アルフレッドの位置からでは見えないが、行く手に敵がいるのか。どうするのだろう。「━やるぞパンカロッ！　突つっこんでぶっちぎるッ！　よっしゃァ俺につづけェ……ッ！」チーロ以下パンカロ・ファミリーの男たちが突とつ進しんする。避難民の列は乱れた。立ち止まる者もいれば後退する者もいる、パンカロ・ファミリーに引きずられるようにして足を速める者や、左右の路地に逃げこむ者もいる。「━ここは彼らについていくのが一番だ！」ベルウッドはあくまでパンカロ・ファミリーに従うつもりのようだ。アルフレッドもそうするのがいいと思った。というか、それしかない。とにかく前に進め。進むんだ。ちゃんと目を開けているのに、まるで目をつぶっているみたいだ。何が起こっているのか、さっぱりわからない。ベルウッドが「うわっ！」と声をあげた。見ると、ベルウッドは血まみれになっていた。亡もう者じやのようなやせっぽちの悪あく魔まがベルウッドの背中にしがみついて、後頭部に噛かみついている。「━ベ、ベルウッドさん……！」

助けようとしたら、ベルウッドは祖母の身体をアルフレッドのほうに押しやった。「お、俺のことはいい！　行け！　おばあちゃんを守るんだぞ！」そんな━と抗こう弁べんする間もなかった。ベルウッドは悪魔に引き倒たおされた。まごまごしていたら、後ろからくる人たちに突き倒される。行くしかない。

「おばあちゃん、つかまって……！」祖母を抱かかえて走りだす前に、悪魔を逆に組み敷しいているベルウッドの姿をちらっと見た。「━ただでは死なんぞ、この悪魔野や郎ろうめ！」そんな声も聞いたような気がする。

　涙なみだが出てきた。泣くのは父が死んだとき以来だ。

　でも考えてみれば、父が死んでからまだ、七日しかたっていない。

　たった七日の間に、父が死んで叔父おじが死んでいとこが死んで知りあいが何人も死んで友だちのブラントやトーマスも死んで、シャッコーが陥かん落らくしようとしている。

　アルフレッドたちは、何もかも失おうとしている。

「ついてきてっか！　離はなれるんじゃねえぞ！」チーロ・パンカロが叫さけぶ。返事をする避難民たちもいる。アルフレッドは祖母をきつく抱だきしめてひたすら足を動かす。前で誰かが倒れた。乗り越こえて進む。自分がどこか遠くにいるような感覚。アルフレッドはここにいる。それなのに、ここにいない。すべての音が遠く聞こえる。「……もういいよ」と祖母が呟つぶやく。アルフレッドは無視する。祖母が「……もういいよ」と繰くりかえす。「……もうたくさんだよ。こんなのは、くるってる。アル、アルフレッドや……おばあちゃんはね、疲れちゃったよ……もう走れないよ……ここに置いてっておくれ……あんたの足を引っぱりたくないんだよ……お願いだからさ……」祖母は泣いている。こんな祖母を見たのは初めてだ。そうしようかな。そうしたほうがいいのかな。一瞬、そんな恐おそろしいことを考えてしまう。アルフレッドだって疲れきっている、これ以上は無理だ。だけどベルウッドに言われた。おばあちゃんを守るんだぞ、と。ベルウッドは勇ゆう敢かんだった。父は家族の、街の、みんなのために命を捧ささげた。祖母一人くらい守れないでどうする。途と端たんに確かな感覚が戻もどってきた。自分はどこか遠くにいるんじゃない。間ま違ちがいなくここにいる。

戦場に。

切り抜ぬけないといけない。

「だめだよ！　おばあちゃんを置いてなんかいけない、一いつ緒しょに行こう……！」

祖母はうなずいてくれたのか。わからない。その前に「シイガキアカッ！」というような耳みみ障ざわりな音がした。声か。悪魔だ。向かって左側に立ちならぶ建物の屋根の上に、毛むくじゃらでギョロ目の悪魔どもが。数は多い。たくさんいる。飛びかかってくる。悲鳴。もみくちゃにされた。身動きがとれない。誰かの肘ひじがアルフレッドの鼻面にあたった。瞬間、何も見えなくなった。祖母がアルフレッドの名を呼んでいる。助けて。死ぬ。どけ。やめて。こっちはもう。声。声。声。祖母がアルフレッドに覆おおいかぶさっている。守らないといけないのに、守られている。大丈夫だからね。大丈夫だからね。大丈夫だからね。祖母が自分とアルフレッドに言い聞かせるように、呪じゅ文もんみたいに唱える。でも引っ剝ぱがされてしまう。「──ああ！」と祖母が絶ぜつ叫きょうした。祖母はギョロ目の毛だらけ悪魔に髪かみをつかまれている。アルフレッドは悪魔にしがみつく。「おばあちゃんを放せ……！」すぐに別の悪魔に蹴け飛とばされた。何回も。死ぬかもしれない。殺される。必死で悪魔の脚あしにとりすがった。頭を鷲わしづかみにされて揺ゆさぶられた。割れる。頭ず蓋がい骨こつが。アル、アル、と祖母が叫んでいる。祖母はまだ生きている。

「おっしゃらァァー……ッ！」チーロ・パンカロの声だ。何かが派手に潰つぶれる音がして、アルフレッドは痛みや恐きょう怖ふからいっぺんに解放された。チーロがやってきて悪魔をぶっ殺してくれたのだ。鉄球みたいな義手が猛もう威いをふるっている。ぶん殴なぐられた悪魔は粉ふん砕さいされる。吹ふっ飛ばされる。恐れをなして逃げだす悪魔もいる。「……おばあちゃん！」アルフレッドは祖母に駆けよった。祖母は投げだされたような姿勢で倒れている。左脚が変な角度に曲がっている。髪の毛ごと頭皮の一部が引きちぎられている。アルフレッドが肩かたに手をふれると、祖母は苦しそうに唸うなった。薄うす目めを開ける。アルフレッドを見た。
「……アル。アルや。無事だったんだね。よかった……」

アルフレッドは何も言えない。言葉が出てこない。見つからない。

祖母が手をのばす。アルフレッドはその手を握りしめた。祖母は笑った。「おばあちゃんは、いいから。逃げな。逃げるんだよ。お母さんと、ハンナと、テリーによろしく伝えておくれ。いい人生だった、ありがとうって、おばあちゃんが言ってたってね。アル。おまえにも感謝しないとね。ありがとう。いい子だね。本当にいい子だ。おまえみたいな孫がいて、幸せだよ。愛してるよ」

こんなとき、どうすればいいのだろう。

何を伝えればいいのか。何をしてあげればいいのだろう。

「ぼ、僕も──」アルフレッドはしゃくりあげながら、自分も祖母が大好きだと、せめてそれだけは言おうとした。祖母が悲鳴をあげた。「ひいっ……!?」

いきなり持ちあげられて、担がれたからだ。禿頭。鉄球。チーロ・パンカロだ。

「やい、ガキ！　めそめそしてんじゃねえ！　てめえのバーサンはこのオレが運んでやっからよ、バビッとしろ、バビッと！　掘るぞ！　いや掘らねえけども、そういう趣しゆ味みはねえし！」「──は、はい……っ！」反射的に背筋をのばして返事をすると、チーロは凶きよう悪あくそうな顔に迫はく力りよくのある、それでいて妙みように愛あい嬌きようがある笑えみを浮うかべた。「いよォーしッ、その調子だ！　行っくぞォついてこい……ッ！」

不思議だ。この男のそばにいると気分が軽くなる。明るくなる。なんとかなりそうな気がしてくる。アルフレッドはチーロの背中を追いかけた。周りにパンカロ・ファミリーの男たちがいる。避難民はだいぶ少なくなった。でも、ファミリーの連中はそんなに減っていない。さすがだとアルフレッドは思う。この人たちはプロだ。兵士よりも頼たよりになる。歴戦の強つわ者ものだ。祖母はチーロの肩の上で目を白黒させている。気の毒だがちょっとおかしい。笑っている場合じゃないけれど、笑ってしまいそうだ。

「──坊ぼつちゃん！」と、チーロの斜ななめ後ろにつけている短たん髪ぱつで背の高い男が鋭するどく注意をうながした。巨きよ大だいな影かげが差す。ただの邪じや竜りゆうじゃない。降下してくる。というか、邪竜じゃない。鳥だ。馬ば鹿かでかい、梟ふくろうのような巨鳥。背というか首のところに、何か乗っている。白い甲かつ冑ちゆうを身にまとった一人の戦士が。人間みたいに見える。

だけど人間のわけがない。悪魔に決まっている。「──おわォッ！」チーロが足を止めた。「なんっか厄やつ介かいそうなのがきやがったじゃねえか！　ワクワクモンだなァオイ……ッ！」

「我が名はスレイナール・マイヘルヒン、地じ獄ごくの侯爵ラデオンである！」白ずくめの悪魔はそう名乗ると、高々と長ちよう剣けんを掲かかげた。「糞くそどもよ、黙だまって我が剣の錆さびとなれ……！」

「だーれが錆なんかになるかよッ！」チーロは振ふり向くなり祖母を投げた。「受けとれ、ボボ・ファッチョ！　バーサン死にかけてっから落とすなよ！」「──うひぇっ!?」とすっとんきょうな声をあげながらも、太った男がどうにか祖母をキャッチした。

　マイヘルヒンが巨鳥から飛び降りる。空中で白い盾たてを構え、チーロめがけてまっしぐらに落下してゆく。チーロは迎むかえ撃うつ気だ。短髪の男が「俺らは鳥をやるぞ！」と指示を飛ばして刀を抜いた。「──戦えねえやつは下がるンだ！　巻き添ぞえを食いたかァねえだろ、急げ……ッ！」避難民がわっと後退しはじめた。巨鳥が降下する。チーロはマイヘルヒンと斬きり結んでいる。すごい風圧。アルフレッドは転びそうになった。ヒガアアアアアァァァァァァァァァ。巨鳥が啼なく。鉤かぎ爪づめのついた脚で、瓦が礫れきを引っつかんで投げつける。瓦礫がパンカロ・ファミリーの男たちを直ちよく撃げきする。何人もの肉体が呆あつ気けなく飛散する。それでも男たちは怯ひるまず巨鳥に突進してゆく。鉤爪にとらえられても、巨鳥の身体からだに刀を突き立てる。おぞましい嘴くちばしでついばまれながら、巨鳥の顔面に一ひと太刀たち浴びせようとする。「イビツゥッ……！」短髪の男が悲痛な叫びをあげる。「な、なんともあらへん！」巨鳥に食われている出っ歯の男がウアッハッハッと笑う。「こんくらい、どってことないわ！　どってことなあ……！」出っ歯の男は巨鳥の眼球に刀を突き刺さした。その直後、彼の上半身と下半身が、巨鳥に噛みちぎられて離ればなれになった。「──化物めェッ！　イビツをやりやがったな……ッ！」短髪の男が突っこんでゆく。巨鳥が羽ばたいた。息を吸う。吐はきだす。ただの息じゃない。赤い霧きりのような息だ。赤い息を食くらった男たちが、顔や喉のどや胸を掻かきむしって激しく苦く悶もんする。短髪の男もしゃがみこんで苦しんでいる。「ぐああぁっ！　うぉおおぁっ！　おごおおぉぉ……ッ！」

「くっそ、てめえら……！」チーロはあっちに飛んだりこっちに跳はねたりして、鉄球の義手でマイヘルヒンの剣を防いでいる。防戦

一方だ。「根こん性じよう見せろや、てめえらパンカロだろうが！　畜ちく生しよう、畜生、畜生、畜生、こんちきしょう……ッ！」

　アルフレッドは鼻や口の周りを手でぬぐった。血まみれだ。とくに鼻血がひどい。祖母は大丈夫だ。太った男が担かついでくれている。足あし許もとに刀が落ちていた。きっとパンカロ・ファミリーの誰だれかが使っていたものだ。死ぬ。男たちが避難民を、アルフレッドたちを、そしてたぶん矜きよう恃じを守るために、死んでゆく。畜生。畜生。畜生。自分はガキだ。悔くやしい。無力なガキだ。悔しい。悔しい。悔しい。アルフレッドは刀を拾った。使い方はわかる。実戦の経験はない。でも練習くらいはした。自分に何ができるだろう。自分ごときに。戦え。戦うんだ。やられっぱなしはもうたくさんだ。弱くても、ただのガキでも、戦うことはできる。振りしぼる勇気は持っている。死んだってかまわない。だけど何もしないで死にたくはない。根性を見せろ。そうだ。やってやる。そうだ！　アルフレッドは刀の柄つかを握にぎりしめた。転げまわっている男たち、もう動かない男たちの間を駆かけ抜ける。「あああああ！　あああああああああ！　あああああああああああ……！」と声を出す。とにかく大きな声を、腹の底から。巨鳥が片目でこっちを見る。ヒガアアアアアアアアアァァァァァ。たぶん、アルフレッドに狙ねらいを定めた。足がすくみそうになる。止まるな。行け。行け。行くんだ。自分自身を叱しつ咤たして、父を思う。父は断だん崖がい城じよう壁へきを登ってきた敵の槍やりで串くし刺ざしにされた。そのまま断崖絶壁の下に身を投げて、敵を道連れにしたのだと聞かされた。だから遺体とは対面できなかった。もうちょっとで会えるかもしれない。自分も父に恥はずかしくない死に方をしたと、胸を張って報告できるかもしれない。巨鳥が羽ばたく。息を吸いこむ。あの息か。死ぬにしてもあれはちょっといやだなと、少しだけ思った。

「馬鹿……！」

　横合いから何者かが飛びだしてきて、アルフレッドの腰こしにタックルした。真っ赤な髪。身体は決して大きくない。きっと女の人だ。でも力強い。アルフレッドは勢いよく赤い髪の人に押されて「うわっ」と路地に倒たおれこんだ。赤い髪の人がアルフレッドに馬乗りになっている。すばらしく鮮あざやかな橙だいだい色いろの瞳ひとみだ。なんてきれいなんだろう。見とれていたら胸むな倉ぐらをつかまれた。「死にたいのか！　自分の命だからどう使おうが

勝手だって言いたいとこだけど、目の前で無む駄だ遣づかいされるとはっきり言って気分悪いんだよ！　誰だって生きてられるわけじゃないんだから、くだらない死に方するな！　わかった!?　返事は!?」

「……は、はい。わかり……ました。ごめんなさい。もうしません」

「よし」赤い髪の人はにっこり笑ってアルフレッドの上からどいてくれた。

　動どう悸きがする。すぐそこにいる赤い髪の人が実在の人物だとはどうしても思えない。こんな人がこの世にいるなんて。夢か幻まぼろしか何かじゃないだろうか。まるで、目を覚ませアルフレッド、と言われたかのようだった。ギガシャアアアアアアアアアアァァァァァァァアアアアアアアアァァァァァァァァァァアアアアァァァァァァァァァ……！　すさまじい声がした。きっと巨鳥だ。アルフレッドは慌あわてて起きあがった。赤い髪の人が路地から顔を出している。アルフレッドも身を乗りだして見た。目を疑った。これは夢のつづきだ。そうに決まっている。

　だって、巨鳥が炎ほのおの柱と化している。しかも、藍あい色いろの炎だ。

　炎えん上じようしながら身をよじる巨鳥の頭上に、女の人が浮いている。

　黒と緑色の服を着て、銀色の髪をなびかせている、ほっそりした女の人が。

　巨鳥は羽ばたこうとした。飛びたとうとしている。女の人に襲おそいかかるつもりなのか。だけどできなかった。「──離りゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！」女の子だ。アルフレッドと同年ねん輩ぱいか、ちょっと上くらいの女の子が矢のように駆けてくる。女の子は光っている。黄金色に。そのまま巨鳥に突とつ撃げきする。「超ちよう絶じえつ紹しよう、黄おう金ごん権ごん化げ……！」飛び蹴りだ。女の子は燃えさかる巨鳥の土手っ腹に飛び蹴りをぶちかまして、ぶち抜いた。ヒイイイイィィィィイイイイイイイイィィィィィィィィィン……。巨鳥が断だん末まつ魔まの叫さけびをあげて崩くずれ落ちる。アルフレッドはあんぐりと口を開けた。「は……はは……ははは……」べつに可笑おかしいわけじゃな

いのに、笑ってしまった。こんな。こんなことって。アルフレッドはビクンッと跳とびあがった。「どけ、チンチロ……！」大だい音おん声じようというよりも、咆吼。白ずくめのマイヘルヒンに追いまわされていたチーロが「はぁっ!?」と飛びのいた。

あれは何だ。

獣けものだとアルフレッドは思った。もちろん、あんな獣は見たことがない。でも野や獣じゆうだ。人の形をした、野獣の王。

長い、長すぎる、茫ぼう々ぼうたる髪かみの毛を轟ごうと振り乱して、野獣の王がマイヘルヒンに躍おどりかかる。「なっ──」マイヘルヒンは長剣で身を守ろうとしたようだ。まったくの無意味だった。野獣は右手に身みの丈たけほどもある黒っぽい長大な剣を、左手には琥こ珀はく色いろの剣身波打つ大剣を持っていた。その右手の剣がまたたく間にマイヘルヒンを食い荒らした。ただ叩たたき斬ったのでも、打ち砕くだいたのでもない。剣が膨ふくらんで、拡ひろがり、マイヘルヒンを押し包んで、木こっ端ぱ微み塵じんにしたのだ。剣、だって？　違ちがう。剣なんかじゃない。あんなもの、剣とは呼べない。髪の毛の合間からのぞく黄玉トパーズのまがまがしい瞳は、まさしく血に餓うえた獣のそれだ。アルフレッドは逃にげだしたかった。悪あく魔まなんかよりもずっと怖こわい。チーロが尻しり餅もちをついている。「……いやオレ、チンチロじゃねえって」

北ワールオック山麓

「──ナツコォッ！　早くオーノを……！」アジアンは叫んで唇くちびるを嚙かむ。腕うでの中で、綿みたいにやわらかそうな茶色い髪をしたオーノは、血の泡あわを吹きながら全身を引きつらせている。否定したいが、できない。オーノは死のうとしている。アジアンはオーノの頰ほおに手をあてて顔を近づけた。「オーノ、オーノ！　聞こえるかい!?　聞こえているだろう!?　こらえろ、行っちゃだめだ、ここにいるんだ、頼たのむから……！」

「……ど……だ……」オーノは眼球を動かして、アジアンを見ようとしている。何か言おうとしている。「……だ……だ……だ……」

「オーノ……！」

「…………っ……―」

　そして、オーノは笑った。顔全体を大おお袈げ裟さなほどゆがめて、イッヒヒヒ、と。オーノは陽気で、ふざけていて、いつもそんなふうに笑う男だった。

　ようやくナツコが走ってきた。「―ごめんアジアン、手一いつ杯ぱいで……！」

　アジアンは「ああ」と答えて首を振った。一足遅おそかった。間に合わなかった。そんなことは言うべきじゃない。アジアンはオーノを地べたに寝ねかせて瞼まぶたを閉じさせた。ボクにはこんなことしかできないのか。「―他ほかの人のところへ……！」

　アジアンはナツコにそれだけ告げてタナトゥスの黒こく翼よくを広げた。自分に何ができる？　問うている場合じゃない。飛べ。翔かけろ。ボクにはそのための翼があるじゃないか。たとえそれが本当は自分の一部じゃないとしても。それらが虎こ視し眈たん々たんと宿主を狙う狡こう猾かつな魔物どもだとしても。それでも、ボクには力がある。この身に巣くう凶きよう暴ぼうでおぞましい魔物を従わせる力が、ボクにはある。

「ジャシュギシュ！　アルカーディア！」

　アジアンの左腕は膨ぼう張ちようして黒こく鱗りんに覆おおわれ、その先せん端たんには嚙み砕き食い破る顎あぎとが現れた。右腕はほどけて、無数の黒い管の集合体とでも呼ぶべきものへと成り果てる。まだだ、とアジアンは思う。タナトゥス。ジャシュギシュ。アルカーディア。四体目は危険だ。いや、恐おそれるな。恐きよう怖ふはボクを弱らせる。おまえたちがボクを意のままに操あやつることなどできはしない。支配者はボクだ。それに、おまえはヤヌゥほどじゃない。

「ウルクハンド……！」

　呼びだすと、全身の皮ひ膚ふがいっぺんに裏返るような感覚に襲われた。それはアジアンの足の先から首までを包みこむ、鱗うろこでも毛でもない、黒い繊せん維い状の何かだ。その隙すき間まから青い輝かがやきがもれている。それらは数えきれないほどの瞳だ。

ウルクハンドはまたたく瞼と瞳の魔物なのだ。

　アジアンは地面を蹴けった。ウルクハンドに侵おかされた両りよう脚あしは、一蹴りで大地を大きく陥かん没ぼつさせる。瞬しゅん時じに数百メーテル飛びあがって、戦場を見おろした。北ワールオック山脈の麓ふもとに広がる森林は悪魔に、蜥蜴とかげ人に、名も知らぬ異形の異界フリー生物クスどもに埋うめつくされている。女め豹ひようことオトミが率いる通つう称しよう・豹ひようの軍団は、完全に敵に包囲されていた。ヨナ樹海から狩かりだされて以来、悪魔の軍勢につきまとわれている。ついに敵は、この場所で豹の軍団を追いつめたのだ。かつては非戦せん闘とう員ふくめて三千の規模を誇ほこった豹の軍団も千に満たない。おそらく総勢五百にも届かないだろう。対する敵は数千どころか数万、あるいはそれ以上か。アジアンの目が北西の方角に人工物を認めた。建物。城か。そちらにも悪魔どもが集まっている。城を取り囲んでいるようだ。攻せめている。何者かが、たぶん人間たちが籠ろう城じようして、抵てい抗こうしているのだ。

　一つ呼吸をして降下する。敵の一角に食くらいつく。アルカーディアが踊おどる。ジャシュギシュが大暴れする。アジアンの両足には爪つめが生えている。ウルクハンドの瞼と瞳でできた獰どう猛もうな爪だ。爪が悪魔どもを引き裂さく。タナトゥスの黒翼が蜥蜴人を斬きり刻む。黒い管の奥でアルカーディアが歌いだす。その声は愉ゆ悦えつに揺ゆれている。快楽に酔よっている。彼女の歌声がアジアンを猛たけらせる。死を。死を。死を。もっと死を。殺せ。殺せ。殺せ。殺し尽つくせ。虐カー殺ネイ人ジド形ール。おまえはわたしの操り人形だとアルカーディアは歌っている。違う。違う。違う。ボクはボクの意思で殺している。ボクが殺したいから殺している。殺さつ戮りくを求めているのはおまえじゃない。ボクだ。ボクがおまえたちを使し役えきして殺している。ソウダオマエハコロシテイル。ジャシュギシュが嗤わらう。オマエハコロシガダイスキダ。コロセ。コロセ。コロセ。言われるまでもない。蜥蜴人たちは怯ひるんでいる。ジャシュギシュを前にすると彼らは手も足も出ない。蜥蜴のくせに蛇へびに睨にらまれた蛙かえるのような醜しゆう態たいをさらす。ジャシュギシュが彼らを食い散らかす。ソウダ。モットコロセ。サラニコロセ。コロサセロ。いいだろう。望むところだ。さあやるがいい。やれ。食らえ。やれ。血肉を平らげろ。タナトゥスが耳みみ許もとで囁ささやく。Are you happy?　ああ。もちろんだとも。幸せだヨ。楽しいからサ。楽しくてたまらない。オ・ゴ・ゴ・ゴ・ゴ・ゴ・ゴル・ゴル・ゴル。ウルクハンドが何か

言っている。喜んでいるのだ。ボクにはそれがわかる。アルカーディアが歌う。歓かん喜きの歌を。ボクを賛美する歌を。ボクらを祝福する歌を。ギシャギシャギシャギシャギシャギシャギシャギシャ。ジャシュギシュが笑っている。ボクはボクはアルカーディアはジャシュギシュはウルクハンドはタナトゥスはボクは殺す。ボク／アルカーディア／ジャシュギシュ／ウルクハンド／タナトゥスが殺す。ボク＋アルカーディア＋ジャシュギシュ＋ウルクハンド＋タナトゥスは殺す。ボク＝アルカーディア＋ジャシュギシュ＋ウルクハンド＋タナトゥス＝ボクが殺す。ボク＝アルカーディア＝ジャシュギシュ＝ウルクハンド＝タナトゥス＝ボク＝殺す。虫のようだ。敵じゃない。虫だ。踏ふみ潰つぶす。百万匹びきいようが一千万匹いようが一億匹いようが同じだ。出せ出せとヤヌゥが言っている。自分も出せ。ニハニハニハニハ誰だれかが笑っている。ニハニハニハニハ。笑っているのは誰？　ボクだ。ボクは笑う。ボクは笑い殺す。笑う。殺す。笑う殺す。すべてを壊こわしてしまいたいヨ。抱だきしめるようにサ。ボクは歌う。存在しているんだな。声を出せ。高い声を。低い声を。それは旋せん律りつになるだろう。悲しいのかい？　それとも嬉うれしい？　完結しているんだ。ここで何もかもが。ずっとたどりつきたかった。仮面をつけた男が両手に大きな剣けんを持って振ふりまわしているヨ。なんだか懐なつかしいな。アイツを食べよう！　Ｙｅｓ！　Ｊａ！　Ｙｅａｈ！　虫をひねり潰しながら迫せまる。肉にく薄はくする。仮面の男が大剣をふるう。左腕で撥はねのける。仮面の男の手から大剣が一本吹ふっ飛ぶ。さあ、いただきます。ボク＝ボク＝ボク＝ボク＝ボクの奔ほん流りゆう。のみこまれて仮面が弾はじけ飛ぶ。素す顔がおがあらわになる。血走った眼球が飛びだしている。筋肉が剝むきだしになったような皮膚。鼻び梁りようがない。鼻び腔こうはただの穴だ。唇もない。歯はぜんぶ義歯だ。金属製の牙きばのような義歯。ＡＺＩＡＮ……！　仮面を失った男が素顔で言う。ＡＺＩＡＮ？　あじあん？　アジアン？　それは――それは――……ボクの、他の誰でもない、ボクの＝ボク？＝アルカーディア？＝ジャシュギシュ？＝ウルクハンド？＝タナトゥス？＝ボク？　違う、そうじゃない、ボクの、アルカーディアでもジャシュギシュでもウルクハンドでもタナトゥスでもない、ボク自身の名前だ。

　やっと気づく。

　自分が仲間を、リキエルを手にかけようとしていたことに。それも、たやすく。人間には、並の人間では太刀たち打ちできないどころか、極限を超こえて鍛きたえ抜ぬかれた戦士であるリキエルでさ

えあらがうすべのない、圧あつ倒とう的な力で。無造作に、蟻ありを踏みにじるように。

　とりかえしのつかないことをするところだった。違う。もうしてしまった。誇りを奪うばい去るような真似まねを。今さらリキエルから離はなれても遅い。遅くても、離れないといけない。ボクの身体からだは簡単に人を傷つけてしまう。殺してしまう。食らってしまう。これがボクだ。弁解できない。ボクの正体だ。本ほん性しょうだ。

　ああ、ボクは人間じゃない。

　人形だ。

　ルヴィー・ブルームに作られた、人形。

　虐カー殺ネイ人ジド形ール。

　でも、リキエルが叫ぶ。素顔のまま。仮面を拾おうともしないで。

「アジアン！　俺は、問題ない……！」

　問題？……ない？……問題？……問題……ない？

　なぜだ。

　どうしてそんなことが言えるのか。

　わからないヨ、リキエル。ボクにはわからない、だけど──ボクは甘えよう。キミの言葉に甘えさせてもらおう。ボクは挑ちよう戦せんしないといけない。何度でも、何度でも。何よりもまず、自分自身に挑いどんで打ち勝たないといけない。怖いんだ。恐ろしくてたまらないんだ。ボクはどうなったっていい。ボクなんか滅ほろびたってかまわない。キミたちを壊してしまいそうで怖いんだ。ボクは知っているんだ。結局はボクの一部としか言いようがないアルカーディアが、ジャシュギシュが、タナトゥスが、ウルクハンドが、そしてヤヌゥが何を望んでいるのか、ボクはよく理解している。敵も味方もない。すべて殺そうとしている。食らいたがっている。だからヤツらはボクをそそのかす。そして過あやまちを犯おかさせようとする。そうすればボクがどうなるか、何をするか、ヤツらはわかっているんだ。その手には乗るものか。封ふうじこめてお

けばいい。本当は。でもボクには力が必要だ。こんなときだから、より強い力が。ヤツらはそれも見抜いている。ボクの貧ひん弱じゃくな本体と弱い心にヤツらはつけいろうとしている。ボクはねじ伏ふせないといけない。それが唯ゆい一いつの道だ。

「ありがとう、リキエル……！」

　黒こく翼よくを羽ばたかせて飛ぶ。おまえたちの好きにはさせない。アジアンは制せい御ぎょする。形を整える。ヤツらを自分自身に近づける。できるだけ人の形に。ボクは人形。上等じゃないか。ボクは人間じゃないのかもしれない。でも人間の皮を被かぶっている。ジャシュギシュは黒鱗に覆われた左腕に。アルカーディアは黒い管が寄り集まってできた右腕に。ウルクハンドは目を細める。青い光は微かすかにしかもれない。タナトゥスの翼は小こ振ぶりになる。おまえたちに使われるんじゃない。ボクがおまえたちを使うんだヨ。スキンヘッドのレイジ兄と反逆的なスタイルのレイジ妹が敵中で孤こ立りつしている。アジアンはそこへ向かう。レイジ妹が道徳刀を振りかざして歓かん声せいをあげる。「──アジアンキタァーッ！　くると思ってたっつーのＡＨＡ、なあ兄！　思ってたよな！」「ああ……！」レイジ兄は傷だらけで血みどろだ。左腕がない。腹には剣が何本も刺さっている。血の繋つながっていない妹の背中を守って、守り抜くために幾いく百の傷を負ったのだろう。その傷を癒いやすことも引き受けることも、アジアンにはできない。できるのはただ一つ。敵を殺す。アジアンはそうした。ヤツらを暴れさせるんじゃない。研とぎ澄すます。力を集中させて、ふるう。悪あく魔まどもの間を疾とく速く駆かけ抜ける。そうして連中の首を両手でそっとさわって回るだけでいい。それだけでぶち切れる。赤黒い血が噴ふきあがり、首、首、首が、刎はね飛ばされる。まだだ。もっと首を。首を首を首を。最速で、最小限の動作で首を。「ＧＹＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ……！」レイジ妹が血の雨を浴びて大笑いしている。レイジ兄が膝ひざをつく。アジアンはすかさず声を張りあげる。「ナツコかヴィクトリア！　どっちでもいい、レイジ兄を手当てしろ……！」言いながらもう次の標的を視界に入れている。雷切ライキリ。祝花ノリカやミョーチ、白妙シロタエを背に庇かばって悪戦苦く闘とうしている。雷切のところまで敵の首を刎ねながら急行する。祝花はただ雷切に守られているのではなかった。後ろから雷切に抱だきついて、腹からこぼれそうな腸だの何だのを押しとどめている。雷切はアジアンを見ると〈雷〉の刺青いれずみがある左ひだり頬ほおをゆがませた。「遅おそかったじゃねえすか、御頭オカシラ」「埋めあわせ

はするヨ」一度、目をつぶる。開けて、数十の首を舞まわせる。明モーけのニング明星スターを振りまわすカイの背中を狙ねらう悪魔がいる。ほんの一歩か二歩で詰つめよってその悪魔の首を刎ねる。「カァイ、油断しちゃだめサ！」「──アジアン⁉」返事のかわりに十か二十の首をとる。気が昂たかぶりそうになる。もっとだ。もっとやれる。もっと速く動ける。百、千、それ以上の敵を一挙に殺せる。いや、抑おさえろ。心臓を凍こおらせろ。ヤツらに主導権を握にぎらせるな。戦場を見ろ。見み渡わたせ。見境なく殺すんじゃない。効果的に、効率的に殺せ。仲間をカバーしろ。「むおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお……！」リキエルに匹ひつ敵てきする体格の巨きよ漢かんが、悪魔を三匹ほども抱かかえてぐるぐる回っている。クルガイスだ。その足あし許もとには黒い肌はだの男が倒たおれている。リー・ブラックか。アジアンは手当たり次し第だいに敵の首を刎ねつつ、クルガイスに駆けよる。クルガイスは頭が半分割れている。「もういい、クルガイス……！」アジアンがそう声をかけると、クルガイスは悪魔を放ほうり投げて、その場にどしんと腰こしを下ろした。それからおそらく、指をしゃぶろうとしたのだろう。クルガイスの癖くせだ。できなかった。クルガイスの右手にも左手にも指なんてなかった。一本も残っていなかった。残念そうに「あー」と唸うなったクルガイスに蜥蜴人どもが群がろうとする。感情に身を任せちゃいけない、でもこればかりは我が慢まんできなかった。「下がれ……！」アジアンが怒ど声せいを浴びせると、蜥蜴とかげ人どもは一いつ斉せいにこけつまろびつ後退した。「うー、あー……」クルガイスはもう片方しかない目でアジアンを見て、立ちあがろうとする。だけど身体が言うことを聞かないようだ。アジアンはクルガイスを抱きしめた。赤子を抱くように、やさしく。「もういい、クルガイス。無理しなくていい。休んでいいんだ」「……あじ、あん」「うん」「よかっ、たぁ……」クルガイスがこんなにはっきりと言葉を発したのは初めてだった。それが最初で最後だった。アジアンはクルガイスの砕くだけた頭を撫なでて、うなずいた。リー・ブラックはまだ息がある。顔を上げた。リー・ブラックが手をのばす。アジアンはその手を握って、起きあがらせようとしたら拒こばまれた。「よせ。俺はここまでだ。楽しかったぜ、アジアン」「ボクもだヨ」「クラニィのやつがあっちで待ってる。最高だ」ゆっくりと息をして、リー・ブラックは旅立った。何があろうと他人に弱みを見せない。どこまでも腹が据すわっている。この男らしい。憤いきどおるな。憤っちゃいけない。悲しむな。ヤツらにつけいる隙すきを見せるな。ぜんぶボクのせいだ、そんなふうに自分を責めている暇ひまがあったら、敵を蹴け散ちらせ。へこたれるな。くじけるな。あの人の顔を思いだしたりす

るな。頼たよっちゃいけない。ボクは誰の力も借りたりしない、これ以上は。だって、もう充じゅう分ぶん以上に力をもらっている、仲間たちに。彼ら、彼女らがいてくれたから、ボクはここまでこられた。ここに立っていられる。ボクが仲間たちの力になるんだ。総身を刃やいばとなせ。

「ボクは止まらない！　誰もボクを止められない！　みんなボクを見ろ！　ボクのあとにつづけ！　立ちふさがるものがいれば、ボクが薙なぎ倒す！」

　アジアンは奔はしる。ジャシュギシュの貪どん婪らんな食欲を、アルカーディアの支し離り滅めつ裂れつな狂きよう気きを、ウルクハンドの破は壊かい衝しよう動どうを、タナトゥスの冷たい殺意をこめた両手の指で、肘ひじで、膝で、爪つま先さきで、翼つばさで、敵の肉体にふれる。撫でただけでその部分が破は裂れつしたように破壊される。一。二。三。四。五。十。二十。五十。百。三百。千。アジアンはますます加速する。殺せば殺すほど力はこの身に馴な染じんでゆく。自然になってゆく。これもヤツらの手なのか。新しい手管か。警けい戒かいはしている。でも、力をゆるめたりしない。ボクが戦況を変える。状況を制圧する。戦場が一方的な殺さつ戮りくの場と化す。

　──こうやって離れていくのだ。

　何者かがどこかで言う。

　──おまえは誰からも離れてゆくのだ。誰もおまえの近くにはいられない。おまえは愛する者から、大切な仲間たちから、遠ざかってゆく。おまえはとっくに常じよう軌きを逸いつしているよ。誰も彼もがおまえを恐おそれるだろう。悪魔だろうと他の異界フリー生物クスだろうと、そして人間だろうと同じだよ。

　黙だまれ。

　その罠わなには嵌はまらない。ボクは仲間を信じる。どんなときもボクを信じて、今までついてきてくれた仲間たちを。だから、ひたすら敵を狩かりつづける。──仲間たちはおまえを信じてなどいないよ。何者かが言う。うるさい。──信じているふりをしているのだ。違ちがう。──おまえを利用している。違う。──おまえの力を。違う。──生きのびるために。違う。──本当はおまえを恐れているよ、いつ自分に牙を剝くか知れないわけだからね。そんなこと

は。──ないと言いきれるかい？　実際、おまえは手にかけようとしただろう。だけど手にかけなかった。──今回はね。ぎりぎりのところでね。しかし、それがいつまでつづくかな？　おまえが力を求めるかぎり、力はおまえに接近する。おまえはいつか力にとりこまれるだろう。黙れ。

　黙れ。黙れ。黙れ。黙れ。黙れ。黙れ。黙れ。黙れ。黙れ。黙れ。黙れ。黙れ。

　アジアンはあらがう。内なる声に。否定する。全身全ぜん霊れいで。敵を屠ほふりながら、証明しようとする。ボクは大丈夫だ。ボクは大丈夫。大丈夫だ。大丈夫。ボクは大丈夫。大丈夫だ。ボクは大丈夫だ。ボクは大丈夫。大丈夫。ボクは大丈夫だ。大丈夫。ボクは大丈夫だ。大丈夫だ。ボクは大丈夫。大丈夫だ。ボクは大丈夫。大丈夫だ。ボクは大丈夫。大丈夫。ボクは大丈夫だ。ボクが敵を消し去る。敵がいなくなってしまえば、問題は解決する。ボクが問題を解決する。この手で。この力で。それしかない。もうそれしか。

「アジアン……！」

　自分の名を呼ぶ声が聞こえたとき、また何かとんでもない間違いを犯したのではないかと思った。違う。ボクはただ敵を殺していた。それだけだ。ダリエロ。ダリエロが血肉の泥でい濘ねいの上を駆けてくる。「──アジアン！　ババアが、北西に城があるからそっちに向かうとか言ってやがる……！」

「城……」アジアンは息をつく。呼吸が乱れていない。これっぽっちも。「ああ。その城ならボクも見た。どこかの勢力が籠ろう城じようしてるみたいだ。オトミさんがそこへ行くって？」

「ただ逃にげるのは限界だっつぅのがババアの判断らしい。俺もそいつはまぁ同意見だ。気にくわねぇけどな」

「わかった」アジアンは黒翼を羽ばたかせた。疲つかれは感じない。それらしきものすら、微み塵じんも。「ボクが先導するヨ」

「おい、てめぇ」

「何？」

「いや……」ダリエロは肩かたをすくめながら、ため息をついた。「なんでもねぇ」

「ボクは大丈夫だ」アジアンは笑ってみせた。ボクは大丈夫だ。ボクは大丈夫。「同じことは繰くりかえさない。もういいかげん、ネ。心配ばかりかけて、すまない」

「俺がてめぇの心配なんぞするかよ、塵ゴミ屑クズ野や郎ろうが！」

「フフッ」

　アジアンは飛びあがる。オーノが死んだ。クルガイスが死んだ。リー・ブラックも死んだ。他ほかにも犠ぎ牲せい者しやが出ているかもしれない。それなのに笑うことができてしまう。自分はおかしい。バラバラになりそうだ。心も身体からだも。でも繋ぎ止める。Are you happy?　タナトゥスが囁ささやく。ああ、当然だとも。わかりきったことを訊きかないでくれ。だってボクは敵を排はい除じよできる。ボクは大丈夫だ。これ以上、何を望めばいいというのだろう。

城塞都市シャッコー

「ジョーカー……！」マリアローズは崩くずれかけた石段を駆けおりて、あちこちくぼんだりめくれたりしている石いし畳だたみの上を疾しつ駆くした。あの男は目立つ。何しろ、身にまとうは黒の金のどぎつい鎧よろい、魔導王〝鴉グレイ大ト・帝クロウ〟ギュンツァーの〝摩訶マハー鴉クロウ一式スーツ〟で、手には〝東の原野の魔導王〟天テン正セイ具グシ象ヨウの遺刀、刃は渡わたり一・二メーテルの黄金色の大おお太刀だち〝大ダイ懺ザン悔ゲシ嘯ヨウ〟を持っている。健在なら身を隠かくしたりは絶対していないだろうし、そのうえ月の女め神がみのようなクローディアを従えているのだから、何百メーテル先からでもそれとわかるはずだ。あの男がもう生きていないかもしれないなんて、一秒たりとも考えなかった。シャッコーは陥かん落らく寸前だ。でもまだ落ちていない。だったらあの男は生きている。必ずこの街のどこかで指揮を執とっている。案の定だった。「──いた！　ジョーカー……！」

　ジャン・ジャック・ド・ジョーカーは悪魔どもの間をゆらゆらと歩いていた。どう見ても歩いている。それなのに速い。なおかつ悪

魔どもはジョーカーをつかまえられない。まるで悪魔どもは自らすすんでジョーカーに斬きられているかのようだ。ジョーカーは大懺悔嘯を振ふりまわさない。舞いでも舞うように、ゆったりと動かしているだけだ。にもかかわらず、悪魔どもがばたばたと倒れてゆく。ジョーカーは血ち煙けむりを浴びることさえない。

それとは反対に、クローディアは猛たけ々だけしかった。彼女が彼女の身みの丈たけより遥はるかに大きい巨おお鎌がまグリムサイズを操あやつっているというよりも、グリムサイズのほうが華きや奢しやにさえ見える彼女のほっそりした身体をぶん回しているような印象を受ける。だけどそれは事実じゃない。あの大ぶりなグリムサイズを旋せん回かいさせる。回転させる。絶え間なく敵を斃たおす。そのために必要な身のこなしなのだ。彼女は悪魔どもを刈かりとる。グリムサイズの一振りで二匹ひき、三匹、もっと多くの悪魔の命を奪うばってしまう。際限なく、吸いとるように。

静と動。柔じゆうと剛ごう。

あの主従は完かん璧ぺきだ。そう思わずにはいられない。

ジョーカーが振り向いた。そうだろうと思っていたけれど、驚おどろきもしない、右の眉まゆをぴくっと動かしただけだ。「帰ってきたか。馬ば鹿か者どもめ」

「言うに事欠いて、馬鹿者どもって……」マリアローズは頭を振った。ダメだダメだダメだ。ダメ、ダメ、ダメ。いちいち腹を立てて突つっかかっていたらきりがない。こういう男なんだ。性格なんだ。それか、病気なのかもしれない。治らないんだ。しょうがないんだ。むしろ、かわいそうな人だくらいに思ったほうが精神衛生上いい。マリアローズは無理やり笑え顔がおを作った。「ただいま、ジョーカー」

ジョーカーはわずかに目を瞠みはって「ふん……」と低く鼻を鳴らした。そしてマリアローズの後ろに視線を向けると、今度は眉まゆ根ねを寄せて両眼を細めた。「いやしい姿だ」

死に瀕ひんしていた友だちがなんとか無事に帰ってきたのだ。そんな言い種ぐさはない。まったく本当にかわいそうな人だと思うけれど、いくらなんでもちょっと怒おこっておいたほうがいいかもね。でも言われた当の本人は、だいぶ長すぎて邪じや魔まそうな髪かみの毛をかきあげるというよりかきわけ、片方の眉をつりあげて

みせただけだった。「どんな案あん配ばいだ」

「とりたててどうということもない」ジョーカーは傲ごう然ぜんとそう言い放ってみせた。

「……や、さすがにそれは、強がりがすぎるってものじゃない？」

「何か言ったか」

「うん、言ったよ？　この有様で、どうってことないなんてありえないし。今現在の目標が何で、どう動いてるのか、ちゃんと教えてもらえれば、僕らにできることだってあるわけだしさ。てゆうか、さっさと指示とか出してほしいんだけど。時間の無む駄だだし」

「相変わらず、口だけは達者だな」

「それくらいしか取とり柄えがないからね。何か文句でもあったりする？　口くち喧げん嘩かなら受けて立つけど。でも、あとにしてほしいかな。今じゃなくて。時間がもったいないから」

　ジョーカーは唇くちびるの端はしをゆがめて口を開こうとした。クローディアが「主様マスター！」とジョーカーに呼びかけたのはそのときだった。「また山が動きました！」

「山……？」マリアローズはクローディアがグリムサイズで示している方向に目をやった。シャッコーはツァール峡きよう谷こくの北側斜しや面めんに築かれている。グリムサイズが指しているのはその反対、南側斜面の上だ。山。たしかに山だ。それはそうだろう。もともと山といえば山だし。だけどなんか──何だろう。おかしい。妙みようだ。でも何が妙なのか。

「山の上に山が」とハニーメリーが、それからピンパーネルが「動いてイル」と呟つぶやいた。

「本当だ」とロム・フォウが言うと、アルファが吠ほえ、きゅーが「くう！」と叫さけんだ。

「山……？」と首をひねるユリカを、飛フエイ燕ヤンがまじまじと見つめている。視線に気づいて、ユリカは頰ほおを染めた。「な、何？　どうかした？」

「イヤ、ウルトラかわェーなァと思って」

「や、やめてよ、しょういうの！」

「なんで？　だって実際マジポンかわェーし」

「オッホンイェヘンッ！」とトワニングが咳せき払ばらいをした。だいぶ我が慢まんしているみたいだが、耐たえきれなくなったのだろう。気持ちはわかる。それはそれとして、マリアローズはハニーメリーの言葉を繰りかえした。「山の上に、山……？　あっ──」

　そうだ。山というか峡谷南側の一番高いところ、その上に、山がのっかっている。山、なのか。違うような気がする。だって、それは震ふるえている。動いている。こっちに近づいてきている。「あれは……！」とサフィニアが声をあげた。「山じゃありません……あれはたぶん……悪魔……！」「は？」マリアローズはまばたきをした。「え、悪魔？　や、それはでも……あれが、悪魔？　って──」「ジャリコ・カスパーロウ」サフィニアの銀ぎん髪ぱつが逆立った。「呪カーわれシー・大ハイ公ヴエリ爵オンジャリコ・カスパーロウ。死なない……死ぬことができない悪魔。致ち命めい傷しようを負うと、たちまち再生してしまう。だから、わたしは……再生する瞬しゆん間かんに、いろいろなものを混ぜこむ方法を思いついて……そのあげく、もう生き物とは呼べないような姿に成り果てたあの悪魔を……お姉様が地中に陥おとしいれた……二度と、出てこられないように！　でも……出てきた！　そして、ここにいる……！」

「つゥーかよォ」飛燕の口調はわりとのんきだ。なんでそんなに悠ゆう然ぜんと構えていられるのか。どういう神経してるんだよ。「アレ、ほっといたら落ちてきちまうんじゃねェーの。そしたらオレらみィーんな、きれいさっぱりペチャンコじゃね？」

「ふむ」トマトクンが顎あごを撫なでながら言う。「壊こわすか」

「……無理っぽくない？　トマトでも」マリアローズはトマトクンの表情をうかがった。じつはちょっぴり期待している。今のトマトクンなら、あるいは。虫がよすぎたか。

「そうだな。砕くだいたとしても、大量の土ど砂しやが降りそそぐことには変わらんだろうし」

「……だよねー。埋うまるよねー。軽く死ねるよねー。全ぜん滅めつだよね。うん。わかってた」

「だったら」ロム・フォウの瞳ひとみはどこかうつろだ。大丈夫かな。「逃げるしかないね」

「逃がすのが先、かな」マリアローズは唇をさわった。「非戦せん闘とう員をできるだけ避ひ難なんさせるために、時間を稼かせぐ。いよいよってときまで、敵を引きつける」

　ジョーカーは顎をしゃくってみせた。「わかっているのなら、こんなところで油を売っていないで、やるべきことをやれ」

　かちんとくる。言い方ってものがあると思うんだけど。変なところが子供っぽいんだよ。どう見たって大人のくせに。まあいいや。僕は立派な大人だし？　マリアローズはぜんぶすっかりのみこんで、うなずいた。「じゃあ、引き際ぎわだけは指示し──」そこまで言ったところで、何かを感じて口をつぐんだ。「て……？」

　足あし許もとだ。黒い。何だろう。煙けむり？　いや、煙にしては黒すぎる。真っ黒い霧きりみたいな。あるわけないけど、そんなもの。とにかくそんなようなものが、地面すれすれのところを漂ただよっている。どこからか流れてきているみたいだ。よくわからないが、やばい感じはした。でも、どう反応したものか。対処といっても、黒いものはいつの間にかあたり一面に立ちこめている。「これ……って──」「魔術……!?」サフィニアがふわっと浮うきあがるなり、叩たたきつけるように鋭するどく両りよう腕うでを振りおろした。「──わっ！」マリアローズはあやうく転ぶところだった。風だ。サフィニアがものすごい風を巻き起こして、黒いものを吹ふっ飛ばした。助かった──のか？　たぶんそうだ。マリアローズたちは攻こう撃げきされた。少なくとも、攻撃されようとしていた。何者に？　普ふ通つうに考えれば悪魔だろう。このわけのわからなさからして、きっと悪魔の仕し業わざだ。

「どこだ敵、敵、敵ィ……ッ!?」きょろきょろしていた飛燕が「オワッ!?」と跳とびあがろうとして、だけどできなかった。見ると、白い手が飛燕の足首をつかんでいる──って、手が？　え？　どういうこと？　あの手は何だ？　地中？　地中からのびているのか。そうらしい。地中に誰かいる？　黒い。黒いんだけど。飛燕が立っているところの石畳が。その付近が、黒ずんで──もう石畳というか、土みたいになっている。

「うおッ」飛燕は逆の足で白い手を蹴け飛とばそうとした。「このッ、放せ……ッ！」

　白い手はすんでのところで引っこみ、そして━━黒が、拡大する。

「下がれ……！」ジョーカーに命じられるまでもない。飛んでいるサフィニア以外は、どんどん黒ずんでゆく地面から離はなれた。離れようとするのだが、すごい速度で黒い地面が追いかけてくる。
「いったい何なんだよ、これ……!?」黒い地面は踏ふむとやわらかい。マリアローズは足をとられそうになった。やばいやばいやばい。必死で駆かけていると、きゅーが抱だきあげてくれた。「くう！」「━━あ、ありがと！」しがみついて、できるだけきゅーの身体の動きを阻そ害がいしないようにする。きゅーのもふ毛がちょっと金色に輝かがやいた。速い。速い。速い。なんとか振りきったか。というか、黒い地面の拡大が止まったようだ。みんなは？
ざっと見たところ、黒い地面にのみこまれてしまった者はいないようだ。そう。あのやわらかさだと、土中にのみこまれてしまいかねない。魔術、とサフィニアが言っていた。あれは悪魔の魔術なのか。悪魔━━なのか。

　サフィニアは宙に浮いているので、一人だけさっきの場所からほとんど動いていない。そのだいたい真下あたりだ。

　黒い地面から、にゅっ……と、それでいてゆっくりと、彼女は出てきた。

　女だ。女に見える。人間の女にしか見えない。ごまかしはきかないはずだ。

　裸はだかだし。

　嘘うそ偽いつわり誇こ張ちようーいつ切さいなく、本当に何も身につけていない。全ぜん裸らだ。

　いいの、あれ？　いいも悪いもないのだが、目をそらしたくなる。なんていうか、大きすぎなんだよね。胸が。てゆうか、知ってるんだけど。見たことあるんだけど、あの人。髪は前に会ったときよりもだいぶのびてるけど。前は完全無欠の全裸ではなくて、たしかショーツだけは穿はいてたけど。もちろんマリアローズは仰ぎよう天てんしている。でもそれより、サフィニアのほうがびっくりしているだろう。だって、関係者のはずだし。

「トモヨ……!?」とサフィニアが女の名を呼んだ。

閃せん光こうの魔女マチルダの弟子でし。サフィニアにとっては同門。姉弟子。トモヨはサフィニアを見上げて何か短い文句を唱えた。魔術。魔術だ。黒い稲いな妻ずまがサフィニアを強きよう襲しゅうする。サフィニアはとっさに魔力の防ぼう壁へきを築いてこれを防いだ。「……トモヨ、何を……!?」

いやマジでほんとに何？　どういうこと？　トモヨはサフィニアの問いかけに答えない。耳に入ってすらいないかのようだ。トモヨは両腕を広げる。何かを迎むかえ入れようとするみたいに。すると漆しつ黒こくの球体が現れた。一つじゃない。十、二十、それ以上。黒球が飛び交かいはじめる。「──どうして……!?」サフィニアが白い光線を矢や継つぎ早ばやに発射して黒球を打ち落としてゆくが、きりがない。トモヨはどんどん黒球を生みだす。その生産速度は衰おとろえるどころかむしろ増している。サフィニアは防ぐしかない。ひょっとしたら反撃に転じることもできないわけじゃないのかもしれない、でもやっぱり無理だろう。可能か不可能か。そういう問題じゃない。だって、相手は人間だ。姉弟子なのだ。だけど相手はどう見てもサフィニアを本気でガンガン攻せめている。殺そうとしているとしか思えない。



　おかしい。

　マリアローズはきゅーのもふ毛に顔をうずめて呟く。「……そうだ。おかしいよ」

　根こん拠きよがまったくないわけじゃない。薄はく弱じやくとい

えば薄弱かもしれないけど。トモヨの表情だ。やけに目を見開いている。口が開いている。笑顔みたいに見えなくもないが、それともなんだか違ちがう。受け答えもしないし。

「サフィニア、さっさとその女を始末しろ！」ジョーカーが叫ぶと、サフィニアが白い光線で防戦しながら「そんなこと……！」と怒ど鳴なり返した。「始末なんて、簡単に言わないでください……！　彼女は……！」「何者だろうと知ったことか！　敵は敵だ！　殺さなければ貴様が殺されるぞ！」「っ……！」サフィニアは空中で一回転して、放った強きよう烈れつな白光で数十の黒球を一挙に薙なぎ払はらう。

「……サフィニア」マリアローズは唇を嚙かんだ。トモヨは何かおかしい。少なくとも平常ではないと思う。とはいえジョーカーの言い分も間違っていない。二人の魔術士としての力量はどうなのか。マリアローズには判断がつかないが、トモヨはたぶんサフィニアをしとめるつもりだ。それなのに、サフィニアはトモヨを傷つけまいとしている。これではとても勝負にならない。あとはまあ、実際問題、トモヨにこれ以上好き放題にやられたら、全面的に危険だし。

「わきあがる、くろ」トモヨが歌を口ずさむように言うと、突とつ如じよとして真っ黒い旋せん風ぷうが吹き荒あれた。「──きゅうっ!?」「わぅっ……!?」きゅーがマリアローズごと黒い風に押されてよろめく。トマトクンでさえ低い姿勢になってこらえているくらいだから、そうとうなものだ。「トモヨ！　なぜ……！」すかさずサフィニアが白い嵐あらしを呼び起こして対たい抗こうする。黒い風は刻々と中和されて、その勢いを失っているものの──マリアローズは激しく咳せきこんだ。「……何これ、なんか……むずむずするんだけど」

　口だけじゃない。鼻も。喉のどから胸まで。むずかゆいどころか。「……痛っ」

　きゅーも、こっ、こっ、と咳せきをしている。苦しそうだ。もしかして、さっきあの黒い風を吸いこんだせいか。マリアローズは愕がく然ぜんとした。「──う、わ……」きゅーの毛が赤く汚よごれている。血。マリアローズの血だ。

「厄やつ介かいな……！」ジョーカーが大懺悔嘯を振ふりまわした。「サフィニア以外は退ひけ！　魔ま術じゆつ士しは魔術士に任せるにかぎる！」

「そ、そんな──」マリアローズは口を押さえた。痛い痛い。いたたたたた。手を見ると、べっとりと濡ぬれている。

「主様マスター、山が！」と、クローディアの声がして、マリアローズは峡きよう谷こくの南側斜しや面めんに目をやった。さっきより大きいような気がする。いや、気がする、じゃない。明らかに近づいている。山が、ジャリコ・カスパーロウのなれの果てが、落ちようとしている。滑すべり落ちてくる。「う、嘘うそでしょ……!?」

　そう思いたい。嘘だ。きっとこれは何かの間違いだ。そうじゃないと困るし。でも、地面が震えている。猛もう烈れつに揺動している。とてつもない音がする。崩くずれる音が、打ち砕かれ、破は壊かいされる音が、天地に響ひびき渡わたっている。「飛燕……」ユリカが飛燕にしがみつく。飛燕は「ああ」と答えてユリカを抱だきしめた。あの飛燕が、ああ、しか言えないなんて。ハニーメリーが「んー」と頭を掻かいた。「子供、一人は産んでみたかったな」ピンパーネルが無言でハニーメリーの手を握にぎった。ロム・フォウがアルファの首を抱かかえこむようにして頭を撫でている。トワニングが目をつぶった。間ま抜ぬけなことに、マリアローズはそのときになってようやく理解した。本当なんだ。本当にやばいんだ。本当の本当に打つ手がない。ただみんなで仲よく死ぬしかないんだ。「やむをえん」トマトクンが駆けだした。「やるだけやってみるか……！」「あたくしが助けてあげましょうか」「え……？」

北ワールオック山麓・孤城

「がんばれェーッ！　がんばるのだァッ！　何はなくともがんばれッ！　それッ！　この私をとくと見るがいいッ！」ファニー・フランクは金ぴかの胸きよう甲こうを、どんっ、と叩いてみせた。「はっきり言って、私は無能だッ！　かつては一ひと角かどの人物だと思っていたッ、天才だとうぬぼれていたこともあるッ、すべて気のせいだった……ッ！　私には親が残した遺産の他ほかは何もなかったッ！　その金を使い果たす前にこんなことになってしまい、もう私にはなーんにもないッ！　スッカラカンのちゃらんぽらんのオッペケペーだッ！　だがしかァーしッ！　そんな私にもできることが一つだけあーるッ！　それはッ！　言うまでもなかろうが、が

んばることだッ！　私はがんばるぞォッ！　どこまでもがんばりつづけてやるぞォッ！　ぶっちゃけキミタチは一人一人、この私よりも上等な人間だッ！　誰も彼もだッ！　ということはだッ！　もしキミタチが私に負けず劣おとらずがんばれば、それはもうとんでもなくすごいことになるッ！　恐おそれるものは何もなァーいッ！　しかも、私は何も四六時中いつでもオールウェイズがんばれと言っているわけではないのだッ！　とりあえず今だけはがんばれッ！　たしかに今はきついッ！　苦しいッ！　厳しい状況だッ！　そんなときだからこそ、がんばろうッ！　私はキミタチよりもォーっとがんばるッ！　だからキミタチもがんばってくれッ！　信じることだッ！　がんばる者が、救われるのではないッ！　がんばる者は人を救うッ！　救われた者はキミを救うだろうッ！　互たがいに救いあうのだッ！　よしよしよしッ！　私をバカ丸出しだと思って笑っているなッ!?　いいのだそれでッ！　ぜんぜんオッケーかまわないッ！　どうか私を笑ってくれッ！　それでキミタチが少しでも元気になるのなら、私はむしろ笑われたいッ！　あそーれッ！　ラッチャッチャッ！　ラッチャッチャッ！　ラッチャッチャッチャッラッチャッチャッ！　こうやって謎なぞの踊おどりをするくらい朝飯前だッ！　私は無能だから、キミタチのためになることなら何でもするぞォッ！　何だってしてやるぞォッ！　キミタチはがんばれッ！　がんばってへこたれるなッ！　私たちは負けないッ！　そうだろう……ッ!?」

　笑いが起こる。苦く笑しようが。失笑が。さらには爆ばく笑しようが。笑うしかない。

　何しろ、信じがたいことに、ファニー・フランクは敵の大軍が詰つめよせる城じよう壁へきの上、それも事もあろうに、城壁の縁へりに設けられた防護用の掩えん壁ぺきの上で、飛んだり跳はねたり踊ったりしながら、皆みなを鼓こ舞ぶすべく一席ぶっているのだ。

　今はやや小康状態だが、それでもときおり蜥蜴とかげ人の弓兵隊が矢を射かけてくる。礫つぶてがバンバン飛んでくる。鳥人ジャドーが槍やりを投げてきたりもする。それなのに、不思議だ。

　当たらない。ファニー・フランクにはなぜか一本の矢も槍も、ただの一個の礫も命中しない。かすりもしない。ファニー・フランクは城外に背を向けているので、よけているわけじゃない。あれではよけようにもよけられない。

「いったい何なんかのう……」カタリはぼんやりとひとりごちた。

抱えるようにして持っている大湾わん刀とう〝血吸いブラドの斬キユラ馬刀トス〟は、吸いきれない血に汚れ、盛せい大だいに刃はこぼれしている。この剣けんで何匹びきぶった斬ぎっただろう。覚えていない。さすがのカタリもちょっと、あくまでほんのちょっとだけだが、疲つかれた。そないなことゆうてられへんけどもな。掩壁の反対側の壁に背をもたれさせて座りこんでいるのは、カタリだけではないのだ。掩壁にとりついて防戦にあたっている者と同数くらいの男女が、こうして身体からだを休めている。その間には戦死者の遺体が横たえられていて、ほとんど足の踏み場もない。戦況は悪い。最悪に近い。それでもなんとか保もっている。アレはおそらく一つの才能やな、とカタリは思う。フランク・ゴールディング・レイヴンズクロフト。〝おかしなフアニー〟フランク。腕うでっ節ぷしは強くない。というか弱い。頭もよくはない。アホだ。でも、何か持っている。わからんもんやのう。エルデンでクラン・創ジエネ世シスのウイ翼ングを率いていたころは、悪目立ちのするヘンテコなオッサンという印象だった。それがここまで化けるとは。しかも、明らかに何か持っているとは思うが、戦力にはなっていない。剣を握ることさえ稀まれだ。道どう化けを演じているだけ。そう言われてもしょうがあるまい。それなのに皆、ある面ではあの男を頼たよりにしている。間違いなく、あの男に支えられている。せやけどな。わしは漢おとこやで。漢として、支えられるよりは支えるほうにならなあかんやろ。カタリは隣となりに腰こしを下ろしているアーニャ・クルチバの手をそっと握った。「アーニャちゃん。そろそろいったろかい」

　アーニャはうとうとしていたようだ。目をぱっちり開けて、何度かまばたきをした。それからうなずいて、微笑ほほえんでみせた。「……ええ。そうね。充じゆう分ぶん休んだし」

　カタリは目を細めてアーニャの頭を、頰ほおを撫なでた。充分なわけがない。この孤城は悪魔をはじめとした異界フリー生物クスどもに十重とえ二十重はたえに取り囲まれ、絶え間なく攻めたてられている。もう秩序のモラル・番キー人パーズも新生太陽王国軍も龍りゆう州しゆう連合もない。部隊もへったくれもない。戦せん闘とう員、非戦闘員の区別すらほとんどない。生き残った者が城壁の上を固めている。破られそうな城門の裏に石材だの煉れん瓦がだの木材だのを積みあげ、城内に鳥人ジャドーが降りたつと寄ってたかって殺す。幼子たちを奥の部屋に集めて、子供たち、母親たち、老人たちが、決死の覚かく悟ごでこれを死守せんとしている。寝ね床どこに身を横たえる余よ裕ゆうは誰だれにもない。疲れ果てたら何か

にもたれて十分、十五分の仮か眠みんをとる。まだ剣や槍を持つには早い男の子や女の子が、たまにパンやら水すい筒とうやらを運んできてくれる。皆、立ったまま、動きながら食べる。盾たてに身を隠かくして、水を飲む。孤城の勢力は消しよう耗もうしている。

　しかし疲ひ労ろうより、敵そのものよりも恐ろしいのは、望みがないことだ。

　敵は数が多かった。多方面から攻めよせてきた。だから、籠ろう城じようする以外に手がなかった。その他ほかに方策があれば採らなかった道を、やむをえず彼らは選ばされてしまった。

　もう終わりなのだ。このまま敵を防ぎつづけることができたとしても、いずれは食しよく糧りようが尽つきる。敵に負けなくても、餓が死しする。

　彼らにも選せん択たく肢しがないわけじゃない。いつ死ぬか。どう死ぬか。それだけだ。

　この状況で彼らがやけっぱちになっていないのは、ヨハン・サンライズ率いる秩序の番人の中ちゆう核かくメンバーの大半が健在で、鋼はがねのような団結と燃えさかる炎ほのおのごとき戦意を維い持じしていることと、そして何より、あのファニー・フランクの存在が大きい。

　がんばる、かい。カタリは胸のうちで呟つぶやく。たしかにそれしかあらへんわな。アーニャちゃんはもうがんばっとるけどな。こないにかわいらしい女の子が、よう眠ねむりもせんで、ぼろぼろになってな。弱音一つ吐はかんで戦っとるわけやからな。

　せやけど、わしはちゃうで。まだや。わしはまだまだやれる。がんばりが足らんわ。わしはこんなモンやない。せや。これから、これから！　これからやんけ……！

「ぅっし……！」カタリはすっくと立ちあがった。グッドタイミニングや。いやタイミニングやのうてタイミングやろ。「──きたぞ！」と誰かが叫さけんだ。掩壁に依よっている者たちの動きが一いつ斉せいに激しくなる。漢も斬ざん馬ば刀とうを引っつかんで掩壁に飛びついた。「おうおうおうおう！　きよったきよったきよった！」掩壁から身を乗りだして見おろすと、悪魔どもが城壁に梯子はしごを掛かけようとしていた。「ぬおッほォーッ！」ファニー・

フランクが新生太陽王国の旗を振りはじめた。「さあさあさあ迎げい撃げきするぞォッ！　私は先頭を切って応おう援えんしまくるッ！　さすれば心配無用ッ、我々は勝ァーつ……ッ！」「どないな理り屈くつやねん！」漢のみならず、多くの者たちがそれぞれファニー・フランクにツッコミを入れて、笑う。笑う。笑う。「撃うてっ！　撃てーっ！」弓を持つ者は悪魔どもに即そく席せきの矢を射かける。集められた瓦が礫れきを投げ落とす者もいる。その程度では寄せ手を怯ひるませることもできない。そんなことは誰しもわかっている。ほんの少し遅おくらせることができればいい。そのぶん心の準備ができる。梯子が掛けられた。悪魔どもが登ってくる。先頭は腕のたくさんある猿さるみたいな、すばしっこい、小こ柄がらな悪魔どもだ。やつらはあっという間に掩壁まで達する。すかさず漢は斬馬刀を閃ひらめかせた。「ぞりゃっ、ずおりゃっ、どりゃあっ！」斬れ味はだいぶ鈍にぶっているが、斬れなくたっていい、叩たたき落とせばいいのだ。この高さから落下したら無事ではすまない。隣でアーニャも刀を繰くりだしている。一いつ瞬しゅん、目があう。微笑みを交かわす。勇気凜りん々りん、元気百倍やで。「どんどんこいっ！　かかってこいやーっ！」漢があげた雄お叫たけびに「うぉー！」「おらーっ！」「らっしゃーぁっ！」と唱和する勇士たちの頼たのもしいことといったらない。せやけど調子に乗ったらあかん。漢の漢眼ガンが、弓ゆ弦づるを引き絞しぼっている蜥蜴人の部隊をとらえた。「きよるで、一斉射！　備え……！」叫ぶなり、漢は掩壁に立てかけてあった大盾を引っぱりあげて構えた。アーニャが身を寄せてくる。間もなく数百の矢が一挙に降ってきた。大盾がバツバツバツバツ鳴る。衝しよう撃げきが伝わってくる。蜥蜴人の弓兵隊はこの一斉射を三度から五度繰りかえす。その間に掩壁を乗り越こえようとする先頭部隊の悪あく魔またちも、当然、味方の矢を浴びることになる。それでもいくらかは掩壁を越えてきた。いくらかといっても無視できない数だ。城壁の上は乱戦になった。休んでいた者たちも戦いに加わる。加わらざるをえない。城壁の上で敵味方が入り乱れる展開になると、どうしても掩壁を巡めぐる攻こう防ぼう戦せんで押され気味になってしまう。「アーニャちゃん、頼んだで！」「任せて！　あなたの背中はわたしが守る……！」漢は、だからあえて掩壁を死守する戦いに専念する。城壁の上にいる敵のことは考えない。必ずアーニャが防いでくれる。「ぐぉらぐぉらぐぉら……っ！」漢は斬馬刀をふるう。「どっせいらッ！　どっせいらッ！　どっせいらァーッ！」ファニー・フランクが旗を振ふり振り応援している。漢は斬馬刀で悪魔を突つき落とし、払はらい落として、梯子を蹴け飛とばした。梯子が悪魔もろとも向こう側に倒たおれてゆく。「どやッ！」とドヤ顔

をしてみせた漢の頬を投なげ槍やりが掠かすめる。ジャドーだ。鳥人ジャドーの一団が上に。「それがどないしたっちゅうねんッ！　こいやぁーっ、うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお……ッ！」漢は斬馬刀を旋せん回かいさせて、鳥人が次々と投げつけてくる投槍を弾はじき飛ばす。しもた。「──ぐっ！」防ぎそこなった一本の投槍が漢の左ひだり肩かたをえぐった。痛みなんぞどうとでもなるが、左腕がきかない。右手だけで扱あつかうには、この斬馬刀は大きすぎる。重すぎる。「ちょうどええがな！」どうせ斬れなくなっていたのだ。「ぬぉらしゃらぁー……っ！」漢は斬馬刀を鳥人めがけて投とう擲てきするやいなや、変形斧おのを抜ぬいた。鳥人の群れが突とつ撃げきしてくる。「ウェルカムやで！」ずあっはっはっと笑いながら、漢は陽気に迎むかえ撃つ。「ドッピーカンや！」変形斧で鳥人の羽を斬り裂さく。ドタマをかち割る。蹴る。「おりゃりゃりゃりゃりゃりゃりゃあ……っ！」ズバッと斬る。ダンッと斬る。ジュビッと斬る。一匹の鳥人が体当たりしてきた。「どほっ……!?」漢はとっさに受け止めて、城外に放ほうり投げる。左腕に力が戻もどりつつある。「魚ギヨフフッ！　フッ！　カァーツッ！　やでえ……！」もう一本、変形斧を抜く。二刀流ならぬ二斧流だ。「シャイシャイシャイシャイシャイシャイシャイシャァーイ……ッ！」漢は敵を、向かいくるすべての敵を、あらゆる敵を、撃げき滅めつする。漢の胸むな板いたに矢が突き刺さる。関係ない。漢の額に礫が命中して血がドバァッと流れる。影えい響きようない。漢の土手っ腹を投槍が貫つらぬく。心配ない。「──わしは！　わしはこっから動かんでえ！　どかしてみいや！　やれるもんならなあ！　ここは、ここは通さへんッ！　燦さん然ぜんと輝かがやく、この漢魂だましいにかけて……ッ！」

　踏ふみとどまれ、何があろうとも、と漢は念じる。たとえ血の一いつ滴てきと成り果てようと、食い止めるのだ。漢は数々の修しゆ羅ら場ばをくぐり抜けてきた。自身の戦闘に没ぼつ頭とうして周りが見えなくなるほど初心うぶじゃない。それゆえに気づいていた。敵の勢いが、今までとは違ちがう。不退転の決意で孤こ城じようを落としにかかっている。今回ばかりは、どれだけ犠ぎ牲せいを払っても敵はあきらめないだろう。人間を皆みな殺ごろしにするまで、敵は止まらない。いや、勢いだけじゃない。もっとわかりやすい、目に見える形で、変化が。

　城壁だ。突とつ如じよ、城壁が震ふるえだしたのだ。破城槌つち。城門を破城槌が攻こう撃げきしている。直後、巨きよ大だいな岩が飛来して城壁に激突した。「──魚ぎよほっ……!?」漢はよろめ

いた。カタパルトか。破城槌に、カタパルト。攻城兵器だ。これまで数に物を言わせて押してくるだけだった敵が、どこからか運んできたのか、そのへんで組み立てたのか、ついに攻城兵器を持ちだしてきた。あかん、と漢は思う。味方がいっぺんに意気消しよう沈ちんした。当然といえば当然だが、明らかに怯んでいる。

「ワッハッハッハァーッ！」ファニー・フランクがそっくり返って呵か々か大笑した。「よいではないかよいではないかッ！　相手にとって不足なしッ！　敵が強ければ強いほど燃えるというものだッ！　命の燃やし甲が斐いもあるというものだッ！　私はまさにッ！　ここでこの敵と見まみえるために生を受けたァーッ⁉　受けてしまったァーッ⁉　カァーッ！　泣けてクルゥーッ！　正直おっかないがおっかなくなァーいッ！　なぜならッ！　キミタチがいるからだァーッ！　キミタチがいてくれるから、私は心強い……ッ！　すまんがみんな、私を守ってくれたまえーッ……！」ファニー・フランクはガタガタ震えている。泣いている。鼻水を垂らしている。それでも掩壁の上にどうにか立っている。持ちこたえている。しゃあないなあ、という雰ふん囲い気きになった。しょうがない、一丁やってやるか。やるしかないだろ。そうだ。そうだ！　そうだ……！

「デートニッヒ・ボルボンゾルここにあり……！」

　絶好のタイミングで、援えん軍ぐんもきた。秩序の番人九番突撃隊隊長のボルボンゾルだ。男くさい女たらしといった容よう貌ぼうだが、その正体はひたすら男くさいだけの男、否いな、漢。ボルボンゾルの九番突撃隊はもはや数名しか生き残っていない。その数名の助すけ太刀だちが今は貴重だ。このうえなくありがたい。

「おっしゃ、押し返すでえ……ッ！」カタリはゴハゴハ血ち反へ吐どを吐きながら変形斧を振りまわす。奮戦するアーニャの姿を視界の隅すみのほうでとらえるたびに、力がモリモリブリブリわきあがってくる。やったれ。やったれ。やったれ。──やっているつもりだ。出し惜おしみなんかしていない。出しきっている。出しても出してもあふれるほど、気力は充じゆう溢いつしているのだ。「……変やな」

　身体からだが、遅おそい。重いわけじゃない。むしろ、軽い。軽すぎて、空気の抵てい抗こうを押しきれない。どうもそんな感じだ。

　全力でやっとんのやけどな。全開バリバリやで。せやのに、おっかしいのう。

　足がふわっふわしとる。まるで風船みたいや。全身風船男ってか。おもろないな。

　一個もおもろないわ。どないやねん、しかし。

「カタリさん……！」

　アーニャちゃんが叫んどる。呼んどる。わしの名前を。

　わけもわからずにうなずくと、轟ごう音おんが響ひびき渡わたって、視界全体が揺ゆれた。「おっ……」

　立っていられない、座ることもできない。浮ういた。

　そして、叩きつけられた。

　何が、どうして、どうなったのか。見えない。霞かすんでいる。えらく埃ほこりっぽい。誰かが、ケヘッ、ケヘッ、と咳せきをしている。いいぃぃあぁぁ。あれは苦く悶もんの声か。起きあがらないといけない。起きろや、と自分自身に命じる。なんで起きられへんのや。ヒュウ、ヒュウ、いっとる。なんや情けない声やのう。

「──せ、せ、せ、生存者ァーッ!?」

　誰だれかが、なんか言っとる。セー・ゾン・シャ？　生存者やて。

　はあ。縁えん起ぎでもないわ。そないな言い種ぐさ。むっちゃ死んでもうたみたいやんか。ちゅうか、ホンマにどないなっとんねん。わし、どうしてもうたん。

「おおおおぉぉぉぉぃぃぃいいッ!?　カタリくんカタリくんカタリくぅーんッ!?　大丈夫かね大丈夫かねェ……ッ!?」

　顔が。近い。近すぎて、さすがに見える。ファニー・フランクだ。そんなジブン、大丈夫かて、大丈夫に決まっとんのやないか。

「……たり、まえ、やろ」

　出た。声が。

　ファニー・フランクは「おおッ！」と叫んで、何度も首を縦に振った。「よかったッ、よかったよかったぞォ！　まことに大変よきにはからえ……ッ!?」

「……わしは……ぃき、や、から……れ、より……何が、あ……ったん……」

「お、大きなッ、大きな石が飛んできたのだッ！　巨大な岩石たちがッ！　それらが、物の見事に直撃して……ッ！」

「なっ――……」

　カタリはまばたきをした。苦しかったり痛かったりはするが、それどころやない、ファニー・フランクを押しのけて、強ごう引いんに身体を起こす。――なんちゅうこっちゃ。

　ファニー・フランクの言ったとおりだ。そうとう大きな岩が、それも一つじゃない、いくつもの岩がん塊かいが、掩壁をぶち壊こわして、城じよう壁へきの上にめりこんでいる。被ひ害がいは掩壁や城壁だけにとどまらない。何人もが岩の下した敷じきになっている。潰つぶれている。飛び散っている。その中の一人は顎あごがくっきりと割れていた。デートニッヒ・ボルボンゾル。下半身が岩に押し潰されていて、ぴくりともしない。刀を握にぎりしめたまま、事切れている。カタリは息をのんだ。頭を振る。それから「アッ……」と叫んだ。「ア、アーニャちゃん、どこや!?　アーニャちゃん……!?」

「カタリさん！」すぐに返事があった。振り返る。途と端たんに抱だきつかれた。「……カタリさん！　よかった！」

「アーニャちゃんこそ！　魚うおごっ……」

「カ、カタリさん!?」

「だ、大丈夫や、こんくらい」

　矢だの投槍だのが刺さっていて、ちょっと痛いだけだ。どうも身体にうまく力が入らないのは、きっとアーニャが無事で安心したせいだろう。そうに違いない。気合い、入れな。入れなおさな、あかんで。カタリはガハハーッと笑った。離はなれがたいが、アーニャ

を突き放す。「――きよるで、敵さんが！　ファニー・フラァーンクッ、応援しさらせ！」

「お、おうッ!?　も、もちろんだとも、おッ、応援するぞォォォウッ！」

「その意気やで！」

　カタリは一歩踏みだした。

　破は壊かいされた掩壁のところから、敵がどんどん登ってくる。

「……ンム？」

　変形斧がない。どこに行ったのか。きっと倒れたときに落としたのだ。

　拾わんと。

　どこや。

　ガクッ――と、視界全体が沈しずんだ。

　なんや？　どないしたん？

　膝ひざをついたのか。誰が？

　自分だ。

「……血が、足りん」

　呟つぶやいてすぐ、否定する。そんなことはない。

　刀が落ちている。誰かが使っていた刀だ。カタリはその刀を握り、杖つえにして立ちあがる。アーニャはすでに敵と斬きり結んでいる。助けないといけない。そうだ。助ける。

　よろめきながら、カタリは進む。背後からアーニャに襲おそいかかろうとしていた悪あく魔まに一太刀浴びせると、刀が手から転がり落ちた。不ふ甲が斐いない。自分自身を叱しつ咤たしたい。でもその前に刀を。武器がないと。手をのばしたら、膝をついてしまった。這はいつくばって、刀を手た繰ぐりよせようとする。「――あぶない……！」

　何かが背中に覆おおいかぶさってきた。何か、やないがな。
「……アーニャちゃん！」

　しっかりと目を開いて、見る。アーニャ。カタリを敵から庇かばおうとして、どこか、斬られた？　アーニャ。アーニャちゃんを。なんちゅうことを。よくも。

「許さへんぞ……！」

　カタリは身体を回転させてアーニャを寝ねかせ、跳とび起きる。腹から投槍を引っこ抜き、悪魔めがけて投げつけた。胸に刺さっていた矢も抜いて捨てた。邪じや魔まだ。「かつては死にマニアの異名をとったこともある、このわしやけどなぁっ！」カタリは唇くちびるを舐なめる。血の味がする。「とっくのとうに返上しとんのや！　死んでなんかいられるかいっ！　今のわしは不死身やで……っ！」拾いあげる。刀を、二本。今度は二斧流じゃなくて正真正しよう銘めい、二刀流だ。本当は起きあがろうとしないアーニャの怪け我がの具合を確かく認にんしたいが、余よ裕ゆうがない。まずは守る。守れ。愛する女を。守るのだ。守り抜くのだ。

「ヌハアアアアアアアァァァァァァアアァァァァァアアア
アァァァァァァァァ……ッ！」

　ファニー・フランクが旗を掲かかげてカタリの目の前を駆かけ抜けていった。敵が思わずそっちを見る。ナイスやんか。その間に、カタリは当たるを幸いに刀で斬った。斬りまくった。膝から力が抜けたら転がった。その勢いを利用して立ちあがった。刀を持っていられなくなったら手放した。また武器になりそうなものを拾った。やばくなると、見計らったようにファニー・フランクが「ノアファァアアアアァァァァアアアアァァァァアアアァアア
アァァァァアァ……ッ！」と戻もどってきて、敵の注意を引いてくれた。おかげでカタリは一息つくことができた。そら、つらいけどな。そらそうやけども。つらいのは、きついのは、限界を超こえているのは、みんな同じだ。誰も彼もが城のあちこちで身を削けずり、魂たましいをすり減らして、死し闘とうを繰くりひろげている。倒たおれ伏ふし、何も見えなくなるまで、何も聞こえなくなるまで、戦うのだ。戦え。戦うこと自体が目的であるかのように、戦うのだ。さすれば必ずや光明を見いだせる。だが、本当にそんなことを考えていたのだろうか。踏んばっていれば活路が開ける。そんなふうに信じていたのだろうか。

「援軍だ……！」と誰かが言った。

　そんなアホな、とカタリは思った。

　しかし声はそこらじゅうからわきあがった。「援軍！」「援軍だ！」「援軍！」「援軍がきたぞ！」「見ろ、南東だ！」「援軍！」「援軍だ！」「援軍がきた……！」

「ありえんやろ！」カタリはそう吐はき捨てながらも、こらえきれなくて南東の方角に目を向けてしまった。「……ホンマや」

　悪魔とその他の異界フリー生物クスの軍勢は四方八方、三百六十度から孤こ城じようを押し包んでいた。その包囲の輪が崩くずれつつある。南東。南東の方向だ。規模は不明だが、ある程度まとまった数の集団が敵の後背を衝ついて、かき乱している。しかも、すごい速度だ。集団はどんどん城に近づいてくる。そのせいで敵全体に動どう揺ようが広がろうとしている。孤城を攻せめる勢いがあからさまに弱まっている。せやけど、あれは。カタリは目を凝こらす。援軍。本当に援軍なのか。そもそも、あの集団は人間なのか。疑わざるをえない。だって、悪魔どもを切り裂さくように突とつ進しんする集団の、先頭。あれは何なのか。「……飛んどるやんけ」

城塞都市シャッコー

　マリアローズは振ふり返った。今、たしかに聞こえた。助けてあげましょうか。誰かがそう言ったのだ。あいつか。あの女。屋根の上に女が腰こしかけて、脚あしを組んでいる。絹みたいな髪かみの毛。トモヨにも負けないくらい肉感的だ。いや、色気という意味では遥はるかに上回っている。一いつ瞬しゆんで頭に血がのぼって、言葉にならなかった。「……っ！」

「貴様――」ジョーカーが大ダイ懺ザン悔ゲシ嘯ヨウの切っ先を女に向けた。「何をしに現れた！」

　トワニングが目を開けて息を吸いこんだ。「……なんと」

「むう」トマトクンが足を止めて振り向いた。「リルコか」

「聞こえなかったのかしら」リルコは愉ゆ快かいそうに喉のどを鳴らして微笑ほほえんだ。「助けてあげましょうかと、あたくしは言ったのです」

「よくも、そんなことが……！」マリアローズはやっと声を出せた。「ぬけぬけと！　僕らを殺そうとしたくせに！　ハニーは火傷やけどで大変だったんだ！　それに、ピンパーネルの足をあんなふうにして！　何が、助ける、だよ！　ふざけるな……！」

「ふざけてなどいないわ。どう思われていようと、あたくしもＺＯＯだったのよ」

「それが何だっていうんだよ！　昔のことだろ！　きみなんかっ！」

「捜さがしていたのです。会いたくて。でも、時間がないから、挨あい拶さつはこのへんでおしまいにしましょう」リルコはふわりと浮きあがって、胸の前で両の掌てのひらをあわせた。「準備は整えてあるの」

　リルコの全身から青あお紫むらさき色の光が立ちのぼり、揺らめく。魔術だ。くる。マリアローズは身構えた──って、身構えたってどうにもならないだろうけど。ハニーメリーが拳けん銃じゅうを抜いて、リルコに銃口を向けた。引き金を引く前に、トマトクンが「待て！」と止めた。

「そう。それが正解よ。〝古こ代だい壊かい王おうの呪のろい〟」リルコは笑う。そして、合がつ掌しようしたままの両手を前に突つきだした。「──起abo動rt.」

「戦ストラ略テジ級ツク・魔マジ術ツクか！」ジョーカーが振り仰あおぐ。つられてマリアローズも南側斜しや面めんを見た。

　何だ、あれ。

　光。光の柱だ。斜面のあちらこちらに光の柱が立っている。

　それらが、回る。回る。回る。回る。回転するのにあわせて、斜面全体が、目に見えて揺ゆれ動く。もともとジャリコ・カスパーロウのなれの果てが落っこちてこようとしていて、激しく震しん動どうしていたのだが、もっとだ。もっと、さらに、激げき烈れつに、震ふるえている。

光の柱が回りながらのびてゆく。弾はじける。それぞれが何本にも分かれる。無数の光の線となる。光の線は互たがいに交わる。網あみ目め状になって、見る間に斜面を包みこんでしまう。その瞬間に、崩ほう壊かいが始まった。土ど砂しやが噴ふきだす。そこかしこから。へこむ。陥かん没ぼつする。まるで中身を抜ぬかれたかのように、南側斜面が低くなる。当然、ジャリコごとだ。山のようなジャリコは、南側斜面という滑すべり台だいを滑り落ちようとしていて、その先にあるのは峡きよう谷こく底で、ジャリコの大きさを考えると峡谷底を埋うめつくすだけではとても足りない、北側斜面にあるシャッコーも甚じん大だいな被害を受ける、というか間ま違ちがいなく壊かい滅めつする、そうなるはずだったのに、滑り台自体がなくなってしまったら、どうなる？

当然、ジャリコは滑り落ちてこない。あたりまえだ。ということは？

マリアローズは外がい套とうを引っぱりあげて口を覆った。目を細める。風というか埃ほこりのかたまりが吹ふきつけてくる。
「……助かる？」

そうだ。助かる。少なくとも、ジャリコに何もかも押し潰されて、めちゃくちゃになってしまう事態はさけられる━のか。いやだけど、崩落しつつある南側斜面の土石が、峡谷底になだれこんでない？　なだれこんでる。峡谷底にひしめいていた悪魔どもをどんどんのみこんでいる。あれ、地味にやばくない？　地味じゃなくて、派手にやばいって。

「退たい避ひだ」ジョーカーが右手を振った。「上層へ！　生き埋めになるぞ！　走れ！」

「くう……！」「わっ」きゅーがマリアローズを抱きしめたまま駆けだした。ほぼ同時に、仲間たちはみんなスタートを切っている。みんなじゃないか。サフィニア。サフィニアはまだトモヨとやりあっている。「━サフィニア、逃にげて……！」マリアローズが呼びかけると、サフィニアは飛びあがった。トモヨも黒い風をまとって飛ぶ。サフィニアを追いかける。「髭ひげのオッサン、ダイジョブかァッ!?」飛フエイ燕ヤンがトワニングに声をかけている。トワニングは「気き遣づかいなど無用！」と即そく答とうしたが、そっか、そういえば髭は、獄ジエのイルネ獄イルでかなりダメージを受けているはずなんだ。ユリカもいるし、平気だとは思うけど。ピンパーネルとハニーメリーは先を行っている。ロム・フォウとアル

ファもいる。でも、ジョーカーとクローディアの姿がない。二人の声は聞こえる。逃げろ、上のほうに逃げろと、避ひ難なん中の非戦せん闘とう員、戦闘員たちに叫さけんで回っているのか。トマトクンは一番後ろだ。その上に、リルコ。飛んでいるリルコと、目があった。リルコは笑った。「っ……」マリアローズは横を向いた。何なんだよ、あの女。何が、助ける、だよ。危険な、危険すぎる女だ。信じちゃいけない。あの女の言うことは、一つたりとも。クルルが外套の中から顔を出して、すぐに引っこめた。きゅーが加速する。マリアローズは振り向いた。南側斜面の高さはすでに、もともとの半分にも満たない。きっと峡谷底はすっかり埋まっているだろう。押しよせてくる。シャッコーに。土が、岩が、濁だく流りゅうみたいに。とてつもない土つち煙けむりだ。間に合うのか。逃げきれるのか。わからない。そんなこと。てゆうか、僕は走ってないし。きゅー任せなんだけど。サフィニアは？　見あたらない。どこに行ったのか。

　きゅーは、仲間たちは、駆けた。

　地上二百メーテルのシャッコー最上層まで駆けあがった。

　見おろすと、地上四十メーテルの最下層は完全に埋め立てられてしまっている。七十メーテルの第二層もほとんど土砂の下だ。南側斜面はほぼ消失した。

「壮そう観かんね」リルコが喉を鳴らして笑った。嬉うれしくてたまらないといった様子だ。

　変態め。

「……下ろして、きゅー」もふ毛をつかんで頼たのむと、きゅーはマリアローズをそっと地面に下ろしてくれた。ジョーカーとクローディアが兵隊や避難民を引き連れて石段を上がってくる。その中にはチーロ・パンカロたちパンカロ・ファミリーの連中もいた。仲間は無事だ。みんないる。サフィニアをのぞいて。だけどサフィニアも大丈夫だと思う。やられるわけがない。そこは心配していない。でも、どうすれば。正直、何も浮うかんでこない。これからどうしようとか、どうしなきゃいけないとか、どうするべきだとか、何も。ちょっとでいいから、考える時間が欲しい。くださいと願って、そのとおり与あたえられることなんて、めったにないわけだけど。うん。そういうものだって、わかってる。

「動いている」とロム・フォウが呟つぶやいた。アルファが吠ほえて、きゅーも「くう！　きゅう、くう！」と騒さわぎだす。飛燕が「おわッ」といやそうな顔をした。トワニングは膝ひざをついて休んでいる。ユリカがその背中を撫なでながら、さっきまで南側斜面があった場所に目をやった。ピンパーネルがため息をついた。「一難去って・マター難・デス」「ちょっと違うかな」ハニーメリーは冷静だ。「災難は、まだ去ってなかったってことじゃない？」

そのとおりだ。たしかに南側斜面は崩れた。おかげで、南側斜面の上からジャリコ・カスパーロウのなれの果てが滑り落ちてくる危険性はなくなった。でも残念ながら、ジャリコ・カスパーロウのなれの果てが消え去ったわけじゃない。

それは──いや、やつは、と言うべきなのか──まだ、いる。

南側斜面があったところに、山のようなその身を横たえている。

横たわっているだけなら、べつに問題はない。なんならずっと横たわっていてくれたっていいのだが、どうもそういうわけにはいかないようだ。

やつの中からズドォーンと突きあげられたあれは、いったい何なのか。岩いわ肌はだのようでも、木肌のようでもあり、それでいて動物の肌っぽくもある質感。先っぽには手みたいなものがある。肘ひじらしき部分もある。まさか、腕うでなのか。そう見えなくもない。「うっおおおおおおおおおお……っ！」と叫んだのはたぶん、チーロ・パンカロだ。もっとも、驚おどろくのはまだ早い。腕は一本じゃなかった。ズッドォーンドォーンボォーンドカァーンズガゴォーンドドドォーンと立てつづけに、さらに六本の腕が天を衝く勢いで現れた。長い。というかでかいのだが、とにかく長いという印象だ。二十メーテルか三十メーテル、いやいや、そんなものじゃない、多少ばらつきはあるものの、どの腕も五十メーテル以上あるだろう。ひょっとしたら、百メーテルくらいあるかもしれない。しかも第二弾だん、第三弾、第四弾、ズドーンドンドンズガッドンドンガンッッドンドンズオォーンと、次々にきた。ああ、もうやめて。頼むから。腕。腕。腕。数十本の腕を生やして、どうするつもりなのか。数十の手をついて、やつは、山みたいなその巨きょ体たいと呼ぶのも馬ば鹿か馬ば鹿かしい巨体を──もしかして、持ちあげようとしてる？　歩くとか？　歩いて、こっちにくるとか？　いやそれはさすがに。無理無理無理。無理だって。ほら、やっぱり。持ちあがらない。ただ持ちあがらなかっただけじゃない、数本の腕が折れ

て、壊こわれた。重すぎるのだ。そりゃそうでしょ。無茶しないほうがいいって。おとなしくしてたほうがいいよ。忠告を聞き入れたわけじゃないだろうが、やつはすぐに歩行を断念した。代わりにやつは、何を思ったか、数十の手で自分の身体からだの一部を引きちぎりはじめた。え？　いきなりの自傷行こう為い？　そんな自分自身がいやになっちゃったとか？　違う、そうじゃない、やつはそれを、引きちぎった自分の一部を、投げる。投げる。投げつけてくる。「──え、ちょっ、なっ……!?」

「シャッコーから離はなれるぞ！」ジョーカーが大懺悔嘯の切っ先で北西を示した。「これより先は振り返るな、走れ、ひたすら駆かけよ！　止まってはならん、己おれについてこい！」

　や、それはいいんだけど──土の塊かたまりとか、岩とか、木とか、ガンガンこっちに飛んでくるよ？　飛んで、落ちてくる。クローディアを従えてもう走っているジョーカーの行く手にも、いろいろなものが落下する。当たるってば。当たっちゃうって。当たったら、死んじゃうよ？　誰だれも彼も、チーロ・パンカロさえためらっている。動けないでいる。──と、ジョーカーが振り向いて、クワッと目を見開いた。「何をしている！　己おれのあとについてきさえすれば、こんなもの、当たりはせん……！」

　始まった。出たよ。根こん拠きよなんかあるわけがない、その自信。

　どう考えたって当たるときは当たるに決まっているのに、「うおおおおッ！」とか「行くぞぉっ！」とか「ジョーカー万ばん歳ざい！」とか「ひゃっほーい！」とか叫んでついていっちゃう人たちも、本当にどうかと思う。でもわかっている。行くしかない。ここにとどまっていたら、いい的だ。マリアローズは「い、行こう！」と仲間たちをうながした。みんなうなずいてくれたけれど、トマトクンだけは長い髪かみを渦うず巻まかせるようになびかせて踵きびすを返した。「お前たちは先に逃げろ。俺はやつを足止めする」「え、あ、足止めって」「まあ、任せろ」と言うなり、トマトクンは跳とんだ。十メーテル以上。そして大カタ懺スト滅ロフ刀アーをしならせ、ぶっ飛んできた巨きよ大だいな土つち塊くれをたやすく打ち払はらって、聖断罪の剣けんで岩がん塊かいを薄切りにスライスした。トマトクンは吼ほえた。ＧＡＡＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨ……！　こい、とトマトクンは

言っている。かかってこい、と。挑ちよう発はつしている。「すてき」リルコがうっとりと言って、トマトクンのあとを追う。「あたくしも手伝うわ」きみなんかに何ができるっていうんだ。できるのか。リルコが指先で直線を描えがくように腕を振ると、飛来した岩が砕くだけ散る。できちゃうんだ。変態だけに。つきあいきれない。というか、つきあおうとしても足手まといになるだけだ。飛燕あたりはちらちら振り返って行きたそうにしているが、やめておいたほうがいいと思う。トマトクンがジャリコ・カスパーロウにまっすぐ突っこんでゆく。ジャリコはトマトクンめがけて投げる。何でもかんでもぶん投げる。トマトクンは、それからついでにリルコは、それらぜんぶを叩っ斬きり、ぶち壊し、払いのけてしまう。ジャリコに肉にく薄はくしようとしている。でも、あっちはあっち、こっちはこっちだ。まずは生き残ることに専念しないと。こっちにもあれこれ飛んでくるのだ。それに、峡谷底にひしめいていた悪あく魔まどもは全滅したはずだが、敵はそれだけじゃない。前を行くロム・フォウが振り仰いだ。「──空からくる！」邪じや竜りゅうどもだ。その背には悪魔が乗っている。数十、数百の邪竜が急降下してくる。まったく逃げるだけでも楽じゃない。行く手をさえぎる邪竜を、ジョーカーが大懺悔嘯で、クローディアがグリムサイズで斬り払う、ロム・フォウが弓矢で射る、ハニーメリーが銃じゆう撃げきを浴びせる。下りてきた悪魔どもを、ピンパーネルが斬り刻む、きゅーが吹っ飛ばす、アルファが喉のど笛ぶえを掻かき切る、飛燕がぶん殴なぐって、ユリカが弾き飛ばす、トワニングが蹴けり倒たおす、チーロたちパンカロ・ファミリーが押しのける。マリアローズはみんなの邪魔をしないように気をつけて走りながら、敵の様子をうかがう。可能なかぎり把は握あくして、避難民を誘ゆう導どうする。合流してくる者たちもある。彼ら、彼女らに声をかける。「こっちだ！　ジョーカーを目印に！　走って！　さあ、大丈夫だから！　きて、こっち……！」

　ともすると、自分が何をやっているのかわからなくなる。疲つかれている。ひどく。それがどうした。もうちょっとだ。あと少しでシャッコーの市街地が果てる。その向こうには断だん崖がい城じよう壁へきがあった。今はない。埋うまっている。厚く積もった土ど砂しやの上を進む。ツァール峡きよう谷こくから出るのだ。先に避難した者たちを追いかける。合流して、ジョーカーはどうするつもりなのか。拠きよ点てんを失い、新生太陽王国みたいに流る浪ろうするのだろうか。いつまでこんなことを繰くりかえせばいいのか。気が遠くなる。いや、弱気になるな。僕らは帰ってきたんだ。あの獄の獄から。なんとかなる。なんとかしないと。なんとかするん

だ。

「顔、上げて！」マリアローズは避難民を叱しつ咤たする。「止まらない！　走れなかったら歩いて！　止まっちゃダメだ、進めなくなるよ！　少しずつでもいいから進んで……！」

　そうやって他人を励はげましながら、きっと自分自身に同じことを言い聞かせている。

　土砂の上は走りづらい。すぐ崩くずれる。足をとられる。転ぶ。岩と岩の隙すき間まに落ちてしまう者もいる。片足が嵌はまった程度なら助けだせる。でも、背が立たない穴に陥おちいってしまったら、一人ではどうしようもない。選せん択たくを迫せまられる。見捨てるのか。そのとおりだ。数人がかりで救助しようとしているところを敵に襲おそわれたら、目もあてられない。動ける者、前へ進める者を優先して、見捨てるしかない。平気だ。似たような決断を今までいくつも下してきた。胸が張り裂さけそうになるのにも慣れている。このくらいで自分を嫌きらいになったりしない。こんなことができる自分だということはとっくにわかっている。僕には人を助ける力なんてない。人を導く道も知らない。資格がない。能力がない。才能がない。僕にできることは、この息がつづくかぎり一歩ずつ進むこと。それから、同じように進もうとしている人たちと歩みをともにすることだけだ。今さらながらに思う。生きるのって、きつい。死んじゃったほうが楽だ。それでも死にたくない。生きたい。この命を手放したくない。だからしがみつく。苦しみだけじゃなくて、喜びや、あたたかさも知っているからだ。嫌いなやつは多いけれど、大好きな人たちがいるから。二度と会いたくないやつもいれば、会いたくてたまらない人もいるから。まだ死ねない。死んでたまるものか。

　半分転げ落ちるように、マリアローズは道なき道を駆けおりる。もうシャッコーからだいぶ離れた。でも、ツァール峡谷はまだまだつづく。どこまで行けばいいのか。考えたってしょうがない。見上げると、邪竜の姿はまばらだ。追つい跡せきしてくる敵の数はどうか。振り返る。少なくはないが、多くもない。このままでいけば、逃にげきれそうだ。そんなふうに楽観が首をもたげると、たいていよくないことが起こったりするものだから、慌あわてて否定する。これからだ。これから。まだだ。何があるかわからない。気をゆるめるな。

　不意にロム・フォウがふらついた。妙みようだ。

何かが彼女の背中にしがみついている。

━と思ったら、そいつはロム・フォウの背中から飛び離れた。

アルファが気づいて、吠えたてながら追いかける。そいつは逃げた。速い。四つ足の獣けものか。いや、犬や猫ねこみたいな走り方じゃない。小こ柄がらな人間が地面に手をついて走っているかのようだ。それでもアルファが追いつけないくらいなので、そうとう素す早ばやい。敵、なのか。少なくとも、味方ではないと思う。やつはロム・フォウに何をしたのか。アルファは間もなくあきらめて駆け戻もどってきた。ロム・フォウもしゃがみこみかけただけで、すぐに体勢を立てなおしたから、何かしようとして、できなかったのだろうか。マリアローズは足を止め、目を瞠みはった。「え……」

きゃぅんっ。

アルファが、似合わない、まるで子犬みたいな声で鳴いて、もんどり打った。何が。

いったい、何が起こったのか。

わからない、わけじゃない。この目で、しっかりと見たし。だけど信じられない。

だって、ロム・フォウが刀を抜ぬいて、アルファに斬りつけるなんて。

アルファは無警けい戒かいだったから、よけられなかったのだろう。あたりまえだ。警戒する理由がない。

そのはずなのに、ロム・フォウがアルファを斬ったのだ。

アルファは、倒れてはいない。ただ、右前ぜん肢しから脇わき腹ばらまでをバッサリやられている。右の前足は地面につけない状態なのか。よたよたしている。怯おびえているように見える。戸と惑まどっているようでもある。母犬に甘えようとしたら手ひどく拒こばまれて、何がなんだかさっぱりわからなくて、途と方ほうに暮れている子犬みたいだ。狼おおかみは夢を見るのだろうか。見るのだとしたら、これは夢なんじゃないかと疑っているだろう。マリアローズも正直、ちょっと疑っている。ロム・フォウがそんなことをするはずがない。

「ロム・フォウ……!?」ユリカが叫さけんだ。同時にロム・フォウはまたアルファに斬りかかった。アルファは飛びのいて、なんとかよけたが――夢じゃないんだ。だとしたら。だとしたら？　何だ……？　そうか。さっき、ロム・フォウの背中にしがみついたやつ。あいつがロム・フォウに何かしたんだ。そうに違ちがいない。それしか考えられない。

「アルファ、逃げて！　ロム・フォウは正気じゃない！」マリアローズはとりあえずそう言ってみたが、アルファが理解してくれるだろうか。どれだけ賢かしこくても、狼だし。

「どういうことなの!?」とユリカが怒ど鳴なった。

「ロム・フォウは敵に何かされたんだ！　ちらっとだけど、見たから――」と、そこまで言ったところで、マリアローズは凍こおりついた。

　ロム・フォウが刀を鞘さやに納め、弓矢を構えている。

　鏃やじりが、こっちを向いている。

「嘘うそ、やっ、待っ――」てくれはしなかった。くる。きちゃう。矢が。飛んでくる。

　マリアローズはとっさに横っ跳びした。でもかわしきれなかった。「ぐっ……」

　刺さった。横っ腹だ。

「――ロム・フォウ!?」「やめて、ロム・フォウ！」ピンパーネルと、ユリカの声。飛燕が「ど、ど、どうすりゃいいんだッ!?」とかなんとか言っている。「――操あやつられてるってこと!?」ハニーメリーはさすがに察しがいい。「マリアローズ、今、拙せつ僧そうが……！」トワニングか。治ち療りようしにきてくれる。「くう!?　きゅう!?　きゅうっ!?」ときゅーがすぐそばで大おお騒さわぎしている。

「……だ、大丈夫、だから」マリアローズはきゅーに笑いかけてみせながら、横っ腹をさわってみた。矢。ある。突つき刺さっている。

「何事だ……!?」とジョーカーが怒ど声せいを発した。何事。そう

だ。

　トモヨも変だった。そして、今度はロム・フォウ。たぶん、あの敵の仕し業わざだ。

「抜くぞ！」駆かけつけてきたトワニングが、さっそく矢を引き抜いた。息が止まりそうになった。まあ痛い。痛いよ。うん。痛いけど、それよりも。マリアローズは傷口の近くに掌てのひらをあてて医術式を施ほどこしているトワニングの肩かたに手をかけた。
「ちゅ、注意、して、こっちを、操る、敵がいる……！」「何だと!?　ぬっ──」トワニングは振り向きざまに鉄てつ拳けんを一いつ閃せんさせた。比ひ喩ゆでも何でもなくて、トワニングの拳こぶしは本当に光った。でも、空から振ぶりしたみたいだ。「──むむっ！　もしや、あれか……！」

　そのあれとやらを、マリアローズも見た。

　おそらくやつは、トワニングの背中にとりついて、ロム・フォウにしたのと同じことをしようとしたのだろう。トワニングに勘かんづかれてしくじり、逃げたのだ。

　やつは──昆こん虫ちゆう、みたいな？　人間の形に似た、昆虫。そんな姿をしている。

　あれが敵。悪魔か。もちろん、悪魔だろう。

「……髭ひげ、僕はいいから、あいつを……！」「だが──っ!?」トワニングはいきなりマリアローズに覆おおいかぶさった。矢か。トワニングの背中に矢が二本、刺さっている。ロム・フォウだ。見れば、みんなロム・フォウを遠巻きにするだけで、まごついている。あれじゃあ弓矢を持っているロム・フォウはやりたい放題だ。痛いとかなんとか言っている場合じゃない。マリアローズはトワニングを押しのけた。「──こっちには医術士がいるんだ、殺してしまわなきゃなんとでもなるんだから、ロム・フォウを取り押さえて！　敵にも警戒！　虫人間みたいなやつが背中を狙ねらってくる！　やられると、操られ──」

　遅おそかったか。

「……ッ!?」

　飛燕。

よりにもよって、飛燕だ。

飛燕が、よろける。首筋を押さえて、うずくまりかけたが、持ちこたえた。その直前だった。マリアローズは見み逃のがさなかった。あの虫人間みたいな悪魔が、飛燕から飛び離はなれた。最悪じゃないか。飛燕のそばにはユリカがいる。マリアローズは血が流れでる横っ腹をぎゅっと押さえた。「ユリカ、飛燕が……！」「──え……っ!?」驚おどろきながらも即そく座ざに反応して、極クライ限マツ九クス手ナイン棍ポールで飛燕の回し蹴りを受け止めてみせたのは、ユリカだからこそできた芸当だろう。だけど飛燕は止まらない。「ウォラァ！　ウラァ！　オラァッ！」蹴る。突く。蹴る。「……っ！　フェ、飛燕……!?」ユリカは防ぐ。かわす。でも明らかに動どう揺ようしている。そのせいか、よけきれなかった。「ゃっ……！」ユリカは頬ほおをぶん殴られて、体勢を崩した。飛燕はそこに追い撃うちをかけた。「オラッ、ラァッ、ウラウラウラウラウラウラウラウラウラウラウラウラァッ！」目にもとまらぬ連撃だ。「──っ……！」ユリカは捌さばききれない。あっという間に追いこまれた。やられる。いや。黄金色の暴風が割りこんだ。「──こォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォの馬ば鹿か者がァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ……ッ！」

トワニングだ。黄金の光をまとったトワニングが、目の錯さつ覚かくだと思うが巨きよ大だいにさえ見える拳で、飛燕をボッッッコォォォォォォォォォォォォォォォォォォンッと殴なぐりつけた。その瞬しゆん間かん、飛燕の顔面がひしゃげるほどのパンチ力だった。

「──ヒゲェ……ッ!?」

十メーテル以上吹ふっ飛ばされて、ゴロンッゴロン転がりながらダンッダン弾はずみ、それでもすぐに起きあがるあたりは、飛燕も普ふ通つうじゃない。

まあ、トワニングはある意味、もっと普通じゃなかったりするわけだけど。

「貴様ァァァァッ！　愛しておるのだろうッ!?」トワニングは顔中にメリメリ血管を浮うきあがらせ、全身から金色の光を放散させまくっている。「愛しておるのではないのかッ、ユリカを！　であるならばッ！　たとえ何者に何をされようとッ、何があろうと

もッ！　ユリカに手を上げるなど言語道断ッ！　もはやァッ！　もはや貴様を許すことはできぬッ、認められぬッ！　拙僧が成敗いたすッ！　この筋肉にかけて……ッ！」

「ごちゃごちゃうっせェ」飛燕は血が混じった唾つばを吐はいた。何か変だ。いや何かも何も、操られている時点で変なのだが、それにしてもおかしい。飛燕は泣いている。涙なみだを流している。「うっせンだよ……！」

「されば拙僧を黙だまらせてみせよ……ッ！」

　トワニングが突とつ進しんして、飛燕が迎むかえ撃つ。ユリカは呆ぼう然ぜんとしている。ロム・フォウを相手にしているピンパーネルも、飛燕とトワニングが気になっているみたいだ。ハニーメリーは拳けん銃じゅうでロム・フォウを狙い撃ちしようとしているが、一発も当たっていない。いくらなんでも急所に当てるわけにはいかないから、なかなか難しいだろう。アルファは座りこんでしまった。きゅーはマリアローズのところにやってきて、でも、どうすればいいかわからなくて困り果てているようだ。ジョーカーとクローディアは避ひ難なん民みんの誘ゆう導どうを優先させている。

「くっ……そ……！」

　マリアローズは腹に力を入れて立ちあがった。

　どうしよう。

北ワールオック山麓・孤城

「援えん軍ぐん!?　援軍だと!?」ヨハン・サンライズは城じょう壁へきによじ登ってきた悪あく魔まを一刀のもとに斬きり捨てて叫んだ。「南東方向に！」と、すぐに答える声があった。ハインツ・クルエルフォートだ。「敵軍と交戦しつつ、城に近づいてくる集団ありとのことです……！」

　援軍。まさか。にわかには信じがたい。ヨハンはクルエルフォートを見た。肩まで届く髪かみが汗あせと血で汚よごれた顔に張りついている。傷も負っているようだ。クルエルフォートは情報の収集

と伝達を主任務とする無名隊を率いている。だが、その麾き下かも多くは残っていないはずだ。敵は無名隊だろうと他の隊士だろうと隊士でなかろうと区別しないし、こちらもいかなる役割を担になっていようと、敵が押しよせてくれば応戦するしかない。この状況でクルエルフォートはまだヨハンの耳じ目もくたりえようとしている。むろん、多大な犠ぎ牲せいを払はらいつつ。ヨハンは労をねぎらおうとしてやめた。今はそのときではない。今はまだ。ただ、うなずいてみせた。強く。「そうか。貴公が言うのなら間違いなかろう。──シュナイデル副長！」「はッ……！」「ここは任せる！　私は援軍を迎え入れるために動く！　コンラッド、ついてこい！」「はい……っ！」

　ヨハンはコンラッド・アシャー以下の手勢を率いて城壁の上を駆ける。孤城は全方位から攻こう城じよう兵器による投石と射しや撃げきにさらされていて、少しでも防備が手て薄うすになったところがあると、敵兵が梯子はしごを登ってそこを衝つく、こちらは死にものぐるいで死守する、なんとか押し返しては攻せめられ、防いでは猛もう攻こうを受けて、屍しかばねだけが増えてゆくような有様だ。しばらく前から敵は破城槌つちを持ちだしてきた。あれで城門が破られたら、おそらく何もかも終わる。城門は琺瑠フオールが中心になって固めているが、どれだけ持ちこたえられるだろう。父はともかく、母が身近にいなくて、息子むすこは、カレルは泣いていないか。不安と悲観を一瞬で封ふうじこめる。ヨハンは刀を振ふり、道を切り開き、走った。援軍。本当なのか。クルエルフォートにはああ言ったが、この目で見るまでは信じられない。「──あれか……！」

「ワッショーイッ！　ドッセーイッ！　ラッセラー、ラッセラーッ！」ファニー・フランクが掩えん壁ぺきの上に立って旗を振っている。あの男はドがつく阿あ呆ほうだが、その底そこ抜ぬけの明るさに救われる者も少なくない。それはヨハンもわかっている。そうはいっても、自分まであの男の振る舞まいを目まのあたりにして、何か暗くら闇やみの中で光を見つけたような気分になることがあるとは思ってもみなかった。

　ファニー・フランクは味方に声援を送っているのではない。城外に身体からだを向けている。

　その視線の先に目をやると──いる。たしかに。

　人間たちの一団が、敵軍を食い破って、城に迫せまろうとしてい

る。援軍。援軍だ。

　いや、彼らにヨハンらを救援しようという意図があるかどうかは、まだわからない。数もさして多くはなさそうだ。おそらく千には届かないだろう。数百か。よしんば彼らが加勢してくれたとしても、逆転は難しい。まず無理だろう。この芳かんばしからざる戦況を病だとすれば、根治は望めない。延命がせいぜいだ。だから意味がない、とは、あえて考えないのではない、真実、そうは思わなかった。

　我々は死ぬのだ。誰だれしも、いずれは死ぬ。生まれたばかりのカレルでさえ、必ず死ぬ。すべからく死ぬ。死すべき運命を背負い、我々は生きる。それが数十年だろうと、数年だろうと、数巡じゅん月げつだろうと、数日だろうと、たった一日だろうと、数時間、一時間、一分、一秒だろうと、我々は生きる。長短など問題ではない。我々は瞬間瞬間を生きるのだ。

　むろん、過去はそこにある。懐なつかしい、輝かがやかしい日々も、苦く渋じゆうに満ちた来し方も。未来を夢見ることもある。明日をつかむために我々は戦っている。一瞬は現在だけで成り立っているわけではない。すべての過去と未来を内包した、この瞬間を生きるのだ。一年先が見えなくても、十日後が保証されなくても、明日を手に入れられる見み込こみが立たなくても、この命をおろそかにはしない。次の一分一秒を手に入れるための努力を無益とは考えない。我々は死ぬ。我々は儚はかない。しかし、たとえばカレルが今日死ぬのだとしても、父親としては慚ざん愧きに堪たえず、無念ではあるが、その人生は決して哀あわれなどではない。我々は死ぬ。死んでゆく。だが我々は、生きている。

　喜ぶべきだ。見よ。あそこに、我々と同じく悪戦苦く闘とうする者たちがいる。

　味方かどうか。そんなことはどうでもいい。間ま違ちがいなく同志だ。もし彼らが我々と手を携たずさえて戦うというのなら、喜び勇んでそうしよう。一分一秒を分かちあおう。できることなら、彼らと合流すべきだとヨハンは思った。果たして可能だろうか。

「ヨハン……ッ！」

　呼ばれて見ると、カタリが満身創そう痍いで豪ごう気きに笑っていた。「見てみい！　昼ラン飯チタ時イムの連中や！　アジアンが

おるで！　あの飛んどるヤッツや……！」

「昼ラン飯チタ時イム──」ヨハンは眼鏡の位置を直して目を凝こらした。飛んでいるやつ。あれか。

　集団の最先頭を、黒い翼つばさを生やした黒ずくめの生き物が飛びまわって、敵を薙なぎ払い、蹴け散ちらしている。アジアン。あれが昼ラン飯チタ時イムの頭領マスターなのか。人間業わざではない。だとしても、それがどうしたというのか。アジアンの突進力はすさまじい。誰も、何も、アジアンを止められない。アジアンが通りすぎただけで、死し骸がいが転がる。積みあげられる。敵は浮き足立っている。ヨハンは「好機だ」と呟つぶやいて、歯を食いしばった。とはいえ。「──現状、こちらから打って出ることはできぬ。手をこまねいて見ているしかないのか」

「ヨハァァァァァン」

　その声を聞いて立つ鳥とり肌はだを抑おさえることは、終生できまい。

　どこにいたのか、どれだけ殺したのか、男は半はん裸らで、血みどろだった。多少は手傷を負っているのかもしれないが、何しろ首だけになったところで死にはしないような正真正しよう銘めいの化物だ。ＳＩＸはヨハンの横に進みでると、血脂あぶらにまみれた髪の毛をかきあげて、蛇へびのような双そう眼がんにまがまがしい鬼おに火びをちらつかせた。「俺が行こう」

「負傷者！　治ち療りようします！」救レス護キユ剣ーナ士イトベアトリーチェが颯さつ爽そうと現れて鋭するどく叫さけび、さっそくカタリをとっつかまえてその場に座らせた。「暴れるな、おとなしくしなさい！　残念ながらわたしの医術式は、剣けんほどうまくない！」「──い、いや、わしは平気やて、な、このとおり！　ピンピンしとるやろ！　わしより先に、アーニャちゃんをやな……」「わたしの見立てでは、あなたのほうが重傷！　早くクルチバ隊長を治してもらいたいなら、黙って治療を受けなさい！」「わ、わかったがな……！」

「私も行きますよ」と、ＳＩＸの隣となりでゆっくりと首を左右に曲げた男は、半裸でこそないものの、秩序の番人の平服姿だ。血の雨を浴びたようにどす赤くずぶ濡ぬれだが、どうやら無傷らしい。

　シャット・グレヒャ。かつて〝神剣〟と呼ばれ、今、すぐそばにいる化物に屈くつ辱じよく的な惨ざん敗ぱいを喫きつしてその名を返上した男の愛刀、ローリー・アギャンスタに鍛きたえられた淫イン靡ヴイ浪ロー漫マンの刀身は、驚くべきことに一点の曇くもりもなく冴さえ冴ざえと輝いている。

　斬れば斬るほどに、グレヒャの剣は研とぎ澄すまされるようだ。刀とう即そく断だん離り。もはや刀がふれただけでやすやすと斬断する境地に達しているのだろう。乱世がグレヒャを飛ひ躍やくさせた。

「征ゆけ、神剣」ヨハンは静かに命じた。「この地平に、ふたたびその名を轟とどろかせろ」

　グレヒャは声を立てずに笑った。「御ぎよ意い、総長。仰おおせのままに」

「Ｋｕ□Ｈａａａａａａ□Ｈａａａａａａａａａｈｈｈｈ……！」まずＳＩＸが跳とんだ。グレヒャは跳ちよう躍やくせず、虚こ空くうに踏ふみだした。ＳＩＸは回転して一個のドリルと化し、城壁下の敵へと突入する。「Ｕｒａｒａｒａａａａａａａｈｈｈｈｈｈｈｈｈ……！」一方、グレヒャは静かだ。舞い落ちる。そして刀をすくうようにふるう。グレヒャは歩く。音楽にあわせて軽かろやかに踊おどるかのように。奇き怪かいな悪魔どもの、蜥蜴とかげ人などの異界フリー生物クスどもの上を。ＳＩＸは敵中に突つっこんでいって、粉ふん砕さいし、かき回して、血肉と骨と臓物をばらまき、まぜこぜにする。グレヒャはもっと手て際ぎわがいい。あまりにもよすぎる。無む駄だなことを一いつ切さいしない。グレヒャが進む道は常に最短ルートだ。急所のみに斬りつける。刀の一ひと振ふり、多くても二振りで決着をつける。シャット・グレヒャ。人を超こえたか。あのような力を目にすれば滾たぎるものがある。ヨハン・サンライズもまた、己おのが剣を磨みがき抜いてきた一人の剣士であるがゆえに。だがその熱をヨハンは腹の奥底に押しこめる。我は考え、判断する氷ひよう塊かいでなければならぬ。かのごとき化物と神剣でも、敵中に孤こ立りつすればいずれは滅ほろぼされるのだ。数の差が大きすぎる。倍、三倍、十倍ならともかく、百倍、あるいはそれ以上だ。覆くつがえすことはできない。しかし短時間ならば圧あつ倒とうして、敵をのむこともできる。化物と神剣はそれをやってみせていた。加えて、昼ラン飯チタ時イムをふくむ一団が敵てき陣じんを引き裂さいている。化物と神剣が敵軍に空くう隙げきを作り、そこに一団はなだれこむだろう。問題はその先だ。

「総長……！」女の声だった。

　ヨハンは振り返る。短い金きん髪ぱつ。長身。彼女は三日前まで二十七番無名隊の隊長補だったが、二十六番無名隊隊長ベレニアス・〝褐色のブラウン〟・ウォンドードが戦死したため、その後任となった。よくない報しらせだと、すぐに察した。彼女は琺瑠の下もとで働いている。

「シェルベリ隊長！　何か!?」

「城門が……！」とカロリーナ・シェルベリが叫んだ。そのときだった。

　城壁が大きく揺ゆれた。

　ヨハンは掩壁から身を乗りだした。「突破されたか……！」

　見れば、破城槌が深く、深く、城門に食いこんでいる。とうとう穴があいたのだ。ファニー・フランクが「ヌオオオオオオオオオオオオオオオオォォォォォォォォォ……ッ!?」と目玉を飛びださせている。「らしくないぞ、国王！」ヨハンはすかさず叱しかりつけた。「君は君のなすべきことをなせ！」「──ヲヲッ!?　そうだったそうだったッ！」ファニー・フランクはまた旗を振りはじめた。「大丈夫だ大丈夫だ大丈夫だァッ！　まだまだこれからだぞッ、これからこれからッ！　私みたいなアレがピンピンしているのだから、キミタチはもーっとダイジョーヴイッ！　ヴイッヴイッヴイッ！　勝利のヴイ……ッ！」なんだかよくわからないが、それでいい。ヨハンはあたりを見まわした。十七番警けい邏ら隊隊長スチュワート・モルグレーがいる。「モルグレー隊長！　ここを死守せよ！」ヨハンは顔を上げて、胸を張り、高らかに宣言した。「私は城門を開けて、援軍を迎え入れる……！」しぼみかけていた士気が、またたく間に盛り返した。「──おっしゃあッ！」治療を受けていたカタリが立ちあがった。「わしも、もう一働き二働き億千万働きや！　やるでやったるでやりまくったるでぇーっ！　このわしを倒たおそう思たらなあ、最低でも八百万くらい集めなあかんって思い知らせたるわ……！」「その意気だ！」ヨハンはカタリの肩かたを叩たたいて走りだす。すれ違う隊士、隊士以外でも、大半の顔と名を覚えている。名を呼ぶ。一声かける。得意ではないが、笑いかけもする。悲ひ壮そうは不要だ。ファニー・フランク。あの男を見ていてヨハンは学んだ。信と義と、それから情によって固く結ばれていた秩序の番人ならば、覚かく悟ごさえ見せれば全員ついてきた。我とともに

死ねと命じれば、躊ちゆう躇ちよなく死に花を咲さかせてみせるのが銀のザ・シ軍団ルバリイの誉ほまれだった。だがこの集団は違う。生きのびるために寄り集まり、戦っている。華はなゝばなしい最さい期ごに向かって命を燃焼させる物好きたちの同好会ではない。皆みなに希望を与あたえねばならない。刹せつ那なでもすがりつける、明るい光を。おれにできるのか。できなくても、やるのだ。

　ヨハンはコンラッド・アシャーやカロリーナ・シェルベリらを引き連れて石段を駆かけおりた。城門へと向かう。城門からは破城槌の先せん端たんが突きでていた。積みあげられていた木材や石材が崩くずされている。穴は刻一刻と広げられようとしていた。そこから敵兵が入りこんでくるだろう。琺瑠が隊士らに指図して、穴の周囲に瓦が礫れきを投げこませている。ヨハンは「琺瑠！　もういい！　作業は中止だ！」と叫んだ。「防戦の用意を！　あえて敵を入れる！　外から援えん軍ぐんがくるぞ！　挟はさみ撃うちにする！」「—援軍が!?」琺瑠は仰ぎよう天てんしたようだが、すぐさま切りかえた。「作業中止！　ただちに隊たい伍ごを組み、迎げい撃げき態勢を整える！　わたしたちの力を見せつけてやりましょう……！」「応！」とこたえる声、声、声。ヨハンは養父ちちにして初代総長デニス・サンライズの遺刀、秩序の番人の象しよう徴ちよう、言わずと知れた名めい匠しようダグラス・トゥースの手になる豪ごう刀とう、日にち輪りんを掲かかげた。ああ、養父の顔が浮うかぶ。どうか力を。ヨハンが頼たのまずとも、養父は貸してくれるだろう。養父はいつも見守ってくれている。まだここへはくるでないぞ、と天上で微笑ほほえんでいる。羅叉ラサは城じよう壁へき上で死神と化していることだろう。「—我につづく者は何処いずこ！」

「此処ここに！」とコンラッド・アシャーが応じた。

「此処に！」と李イ童ドウ晏アンが。

「此処に！」とチェス・ピード。

「此処に！」カロリーナ・シェルベリ。

「此処に！」そして、琺瑠。



　それから、エルデン以来の隊士たち、エルデンを去ってから隊に加わった者たち、ただ生き残るため、吸い寄せられるようにこの城に集まってきた者たちが、矢や継つぎ早ばやに声をあわせる。「此処に！」「此処に！」「此処に！」「此処に！」「此処に！」「此処に！」「此処に！」「此処に！」「此処に！」「此処に！」「此処に！」「此処に！」

ヨハンは同志たちの顔を見まわした。「勝つぞ」

勝利とは何か。

困難を乗り越こえることである。今を、次の今を手に入れることである。今、ここにいることである。笑え。笑え。笑うのだ。笑えるかぎり、我らは負けぬ。

破城槌つちがさらに前後する。城門が破は壊かいされてゆく。穴が広がる。悪あく魔まどもが穴に剣だの槍やりだのを突っこんで広げてゆく。すでに、破城槌と城門の間に人が通り抜ぬけられそうな隙すき間まができている。とうとう一いつ匹ぴきの悪魔がそこから醜みにくく膨ふくれた山羊やぎのような顔を出す。ギャアギャアヒギャヒギャ叫んでいる。

「ヨハン」と琺瑠が囁ささやく。いつの間にか傍かたわらにいる。「あなたが愛いとしくて、誇ほこらしくて、たまらない」

「おれもだ、琺瑠」抱だきしめたいが、その必要はあるまいと思う。ヨハンは日輪を振りおろし、切っ先で城門の穴を示す。「突とつ撃げき……！」

叫びながら、先頭を切って駆ける。穴がさらに広げられた。途と端たんにそこから悪魔どもがどっとあふれる。「破天一流天技──」気負いはない。むしろ程ほどよく力が抜けている。口くち許もとには、笑えみ。ヨハンは日輪で空くうを斬きった。「〝残ざん空くう〟」

空が、まさしく空間が、ねじ斬れる。雪白色の圧力変化波が轟ごう音おんを立てて突き進み、悪魔どもと城門を一いつ緒しよくたに、斜ななめに両断した。

ヨハンは左手の中指で眼鏡を押しあげて、城門の穴に突っこんでゆく。突出する形となったヨハンを、数あま多たの敵が押し包もうとする。「無駄だ」ヨハンはただ目前の敵を斬り殺すだけでよかった。「総長を……！」コンラッドが悪魔を突き倒しながら、別の悪魔を突き殺す。「赭亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜」李童晏が凶きよう悪あくな猛もう剣けんで悪魔を斬り崩してゆく。「疾しつ……っ！」チェス・ピードは機き敏びんに立ち回って、敵軍の薄うすい部分を巧たくみに攻せめる。「はああああぁぁぁぁぁぁぁ……っ！」シェルベリは剛ごう剣けんであえて強敵

に打ちかかって立ち往生させる。そして、琺瑠。琺瑠の戦技は流れるようだ。流りゆう麗れいだ。鮮せん烈れつだ。彼女はアラン・ガーランド作のナァガ、幅はば広びろで、刀身の先のほうが重い独特の曲刀を愛用している。男でも重くてうまく扱あつかえないナァガを、彼女は遠心力を利用して誰だれよりも精せい妙みように使ってみせる。それだけではない。ナァガに加えて、魔導王時代の武器、金属鞭べんヴィオキュリンテスも同時に駆く使しする。隊長らにとどまらない。あれにて剣を振るはエルナンド・フレーブ。彼はトーマン・ブレイコード。ガイツ・ベッテン。オルデン・ブラッソー。アダム・セッキアもいる。ライナー・クプレットも。リーナ・チエルンも。裁サイ連レン武ブも。銀の鎧よろいに身を包み、嬉き々きとしてヨハンに従うエルデン以来の隊士がまだ何人もいる。秩序の番人は潰ついえぬ。義は生きつづける。おれが生かしてみせる。

　ヨハンは瞑めい目もくして、呼吸を止める。剣とは。

　剣とは、ただ剣にあらず。剣は時空そのものである。少なくとも、我が剣は。剣、すなわち時空は、我が意のままに。

　息を止め、時を止める。

　ヨハン・サンライズの認にん識しきの中で、時間が静止する。

　目を開ける。

　見える。見える。何もかもが見える。

　ヨハンは把は握あくする。敵の位置を。時を止めて、空間を掌しよう握あくする。

「破天一流絶技」

　斬らなくていい。置いてゆけばいい。ただ敵の居場所に剣を置いてゆく。

「〝覇は界かい〟」

　息を吐はく。時が動きだす。

　剣を置かれた五十七の敵どもは、一いつ斉せいに首を刎はねられ、胴どうを両断され、皆みな殺ごろしの憂うき目めに遭あう。脈

みやく拍はく。正常。身体からだに張りもない。疲ひ労ろう。さしたるものではない。

　ヨハンは日輪を振りかざす。刃やいばに陽光がまばゆく照りかえされる。

「生きるぞ！　進めぃ……っ！」

「ラッセラーッ、ラッセラーッ、ラッセラーラーラー……ッ！」城壁の上でファニー・フランクが旗を振っている。その滑こつ稽けいさに何人かが笑う。笑い声が広まる。ヨハンたちは前進する。敵は退く。あとずさった敵は斬る。背を向けた敵は斬る。いかにしようとも、敵は斬る。「ゆるめるな！」ヨハンは同志を励はげましながら、自らも進みに進む。この勢いを止めてはならない。所しよ詮せん、こちらの数は少ないのだ。傾かたむいた流れに乗らなければ、すぐに行きづまる。行けるところまで行く。ＳＩＸとグレヒャが見えてきた。頭上を影かげがよぎった。否いな。影などではない。黒い翼つばさを羽ばたかせ、黒くろ髪かみをなびかせている。ヨハンは見た。目があった。「──昼ラン飯チタ時イムの頭領マスターか」「ヨハン・サンライズ……！」アジアンは急旋せん回かいして、停止した。「助すけ太刀だちとまではいかないけどネ！　肩を貸しあい、背中を守りあうことくらいはできる……！」「正直、猫ねこの手も借りたい！　願ったり叶かなったりだ……！」「猫よりは役に立つはずだヨ……！」「そうでなければ困る……！」ヨハンは馬ば鹿かみたいに日輪を振りまわした。「援軍を出で迎むかえるぞ！　ついでに敵を蹴け散ちらしてやれ……！」

　喊かん声せいが発せられ、弾はじける。我が軍は灼しやく熱ねつの火球と化す。斬るのではない。粉ふん砕さいする。敵が逃にげ惑まどう。散り散りになる。だがころあいだと、ヨハンは悟さとる。乱れに乱れる敵陣の奥から、整然と行進してくる悪魔どもがいる。まだ遠いので見えないが、やつらの背せ丈たけは二メーテルを超こえ、全身鉛なまり色いろだろう。金属のような肌はだをしているうえに鎧を身にまとっているだろう。鋼鉄の兜かぶとのごとき頭から二本の角が突つきだしているだろう。両眼に青い炎ほのおをともしているだろう。ゼオルクスギャンド。ゼオルどもだ。連中は手て強ごわい。ゼオルの部隊が押しだしてきたら、間ま違ちがいなく苦戦を強しいられる。その前にいったん城内に撤てつ収しゆうして、態勢を立てなおすべきだ。ヨハンは叫さけぶ。「──グレヒャ隊長！　ＳＩＸ！　しんがりを！　いったん退ひく……！」

　グレヒャは足を止めて、舌打ちをしたようだ。救護剣士の調教がよほどきいているのか、ＳＩＸは存外従順だった。「━了りよう解かいだッ！　俺はお前たちが引き返すまでここにとどまるとするよ、超電磁ＳＩＸピィィィィィィィィィィィィィーン……ッ！」稲いな妻ずまを撒まき散らしながら独楽こまみたいに回るあの姿を目にして、従順という言葉を思い浮かべられる者がいるとするなら、だが。ヨハンは再度アジアンを振り仰あおいだ。「何のもてなしもできないが、一時我らが城内へ……！」「ああ、そうさせてもらう！　それにしても、あのＳＩＸまでいるとはネ……！」アジアンは苦い笑みを残して、仲間たちのほうへ飛んでゆく。そうしようとしたのだ。できなかった。妨さまたげられたのだ。何かが急降下してきて、アジアンに襲おそいかかった。鳥？　否いな。違う。鳥などではない。有ゆう翼よくの人面山羊だ。青い肌の悪魔が鷹たかのような目を赤々と輝かがやかせて、その背にまたがっている。右手に葡ぶ萄どう色いろの剣。左手には褐かつ色しよくの剣。背中にも一本、剣を負っている。「ＳＨＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ……！」悪魔は両手の剣でアジアンを斬り裂さこうとした。「━タイダル・クライシズ……！」アジアンは鋭するどい弧こを描えがいて飛び、斬ざん撃げきをかわしたが、悪魔は追つい撃げきする━と見せかけて、こっちに下りてきた。アジアンは意表を衝つかれたようだ。「ッ……!?　気をつけろ、その男は大ハイ公ヴエリ爵オンだヨ……！」「何だと……!?」大ハイ公ヴエリ爵オン。公ヴエリ爵オンの、さらに上か。侯爵ラデオンでさえ厄やつ介かいな相手だ。しかも、手の内がまったくわからない。出方をうかがいたいところだが、駄だ目めだ。うかがっているうちに被ひ害がいが拡大するかもしれない。とりかえしがつかないほどまでに。全力で当たる。それが最善というより、それしかない。「全隊長、あの大ハイ公ヴエリ爵オンを狙ねらえ！　グレヒャ隊長も━」命じている最中に、地じ獄ごくの大ハイ公ヴエリ爵オンタイダル・クライシズは、剣を投げた。投げた、だと？　葡萄色の剣だ。クライシズが何か呟つぶやいた。というよりも唱えた。すると、どうだろう。剣が消えた。代わりに、全長十メーテルばかりもありそうな、濃こい緑と黒の斑まだらの巨きよ大だいな蚯蚓みみずみたいな生き物が現れたのだ。クライシズが「喰くらえ、ヌェニチェゴラ」と言った。ヌェニチェゴラ。それが生き物の名か。「ストーカーめ……！」アジアンが引き返してきて、クライシズに打ちかかる。クライシズはこれを褐色の剣で防いだ。とりあえずクライシズのほうはアジアンに任せるしかない。それよりも、ヌェニチェゴラだ。でかい。身をよじって、落ちてくる。一刀両断できるか。できたとしても、押し潰つぶされてしまったら終わりだ。「━退たい避ひ……！」

　ヨハンは後方に跳とんだ。琺瑠は？　大丈夫だ。他の者たちも、大半は。ヌェニチェゴラが落下した。衝しよう撃げき。ヨハンはすぐさま重心を低くして、息を整える。

「破天一流天技〝残空〟」

　空間を、ねじ斬れ。雪白色の圧力変化波がヌェニチェゴラの巨きよ体たいを猛もう襲しゆうしたが、浅いか。ヌェニチェゴラは傷口から青い体液をばらまいて、のたうつ。その気色の悪い身体から、ニュキニョキニュキニョキ無数の触しよく手しゆが生えた。のびる。迫せまってくる。標的はヨハンだけではない。ヌェニチェゴラの周りにいる全員だ。「防げ……！」ヨハンは日輪を振るって触手を斬った。その瞬しゆん間かんに気づいた。体液。ヌェニチェゴラの体液が地面に降りそそぐと、煙けむりがあがる。あれは危険なものだ。ヨハンは体液を浴びないように身をかわし、下がる。下がる。「──やつの体液に注意しろ、ふれるな……！」「ぐおぉっ……!?」遅おそかったか。李童晏が体液を頭からかぶって苦く悶もんしている。「やらせはせぬ……！」ヨハンは目をつぶる。息を止める。時を止める。目を開ければ、見える、見える、見える。触手の数々。その位置。質感までも。ありありとわかる。「破天一流絶技──」斬らずに、剣を置いてゆく。同志に体液がかかるようなことがあってはならない。断面から噴ふきだすだろう体液が届かない場所に。五十七。いや。五十八、五十九。「〝覇界〟」息を吐く。時が動きだす。五十九本の触手が一挙に切断される。わずかな倦けん怠たい。問題はない。ヨハンは左手の中指で眼鏡を押しあげる。「下がれ！　距きよ離りをとれ……！」はっとして、ただちに命令に従う同志たちの中で、一人だけ。「お言葉ですが……！」

　シャット・グレヒャ。神剣だけは、ヌェニチェゴラめがけて突っ走る。ヌェニチェゴラの触手がグレヒャに集中する。「汚けがらわしい！」触手は、だが、グレヒャをとらえられない。足止めすることすらできない。今のグレヒャなら、〇・一秒間に十五サンチの隙間が存在すれば、そこを通り抜ぬけられる。常人にはむろん不可能だが、天性のバランス感覚と敏びん捷しようさと剣才と膨ぼう大だいな殺傷経験を誇るグレヒャにはできる。さらにグレヒャは、触手を斬りさえする。斬って、体液が噴ふん出しゆつする前に、グレヒャは移動している。時空を掌握する破天一流の覇界とは違う。グレヒャは時空を意のままに泳いでいるかのようだ。そして、ついにグレヒャは到とう達たつしてしまう。ヌェニチェゴラの体上に。

「さあ、処しよ刑けいの時間ですよ」グレヒャは寸時、ヌェニチェ

ゴラの上に突っ立っているように見えた。「汚お物ぶつは、死刑だ」

　始まった。グレヒャはまず、淫イン靡ヴイ浪ロー漫マンを奔はしらせて、ヌェニチェゴラを背開きにした。それから、肉を削そぎ落としてゆく。速い。速すぎる。なんという手て際ぎわのよさだ。見る間にヌェニチェゴラの体積は五分の四になった。四分の三になり、二分の一になった。三分の一になった。ヌェニチェゴラは解体されてゆく。この生き物に脊せき椎ついがあったことが、ヨハンには多少意外だった。よもやこの生き物の脊椎を直じかに拝むことになるとは、思いもよらなかった。グレヒャは首をかたむけて、目をすがめた。「図ずう体たいが大きくても一いつ匹ぴきは一匹。カウントは一つしか増えない。つまらないな。出直してきなさい。無理か」

「グレヒャ！」ヨハンが呼びかけると、グレヒャは不愉ゆ快かいそうに唇くちびるをゆがめた。「わかってますよ、言われなくたって」

　くる。クライシズだ。アジアンの攻こう撃げきに押され、逃げまわりながら、また剣を投げた。今度は褐色の剣。「ガシュテ・ダンドルボログ……！」剣が失うせて、多頭有ゆう尾び、蟷螂かまきりのような前ぜん肢しを備える巨大なコオロギが出現した。ダンドルボログ。だがあのような魔虫など、グレヒャは物ともしないだろう。大ハイ公ヴエリ爵オンともあろう者が苦し紛まぎれか。それにしても、妙みようだ。クライシズは有翼の人面山羊やぎからダンドルボログに飛び移った。アジアンがすかさず有翼の人面山羊を黒い竜首のごとき左ひだり腕うでてつかまえ、食いちぎる。「ボクから逃げるのかい、ストーカー……！」クライシズは答えない。アジアンには目もくれずに、ダンドルボログを駆かってグレヒャに突とつ進しんしてゆく。「大ハイ公ヴエリ爵オン！」グレヒャはダンドルボログもろともクライシズを狩かるつもりだ。「悪くない獲え物ものだ……！」淫靡浪漫が雷らい光こうを閃ひらめかす。──いった。そう見えた。錯さつ覚かくだった。ダンドルボログは一瞬で四し断だん八はち裂れつされたが、クライシズはその寸前に魔虫の背から跳びあがっていた。「──俺の魔術を見せよう……！」

　残りの、一本。大ハイ公ヴエリ爵オンは背負っていた剣を抜いている。

　白い、いや、無色透とう明めいの剣だ。

「魔術なんて……！」グレヒャが飛ひ翔しようする。いくら神剣でも飛べるわけがない。しかし飛ぶがごとく跳ちよう躍やくして、クライシズを墜おとすのだろう。ヨハン・サンライズをしてそう信じさせるほど、グレヒャは神剣の名にふさわしく神がかっている。

　斬きる。

　神剣が、地獄の大ハイ公ヴエリ爵オンを。

　グレヒャの淫靡浪漫と、クライシズの無色透明の剣が、ぶつかりあう。

「ラァラン・グレヒャ！」クライシズが何か言った。

　剣が、砕くだけ散った。クライシズの剣だ。淫靡浪漫はびくともしない。次の瞬間、グレヒャが二の太刀たちを繰くりだしてクライシズを殺とるだろう。そうはならなかった。無色透明の剣の欠片かけらが、輝く。きらめく。グレヒャを包みこむ。「──これは……!?」

「グレヒャ隊長！」ヨハンは目を瞠みはった。何が。何だ。あれは。魔術。クライシズは魔術と言った。俺の魔術を見せようと。あれが魔術なのか。グレヒャがきらきらと光り輝く剣の欠片に、食われてゆく。クライシズは先に着地した。「くくくく……」両腕を広げ、のけぞって、悪魔が嗤わらう。「くははははははははははは……！」

　そんな。こんなことが。

　どんなことでも起こりうる。悪魔に、とりわけ高位の悪魔どもには人間の常識など通用しない。わかっていたはずだ。さりとて、これは。

　グレヒャが消えようとしている。消える。消えてしまった。グレヒャは。

　別の物が残された。剣けんだ。

　銀色の剣。

「たとえ、どんな手品だろうと……！」アジアンが黒こく翼よくを羽ばたかせてクライシズに躍おどりかかる。「手品師さえ始末すれ

ば……！」

「ガシュテ・グレヒャ、ラティハ・アグナル……！」クライシズがそう叫ぶと──手品。これも手品だというのか。アジアンの左腕が空から振ぶりした。「ッ……!?」

　クライシズが消えたのだ。いない。どこにも。クライシズは。しかし、青い剣が。今さっきまでクライシズがいたところに、青い剣が突き立てられている。

　その青い剣を、彼が引き抜いた。

　シャット・グレヒャ。

　輝く剣の欠片に食われて消えたはずの神剣が、なぜ。どうして。

　グレヒャは右手に淫靡浪漫を、左手に青い剣を持って、唇を舐めた。「これが俺の魔術だ、人間クソども。俺は剣メン舞チのド・大ハイ公ヴエリ爵オンタイダル・クライシズ。魔ま剣けん使い。俺は魔剣を生みだし、使いこなす」

ツァール峡谷

　――オレ、何やってンかなァ。わっかんねェーなァ。どォーもぼォーっとしちまってる。何もかも曖あい昧まいで、わッけわかんねェー。どこにいンのかね、オレ。つゥーかオレ、いるンかね。どっかに。イヤいるか。こォーやって考えてるワケだし。なんつゥーの、オレの自我だけが、オレの身体からだから離はなれて、どっか漂ただよっちまってるみたいなカンジ？　思えば、こうやって物を考えることができるようになったのも、最近だ。最近？　その前は？　どうしていた？　どこかにいた。それは間違いない。一人じゃなかった。そうだ。そうだよ。オレァ一人じゃなかったはずだ。誰かと一いつ緒しよにいた。誰か。イヤイヤイヤ。誰かじゃねェーだろ。そんな誰かとか言っちゃえるような相手じゃなかったはずだろ。唯ゆい一いつだろ。オンリーワンだろ。むしろオンリーユーだろ。思いだせねェーとかありえねェーはずだろ。わかるはずだ。考えなくたって、わかる。わかれ。わかれ。わかれよ、オレ……！

　――ユリカ。

　そうだ。

　オレァ、ユリカと、ユリィといたんだ。それから、ユリィの仲間たちと。ンで、何してたっけかなァ。そこまではわッかんねェーケド。なんッか、やったらムカつくんだケド。何だコレ？　すッげェームカムカするわァ。なんかあった？　悔くやしいことが？　ふざけンじゃねェー的な。あった……ような気がする。なかったらこんな気分じゃねェーよな。オレァ、何してんだ？　寝ねてんのか？　夢でも見てんのかよ？　それにしちゃァー奇き妙みようだよな。違ちがう。眠ねむっているわけじゃない。じゃあ何だ？　なんで何も感じねェーんだ？　感じない。本当にそうなのか。見えない？　聞こえない？　オレはどこにいる？　ここだ。オレはちゃんとここにいる。ここってどこだよ？　それがわからない。堂どう々どう巡めぐりだ。きっと何か根本的なところで間違っている。それを突つき止めないといけない。オレはオレで、それなのにオレはオレじゃない？　オレは眠ってない、何かしてる、でも、オレが何か

してるワケじゃない。できない。──身体。

　身体。ソレだ。動かない。オレの身体。動かせない。見ることができない。聞くことができない。感じることができない。自由にならない。まるでオレがオレじゃないみてェーに。それって何だ？　どォーゆーこったよ？　なァ、ユリカ。ユリィ。教えてくれよ。オレァ、どォーなっちまってンだ？　ユリィはどこにいるんだよ。顔を見たいんだよ。声を聞きたいよ。さわりたい。抱だきしめたいよ。キスしたい。ユリィが欲ほしい。ユリィのぜんぶが欲しいンだよ。奪うばったりしない。オレはユリィからユリィを奪いとって自分のモノにしよォーとか、ンなコトは考えてねェーんだよ。ただユリィのそばにいたい。誰よりも何よりもそばに。そんでいろんなコト話したりありとあらゆるモノから守ったりメチャクチャ大事にしたりウルトラかわいがったりスーパー尊敬したりしたい。ずっとしたい。しつづけたい。この命が果てても。ソレが欲しいってコトなんだよ。

　浮うかんでくる。ユリィの顔。瞳ひとみの色。ちっちゃな鼻。ほっぺたの感かん触しょく。くちびるのやわらかさ。耳のトコをちょっとだけさわる。ユリィはくすぐったがる。そんで笑う。おもしろがってオレはもっとさわる。そのうちユリィは少しだけ怒おこる。もう、やめて！　やめねェーよ。だってメタメタかわィーからよォ。かわいすぎだからさ。保証するね。断言できるよ。ユリィは十年後も二十年後も三十年後も五十年後も百年後も二百年後もそのあとも、永遠にかわいいって。オレにはわかるんだよ。ユリィ。ユリィ。ユリィ。ユリィ。

　なァ、ユリィ。

　いったいオレは、どこにいる？

「飛フエイ燕ヤン……！」

　名を、呼ばれた。

　ユリィだ。

　オレの名前を、ユリィが呼んだ。

「お願いだから、目をしゃまして、飛燕……！」

　目を、覚ます。目を？　オレが、目を？　覚めていない？　眠っ

ている？　違う。そんなんじゃねェー。そうじゃなくて、オレは──オレは？　クソッ。シャキッとしろよ、オレ。呼んでるんだ、ユリィが。他ほかの誰でもないユリィが、オレのコトを。

　見ろ。見えなくても、見るんだ。聞け。聞こえなくても、聞くんだ。感じろ。感じられなくたって、感じるんだ。オレは──オレは、切り離されている。自分自身から。オレと、オレが、繋つながってない。繋げろ。意地でも。何がなんでも。是ぜが非ひでも。捜さがせ、オレ自身を。手がかりは、ある。ユリィだ。それから、子分ども。あとは、荊王ジンワン。ジン。記き憶おく。

　光も、闇やみもない、色のない世界で、オレは捜す。上も下も右も左も前も後ろもわからない。進んでいる実感がない。それでもあきらめない。オレは捜す。

　記憶って何だ？　ぬくもりだ。温度。こっちか。オレは進む。今のオレには手も足もない、身体がないから、這はうこともできない、それでもうごめくようにして、少しずつ、少しずつ、進む。

　ややもすると、オレはオレを見失いそうになる。オレなんかいないんじゃねェーの？　オレがいるなんて、気のせいなんじゃねェーのか？　ホントはどこにもいないんじゃ？　最初っから存在してないんじゃねェーの？

　ンなコトねェーよ。ユリィが呼んでくれたじゃねェーか。あの声は絶対にユリィだった。ユリィがそこにいるってコトだろ？　オレを待ってる。待ってくれてる。だったら行くっきゃねェーだろ？何年かかっても何万年かかっても、オレ、行くよ、ユリィ。そこに行くよ。どんなに苦しくたって、もうダメかもって五千万回思ったって、そのたびに打ち消して、オレ、行くよ。会いたいからさ。会いたくてしょうがねェーから。

　そのときは突然、訪おとずれる。──ウォ……ッ!?

　見えた。まだゆがんでっケド。聞こえる。声が。ユリィの声。

「飛燕……！　目をしゃまして……！」

「無む駄だだ、ユリカッ！」

　これは違う。オッサンか。髭ひげのオッサンだ。

「もうあきらめよ！　この男は敵の手に落ちたのだ、あまつさえお前を傷つけたッ！　拙せつ僧そうが口出しする筋合いではないと思い何も言わなかったが、大きな間違いであったッ！　痛つう恨こんの過あやまちだッ！　このような男に、お前を任せるわけにはいかぬ……ッ！」

　──ってオッサン、何言ってんだよ。オレが……何？　敵の手に落ちた？　ユリィを傷つけた？　ハァ……？　バッカなこと言って──イヤイヤだけど、待てよ。よく見ろ。しっかり見ろって。見えてきた。ユリィ。何だよ。ボロボロじゃねェーか。オッサンもだけど。なんでそんな傷だらけなんだよ。どういうワケで、オレの目の前に傷だらけのユリィとオッサンがいるんだよ。オレは何してんだよ。動いてる。激しく。オッサンが近づく。違う。オレがオッサンに近づいてる。肉にく薄はくする。オッサンの拳こぶしを受け流す。オレは回転する。そんでオッサンの腹に一発ぶちかます。「ヌゥ……」オッサンはよろめく。オレは矢や継つぎ早ばやにパンチを繰りだす。オッサンの腹をパンチしてパンチしてパンチする。オッサンは耐たえる。耐えて、光りだす。金色にピカァーッと。そしたらオレのパンチがボーンッと撥はね返される。オッサンが反はん撃げきに転じる。オレは受け止める。捌さばく。でもメタクソ重おめェー。一撃一撃が。なんて打撃だよ。骨に響ひびく響く。筋肉潰つぶれてんじゃねェーのかコレ。なのにオレは平気でオッサンの攻こう撃げきを防いじまってる。ヤッタラメッタラ痛いてェーのに。どォーゆーコト？　なんか──なんッかよォ、思いだしてきたぞ、だんだん。

　傷つけた。ユリィを。そォーだ。

　オレがやった。

　まず回し蹴げり。ユリィは超反応。極クライ限マツ九クス手ナイン棍ポールでガッと止めた。オレはそっからキックパンチキック。ユリィは何が何だかわからないって顔。あったりめェーだ。オレがユリィにラッシュするなんてありえねェー。だけどオレはやった。ユリィの顔をぶん殴なぐった。オレが。やったんだ。思いっきり殴った。嘘うそだ。嘘じゃねェーよ。やったんだよ。オレはあのトキまだなんとなァーく意識っつゥーかそォゆゥーのがあった。あ、オレ、とんでもねェーコトやってる。そんなカンジを覚えてる。なんでだよ。なんでこんなコト。敵の手に落ちたとかなんとか、オッサンが言ってた。そのせいか？　それでオレの身体は勝手に動いてやがんのか？　だとしても、だよ。ダメだろ？　何があったって、

ユリィを殴るなんてやっちゃいけねェーコトだろ？　オレはオレを止めなきゃいけなかっただろ？　できなかったのかよ。オレ、弱よえェーじゃん。激弱じゃん。情けねェ。憤ふん死しモノじゃねェーか。つゥーか今すぐ爆ばく死ししろ、オレ。そんなオレを、だけど、ユリィは……ユリィは、まだあきらめてねェーのかよ。目を覚ませって言ってくれてんのかよ。オレはただ敵に操あやつられてるかなんかしてるだけで、目を覚ましさえすればもとに戻もどるはずだって、思ってくれてんのかよ。オレを信じてくれてんのかよ。なら、オレは。

　オレは応こたえるしかねェーよ。その信しん頼らいに。全力でやれ。やれなくたってやるんだよ。オレの身体は超速でかっ跳とんでオッサンから逃にげて、マリアローズィに襲おそいかかる。ユリィが立ちふさがる。「──やめて、飛燕……！」極限九手棍で、ユリィはオレの身体の連続攻撃を防ぼう御ぎよする。あくまで防御するだけだ。攻せめには転じない。オレの身体は「ヅァッヅァッヅァッヅァッヅァッヅァッヅァッヅァッヅァッ」と気合いを発しながら拳で、掌しよう打だで、貫ぬき手てで、ユリィに痛撃を加えようとする。ユリィはそれを逐ちくーいち防ぐ。それも、できるだけやわらかく。ガンッと弾はじくんじゃなくて、スァッと流そうとする。なんでユリィがそんなコトするのかって？　わかンだろ。オレのためだろ。オレの身体がオッサンやユリィ以上にズタボロのクソミソになってっからだろ。オレは超絶痛ェーし、モンのすンげェー熱を持ってるのに、この身体は止まらない。ユリィはオレを壊こわすまいとしている。

　なんて愛だよ。

　どうにかしなきゃだろ。どうにかするんだ。ンでも、どうする？　考えるんじゃねェー。オレの意識を行き渡わたらせろ。全身に。何かがおかしいはずだろ。どっか変になってる。オッサンがきた。「黄おう金ごん脚きやく……ッ！」金色の足。ゴールデンフット。もしくはゴールデンレッグ。どっちでもいい。オレの身体はぶっ飛ばされる。三十メーテルほどもダダダダッと地べたを転がる。気が遠くなっても、すぐに起きあがる。オレの身体は「ガアアアアァァァァァァーッ」とか叫さけぶ。犬っころみてェーに。そんでもって、加速する。絶対的な、相手にとっては絶望的な加速。相手にはオレの身体が増えたみたいに見えるはずだ。オレが何十人もいるみたいに見える。正確には八十四人。八十四散乱打究極奥おう義ぎ〝我ウオ無ウーシ双ユオン〟。テメェーがやるんじゃねェーよ

とオレは思う。オレの身体だからって、テメェーがやっていい技わざじゃねェーんだよ。だけどオレは止められない。八十四人のオレがオッサンとユリィに攻めかかる。「飛燕……！」ユリィは逃げる。「おのれェェェイ……ッ！」オッサンは踏ふみとどまる。何かを迎むかえ入れるみたいな妙みようちきりんなポーズをとると、全身の筋肉がふくれあがる。パンツ以外の着衣がぜんぶはち切れ飛ぶ。オッサンがとんでもねェーギンギラピカピカの光を放ちだす。「独流秘技ッ！　黄金ゴールド筋肉マツソオオオオオオオオオォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォッ……！」オレの身体からだどもは気にしないでオッサンに押しよせる。押し返される。近づけない。それどころか、バーンッドーンッスターンッと撥ね飛ばされる。アホみてェーにまぶしい。オレは見る。オッサンが。どでかい黄金の、ほとんど裸はだかの、筋肉筋肉している、あまりにも筋肉すぎる、いくらなんでも筋肉にもほどがあるオッサンが、そびえ立って、オレを見おろしている。「──許されざる者よ食くらうがいい、拙僧のォォォォォォォォォォォッ！　筋肉の一撃イイイイイイィィィィィィィィィイイイイィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィ……ッ！」

　マジかよ。黄金の筋肉オッサン巨人が両手を組みあわせて、オレの身体どもめがけてそれを振ふりおろす。イヤ潰れるって。ぺちゃんこになっちまうって。死ぬって。冗じよう談だん抜ぬきで。しょうがねェーかな。そんなふうにもちらっと思う。ユリィにあんだけのコトしちまったワケだし。させたワケだし。オッサンに始末してもらったほうがいいのかもな。ユリィのためにも。万ばん死しに値あたいするってヤツだよな。ところが、そのユリィが。

「だめ！　やめて、トワニング……！」

　だったらオレは。てゆゥーかオレは。そっか。そうだよ。死ぬワケにはいかねェーよ。ユリィのために。だって、オレがたとえ何をしたとしたって、オレが死んじまうコトなんか、ユリィが望むハズねェーだろ。そんな女じゃねェーだろ。そんなコト、オレが一番よくわかってんだろ。オレが過ちを犯おかしたとしたら、オレがやるべきコトはそれを償つぐなうコトで、死んで帳消しにするコトじゃねェーだろ。オレは生きなきゃだろ。ユリィのために。オレはオレはオレは──〇・〇〇一秒を凝ぎよう縮しゆくして展開してオレは探さぐる、オレの中を、オレ自身の中を探る、筋組織を骨組織を血管を神経を細さい胞ぼうの中をオレは探りまくる、誰だれが何と言おうと愛の力だ、愛がなきゃこんなコトできっこねェーって、ユリィ

がいなかったらできやしなかった、オレは━首筋にソレを発見する。何か異質なモノを。ソイツはダニみたいで、皮ひ膚ふの下に潜もぐりこんで、襟えり足あしの、さらに向こう、髪かみが生えているあたり、後頭部に向かって、口から何か管みたいなモノをのばしている、その細い管が達している、頭の中に、奥のほうに、コレか、コレのせいかよ、オレはその管をキュッとつまむ。もちろん実際につまんでるワケじゃねェーケド、そういうイメージをする。たいしてもたないコトはわかってる。ちょっとしたら、オレはまたソイツに身体のコントロールを奪うばわれる。ソイツはやばいヤツだ。当然ただのダニなんかじゃねェーし、ちっせェーワリに弱くねェー。まったく簡単じゃねェー相手だ。

　だけどほんの少しでいい。

　オレに返せよ、オレの身体。

　問答無用だっつゥーの。返してもらうぜ。

　オレはジャキッと奪だつ回かいする。オレは八十四人もいらない。一人でいい。集中させる。オレ一人に。悪わりィーな、オッサン。オレはまだ死ぬワケにゃーいかねェーんだよ。オレは頭上で腕うでを交こう叉させる。交叉した一点に力を集める。集める。集めまくって、踏んばる。くる。オォー怖こえェー。くる。くるぞ。きちまうぞ。オッサンの一撃が。きっ

そだろ。きっつすぎ。どォーなった？　わッかんね。感覚がない。また奪われたか？　違うな。動く。指。ちょぴっとだけどな。オレは両りよう膝ひざをついて、うなだれている。これもう骨、バラバラだな。どこもかしこも。内臓もいっちまってンだろうな。瀕ひん死しだな。間ま違ちがいなく。でもまだ死んでねェー。あと一押しってトコだろォーけどな。オッサンが歩いてくる。そのうち、遠からず、間もなく、あの変なヤツがオレの身体をふたたび奪う。そうしたらどんだけガタきてよォーが、オレの身体を動かすだろう。死ぬまでオレは暴れるだろう。

「しぶといやつめ」

　オッサンはすぐ近くにいる。オレにもう一撃ぶっこんで、今度こそぶっ殺そうとしている。ダメだ、オッサン。オレは渾こん身しんの力を振りしぼる。これが最後だ。顔を上げる。オッサンを見上げる。右手を持ちあげようとする。無理だ。動かねェー。じゃァ左手

だ。首の後ろを示す。「──こ、こ、だッ！　こ、こに、なン、かッ、いるッ！　どォ、にかッ、しろッ！　オレ、をッ、殺ッ、すな……ッ！」

「ぬう……ッ!?」目を見開いたオッサンを、ユリィが突つき飛ばす。「──どいてっ、トワニング！」

　ユリィの手が首筋にあてがわれる。その瞬しゆん間かん、オレはあの変なヤツの動きを感知する。オレは封ふうじこめようとする。ざッけんじゃねェッ！　これ以上、ユリィに手ェ出してみろ、ただじゃおかねェッ！　今のオレは無力かもしれねェーけどな、やらせねェ！　魂たましいにかけて、もうやらせはしねェ……ッ！　気合いは充じゆう分ぶんでも、オレは何もできない。文字どおり手も足も出ない。変なヤツの、あの細い管から、ワケのわからない液体か信号か、何かそんなようなモノがビビビッと放出される。やめろ。やめろッ。やめろッ！　オレは、オレから遠のいてゆく。排はい除じよされる。見えなくなる。聞こえなくなる。何も感じなくなる。その間ま際ぎわにオレの身体が動きだした。それだけはわかった。オレは止められなかった。ユリィ。ユリィが。ユリィを。よせ。よせって。クッソ、オレは──……唐とう突とつに、スイッチでも入ったみたいに、空が広がる。ユリィの顔が見える。はっきりと。ユリィがオレをのぞきこんでいる。ほっぺたとか顎あごとか、すげェー赤くなって、目も片方潰れかけて、鼻から、口から、血も出ている。それでもユリィは笑う。オレに笑いかける。どんなユリィでも最高にかわいい。だけどこんなときのユリィは最高に最大に最上に、無上にかわいい。とけそうなほどかわいい。どこかに行ってしまいそうなくらいかわいい。どこにも行かせるものか、行かせたりしないと決意を新たにせずにはいられないほどかわいい。忠誠を誓ちかいたいくらいかわいい。崇すう拝はいしてしまうほどかわいい。

「大丈夫ね、飛燕？」とユリィはオレに尋たずねる。大丈夫かって訊きいてるんじゃない。大丈夫だよなって念を押している。ユリィには確信がある。オレを救ったって。オレはユリィに救われた。恥はずかしいコトだって思う。いつだってオレがユリィを救わなきゃなんねェーのに。でもユリィは最強だから、こォゆゥーコトもあンだよなと思いなおす。ユリィがオレのコト救わないワケねェーんだよな。わかるかよ。ユリィのすごさ。誰にもわかンなくていい。オレだけわかってればいい。だけどわかっちまうと思う。ユリィがそこにいるだけで。ソレがちょっと残念なようなもったいないよう

な。他ほかの誰にも見せたくねェーよ。ユリィのコト。誰にも知られないように、どっかに隠かくしちまいてェーよ。そうはいかねェーんだけど。もどかしくて、嬉うれしくて、たまらない。

「愛してるぜ、ユリィ」とオレは答える。

「わたしもよ」とユリィは即そく座ざに返してくれる。

　オッサンが「ンヌムゥ……ッ！」と唸うなっている。「何をしたのだ、ユリカッ！　いったい何を……ッ!?」

「妙な生き物に寄き生しえいしゃれていたのよ。しょれを取りのじょいたの。医い術じゆちゆ式しきを応用して。ロム・フォウも治しぇるわ！」

　そォーだそォーだそォーだ。これで万事解決っつゥーワケじゃねェーぞ。

　オレは立ちあがろうとして、崩くずれ落ちそうになる。「飛燕っ」ユリィに抱だきとめられる。ウッワ。ひでェーな、この身体。ボロボロっつゥーかフニャフニャじゃん。痛いっつゥーかジンジンしてボワァーッとしちまってンじゃん。

「ええいッ、ユリカはその男を診みてやるがよいッ！」オッサンが叫ぶ。「ロム・フォウは、拙せつ僧そうがなんとかする！　筋肉にかけて……ッ！」

　イヤ、ソコは筋肉じゃねェーだろと思わなくもなかったが、ユリィが抱きしめてくれていて、おかしいくらい気持ちよくて、なんだか眠ねむくなってきて、寝ねねェーケド、何秒かだけ休もうと飛燕は思った。応急処置してもらう間だけ、このぬくもりに包まれていよう。

北ワールオック山麓・孤城

　背後から人身馬頭の悪魔に詰つめよって刀を突き刺さしてその勢いのまま倒たおして、あとは手下に「やれ」と命じて任せる。つくづく俺は尋じん常じようだと荊王ジンワンは内心で苦く笑しようす

る。龍りゅう州しゅうの裏街リージエに糞くそみたいに産み落とされ、虫のように這はいずっていたころから、彼の周りには異常人がうようよいた。殺しても死なないような者が、息をするように殺す者が、敵にも味方にもいた。千人の中に放ほうりこまれて、このうち一人しか生き残れないと言い渡されたら、平然と九百九十九人の命を奪うような者が、嘆なげき苦しみながらも結局、九百九十九人虐ぎやく殺さつするような者が、嬉き々きとしてじわじわと九百九十九人嬲なぶり殺すような者が、味方にも敵にもいた。自身の性せい癖へきもどうかと思うが、とはいえ俺などかわいいものだと彼は呆あきれていた。よくもあんな連中がひしめく中で生き残ってきたものだ。彼はうまく世を渡ってきた。それにも増して、幸運だったのだろう。なぜ自分にそんな運が与あたえられたのか、彼にはわからない。過分だとも相応だとも何とも思わないが、多少は不思議だ。しかし帳ちよう尻じりは合うものなのだろう。何かをえれば何かを失う。生まれた者は死ぬのだ。最終的には差し引きゼロになる。無に帰する。むなしくも悲しくもない。黒が黒で、白が白であり、赤が赤で、青が青であるように、ただそうだというだけの話だ。

敵はとうとう孤こ城じようの中に入りこんできた。今一つ事情がのみこめていないのだが、破城槌つちで城門が破られたものの、そこからヨハン・サンライズ率いる一隊が出ていって敵を押し返した。それから程ほどなく、秩序の番人のシャット・グレヒャとおぼしき男が城内に戻もどってきた。そうかと思ったら、グレヒャは味方を殺しはじめた。ヨハンらが引き返してきてグレヒャを討うつ指令が伝達されたが、動どう揺ようを抑おさえきることはできなかった。正確に言えば、動揺が収まる前に悪魔や異界フリー生物クスどもが城内に突入してきて、混乱に拍はく車しやをかけた。城門付近や城じよう壁へき上では防戦がつづいているが、どれだけの敵に入られたのか、おそらく誰も把は握あくできていない。グレヒャに何があったのか、荊王は知らない。できることはかぎられている。城内の敵を見つけ次し第だい、潰つぶす。城門近くで指揮を執とっているヨハンはたぶん、外の敵を食い止めつつ内の敵を殲せん滅めつして、少しでも状況を安定化させようとしている。その手助けをする以外ない。

だから荊王はそうしている。龍州連合の生き残りを連れて、城内を駆かけずり回る。敵を探す。敵を狩かる。いずれ城は落ちるのだから徒労だとは思わない。そんなことを言いだしたら何もかも同じだ。どうせ死ぬのになぜ生きる。くだらない問いだ。理由などなく

ても人は、生き物は生きる。意味などいらない。飯を食って眠って糞をひりだしさえすれば生きていられる。しいて言えば、それが自然だからだろう。ときに異様でも、すべての生き死には常態なのだろう。

　天守が近い。あそこにはモリー・リップス・アサイラムの者たちや妊にん婦ぷや子供たちや乳ち飲のみ子の母親や老人が立てこもっている。若い女や少年たちが即そく席せきの武器を持って入口を固めているが、その中の一人に見覚えがあった。女だ。少女と呼ぶべきか。荊王は思わず少女の名を低く呟つぶやいた。まさにその瞬間だった。

「きた！」と一人の少年が叫さけんでどこかを指さした。「敵だ！」「守れ、守れ！」「絶対、入れるな！」「うあああ！」「やるぞ！」「おお！」「ここで！」「やるぞ……！」

　少年少女が武器を構える。訓練だけは受けているので一応様になっているが、彼ら、彼女らは兵士じゃない。兵士になるには幼すぎる。「餓が鬼きどもを死なせるな」荊王は手下にそう告げて駆けた。敵の姿はすぐに確かく認にんできた。天守めがけて突進してくる蜥蜴とかげ人が数十匹ぴき。荊王の手下はもう十一人しかいない。分が悪そうだが、この期ごに及およんで怯ひるむ者は一人としていなかったし、彼も迷っていなかった。「俺が引きつける。いいな」足を速めて、刀を抜ぬく。二本。右手と左手でそれぞれ上手に刀を操あやつれるほど器用ではないが、得物は多ければ多いほどいい。蜥蜴人どもは槍やりと盾たてで武装している。鎧よろいまで着こんでいる。槍を突きだしてくる。最前列の蜥蜴人だけじゃない、二列目、三列目からも槍をのばしてくる。ほとんど槍やり衾ぶすまだ。荊王は二本の槍を蹴けりのけ、三本の槍を両手の刀で払はらいのけて、できた隙すき間まに身体からだを突っこませて蜥蜴人の顔面に肘ひじ打ちを見み舞まった。すかさずその隣となりの蜥蜴人の横っ面つらを刀の柄つか頭がしらで一いち撃げきして、逆側の蜥蜴人の眼球に刀を突き入れる。肘打ちを食らわせた蜥蜴人の腹を蹴りつつ飛びのいて、蜥蜴人どもが突きだしてきた槍をまた払う。蜥蜴人どもは前進できない。その間に手下たちが荊王に追いついてきた。最初の突撃で蜥蜴人を三匹びき倒たおして、手下が一人、槍の餌え食じきになった。荊王は「無理するな」と声をかけて、蜥蜴人どもの槍を狙ねらう。執しつ拗ように狙いつづける。蜥蜴人の指揮官か。一匹の蜥蜴人が「ＳｙｙｙｙＧＹａａａａｈｈｈｈ」と叫ぶと、連中は槍を引っこめて盾を並べた。そのまま押しきろうという

腹だろう。「かき回す」荊王は呟くように言うなり、跳とんだ。盾を踏ふみ台だいにして二列目の蜥蜴人に躍おどりかかる。そいつの口の中に刀を、別の蜥蜴人の喉のどにもう一本の刀をぶちこみ、槍を奪うばう。槍はよくわからないが、棍こんだと思えば使えないこともない。石いし突づきで突く。殴なぐる。突いて突いて、殴る。何匹かの蜥蜴人が槍を手放して剣けんを抜いたが、遅おそい。剣を持っているやつを優先して標的にする。手下もよくやっているようだ。そのせいで気がゆるんだわけじゃない。ただ単に見えなかった。気づくことができなかった。なぜ自分が身体を横に傾かたむけながらしゃがんだのか、荊王にはわからない。説明できない。

色サン眼鏡グラスが飛んだ。

何かが通りすぎていった。それは感じた。疾はやくて何かとてつもないものが。暴ぼう威いのかたまりを極限まで圧縮して鋭するどく研とぎ澄すませたようなものが。

奇き跡せきだ。首を落とされなかった。そのことが。どうも俺にはまだ運が残っているらしい、と荊王は思う。さもなくば、死を意識することもなく死んでいただろう。

振ふり返ると、金きん髪ぱつの男が立っている。右手にモトロール刀。左手には青い剣。秩序の番人の、濃のう紺こんの平服を着ている。ずぶ濡ぬれだ。悪魔ども、それからその他の異界フリー生物クスども、そして人間たちの血で。

男が、シャット・グレヒャが、こちらを向く。

見たことがない。あんな瞳めは。古ふる井い戸どのようだ。その底にたまった水は、濁にごり、淀よどんで、腐くさり、何か別のものへと変じている。

人ではない。人の常識で測ることはできない。

グレヒャはかつて、神剣、との異名をとっていたそうだ。たいそうな名だが、魔ま人じん、妖人のたぐいであることは間ま違ちがいあるまい。

勝てない、と荊王は瞬時に判断した。俺ではとても相手にならない。

グレヒャは、しかし、荊王を獲え物ものとして認めたようだ。グ

レヒャが近づいてくると、蜥蜴人どもがＳｙｙｙＳｙｙｙｙわめきながら下がった。恐おそれているのだ。荊王は「やつには手を出すな」と手下たちに言いつけて槍を構える。さて何秒もつか。彼一人では本当に数秒しか持ちこたえられなかっただろう。

「グレヒャ隊長……！」女の声がした。羽根付きの兜かぶとを被かぶった番人が、十人ばかりの手勢を従えてやってくる。十二番遊ゆう撃げき隊隊長シャルロット・リンデか。逆方向から、巨きよ漢かんで髭ひげ面づらの番人も。あれは六番突撃隊隊長ラッド・ワーノンだ。リンデは女とはいえ秩序の番人有数の使い手で、ワーノンも見てのとおり頑がん強きようでしぶとい。グレヒャはリンデとワーノンに気づいて、荊王から目をそらした。これでいくらかは時間を稼かせげるか。

　いや。

　足りない。時間を稼ぐ。それだけでは。

　荊王は天守の入口に向かって走った。少年少女は呆ぼう然ぜんとグレヒャを見つめている。あえて「ぼんやりするな！」と怒ど鳴なりつけてやると、仰ぎよう天てんして悲鳴をあげる者さえいた。揉もまれてきたとはいっても、所しよ詮せんは子供だ。「いいか」と荊王は嚙かんで含ふくめるように言って聞かせた。「自分のことより、隣の者を守ってやれ。庇かばいあえば生き残れる。忘れるな」

　皆みな、素す直なおにうなずいた。まったく、子供だ。

　荊王は、一人の少女に向かって手をのばした。

　少女はびくっと身を硬かたくしたが、逃にげはしなかった。

　顎あごにふれる。頰ほおに。形を確かめて、指に力を入れると、少女は口を開けた。

　荊王は笑った。「悪くない歯並びだ。大事にしろ」

　少女はわけもわからずといった様子で、それでも首を縦に振った。

　声には出さなかった。

　生きろよ、タシー蝶デイエ。

生きて、飛んでゆけ。

胸の裡うちで告げると、少女はまるでそれが聞こえたかのように「ジンも」と言った。

荊王は返事をせずに踵きびすを返した。

グレヒャは早くも番人たちを殺し尽つくそうとしている。リンデとワーノンでも、ろくに斬きり結ぶことすらできないようだ。とくにワーノンは左ひだり腕うでを斬り落とされ、腹を斬り裂さかれている。血を撒まき散らし、腸はらわたが飛びだすのもかまわず、ワーノンは「ぬうん、ふん、ぬああっ……！」と右腕一本で刀を力強く振るっている。グレヒャにはかすりもしないが、そんなことはワーノンもわかっているだろう。ワーノンは派手に動いてグレヒャの注意を引こうとしている。そうしてグレヒャを攻せめる糸口をリンデにつかませるつもりか。でも無理だ。リンデはグレヒャを間合いにとらえることさえできない。というかおそらく、間合いにとらえたとしても攻こう撃げきできないだろう。無む駄だだからだ。リンデが今だと思い、刀を出したときにはもう、グレヒャはそこにいない。グレヒャの動きを完全に止めないとだめだ。荊王はリンデに近づいた。「シャルロット・リンデ、俺があれを止める。あとはお前たちがどうにかしろ」「──だが、どうやって⁉」「お前たちはなまじ強いから、あんな化物にも勝とうとする。勝つ気がなければ、案外なんとかなるものだ」

俺はなぜ今日まで生きてこられたのか。俺の腕っ節の強さなんぞは、大海を知らなければ驕おごっていられる井の中の蛙かわず程度のものでしかない。育ちは悪い。ひどいものだ。俺には教養がない。複雑怪かい奇きな物事を整理して理解できるような聡そう明めいさもない。馬ば鹿かだが、そう愚おろかではない。少なくとも俺は、自分が馬鹿だとわかっている。俺にはできないことがある。たくさんある。できることも多少はある。今、この状況で、俺には何ができるのか。何をするべきなのか。俺にはわりと見えている。優先順位をつけて、それに従って行動できる。迷うことはある。しかし一度こうと決めたらもうためらわない。実行する。龍州から逃のがれたときも、エルデンにたどりつくまでも、その後も、俺はだいたいうまく泳いできた。なぜならそれが俺にとって最優先事じ項こうだったからだ。突つきつめれば、俺には他ほかに何もなかった。ただ生きる。生命があるから、生きる。喉から手が出るほど欲ほしいものもあるにはあったが、それも結局、俺にとっては二の次だった。そうでなければ、とっくに俺はしゃにむにそれに手をのばし

て、ひどいしっぺ返しを食って、きっとくたばっていた。ようするに俺は、綱つな渡わたりもあったかもしれないが、致ち命めい的てきな間違いは犯おかさなかった。それが俺の強みだった。俺の武器はそれしかない。

　そのたった一つの武器を握にぎりしめて、俺はグレヒャに迫せまる。グレヒャはワーノンの右腕を叩っ斬り、たまらず助けに入ったリンデの刀を真っ二つにしたところだった。そして荊王のほうに顔を向けた。荊王は落ちついてグレヒャを見た。右手の刀と、左手の青い剣だけじゃない、グレヒャは背中にも一本、透とう明めいの剣を負っている。

　リンデが叫ぶ。「──荊王、貴様、何を……⁉」

　荊王は槍を突きだした。グレヒャは青い剣でやすやすと槍を叩っ斬った。

　まあそうだろうな。荊王はそのまま突っこむ。グレヒャは刀で荊王を一刀両断しようとする。だが、それだけはさせない。といっても賭かけだ。見て、回かい避ひする。そんなことができる速さじゃない。予想する。山を張る、といったほうがいいかもしれない。グレヒャは効率のいい殺し方をする。ワーノンが腕だの腹だのを斬られているのは、なんとか致命傷をさけようとして、その結果だ。グレヒャは、首。荊王の首を落とそうとする。今だ、と思ったときでは遅い。その前に荊王は身を低くする。それでもカッと刀が奔はしって頭ず蓋がいを削そぎ落とされたが、読みどおりだ。とはいえ、その次は予想できなかった。青い剣が、脇わき腹ばらに。一いつ瞬しゅんで正中線あたりまで食いこんだ。

　でも、届いた。

　荊王はグレヒャに組みついた。

　グレヒャの背中の剣を両手でつかむようにして抱だきすくめる。

「人間クズめ」とグレヒャは言った。屑くずで悪かったな。

　荊王は両りよう脚あしもグレヒャの身体に絡からみつかせた。
「──俺ごとやれ……！」

　この期に及んで、よもや逡しゆん巡じゆんすまい。荊王には確信があった。よく知りもしない女だが、シャルロット・リンデなら必

ずやるだろう。何しろ俺は頭を削けずられていて、明らかに手の施ほどこしようがない。あとは残った力を振りしぼればいい。それはそれで難なん儀ぎだが。



　グレヒャが青い剣を押しこんで、荊王の胴どうを断たち斬ってしまおうとする。同時に刀の柄で後頭部を殴おう打だする。グレヒャ

の顔がひどくゆがんでいる。「往おう生じよう際ぎわが悪い……！」どっちがだ、と荊王は思う。飛フエイ燕ヤン。お前は今、どうしている。お前の女はどうだ。二人とも息災か。お前のことだ。二人とも生きているか、二人とも死んでいるか、どっちかだろう。きっと生きているだろう。マリアローズ。無事だろうか。俺はお前が欲しかった。俺より遥はるかにひ弱で、肉体的には人並み以下ですらあるのに、どこまでもあらがうお前の魂たましいが俺にはまぶしかった。なぜお前は何もあきらめない。俺はこの手に握りしめられるもの以外は望まなかった。お前はどうしてへこたれない。なんで絶望しない。その答えを知りたかったわけじゃない。答えなどいらなかった。そんなもの、ありはしないだろう。あったとしても、こんな生き方をしてきた俺には無関係だろう。俺は、ただ。

「ガシュテ・アグナル……！」とグレヒャが言った。

　その瞬間、下半身の感覚が消失した。何が起こったのか。わからない。

　後ろから引っぱられた。引き剥はがされる。

　荊王はとっさにグレヒャの背中から透明の剣を引き抜いた。

　グレヒャが血相を変えた。「やめろ……！」

　その素っ首を、リンデの脇差が「━サァッ……！」と刎はね飛ばした。

　荊王は引きずり倒たおされた。青い肌はだの、悪あく魔まか。こいつは何だ。青い剣はどこに行った。とにかく、青い肌の悪魔が荊王の手から透明の剣を奪おうとしている。そんなに欲しいのか。じゃあくれてやる、と言いたいところだが、俺はそこまでお人ひと好よしじゃない。荊王はなけなしの力で透明の剣を振りまわした。剣先が悪魔の手をかすめた。悪魔は絶ぜつ叫きようして、硝子ガラスか何かでできていたかのように砕くだけ散った。ついでに透明の剣も雲散霧む消しようしてしまった。わけがわからない。何がなんだか。まあ結果がよければすべてよしか。荊王は目を閉じた。俺は死ぬ。これが死か。たいしたことはない。終わるだけだ。何もかもが。暗い。閉とざされる。━いや。ああ。見える。飛んでゆく。夕空を、一羽の蝶が。行け。どこまでも。飛んでいけ。悪くないな。悪くない。

ツァール峡谷

「ロム・フォウ……ッ！」トワニングが疾しつ走そうする。ロム・フォウは上半身をほとんど動かさず、長くしなやかな脚あしを回転させるように動かして、逃げる。逃げながら、弓ゆ弦づるを引き絞しぼって矢をつがえる。一本じゃない。二本同時だ。放つ。トワニングはよけない。当たった。が、その筋肉を貫かん通つうすることはできない。気合いが入っているときのトワニングの筋肉は鎧よろい同然、それ以上だ。ロム・フォウが逃げてゆく方向に、ピンパーネルが先回りしている。雌し雄ゆう一対ついの短たん剣けんを手にしたピンパーネルがロム・フォウを襲おそう。が、ロム・フォウは直角にターンして回避。至近距きょ離りからピンパーネルに矢を射る。「ッ……！」ピンパーネルは身をよじってよけた。その間にロム・フォウは距離を稼ぐ。あんなに速いなんて。トワニングやピンパーネルは異能の戦せん闘とう者で、素人しろうと目めにもあからさまに強い。あの二人が、二人がかりでロム・フォウを打ち負かせないなんてちょっと想像しづらいけれど、実際にそうなっている。彼女は、トワニングみたいに鵺ぬえ流古式戦闘術の達人で筋肉マニアなわけでも、ピンパーネルのように暗アツ殺者サシンとして育成されたわけでもないのに。ただ、特とく殊しゆな体術を身につけていなくても、予期しない出来事が頻ひん発ぱつする大自然の中を身一つで生き抜ける強きよう靭じんな肉体と図ず抜ぬけた対応能力が、彼女にはあるのだ。戦士としてはトワニングとピンパーネルのほうが上手でも、生存を最優先目標にする動物としてなら彼女のほうがすぐれている。彼女はまさしく野生の獣けものだ。しかも、人間の頭脳を持っている。計り知れない経験を積んでいる。

　マリアローズは横っ腹を押さえて考える。ユリカは飛フエイ燕ヤンを治ち療りようしていて、もうすぐ終わりそうだ。きゅーはまだ戸と惑まどっているようで、深ふか傷でを負ったアルファにはハニーメリーがついてくれている。ジョーカーとクローディアは避ひ難なん民みんらを連れて先行した。

　あーそれにしても痛い。痛いとか言ってる場合じゃないし。この程度の傷、たいしたことないし。動かせ、頭。働かせろ。それくらいしか、僕にできることはないんだから。だけど、何も思いつかない。本当に何一つ、打開策らしきものが見いだせない。いや、そん

なことはない、考えろ。人間の形をした昆こん虫ちゆうみたいな、悪魔？　まあ悪魔だろう。あの悪魔を倒したらどうか。あいつが首筋に何かを植えつけて、それで操あやつられるか、敵味方の区別がつかなくなるかしているみたいだし。あいつはどこに逃げた？　てゆうか逃げたのかな。まだどこかに潜ひそんでいて、誰だれかを操ろうとしてるんじゃ？　ユリカと飛燕は？　今のところは大丈夫そうだ。僕は？　僕を狙ねらうような間ま抜ぬけならいいけど。僕なんか操ってもね。きゅーとかハニーは？　マリアローズは目を瞠みはった。「ハニー、後ろ……！」

「え──」ハニーメリーは振ふり向きざまに拳けん銃じゆうをぶっ放した。照準なんて定めていない。反射的に撃うったという感じだ。かえってそれが功を奏したのかもしれない。銃じゆう弾だんが昆虫人間悪魔の肩かた口ぐちをかすめた。昆虫人間悪魔がよろめく。マリアローズは昆虫人間悪魔を指さした。「きゅー、そいつを……！」「くうっ⁉」いきなりなので、きゅーもびっくりしたようだが、それでも瞬時に駆かけだした。昆虫人間悪魔が泡あわを食って逃げる。きゅーは追う。全身のもふ毛を逆立て、金色に輝かがやかせて、さながら雷らい光こうと化したかのような速度でやつを猛もう追ついする。「──ッシッ！　オレもいっくぜェッ！」飛燕がぴょんと跳はね起きて、きゅーのあとにつづいた。ユリカはマリアローズのほうにこようとしている。マリアローズは首を振った。「──僕はわりと平気だから、先にアルファを！」「わかったわ！」ユリカはアルファに駆けよってゆく。ハニーメリーも昆虫人間悪魔の追つい跡せきに参加するつもりみたいだ。よし。ちょっと痛いけど、生きてる証しよう拠こだよね。一時はどうなることかと思ったが、だいぶ持ちなおした。態勢が整いつつある。だけど好こう事じ魔ま多し。うん。だいたいそういうものだし、これくらいで自棄やけになったりしないけどね。べつに慣れたくはないけど、しょうがなく、やむをえず、どうしようもなく、慣れちゃってたりもするし。

　サフィニアだ。飛んでくる。

　黒い靄もやみたいなものにつきまとわれて、後ろ向きで、こっちに。

　サフィニアは黒い靄めがけてビシバシ白い光線を放っている。光線にふれると黒い靄は消える。ふれたところだけは。でも霧きりを払はらっても払ってもきりがないように、黒い靄もサフィニアから離はなれない。黒い靄はサフィニアを包みこもうとする。サフィニ

アは逃れる。そして、こっちまで飛んできたのか。黒い靄の向こうには黒い光をまとった全ぜん裸らの女がいる。トモヨだ。トモヨが両手を持ちあげて、振りおろす。そうすると黒い竜たつ巻まきが起こった。どこでかというと、サフィニアの進行方向、もっと言うと—ここだ。

　マリアローズがいるあたり。

「わ、うっ……！」マリアローズは伏ふせる。地面にしがみつこうとする。だめだ。身体からだが浮うく。巻きあげられる。「マリア……!?」サフィニアがこっちを見た。そのせいで、サフィニアまで「—ぅっ……！」と黒い竜巻にのまれる。マリアローズはもう舞まいあがっている。「うわわわあぁぁあああぁぁぁわぁぁうああぁぁぁああぁぁ」目が回る。口を閉じろ。舌を噛かむ。これはちょっと、やばい、かも—と思ったら、サフィニアにキャッチされた。「つかまって、マリア……！」「は、はいぃっ！」つい変な返事をしてしまったが、ちゃんとがっちりつかまった。「サ、サフィニア、首の後ろにな、何かがっ、そ、それでトモヨは、操られ……っ！」「……わかった……けど、どうにかしようにも、近づけなくて……！」サフィニアはマリアローズを抱きしめて、黒い竜巻の中を飛ぶ。あっという間に突っ切ったが、そこに黒い靄が。近くで見ると、靄というか蚊かの大群みたいだ。できれば近くでなんか見たくなかったんだけど。「っ……！」サフィニアは垂直降下する。黒いやつが追ってくる。その上にトモヨが。トモヨが—分かれた……のか？　トモヨから、黒いトモヨが滲しみだすようにぬるぬると出てきたのだ。すかさずサフィニアが純白の光を放つ。まぶしい。目をつぶったのだが、マリアローズは一瞬、視力を奪うばわれた。見えるようになると、黒いトモヨに肉にく薄はくされていた。「Ｒｙｙ……！」

　黒いトモヨが、くる。飛び蹴げりだ。サフィニアも迎むかえ撃つ。「はあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！」蹴り返した。もちろん、ただの肉弾戦じゃない。黒いトモヨ自体がおそらく何らかの魔術で、サフィニアも身体に白い光をまとわせている。軍配はサフィニアに上がった。黒いトモヨが吹ふっ飛ばされる。でもトモヨの本体が、いつの間にか真上に。「Ｎｙａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａｈｈｈｈ……！」トモヨが両手から真っ黒い光を放出する。

「ふぅっ……！」サフィニアは右手から白い光をあふれさせて対たい抗こうしたが、押されている。きっと僕のせいだ。僕を庇かばいながら、戦わないといけないから。だからって下ろせとも言えない。言ったって下ろしてくれるわけがないし。マリアローズは歯を食いしばる。真っ黒い光の圧力で、サフィニアは落ちる。落ちてゆく。「……トモヨ！　これが、トモヨの力……トモヨの魔術！　すごい……でも、わたしは負けない……！」

　止まった。落下が。急に白い光が勢いを強めた。

「Ａｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈ……！」とトモヨが叫さけぶ。黒い光も増大する。せめぎあう白い光と黒い光が、今にも弾はじけそうだ。サフィニアはもう落ちてはいないが、トモヨを押し返すこともできない。拮きつ抗こうしている。だけど一対一じゃないんだ。マリアローズはあたりを見まわす。いた。「──サフィニア、黒いほうが！」

　左方向から、黒いトモヨが突っこんでくる。

「マリア、振り落とされないで……！」不意にサフィニアは白い光を引っこめた。黒い光が押しよせてくる。黒いトモヨも。それより早く、サフィニアは右下に向かって白い光を噴ふん出しゆつさせた。一応覚かく悟ごしていたつもりなのだが、マリアローズは悲鳴をあげてしまった。急加速。超急速離り脱だつ。身体だけじゃない、魂までばらばらになって、どこかにすっ飛んでいってしまいそうだ。というか実際、すっ飛んだんだけど。サフィニアはトモヨと黒いトモヨを引き離した。これで一息つける。そうは問屋が卸おろさない。トモヨと黒いトモヨが矢や継つぎ早ばやに黒い光球を投げつけてくる。「ＲｙａＲｙａＲｙａＲｙａＲｙａＲｙａＲｙａＲｙａＲｙａＲｙａＲｙａ！」「ＲｙａＲｙａＲｙａＲｙａＲｙａＲｙａＲｙａＲｙａＲｙａＲｙａＲｙａＲｙａＲｙａＲｙａ……！」軌き道どうが一定じゃない。まっすぐだったり、さまざまな弧こを描えがいたりして、黒い光球がドンドンバンバン飛んでくる。
「かぁぁっ……！」サフィニアは数十、数百の極ごく細ぼその白い光線を放散させて黒い光球を撃ち落とす。今のところはぜんぶ落とせている。「──サフィニア！　飛フエイ燕ヤンも一回操られたけど、自力で正気に戻もどったんだ！　トモヨも可能性はあるかも……！」「……それなら、彼女に会えば……もしかすると……！」「え、会うって……!?」「彼女の中に入って……！　だけど、マリアを下ろさないと……！」「大丈夫だから、下ろして！」「……やってみる……！」

　サフィニアはすっと息を吸って、吐はいた。今まで以上の、とんでもない数の極細の光線が展開されて、トモヨと黒いトモヨを圧あつ倒とうする。その瞬間、サフィニアは急降下を開始した。落ちる。墜つい落らくする。ぺちゃんこになる。寸前で、制動ブレーキ。眼球が飛びだしそうで、口から胃が出てきそうだった。出てきたっていい。マリアローズは飛び降りた。地上までは一メーテルくらいだ。なんてことはない。サフィニアは即そく座ざに急上昇。トモヨに突っこんでゆく。まっしぐらだ。「──サ、サフィニア、危なっ……！」見ていられない。おっかないって。だって、トモヨと黒いトモヨが黒い光球を投げる、投げる、投げまくる。サフィニアは無数の黒い光球に向かってゆく。当たるでしょ、それは。ところが、当たらない。サフィニアは、まっすぐ飛んでくる黒い光球を右に左にヒョイヒョイ身体を揺ゆらしてかわす。弧を描いて飛んでくる黒い光球は眼中にないのだ。直進コースをとっているサフィニアには命中するはずがないからだろう。まあ、こっちには飛んでくるわけだけど。

「──って、危ないのは僕……っ!?」マリアローズは走る。どっちに行けばいいのか、皆かい目もく見当がつかない。勘かんに頼たよって、あっちへ走る。こっちへ走る。目の前で黒い光球が地面にボォッ……と激げき突とつして穴をあける場面を目まの当たりにして「わお……」と呟つぶやいてしまったりもしたが、どうにか直ちよく撃げきを食くらわずにすんだ。サフィニアは？　見上げると、トモヨにとりすがっていた。二人が絡からみあう。そのまま錐きり揉もみ状態になって、落ちてくる。黒いトモヨは途と方ほうに暮れたようにぽつんと浮いている。サフィニアはきっと今、トモヨの中に入っているのだ。たぶん精神マインド攻撃アタツクの要領だろう。よくわからないけどさ。推測にすぎないけど。でもあのままだと、二人とも。「サフィニア、急いで……！」なんて叫んだところで、サフィニアには聞こえないだろう。もう祈いのるしかない。間に合え。だけどほんの数秒だ。祈りが深まる前に過ぎ去ってしまう。マリアローズはたまらず仲間の、大事な友だちの名を呼んだ。「──サフィニアァァァァァァァァァァァァァァァァァ……ッ！」

　地面と衝しよう突とつする間ま際ぎわも間際だった。あと数センチで、二人はベチャッと潰つぶれていた。

　サフィニアがパッとトモヨから離れた。

　トモヨはそのまま地面へ。黒い光が噴ふきだすように広がった。トモヨはどうなったのか。わからない。見えない。「トモヨ

は……!?」

　サフィニアは空中で首を横に振った。「……だめだった！　中で会って、説得してみたけど……聞き入れてくれなくて……！」

「て、ことは──」マリアローズは唾つばを飲みこんだ。トモヨが黒い光から飛びだしてきた。トモヨだけじゃない。黒いトモヨがもう一人。さっきのとあわせて、黒いトモヨが二人になった。トモヨと黒いトモヨ二人が、三人がかりでサフィニアに黒い光球を投げつける。サフィニアは白い光線でこれを撃げき墜ついしながら、後退する。じりじりと下がってゆく。

「……わたしは、トモヨを……止められないかもしれない……！　もう倒たおすしか……！」

「しょうが──」ない、なんて言ってしまってもいいのか。マリアローズにそんなことを言う資格があるのか。姉あね弟子でしとの関係なんてわからない、想像もつかないが、少なくともサフィニアにとって、危険を冒おかして説得しようとする程度には大切な人なのだろう。しょうがないから殺しちゃえ、なんて、軽々しく言えない。だけどもうやるしかないんだ。サフィニアはそう判断したのだろう。

「どうして……なぜ、こんなことに……！　トモヨォォォォォォォ……ッッッ……！」

　攻せめに転じた。サフィニアが、たぶん初めて。黒と緑色に染まっていたサフィニアの魔術士衣が白しろ銀がね色いろにきらめきだして、色とりどりの光こう彩さいを帯びる。サフィニアを中心に輝きの渦うずが巻き起こる。黒い光球は輝きの渦にのみこまれてしまう。トモヨも黒いトモヨ二人と一いつ緒しよに黒い渦を発生させた。渦と渦がぶつかりあう。三対一だからなのか。黒い渦のほうが大きい。でも勢力は輝きの渦のほうが強いみたいだ。黒い渦が削けずられてゆく。皮を剝むかれるように。次し第だい次第に小さくなってゆく。輝きの渦が黒い渦に食いこんでゆく。二つの渦は、サフィニアとトモヨたちの中間で争っている。黒い渦はトモヨたちにとって盾たてだ。突破されたら、輝きの渦はトモヨたちに攻めよせる。輝きの渦は黒い渦を突つき破ろうとしている。そうはさせじとトモヨも踏ふんばる。──いや。

　二人の黒いトモヨが、トモヨのそばから離れた。黒い渦が分ぶん

裂れつする。三つに。真ん中の黒い渦が輝かがやきの渦を防いで、左右に分かれた黒い渦がサフィニアに襲おそいかかる。

　輝きの渦は突き進み、真ん中の黒い渦をどんどん弱らせてゆく。

　だけど左右の黒い渦がサフィニアに。

　マリアローズは四よつん這ばいになっていた。とても立っていられない。ものすごい風だ。いろいろなものが吹きつけてくる。サフィニアの名を呼ぶ。無む駄だだろうが叫ぶ。

　サフィニアは前進する。輝きの渦の中に入ってゆく。サフィニアを挟はさみ撃うちにしようとしていた黒い渦はむなしく合体した。輝きの渦が真ん中の黒い渦を、その輝きの渦をサフィニアがぶち破る。サフィニアはそのままトモヨを一殴なぐった、蹴った、殴りつけた。当然、ただのパンチじゃない、キックじゃない、一発一発にめくるめく輝きが宿っている。トモヨは黒いものをまとわせた腕うでで、脚あしで、防ぐ。防いで、反撃しようとする。でも、サフィニアがそうはさせない。トモヨの拳こぶしを、サフィニアはたやすく打ち払ってしまう。トモヨの足を、サフィニアは蹴り返す。

　輝きと黒が、交こう錯さくする。

　輝きが、黒を圧倒する。

　マリアローズは目を細めた。そこに太陽が出現したかのようだ。まぶしくて見えない。

「トォォォォモヨォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ……ッ！」

「サァァァァァフィニアァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ……ッ！」

　二人の声が、ありとあらゆるものを引き裂さくように響ひびき渡わたる。その直後だった。

　静せい寂じやく。

　世界の時間が止まったんじゃないか。もしくは、自分だけ世界から追放されて、どこか別の場所に隔かく離りされてしまったんじゃ

ないか。そう錯さつ覚かくしてしまうくらい、唐とう突とつで、完かん璧ぺきな静けさの中で、サフィニアはトモヨの胸の中心に掌てのひらを押しつけていた。

　その部分から、ひび割れている。

　トモヨの身体が。

　それらのひびからは、輝きがもれている。

　砕くだいた金ダイ剛ヤモ石ンドのような輝きが、トモヨの肉体を侵しん食しよくしている。

　輝きが、広がってゆく。

　刻々と。

　破は壊かいしようとしている。殺そうとしている。

　輝きが、サフィニアが、トモヨを。

「……トモヨ……どうして……っ！」

「これで」

　トモヨは笑った。そして、サフィニアの腕にそっと手をかけた。トモヨの胸に掌を押しあてている、サフィニアの右腕に。押しのけようというのか。違ちがう。そうじゃない。むしろ、サフィニアがトモヨの胸から手を離はなそうとした。トモヨはそれを阻はばんだ。

「これで、いい。ありがと、サフィニア。これでトモヨさんは、解き放たれる」

「解き……放たれる……？」

「そぉ。トモヨさんを縛しばりつけてた、この身体からだから、ね。お姉様が愛してくれて、トモヨさんも大好きだった、この身体から。こんなつまらないものに執しゆう着ちやくしちゃってるせいで、トモヨさんはサフィニア、あんたに勝てなかった。たぶん、ベティにさえ」

「何を……トモヨ……あなたは、何を言って……っ」

「結局、魔術士だってこと。トモヨさんは限界を超こえるの。そのためなら、どんなものでも利用する。悪魔の罠わなでも、サフィニア、あんたでも」

　トモヨはサフィニアの右手をさらに押しこませる。

「さよなら、サフィニア」

「あぁ……！　あああぁぁぁぁぁ……っ！」

　サフィニアが絶ぜつ叫きようした。

　トモヨの身体に、サフィニアの右手がめりこむ。まるで吸いこまれるように。そこから輝きがこぼれて、あふれ、崩くずれてゆく。トモヨが輝きにのみこまれてゆく。輝きそのものへと化してゆく。トモヨが潰ついえる。消えてしまう。輝きが散る。舞まい散り落ちる。

　終わってしまえばあっという間だった。サフィニアは輝きの残ざん滓しを握にぎりしめてゆっくりと降下している。茫ぼう然ぜん自失としていて、気づいていない。

　黒いトモヨだ。

　トモヨは消しよう滅めつしたのに、二人の黒いトモヨはまだいる。

　二人──じゃなくなった。合わさって、黒いトモヨは一人になった。

　マリアローズは注意をうながそうとした。その前に黒いトモヨが「ＡＨＡ！」と大笑いしはじめた。「これでこれでこれで！　身体なんて身体身体なんて不自由な不便な窮きゆう屈くつなくだらない身体身体から解き放たれてこれで！　限界を限界限界を超える超えられる限界をこれで！　ＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ……！」

「……なっ」サフィニアが振ふり返ると、黒いトモヨは上じよう昇しようしだした。「ＡＡＡＡＡありがとサフィニア恩人だよあんた

はＡＡＡＡまＡＡＡＡた勝負しましょそのうちネ♥　どこまで登れるか勝負勝負♥　ＫＹＡＡＡＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＡＡＡＡ……！」

　黒いトモヨは行ってしまう。逃にげるのか。逃げるっていうか。何？　何がなんだか、もうよくわからない。ホントに魔術士ってのは、これだから。傍はた迷めい惑わくすぎるっていうか、なんていうか。サフィニア以外の魔術士なんて、みんないなくなっちゃえばいい。そのほうが世のため人のためだ。おかげで、飛燕に「マァーリアローズィ……ッ！」と声をかけられるまで、ぼけっとしちゃってたし。「え……」

　声がしたほうに顔を向けると、昆虫人間悪魔がいた。え？　は？　近いんだけど？　近すぎじゃない？　てゆうか、僕？　僕にきちゃう？　僕、おいしくないよ？　食べるわけじゃないか。てゆうか、僕なんか操あやつっても役に立たないよ？　やめたほうがよくない？　でも、昆虫人間悪魔は聞き入れてくれない。そもそも、僕は何も言ってないんだけどさ。言う暇ひまなんてなかった。
「わっ……」

　とっさに首筋を両手で押さえた。そのときにはすでに、昆虫人間悪魔はマリアローズの背にとりついていた。両手を一囓かじられているのか。手の甲こうが食い破られる。やばい。何かが手を貫かん通つうした。痛いっていうか、怖こわい。首筋に硬かたい、尖とがったものがふれる。そこを破られたら。マリアローズは身体をよじって昆虫人間悪魔を振り落とそうとする。ダメか。ダメだ。想像したより痛みは少ない。チクッとした。と思ったら、そのあとにズガガッ。掘ほられている。頭の中を。何かが掘り進んでいる。マリアローズはあいあいあいあいあいあいあいあいあいと変な声を出した。出したくなくても勝手に出てしまう。やばこれ終わ終わ終わ終わりやば何これ死ぬ死死死ちょっやめあがあがぐああがごああふぁがんｇｋｄんぎああｋｊｇなｄｋんｇｄかんｇｋだがｓｆｓｄａｇｄｋｇｉａｕｇｄがｌぐｈｇａｆｊｚｚｚｋｓｇｄんっっｇｄｇｈｄっいｋｇぁｄｇづｈｓａｄｋａｓｉｇｕａｄｇｕｉｚｚｉｄａｙｎｇａ……っっ！

　抜ぬけた。

　そんな感覚だった。頭に打ちこまれた長い釘くぎを、一気に引き抜いた、みたいな。

「おいッ！　平気かッ!?」

　飛燕。何か言っている。飛燕が。何か、じゃない。平気かどうか、訊きいているらしい。誰だれに？　僕に、だろう。たぶん、だけど。そんな、ね。平気なわけないじゃないか。だから寝ねてるんだろ。寝てる。寝てる？　そうだ。僕は寝転がっている。身体を横向きにして。正面に、何かいる。何かっていうか、昆虫人間悪魔だ。ただ、頭がない。どうしたんだろ。僕はどうなっちゃったんだろ。飛燕が目の前にしゃがんだ。何か突きつけてくる。指でつまんだものを。それはぴちぴちと暴れている。細長い、虫のような生き物だ。

　何だろう。脚がない蜈蚣ムカデみたいな。けっこうきもい。

「コレが入ってやがったんだぜ」と飛燕は言って、そいつを握り潰すと、自分の首筋を指で叩たたいてみせる。「テメェーのココにな。まァ、オレも入られたっぽいけどよォ。何とも言えねェ。独特だよなァ」

「……だね」マリアローズは手で顔をぬぐった。全身が微び妙みように痺しびれていて、うまく力が入らない。でも、なんとか言うことを聞いてはくれているようだ。顔はよだれやら血やら鼻水やらでひどいことになっている。

　きゅーが「くう？」と首をかたむけて、頭を撫なでてくれた。

「マリア……！」ユリカの声がする。

　立たないと。ロム・フォウはどうなったのか、確かめないと。起きあがろうとしたら、脇わき腹ばらが激げき烈れつに痛んで、あやうく気絶しかけた。「……くぅぅぅぅぅぅぅぅぅ……っ」

　ひどい目に遭あってるなあ、と少しだけ思った。自じ業ごう自得だけど。自分で自分の身を守ることもできない自分が悪い。せめて、仲間に手間をかけさせたくないんだけどね。それにしても、何だろう。この音。振しん動どう。マリアローズは脇腹の傷を押さえ、息を詰つめて、顔を上げた。「あぁぁ……」

　もう失神してしまいたい。

　山だ。山が迫せまってくる。こっちに向かって、山が。トマトクンとリルコはどうしたのだろう。いる。山に追われている。あの山はきっと、ジャリコ・カスパーロウだ。トマトクンでも退治しきれなかったのか。

「──ッソォッ！」飛燕が舌打ちをした。「ユリィ、急げッ！　とりあえず動けるようにしてやりゃァーいいからッ！」

「ええ！」ユリカがマリアローズを抱だき起こして、医術式を施ほどこそうとしている。動けるから、と言いたいところだけれど、無理っぽい。ロム・フォウは？　ピンパーネルとトワニングがまだ追いかけているみたいだ。昆虫人間悪魔を倒たおせば、もとどおりになるというものでもないのか。あの変な蜈蚣みたいなやつを取り除かないと治らないのだ。くそ。頭が重い。吐はき気けがする。マリアローズは空を仰あおいだ。何か見えた。影かげ、みたいな。飛んでいる。邪じや竜りゆうか。やめてよ、そんな。だけど、一つだ。たった一つ。邪竜──じゃない？　だったら、何だ……？

　空を飛んで、近づいてくるもの。

　それは、刻々と高度を下げている。大きい。

　対照物がないから、はっきりしたことは言えないが、かなり大きい。

「……何、あれ」

北ワールオック山麓

「ドルゲイ……ッ！」ダリエロが叫さけんだときには遅おそかった。身みの丈たけ二メーテル超の全身鉛なまり色いろで角を生やしている悪魔が大きな戦せん斧ぷを振りまわす。ドルゲイはそいつと同族の別の悪魔が繰くりだした大たい剣けんを棍こんで受け止めて、一いつ瞬しゆん、動きが止まっていた。そこを狙ねらわれたのだ。戦斧はドルゲイの横っ腹に叩きこまれた。胴どうを断たち斬きられてもおかしくない。そうならなかったのは、ドルゲイが鵺ぬえ流古式戦せん闘とう術の気功だか何だかで身体を硬こう化かさせでもしたのだろう。そうはいっても、戦斧はドルゲイの臍へそくらい

までは達していた。「──ドルゲイ、この塵ゴミ屑クズ野や郎ろうが……ッ！」ダリエロはまた別の角つの鉛なまり悪あく魔まを蹴けりのけながら、あれは助からねぇなとも思っていた。それなのに、なんで俺はこんなことしてやがるんだ。無む駄だじゃねぇか。ドルゲイはダリエロのほうに老ふけ顔を振り向かせて、ヘッ、と笑った。やつは何をしようとしているのか。知るかよ。やつの左手は指が一本もない。ジジイみたいな見た目だが、そこまで年がいってるわけじゃないらしい。やつは鶡流古式戦闘術の使い手だ。山さん賊ぞく上がりで、アジアンの阿あ呆ほうを何度か殺そうとした。果たせず逆に半殺しにされて、どういうわけか昼ラン飯チタ時イムに加わりやがった。ドルゲイについてダリエロが知っていることといったら、その程度でしかない。知ろうとしたことも、知りたいと思ったこともない。やつが何をしようとしてるか、だと？　知ったことか。知りたくもないのに、わかった。止める気にはなれない。止めて何になる？　やれ。

　やっちまえ。

　ドルゲイはそうした。

「鶡流古式戦闘術暗あん紹しよう〝爆バク撃ゲツ気キ〟……！」

　ボゥンッ……と、破は裂れつした。

　角鉛悪魔を何匹びきも巻き添ぞえにして、ドルゲイが。角鉛悪魔の残ざん骸がいはそこらじゅうにぶちまけられたが、ドルゲイは跡あと形かたもなかった。消え去った。まるで最初からドルゲイという男なんて存在しなかったかのように。

「どうせ花火を上げるんだったらよ！」ダリエロは笑った。笑いながら角鉛悪魔の口の中に刀を突っこんだ。「──もっと見み栄ばえのいい花火にしやがれ、糞くそが……！」「ＷＯＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨ！」角鉛悪魔は双そう眼がんに宿る青い炎ほのおを揺ゆらめかせて、刀をガッと噛かんだ。引っぱる。刀ごとダリエロを引きずろうとする。しぶとい野郎だ。ダリエロは刀を手放して、角鉛悪魔の眼球に指を突っこむ。ダリエロの右手の指には鋼はがねの爪つめが仕し込こんである。眼球がヴチッと破れる感かん触しよくは嫌きらいじゃない。角鉛悪魔が「ＵＧＯＯＯＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨＨＨＨＨ……！」と悲鳴をあげて身み悶もだえる。ダリエロはそいつの膝ひざ裏うらに踵かかと蹴げりを叩きこんで転ばせると、突つっかかってきた別の角鉛悪魔の懐ふと

ころにスッと入りこんで顎あごに肘ひじ打ちをぶちこむ。右肘に仕し込こんだ超ちよう硬こう度どのブレードが角鉛悪魔の顎を貫つらぬく。すぐさま左手の指で目玉の一つや二つ抉えぐってやりたいところだが、あいにくダリエロの左ひだり腕うではだらりと垂れ下がるだけの役立たずと化している。しょうがねぇな。ダリエロはするりと角鉛悪魔の背後に回りこんで首筋を拳こぶしで殴なぐりつける。角鉛悪魔は厄やつ介かいな相手だが、何度もやりあっているうちにここが急所だとわかった。といっても、ここしかないというポイントに、いい具合の角度から、強きよう烈れつな打だ撃げきを加えないといけない。角鉛悪魔は「ＧＵ！」と呻うめいて膝を折った。「こいつを始末しろ！」とアンガルセンやメツェルディ、キューレイに命じて、ダリエロは次の角鉛悪魔に躍おどりかかる。ぶっ殺す相手に不自由しねぇってのはなかなかの娯ご楽らくだ。さすがに飽あきてきたけどな。飽き飽きしながらも、ダリエロは敵を求めつづける。襲おそいくる敵を返り討うちにするのではない。受け身になど回らない。これは防戦ではない。抵てい抗こうではない。攻せめる。そうだ。俺は餓うえに餓えている。満たされてなどいない。ちっともだ。いつも足りない。欠けつ乏ぼうしている。埋うめあわせをしようとしているわけじゃない。足りなくていい。欠けていたってかまわない。どのみち食っても食ってもこの飢き餓が感かんから逃のがれられないことなど承知の上だ。どういうわけか、そういう種類の人間がいる。俺みてぇなやつが。ドルゲイの野郎もたぶん同類だった。先天的なのか後天的なのか。それはともかく、急性じゃない、慢まん性せいの、死ぬまで治らない病に冒おかされている。おそらく頭の中が。喜びだの幸福だのとは無む縁えんで、貪むさぼることしかできない。くたばるまで延々と貪りつづける。改善は望めない。いや、望むだけならできなくもないし、たまには別の自分になろうとしたりもする。不可能だけどな。俺たちは変われない。たいていは餓が鬼きのころから傷つけたり盗ぬすんだり奪うばったり殺したりしている。それと同時に、自己弁護する気なんぞさらさらないが、たぶん傷つけられて盗まれて奪われて、どうにか殺されずにきた。そういう手合いは変わることなんかできやしない。ただただ迷めい惑わくなだけの塵ゴミ屑クズ野郎どもは、たとえ非の打ちどころがないご立派な善人様に祝福されても、反へ吐どを引っかけて目め障ざわりだ失うせろと毒づくだけだろう。そうすることしかできない。俺たちには居場所なんぞない。俺たちが腰こしかけてもいいベンチを作る椅い子す職人は一人もいない。俺たちは骨身に染しみてわかっている。俺たちは異常者だ。手て癖くせの悪い天性の盗人ぬすつとで、衝しよう動どうを抑おさえられない強ごう姦かん魔まで、根っからの殺さつ人じん鬼きだ。俺たちが

やさしく微笑ほほえんだりすると、あんな人にもいいところがある、生まれつきの悪人なんていない、加害者になる前は被ひ害がい者しやで、つまり犠ぎ牲せい者しやを生む犠牲者なのだ、かわいそうだ、そんなもっともらしいことを言うやつ、思うやつもいる。お笑い種ぐさだ。仮にそれが事実だとしても、やっぱり俺たちは手がつけられない糞の中の糞だ。誰でもいい、俺たちに同情しろ。俺たちは一時の慰なぐさめをえるだろう。俺たちは善意につけこんで利用するだろう。おまえたちを傷つけるだろう、盗むだろう、奪うだろう、殺してしまうだろう。俺たちはそうせざるをえない。俺たちはきっと、受け容いれてほしがっている。だが、受け容れてもらえるわけがないと思っている。俺たちは危険物だ。誰も受け容れるなと願っている。どうしようもなく俺たちはねじくれている。一サンチごとに固結びをした細くて長い紐ひもみたいに、どうやったってほどけない。

　そんな連中が、しかもそんな連中だけじゃない、まともなやつも、滓かすみたいなやつも、いろんなやつらが寄り集まって酒を酌くみ交かわし、馬ば鹿か騒さわぎをしていた。

　正気の沙さ汰たじゃない。

　俺たちは夢を見ていたんだろう。気味の悪い夢だ。くだらなすぎて、胸むな糞くそが悪い。

　お似合いだ。

　この殺さつ伐ばつとした世界は、俺たちに。

　殺やるか殺られるか。食うか食われるか。殺られたらマジで食われる。こっちだって、食い物がなきゃまずかろうが相手を食う。おあつらえ向きだ。俺たちのためにあるような世界だ。ひょっとして、俺たちが招きよせたんじゃねぇのか？　そうだとしても驚おどろかねぇ。前の、エルデンの、ぬるま湯に頭のてっぺんまで浸つかってたような暮らしよりは、こっちのほうがずっと、何万倍もマシだ。死ね。死ね。死ね。死ね！　どいつもこいつも死んじまえ！　俺だけだ。俺だけが生き残る。生き残ってやる。何億もの屍しかばねの上で、俺は一人で高笑いしてやる。もともとそれが俺の願いだったんじゃねぇのか？　そう思えてしょうがない。俺は嫌いだ。てめぇらが嫌いだ。敵も味方もどっちも嫌いだ。誰も、何も、俺は信じない。自分だけだ。俺はそれを確かめたい。ぜんぶ殺して、みんな死んで、そのあとに俺だけが残る。そうしたら俺は実感

できるはずだ。これが俺だ、俺が世界だ、俺は王で、俺は神みてぇなもので、俺がすべてだ。そのとき俺は、もしかすると生まれて初めて、あとにも先にもそのときだけ、俺は、満ち足りるかもしれない。他ほかには何もいらない。そんな気分にひたれるかもしれない。だからてめぇらは全員いなくなればいい。放ほうっておいてもそうなる。何せてめぇらは弱よえぇ。どんどん死んでゆく。死んで動かなくなる。しゃべらなくなる。生きていたなんて思えないような有様になる。有様も何もない。何もなくなる。俺は忘れる。死んじまったやつのことなんざ忘れっちまう。亡ぼう霊れいすら俺は見ない。今、こうやってこの手でぶち殺している角鉛悪魔どものほうが、俺にとっては親しく感じられる。こいつらは俺の友だちみてぇなもんだ。そして殺したそばから忘れる。煩わずらわしさの欠片かけらもない、便利なことこの上ない、その場かぎりの友だちだ。それでいい。これで。何の問題もない。この世界はまさしく俺のものだ。俺だけの。

「だりゅりぇろー！」と、小こ柄がらな女が猛もう然ぜんと飛びかかってきて、ダリエロの背中にしがみついた。「──だあぁっ、ミシーリャてめぇっ！　邪じや魔まくせぇんだよ！」とはいえ振ふりほどくよりも、眼前の敵をどうにかしないといけない。ダリエロは角鉛悪魔の膝を蹴る。踵かかとに仕込んだ超硬度の棘とげがやつの膝にザグッと刺さる。体勢を崩くずしたやつの顔面に肘を入れる。肘の超硬度ブレードが見る間にやつの顔をズシャグシャにする。まだだ。まだ別の角鉛悪魔がくる。ダリエロは戦斧を、大剣をかいくぐる。攻こう撃げきをかわして、ピンポイントで痛打を見み舞まう。「──重てぇだろうがっ！　ミシーリャ、離はなれてろ！」怒ど鳴なりながら、変だと思う。ミシーリャはたしかに阿呆だ。人間並みの知能があるとは思えねぇ糞クソ屑くず娘むすめだが、こんなときに駄だ々だをこねるようなやつじゃねぇ。ダリエロは角鉛悪魔を突き飛ばして、背中にちらりと目をやる。「……ミシーリャ、怪け我がしてやがるのか!?」さして間を置かずに「らんれむらいろぉー」という答えが返ってきたが、声が頼たよりない。だいぶ弱ってやがる。たぶん、ちょっとやそっとの傷じゃない。深ふか傷でを負っている。だからどうした。わかっているはずだ。ちゃんと目が見えて、物が考えられるやつなら、この状況が最悪だってことは。ミシーリャだけじゃねぇ。みんなだ。遅かれ早かれ、ここで誰だれも彼も死ぬ。たとえ前方数百メーテルのところにある城までたどりついたとしても、どうなる？　どうにもならない。時間の問題ってやつだ。俺はまだ死ぬつもりはねぇけどな。まぁ、だいたいは死ぬだろう。どいつもこいつもおっ死ちぬだろうよ。ミシーリャ

だって例外じゃねぇ。ただそれだけの話だ。ミシーリャがくたばっちまえば、俺は忘れる。ミシーリャなんざいなかった。どうってこたぁねぇだろ。

「あったらいらぁ……」

　ミシーリャが呟つぶやいた。

　あったかいなぁ、と。

「──っざけるな……ッ！」

　俺はなんでこんなに腹が立ってやがるんだ。そう。これは怒いかりだ。俺は誰に、何に対して怒おこってるんだ。知るかよ。とにかく頭にきている。「リィーキエェェールッ！」声を張りあげて呼ぶと、すぐに「応……ッ！」と返事があった。近くはねぇな。「カイッ！　どこだ！」「──ここにいる……！」「ナツコ！　ヴィクトリア！」「何なのよ!?　こっちは忙いそがしいんだから……っ！」「……は、はははいっ……！」「ヘンドリクッ！」「ああッ!?　おおッ!?」「アンガルセェーンッ！」「はいはいはいここにいるっつーの」「シャマニッ！」「イヤッ！　何だぴょーん！」「メツェルディッ！」「えっえっえっ……！」「キューレイ、キューレイッ！」何度、名を呼んでも反応がない。さてはくたばりやがったか。聞こえないだけかもしれない。「──糞ったれが！　ポーはいるか!?　いねぇのか……!?　ミョーチ、白しろ妙たえ！」「うるふぁい」「にゃははーん」「ラギィ！」「ダリエロ殺ぉーす！」「ハァッ!?　なんでだよ、相変わらず意味不明な女だなてめぇは！　レイジッ！」「まだ生きている」「ったりめぇーだベヨＧＩＨＩＨＹＡ！」「ボンド、ロロ、トト、ボダダグッ！」「お、おおおおれは大丈夫だけどな、ボンドとロロも、だけどトトが怪我しててな……！」「塵ゴミ屑クズどもが！　ナツコ、手当てしてやれ……！」「ゆわれなくてもやるってーの！」「チェリー、腐くされオカマフア野郎ギーめ、しっかりくたばりやがってるだろうな!?」「くたばってたまるかってんだよ、あたいは見た目どおり大脂羽蟲ゴツキーよりしぶといんだから、見た目どおりってなんだよ、どういうことだいっ！」「クラララッ！」「──ええ！　リリアもジョゼもユーリィも無事よ、心配しないで！」「心配なんざしてねぇんだよ糞クソ女アマが、さっさと死ね…！　雷切ライキリッ！　そろそろ死んだか……！」「……し、死んじゃった！」と女の声が答えた。祝花ノリカか。「雷切、がっ……死んじゃった……っす……！」「阿あ呆ほう！」あの野郎。生意気なやつだっ

た。もう二度とあのむさくるしい面ツラを見なくてすむ。上等だ。「──だったらてめぇは死ぬんじゃねぇ！」「……あ、あ、あ、あい……っ！」「サイケングレンマイセルヒ！」「はい？」「はい、じゃねぇ！　てめぇはもっと真面目まじめにやりやがれ！」「あなたがそんなことを言うとは世も末ですね。まさしく末世といった様相を呈ていしてはいるわけですが。あはは」「……チィッ！　死ぬ前に俺にぶっ殺されてぇのか、てめぇ……！」

　ミスター・毛モウ、寂ジヤク星セイ、リョーヨルカ、アルバート、シュトレーハウゼンは、ヨナ樹海からの撤てつ退たい戦で無様に死にやがった。ドルゲイはついさっき、オーノ、クルガイス、リー・ブラックも、この戦いでみじめに命を落とした。生き残りは何人だ？　数える気にもならない。死ね。死ね。みんな死んじまえ。死んじまやぁいいんだよ。消えろ。俺の前から、俺の中から、すっかり消えて、きれいさっぱりなくなっちまえ。そうなってくれねぇかと、ずっと俺は願ってた。もうたくさんだ。こんなのは糞食くらえだ。むしろ糞を食ってきたようなもんだ。それをやめるってだけのことじゃねぇか。「──アジアンめ……！」

　あの最大の糞が、方々で急降下と急上昇、急旋せん回かいを繰くりかえして、黒い管の束みたいな右腕だの、黒い竜りゆうの首みたいな左腕だの、黒い纖せん維い状の何かで覆おおわれた脚あしだので、角つの鉛なまり悪あく魔まどもを一方的に殺しまくっている。角鉛悪魔どもは団体行動が大の得意らしい恐おそるべき兵士で、個々も強きよう靭じんきわまりない凶きよう暴ぼうな戦士だ。それでもあの最大の糞にかかれば物の数に入らない。角鉛悪魔どもは最大の糞に蹂じゆう躙りんされている。にもかかわらず退ひかない。殺されても殺されてもやつらは怯ひるまない。逃にげる角鉛悪魔は一いつ匹ぴきもいない。隊列が破られて穴があけば、後続がすぐさま埋うめてしまう。その数は見当もつかないが、少なくとも数万、ひょっとしたら桁けたが一つ上か。本来なら一いつ瞬しゆんで握にぎり潰つぶされて終わりだ。あの最大の糞と、それから城から打って出てきた連中のせいで、どうにかまだそうなっていない。

「だりゅりぇろー」とミシーリャが背中で言う。なんだか、熱に浮うかされているみたいな声で。「つぁーれららー？」

「……ねぇよ。疲つかれてなんざ」

　マジでぶっ壊こわしちまいてぇな。何もかもぜんぶ台無しにして、腹ぁ抱かかえて笑い転げてぇ。いつだってそうだった。失うこ

となんざ怖こわくねぇ。あると思えばある、ないと思えばない、何だって所しよ詮せんはそんなもんだ。大切だとか大事だとか必要だとか、みんな幻げん想そうだ、思いこみだ。存在理由、価値観、ありとあらゆる意義、どれもこれも妄もう言げんでしかない。俺は何も信じねぇ。感覚も感情もあてにするな。流されるな。俺の右目が見る世界と、俺の左目が見る世界は、まるで違ちがう、別物だ。俺は生まれてこのかた、色の違う左右の目で、別々の世界を同時に見てきた。確かなものは何もない。誰も彼も同じものを見ているようで違うものを見ている。今の俺と一瞬後の俺は、同じ場所にいるようで違う場所にいる。変わらぬものなど何一つない。糞にまみれた糞だらけの糞世界だ。

疲れたかって？

ダリエロは立ちつくす。

ああ、それなりにな。

疲れちまったよ。

戦力が足りてねぇ。勝てねぇな。今さらじゃねぇか。とっくにわかりきってることだ。ここが終着点ゴールかよ。こんな場所が。ローガン。クラニィ。俺に塵ゴミ屑クズ野や郎ろうのお守もりを押しつけやがって。卑ひ怯きよう者どもめ。リキエルじゃあ何の役にも立たねぇ。あの女アマはいねぇしよ。とんだ貧びん乏ぼう籤くじだぜ。しがないニセチチのくせしやがって、てめぇ、いったいどこにいやがる。ミシーリャが叫さけぶ。「──だりゅりぇろー……っ！」

「あ……？」俺も焼きが回ったかとダリエロは思う。すぐ目の前で角鉛悪魔が戦せん斧ぷを振りかぶっている。振りおろそうとしている。どういうわけか身体からだが動かない。何かが切れている。「にゃりょー……っ！」ミシーリャがダリエロの背から飛びあがろうとする。何をする気だ。よせ。やめろ。てめぇ、怪我してんだろ。「ばっ──……」

かき消された。声が、轟ごう音おんに。

ダリエロは、オオッ、と声を出し、とっさにミシーリャを引っつかんで後ろに倒たおれこんだはずだが、その自分の声も聞こえなかった。噴ふきあがったのだ。何が？　地面か。土だの何だのが、

下から強きよう烈れつな勢いで押しあげられたように、いや、ようにじゃない、実際に押しあげられたのだろう。何らかの力によって。柱だ。土柱が立った。一つじゃない、二つ三つじゃきかない、数十の土柱が立っていた。そこにいた角鉛悪魔どもは、例外なく打ちあげられた。高く、高く。

　ある予感に駆かられて、ダリエロは振り返った。

　さっきまで、そこにはいなかったはずだ。はず、じゃない、間違いなくいなかった。

　いつの間に。どこからやってきたのか。何か変わった。ちょっとじゃない。大きく。そんな印象を受けた。見た目じゃない、外見じゃなくて、たぶん中身が。

「まったく、だらしないわね」女はそう言って髪かみをかきあげると、垂れ目を細めて唇くちびるを笑わせた。「何やってるのよ。いくらなんでも、まだ耄もう碌ろくするような年じゃないでしょ？」

「黙だまれ。犯やられてぇのか」

「その様でよく言えたもんだわ。黙らせたいなら、せめてしゃんとしたら？」

「ベティ」ダリエロは女の名を呼んで、ため息をついた。いるのか、そこに。マジでいやがるってのか。目をこすって見なおしたい。しねぇけどな。なぜだか目を離せない。まばたきさえできない。「今まで、何してやがった」

　女はその問いに答える前に、指先で何かをつまみあげるようにすっと両手を持ちあげた。たったそれだけでまた数十の土柱が上がり、角鉛悪魔どもが丸めた紙かみ屑くずみたいに吹ふっ飛ばされた。そして女は平然と言った。「必要なことをしてたのよ。ただそれだけ」



「ベティ……!?」「ベティ！」「ベティじゃね!?」「ベティ！」
「ベティだ！」「おかえりベティ！」「ベティ！」「ベティ！」
「ベティ！」「ベティ！」「ベティ……！」

「うっせぇやつらだ……！」

　ダリエロは動かなかったはずの左ひだり腕うでででミシーリャを引っ抱えた。ベティの糞クソ女アマが多少ぶっ飛ばしても、角鉛悪魔はまだいる。いすぎるほどいる。踏ふみこんで肘ひじの仕し込こみブレードを手近の角鉛悪魔の喉のど奥までぶっこんで、一気に突き倒す。そいつを踏みつけて立って、別の角鉛悪魔の眼球に踵の仕込み棘を乱暴に丁てい寧ねいに突き刺してやる。ベティがひらりと飛ぶ。あの女が上空でどこかを指さすと、そこに稲いな妻ずまが落ちる。生半可な雷じゃない、爆ばく雷らい索さくどころか、あれは雷らい獅じ子しに近い。「クハッ」とダリエロは笑う。これが笑わずにいられるかよ。「クハハハハハハハ……ッ！」落雷。落雷。落雷。角鉛悪魔がベティめがけて槍やりを投げた。やべぇ。そんなことはちらりとも思わなかった。げんにベティは槍を受け止めた。肩の上からぬっと生えた、別の、おそらく、男のものとおぼしき腕で。ベティは、その腕は、すぐさま槍を投げ返した。槍はもともとの持ち主に返へん却きやくされて、ついでにそいつの頭を串くし刺ざしにした。ベティがこっちに目をやった。顔がこわばっている。崖がけっぷちに一人で突つっ立ってる。そんな表情だ。もっとも、今のあいつらなら、崖だろうが何だろうが、どうってこたぁねぇだろうけどな。なんて面ツラァしやがるんだ、馬ば鹿かめ。

「しばらく見ねぇうちに」ダリエロは鼻で笑った。「余計不細工になりやがったじゃねぇか。まぁ、もとがもとだし、大差ねぇけどな」

「──あんたにだけは言われたくないわ！」

　ベティは頰ほおを紅潮させて、八つ当たりするように指を動かすだけで角鉛悪魔どもを雷らい霆ていで薙なぎ払はらう。

「ベティ……！」

　そこに、やつがきた。

　仲間が口々に糞女の名を呼ばわるのを聞きつけて、黒い翼つばさを阿呆みたいに羽ばたかせて駆けつけてきたのだろう。

　しかし、さっきとは別の意味で──なんて面ァさらしやがるんだ、このすっとこどっこいめ、仮にも頭領マスターだろうが。みっともねぇ。てめぇは百年か二百年ばかり離はなればなれでずっと捜さがしまわってた飼い主にようやっと巡めぐりあった犬っころかよ。

　そんな顔を見せつけられた糞女が、どんな反応を示しやがるのか。見物だな。

　どうしてか、この胸が重く疼うずく。そんなことはない。気のせいだろう。

　果たして糞女は、「Hiyas.」と事もなげに、何日かぶりに行きあった知りあいに挨あい拶さつでもするみたいに、軽く手をあげてみせただけだった。「久しぶりね、アジアン」

　おいおいおいおい。

　それだけかよ。

ツァール峡谷

「トマト……！　ロム・フォウを……！」言うまでもないかなと思ったり思わなかったりしながらもマリアローズが声を張りあげてそう言うと、トマトクンは「──ああ！」と応じて、ピンパーネルとトワニングに追われつつ矢を放っているロム・フォウに襲おそいかかろうとした。

「待って、あたくしが」リルコがトマトクンを制して、音もなく飛んでゆく。ロム・フォウに迫せまる。ロム・フォウは即そく座ざにリルコに狙ねらいを定めて矢を連射した。でもその矢が、当たらないんじゃない、止まってしまう。ピタッと静止して、落ちる。リルコはさらに距きょ離りを詰つめて、ロム・フォウに掌てのひらを向けた。「──ロム・フォウ。知っていたかしら。あたくしはあなたが大だい嫌きらいだったのです」

　途と端たんにロム・フォウが全身を硬こう直ちょくさせた。走っている最中の、とても安定しているとは言いがたい体勢だ。

「ＥＬＭＮＩＢＬＥＨＥＭ」リルコの全身から、紫むらさき色いろの炎ほのおがにじみ出て、揺ゆらめく。

　まさか、その炎でロム・フォウを焼き払うつもりなのか。

「リルコ、貴様……！」と、トマトクンが豪ごう快かいに、リルコを足あし蹴げにした。

　ヴォッゴォォォォォォン……ッ、みたいな、ものっすごい音がしたんですけど。

　リルコはゆうに十メーテル以上ぶっ飛ばされて、でこぼこした下り勾こう配ばいの地面をゴロゴロ転がった。でも、今のトマトクンに蹴られてあの程度ですんだのだから、まあマシなほうといえばマシなほうかもしれない。というかたぶん、トマトクンも手加減、いや足加減したのだろう。リルコの謎なぞめいた力による拘こう束そくから解き放たれて、ロム・フォウが動きだす。それと同時か、その直後だった。「フォッハァァァ……ッ！」トワニングがロム・フォウに組みついて羽は交がい締じめにした。その両眼が爛らん々らんと輝かがやいている。「首筋ィィィィィィィここかッ！　見える、見えるぞォッ、ヌォアハッ！　滅めつ殺さつッッッッ……！」身体中の筋肉がムキムキモリモリ盛りあがりまくっているし、素す直なおにかなり気持ち悪いし、医術式を使っているとはとても思えないが、そんなこともないのだろう。

「あぁ……っ」と声をもらして、ロム・フォウがぐったりした。

　トワニングはそのままロム・フォウを担かついで、走る。ピンパーネルも、ハニーメリーも、ユリカも、飛フエイ燕ヤンも、アルファも、走っている。

　リルコが仰あお向むけのままふわっと浮きあがって、無残に腫はれあがった顔をトマトクンのほうに向けた。「どうせなら、殺してくれてもよかったのに」

「それがお前の望みか。そんなことが。くだらんな」トマトクンは茫ぼう々ぼうたる長い髪をなびかせて振ふり返った。山は、ジャリコ・カスパーロウのなれの果ては、おびただしい土つち埃ぼこりを上げ、ドゴゴゴズゴゴゴひどい音を立てて、どんどん近づいてくる。「──きゅー！　マリアはまだ完全じゃない、背負ってやれ！」「くう！」きゅーがただちにすっ飛んできた。よたよた足を動かしていたマリアローズを、もふもふした背中に手早くさっと押しあげてくれる。「──ありがと、きゅー……！」「きゅうっ！」

「……あれ、は……」サフィニアが空中で何かを見ている。

何かというか、あれだ。

どこからか飛んできて、マリアローズたちの進行方向、おそらく峡谷の出口あたりに降りたとうとしている、そうとう巨きよ大だいな、あれは――いったい、何なのか。

形は、円えん盤ばんみたいな。めっちゃくっちゃでっかい、空飛ぶ円盤……？

人並み外れて目のいいピンパーネルが「アレは」と叫んだ。「エルデン・でス……！」

「えっ…………」ルデン？　エルデン？　そのエルデンって、あのエルデン？　それ以外にエルデンがあるとも思えない。ということは、あのエルデンだろう。

「グッダーめ……！」とトマトクンが吐はき捨てるように言った。グッダー。そのグッダーって、ひょっとしてあのグッダー？　キング・グッダーのこと……？

いやな感じだ。何がどういやなのか。よくわからないけれど、自分で選んだ道を進んでいるつもりだったのに、じつは誰だれかにそう仕向けられていて、そのことに自分が気づいていなかっただけで、ということはとんでもなく自分は間ま抜ぬけで、間抜けなだけに自分がどれだけ間が抜けているか理解していない、でも、ちょっとおかしいとさすがに思いはじめている。たとえて言えば、そんな感じだ。だったらそっちになんか行かないよ。意地でも行ってやるもんか。行きたくなくても、行かざるをえない。なぜなら、道は一本。そっちにのびている道しかないからだ。それすらも仕組まれているかのようで、何か苦いものがこみあげてくる。

「エルデンを目指せ……！」トマトクンが怒ど鳴なった。なんか完全に怒おこってない？　ただ、その怒いかりはマリアローズたちに向けられたものではないだろう。ＺＯＯとその他若じやつ干かん名めいは斜しや面めんを駆けおりる。サフィニアとリルコは飛んでるんだけど。もうこのへんは峡谷の底だ。しばらく行けば峡谷を抜ける。先行していたジョーカー率いる避ひ難なん民みんたちにそろそろ追いつきそうだ。エルデンは着地したのか。まだみたいだ。
「ジョーカーッ！」トマトクンが声をかける。「エルデンが降りてきた！　間に合いそうなら、逃にげこめ……！」「エルデンだと……⁉」ジョーカーは振り返らずに答えた。「――考えておく！」

そんな考えておくってほどの余よ裕ゆうは基本的にないと思うんだけど。だって、さ。マリアローズはきゅーにしっかりがっちりつかまって振り向いた。ほら。ね？　無理だよ、やっぱり。あの山。ジャリコ・カスパーロウ。最初に南側斜面から滑すべり落ちてきたときの面おも影かげというか山影はない。言ってしまうと、山ですらない。ただの土ど砂しやの塊かたまりだ。いや、固まっていないので、塊でさえない。超ちよう絶ぜつ大規模な、土砂の波だ。あれではトマトクンとリルコでも止めようがないだろう。とにかく逃げるしかない。ジャリコ・カスパーロウの手が届かないところまで。だけど逃げきれるのか。間に合いそうなら、とトマトクンが言った。間に合うだろうか。微び妙みようかも。とか冷静に思ってる場合じゃないんだけど。冷静なわけじゃないんだけど、何かできるわけでもないし、だいたい自分の足で走ってもいないので、ギャーギャーガタガタ騒さわぐのも違ちがうような気がして。騒いでどうにかなるのなら、いくらでも馬ば鹿か騒ぎするんだけど。馬鹿騒ぎっていったらカタリ、元気かな。ダメだ。弱気になってる。弱気を通り越こして虚きよ脱だつしかけている。歯を食いしばって「うううううう……！」と唸うなってみたら、フードの隙すき間まからクルルが顔を出した。──と、いきなりサフィニアが身をひるがえして真っ白い光を放った。「はぁぁぁぁぁぁぁぁ……っ！」地面に白い線が一直線に引かれて、そこの部分が大おお袈げ裟さなくらいドウゥーンと沈ちん下かする。土砂の大波は、だが、その深い窪くぼみをやすやすと埋うめつくして乗り越えてしまった。「ふぅっ！　はぁっ！　さぁぁ……っ！」サフィニアは、でも、あきらめない。土砂の大波に、立てつづけに光をぶつける。なんとか少しでも時間を稼かせごうとしているのだ。マリアローズたちを一歩でも二歩でも遠くへ逃がすために。きっとサフィニアなら奇き跡せきを起こしてくれる。そう思いたい。思ったところで、そのとおりになるわけじゃない。誰にだって、できることとできないことがあるのだ。できないことは逆立ちしてもできない。

　こんな心臓、今すぐ止まってしまえ、とマリアローズは念じた。

　悔くやしがることしかできないなんて、超最低ＳＵＣＫすぎる。

　あと三秒くらいで、マリアローズは自分の口に手を突っこんで、中にあるものを、何でもいいから引きずりだそうとしていたかもしれない。

ビュゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ

ンと、峡谷の向こうから、何かがかっ飛んでくる。

　くる、と思ったときにはもう、鼓こ膜まくが破れて耳がちぎれるような音とともに通りすぎていて、マリアローズごときゅーが飛ばされた。

　次の瞬しゅん間かん、天上天下が破は裂れつした。

　そう感じられるくらいの
大々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々衝しよう撃げきだった。

　身体からだがなくなってしまったかのようにマリアローズは錯さつ覚かくした。身体だけじゃなくて全世界が失われた。もっとも、そうだとしたら、失われたと感じることもできないはずだ。だから、失われてはいない。それはわかるんだけど━━何これ。マリアローズはきゅーにしがみついている。きゅーは横向きに倒たおれている。あっつい？　てゆうか、熱い。熱っ。熱っ、熱っ！　熱風が吹ふきつけている。火柱が上がっている。火柱？　違う、そんなものじゃない。炎の壁かべがそびえている。峡谷を完全にふさいでしまっている。なぜか土砂の大波が炎の壁と化してしまっている。炎の壁の前に、一人の男がこっちを向いて浮ういている。男は髪かみが長い。のばし放題にのばしているといったふうだが、トマトクンの髪みたいに渦うず巻まいてはいない。まっすぐだ。男は絹か何かの長衣を身につけて、腰こし帯おびを巻いている。豪ごう華かだがごてごてしていないガウンを羽織っている。男は王おう冠かんを頂いている。長い髭ひげ。削そいだような頬。双そう眼がんは炯けい々けいとしている。なんて冷たい眼光だろう。独立不ふ羈きを通り越して、横おう柄へい、尊大、倨きよ傲ごう、傲ごう岸がん不ふ遜そん。その種の言葉を百や二百並べたところで及およばない。一つだけ明確にわかることがある。男は生まれながらの王だ。もし全人類が絶滅し、男だけが生き残ったとする。男に仕える者はいない。男が支配する者もいない。男には玉座がなく、領土もない。仮にそうなったとしても、男は王だろう。たった一人でも、男は王でありつづける。王以外の何物でもない。だからマリアローズにもわかった。会ったことなんかもちろんない、肖しよう像ぞうすら出回っていなかったので、容よう貌ぼうを知るすべはない。それでもわかる。たぶん、その名を知っている者なら、誰だって一目見ただけでわかるだろう。

「━━……キング・グッダー」

魔ま導どう王おうを祖先に持つ男。サンランド無統治王国の何代目か、何十代目かの王。王統を受け継つぐ者。そうじゃないんだとマリアローズは一瞬のうちに悟さとった。悟らずにはいられなかった。違ったんだ。魔導王、王国を打ちたてた始祖、その子孫なんじゃない。

そうじゃなくて、そのものだったんだ。

あの男は紛まごうことなき、疑う余地のない、正真正しよう銘めいの魔導王、〝原アト子ミツのク・極マキシ大マム・魔ドレ術ツド士スター〟キング・グッダーその人なんだ。生ける伝説なんだ。伝説は死ぬことなく生きつづけて、今ここにいるんだ。

轟ごう々ごうと噴ふきあがって天を焦こがす炎の壁が、不意に揺れ動いた。

王が振り向くと、炎の壁から、熱されてどろどろになった土砂の塊らしきものが顔を出そうとしていた。王はいたく気分を害された様子で「余に手向かうとは慮りよ外がい者ものめ」と呟つぶやいてどろどろの塊に向きなおり、胸の前で両の腕うでを交こう叉さささせた。「──グッダァァァァァァァァァァァァァァァァァビィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィム……ッ！」

魔術。あれが王の魔術なのか。交叉させた腕から、ピンク色の光線が発射された。それがどろどろの塊を貫つらぬくと、ボンッポンッバゥンッと爆ばく発はつする。蒸発したみたいに消し飛んでしまう。でも、どろどろの塊はあとからあとから打ち寄せてくる。王は大変ご立腹だ。

「糞くそ生意気にすぎるぞ、下等」と、どろどろの塊を下等呼ばわりしたかと思うと、王はクイッと両の手首を上に曲げた。「グッダァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァリィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィフト……ッ！」

すると、どうだ。どろどろの塊が持ちあげられる。ぜんぶだ。オールいっちゃってる。どろどろの塊が浮く。引っぱりあげられているかのように、上昇する。炎の壁ごとだ。王はそして、顎あごの前あたりで両手をぐるぐる回しはじめた。「グッダァァァァァァァァァァァァァァァァミィィィィィィィィキサァァァァァァァァァァァァァァー……ッ！」その手の動きにあわせて、どろどろの塊と炎の壁がグチャグチャのメチャクチャにかき

混ぜられる。王が「ゲヘラッ！」と笑う。「ゲヘラゲヘラゲヘラゲヘラゲヘラゲヘラゲヘラゲヘラゲヘラゲヘラゲヘラゲヘラッ！
ゲェーハゲハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハァァァー……ッ！」

　マリアローズは呆あつ気けにとられて、それから身み震ぶるいした。聞いたことがない。こんなに下げ衆すっぽくて、鬼き畜ちくな笑い声。キング・グッダーには威い厳げんが備わっている。どこからどう見ても王にしか見えない。だけど高貴ではない。程ほど遠とおい。悪逆の王だ。しかも、すさまじい暴力で他を圧あつ倒とうする。最悪の王だ。

　最低の王がゲヘラゲヘラ笑いながら両手を回しつづける。どろどろの塊と炎ほのおの壁は一つの巨大なわけのわからない球へと収しゅう斂れんしつつある。もう球状になっている。突とつ然ぜんだった。

　王はだしぬけに手を止めて「──飽あいたわ」と吐き捨てると、球に向かって拳こぶしを突つきだした。「グッ
ダァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァーッ！
ポォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ
ン……ッ！」

　ポーンって。

　何だよ、それ。いくらなんでも、適当すぎじゃないか。

　でも実際、球はポーンと飛んでいった。あんなに大きい、大きすぎるほど大きいものが、ポーンと飛んでいくなんて変だ。幻まぼろしでも見ているんじゃないかと疑いたくなるが、疑おうにも球はみるみるうちに遠ざかってゆく。ツァール峡きよう谷こくの遥はるか彼方かなたへと。

　とうとう見えなくなった。

「フン……」王は鼻を鳴らして、マリアローズたちを見おろした。いや、たしかにこの世のすべてを見下しているような目つきだけれど、マリアローズなんかきっと王の眼中にない。視線は感じるけれど、たぶん見てはいないだろう。王が見ているのはおそらく、たっ

た一人だけだ。王は嗤わらった。「ディィィィィィィィィオロット。久しいな。といっても数年ぶりか。余らがすごした冗じよう長ちようなる戯たわけた時を考えれば一瞬にすぎぬ、か」

「グッダー」トマトクンが王の名を呼ぶ声には、塵ちりほどの親しみも懐なつかしさもふくまれていないように、マリアローズには聞こえた。トマトクンとキング・グッダーはどんな関係だったのか。そんなことはわからない。浅からぬ因いん縁ねんがあるのだろうということくらいしか。でもどうやら、気の置けない友人同士だったわけではなさそうだ。トマトクンはやけに平板な声で「何の用だ」と訊きいた。

「わざわざ汝なれを迎むかえにきてやったのだ、サァァァァー・ディィィィィオロット・マァァァァァックスペェェェェェイン」王は片手で髭をしごきながら、嘲あざけるように、侮あなどるように、たぶんわざと妙みような抑よく揚ようをつけて答えた。「力を取り戻もどしたな。感じるぞ、無限の心臓。その鼓こ動どうを。竜りゅう殺しにして、神殺し、皆みな殺ごろしの騎き士しにして、大量の死の上に立つ者よ。ようやくその名に値あたいする様ざまとなりくさりおって、重ちよう畳じよう。まっこと重畳。さてはて、たァーっぷりと余の役に立ってもらうぞ」

「なぜ俺が貴様の役になど立ってやらないとならん」

「わかっておるはずだ」

「さあ。わからんな」

「相も変わらず、愚ぐ鈍どんなァァーり」

「なんとでも言え」

「フォォー・ヴィィィィィィークトリィィィィィィイイイイ」王は右手の人差し指と中指を立ててみせた。「勝利のためだ。敗北は全ぜん滅めつを意味する。もう一度だけ言おう。わかっておるはずだ。汝なれは余の役に立ってみせねばならぬ。そうせざるをえェーぬ。余はまず悪魔どもを誅ちゆう戮りくする。汝なれはその無限の力を余のために使うのだ。王として余が汝なれに命ずる。余の空中要塞エルデンに搭とう乗じようせよ。その際、木こっ端ぱどもを引き連れてもかまわぬ。もったいなくも余が許す。ディィィィィィオロットォォォォォォォォォォ。黙だまって頭こうべを垂れ、余に服

せ。汝なれがいくら愚ぐ劣れつであろうとも、こうなることはわかっておったはずだ」

三巡月一番日　天上

　彼には肉体がない。それにもかかわらず、彼は光こう幽ゆう体たい、プラスマル・ボディとして実存している。

　精神は肉体を超ちよう越えつする、肉体を有していたころからの、それが彼の信念だった。

　現在の彼を構成しているプラスマは、言うなれば精神と物質の中間体だ。精神とは形のないものだが、プラスマには形がある。正確に述べれば、プラスマは薄うすまると無になり、凝ぎよう集しゅうすることで有となる。それは物質のありようとは異なる。物質はどこまでいっても物質であり、極小であろうと有であり、無に帰することは絶対にない。１はあくまで１であり、０にはならない。０をいくら集めたとしても、１になることはない。しかし、プラスマは違ちがうのだ。彼は幾いく多たの実験の果てにプラスマを発見し、これに彼の全情報を組み込むことに成功して旧ふるき肉体を捨てたのだが、この過程を通して世界の謎なぞにふれた。プラスマの正体にもいくらか迫せまることができた。

　プラスマはモノではない。プラスマは状態なのだ。

　真理は、だが、その先にある。じつは、モノすらも状態なのだ。

　０から１になることはない。それが常識だが、正しくない。０から１になることがない物質は、固定された状態にすぎないのだ。一方、プラスマは固定されていないので、０から１へ、また、１から０へと変化する。

　彼と、それから彼の娘むすめは、肉体を捨ててプラスマル・ボディという状態で存在することにより、存在の謎に近づくことができた。

　すべての存在は状態でしかない。有と無は入れかえ可能なのだ。それはあくまで究極的に可能か不可能かという問いには可能である

と答えられるという話であって、有と無の状態が自由に行き来されるわけではない。プラスマであればそれは可能だが、たとえば今、彼が見おろしている暗い空に漂ただよう薄雲でさえ、無にはならない。無にしようと様々な方法でありとあらゆる力を加えても、基本的にはかぎりなく小さな有となるだけだ。が、特定の状況下であれば、彼は物質の状態を変化させ、プラスマ化させることができる。プラスマは有となり、無となるので、有と無は原理的に入れかえ可能なのだ。

彼は１であり、０である。

世界は０であり、１である。

そのはずであるのに、世界は固定されている。あやふやではない。１でありつづける。

いったい何が世界を固定しているのか。

（エヴァンジェリン、我が娘よ）彼と彼の娘は、プラスマル・ボディを構成するプラスマをどこまでも薄くのばして広く広く展開し、無に近い。彼も彼の娘も、今はほとんど無だ。無に転じないぎりぎりの地点を見み極きわめて、そこにかろうじてとどまっている。彼と彼の娘はほぼ混じりあっている。どうにか区別できるかできないか、その境目にいて、意を通じあわせるときだけお互たがいを切り離はなすのだ。（━はい、お師様）（どうだ、感じとれるか、有から無への転化は）（わたしの範はん囲いでは感知できません）（そうか。我もだ。やはり、転化を遂とげうるのはあの悪魔だけかの）（悪グラ魔ンヴ大エリ公オンアーマン）（うむ。あの悪魔だけは、どうやら特別のようだ）（ふと現れたり、消えたり━）（プラスマなのか）（わたしたちとは異なるように思います）（我もそう思う。あれは何なのだ）（この世界の謎に関かかわる存在なのでしょうか）（あるいは、そうやもしれぬ）（お師様）（うむ）（見つかったようです）（らしいな。ふむ。━踊ダンりシング羊シープ。あの不ふ埒らち者か）（わたしは嫌きらいです）（心配するでない、エヴァンジェリン、我が娘よ。彼はおまえに手出しはできぬ。我らが昇のぼりたる階かい梯ていに、彼はいまだ足をかけておらぬゆえな）（ここから離れませんか）（その必要はあるまい。さらに無に近づこう。さすれば━……）

「あれ……？」踊り羊は虚こ空くうできょろきょろとあたりを見まわした。綿わた菓が子しのような髪かみから、羊の角が突きだして

いる。水玉模様の服と、マフラー。まるで年とし端はもいかない子供のような姿をしている。「ここにいると思ったんだけどな。モーグとエヴァンジェリン。さっきまではたしかにいたのに。どこ行っちゃったのかな。ていうか、いるんでしょ？　モーグ。エヴァンジェリン。クルオと遊ぼうよ。せっかく遊びにきたんだからさ。クルオがこんなところまで遊びにきてあげたんだよ？　無視するなんて、ひどいよ」

（……なんて勝手な言い種ぐさ）（エヴァンジェリン）とたしなめたが、手て遅おくれだった。踊り羊は彼と彼の娘の気配を感じとったようだ。「──やっぱりいるんじゃないか」

　にやっと笑って、一人の踊り羊が二人になった。二人の踊り羊が四人の踊り羊になり、四人の踊り羊が八人に、八人が十六人に、十六人が三十二人に、三十二人が六十四人の踊り羊になって、六十四人の踊り羊が百二十八人の踊り羊になった。「いる」「いる」「いるんじゃないか」「いるんじゃないか、モーグ」「モーグ」「モーグ」「そこにいるんじゃないか」「知ってたけどね、そこに」「そこにいるってことは」「最初からね」「出ておいでよ、モーグ」「モーグとエヴァンジェリン」「きみは」「きみたち」「きみたちは、とっても素す敵てきな二人だよね」「ほんとに素敵だな」「憧あこがれるよ」「だって、クルオは」「クルオたちは、孤こ独どくだからね」「一人で歩むしかない」「自分自身の魔ま道どうを、一人きりで」「それなのに、モーグは、ずるい」「ずるいよ、モーグは。かわいい」「かわいい女の子と二人でさ」「いつも二人で」「二人で一人の道を進むなんて、モーグは」「モーグは策士だよね、最初から狙ねらっていたんでしょ？」「自分の伴はん侶りょにするつもりで、その娘こを育てたんだよね、ずるいな」「べつにね」「べつに、責めてるわけじゃないよ？　クルオはすごいなと思ってるんだよ」「お目が高いってやつだよね」「さすがだよ、モーグ」「そんな素質のある娘にはなかなか巡めぐりあえない、素質があるだけじゃだめだ、相あい性しょうもよくないといけない」「弟子でしをとって成功しているのは、モーグとマチルダだけだよね」「マチルダの弟子も、あれはあれですごい、あのマチルダの弟子だけあって、まだまだやることなすこと考えること、何もかも低次元だけどね。魔術の」「魔術の本質にはふれてない。魔術がもたらす力ばかり追い求めてる」「力ばかり」「力」「力」「力」「モーグ」「エヴァンジェリン」「きみは」「きみたちは違うね」「違う」「魔術の本質をよくわかっているよね」

（……魔術の本質を語る資格が、あなたのような低てい俗ぞくな魔術士に）（よせ、我が娘よ。これがこの者の手なのだ）（ですが、お師様、わたしはともかく、お師様に対してあのような口の利きき方、とうてい聞き流せるものではありません。事もあろうに、わたしのお師様を策士などと……！）（いや。それは、だが、否定しえぬ。我はおまえを、ともに歩む者、伴侶になりうる者と見み抜ぬいておった。我が階段を築き、それを示せば、おまえはやすやすと昇ってくるであろうと、我は確信していたのだ）（……お師様）（許せ、エヴァンジェリン。我はおまえが幼子であったころから、我が道に引き入れるため、数々の手管を弄ろうしておったのだ）（何を……何をおっしゃいます、お師様！　わたしはむしろ、感謝しています。わたしをここまで連れてきてくださったのは、お師様！　お師様なき人生など想像もできません。そのような人生の可能性があったことさえ、否定したいくらい！）（おお、エヴァンジェリン！）（お師様……！）（愛いとしき我が娘よ……！）

「……盛りあがってるところ、悪いんだけどね」百二十八人の踊り羊がまったく同じ表情を浮うかべて、一いつ斉せいに肩かたをすくめた。「クルオとも遊んでくれないかな？」

　今や彼も彼の娘も、光り輝かがやく粒りゆう子しの集合体として目に見えるほど、プラスマル・ボディがはっきりと実体化している。彼は娘を胸に抱いだいて踊り羊たちを一いち瞥べつした。（戯たわむれる相手が欲ほしいのなら、我や我が娘ではなく、あの者に頼たのめばよい。適任であろう）

「え？」「え？」「え？」「え？」「え？」「え？」「え？」「え？」「え……？」百二十八人の踊り羊が振ふり向いた。流れ星だ。純白の流星が夜空を斜ななめに切り裂さいて、急に方向転てん換かんする。こちらへ向かってくる。猛もう速度だ。「わ」「わっ」「わわっ」「わ」「わあぁっ」「わあああああぁっ……⁉」踊り羊たちが右往左往して回かい避ひを試みる。そのうちのいくらかは成功して、いくらかは失敗した。流れ星は三十人かそこらの踊り羊を消し飛ばして急停止すると、銀色にきらめく髪を左手でかきあげ、その瞳ひとみに宿る億万の宝石をまたたかせた。「モーグ。こんなところで何をやっているのかしら。何か楽しいことをしているのに違いないのだわ。答えなさい。正直に。正確に。つまびらかに」

「マチルダ……！」百人足らずの踊り羊が右手を前に突つきだすと、奇き妙みような形状の刀とう剣けんが現れた。二本の厚い両り

よう刃ばの剣身が長い柄つかを挟はさみこんでいる。頭ヘツド尾テイ剣ルズ。中部ミツド諸国域ランズ北部の伝統的な武器だ。踊り羊は頭尾剣を引っつかんで、四方八方から閃せん光こうの魔女に襲おそいかかる。魔女はよけない。その場から動きもしない。少女のように華きや奢しやなその背から、白い光線が放たれる。一本一本の光線は心もとないほど細いが、とてつもない数だ。光線にふれると、踊り羊が消失する。みるみるうちにかき消されてゆく。たちまち十人かそこらまで打ち減らされた踊り羊は、たまらず逃にげる。「くっ！」「相変わらず！」「そうやって！」光線から逃げようとする。だが光線は屈くつ曲きよくし、複雑な軌き道どうを描えがいて、踊り羊たちを追つい尾びする。どこまでもどこまでも追いかける。光線に打ち抜ぬかれて、踊り羊が一人消える。二人消える。また一人消える。消える。消えてゆく。とうとう一人になった。「──うわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわぁ……っ！」

　踊り羊は身をよじって、光線をかわそうとしたようだ。しかし光線はそれより早かった。光線が炸さく裂れつする。踊り羊は、消えなかった。飛び散った。

　そして、分かれた。

「なーん」「なん」「なーん」「なん」「なん」「なん」「なーん」「なん」「なーん」「なーん」「なん」「なーん」「なーんちゃって」「って」「ね」「ね」「ね」「ね？」

　分ぶん裂れつしたのだ。小さな、指ほどの大きさの、数百人の踊り羊に。

　魔女が「こしゃくな……！」と怒ど声せいを発すると、光線はその分裂した小さな踊り羊たちを次々と狙い撃うった。小さな踊り羊が一人、また一人と光線によって消されてゆく。あっという間だった。最後の一人になった。光線は容よう赦しやなくその最後の一人をぶち抜いた。小さな踊り羊は、だが、やはり消えなかった。分裂した。さらに小さな、数百か、数千の踊り羊に。「ははは」「はははは」「はははははははは」「はははははははははは」「はははははははははははは」「はは」「──どう、マチルダ？　クルオの魔術は？」

　見ると、魔女の右みぎ肩かたの上に小さな踊り羊が腰こしかけて、脚あしをぶらぶらさせている。魔女はその踊り羊にちらりと目

をやって、鼻先で笑う。「手品の間違いではなくて？　あなたの魔術などわたくしは認めないのだわ。未来永えい劫ごう認めない。徹てつ底てい的にくだらなくて、絶望的なまでにつまらないのだもの。あなたではわたくしの右みぎ腕うでにも勝てないでしょうよ」

「サフィニアかい。あの娘はたしかにいい素材だね。力はすごい。遠く離れていてもひしひしと感じるよ。あの娘の力を。存在感を。でも、ベティだって捨てたものじゃないよ。マチルダ、きみは捨ててしまったみたいだけどね」

「捨てた？　わたくしが？」魔女は顎あごを上げて目を細めた。「馬ば鹿かなことを言うのね、あなた。さすが、救いようのないお馬鹿さんなのだわ。このわたくしが、一度手に入れたものを捨てたりするわけがないでしょう？　もちろん、あなたごとき厚顔無む恥ちな下げ衆すの下げ郎ろうにくれてやるつもりもないのだわ。あれもこれも、ぜんぶわたくしのものよ。完全に壊こわれてしまうまで、決して放さない。あたりまえでしょう？　あの子にはそれが必要だったから、わたくしはあえて突き放してあげたのよ。わたくしのおかげで、あの子は一皮剝むけたのだわ。言うまでもないことだけれど、すべてわたくしの目もく論ろ見みどおりなのよ。当然すぎて口にするのも馬ば鹿か馬ば鹿かしい、でも、あなたのような愚おろか者に理解できるように言葉にしてあげたのだわ。わたくしの親切心に感謝して、平へい伏ふくしなさい。ようするに、わたくしはいつも正しいということ。わたくしが正しいことをなすのではなくて、わたくしがやることなすこと、何もかも正しいのよ。これは宇宙の真理なのだわ」

「やっぱりクルオはきみのことが嫌いだなあ、マチルダ。理由はたくさんありすぎて、いちいちあげたらきりがないし疲つかれるから、しないけどね」

「だったら、さっさとわたくしの肩の上からおどきなさいな」

「やだよ。だって、ここはなかなか居い心地ごこちがいいんだもの。マチルダの中身は大嫌いだけど、外側はとても気に入っているんだよ。正直、マチルダほどきれいでかわいくて胸が締しめつけられるような女の子には会ったことがないしね」

「そうでしょうとも」

　魔女はまんざらでもない顔つきで、踊り羊を追い払はらおうとし

ない。肉体を捨て去った超ちよう賢けん者じやとしては理解に苦しむが、自身の容姿や弟子をふくめた多くのものに対する強きよう烈れつきわまりない執しゆう着ちやくこそが、魔女の力の源泉なのだろう。それが彼女に超ちよう越えつ性を与あたえ、同時に彼女を制限してもいる。惜おしむべきことだ。そう呟つぶやいたわけではないのだが、魔女は超賢者の思念を捕ほ捉そくしたらしい。

「モーグ。あなた今、上から目線でわたくしについて何か思ったでしょう」

（……そのようなことはない）

「否定しても無む駄だなのよ。肉体から解き放たれることによって、失うものもあることをあなたとあなたの娘むすめは知るべきなのだわ。言ってみれば、あなたたちはダダ漏もれなのよ。肉体という鎧よろいを持たないあなたたちの情報は、常に拡散と改変の危機に瀕ひんしている。不安定で、脆もろく、あやうい。あなたたちがあなたたちを保っていられるのは、プラスマという状態を完かん璧ぺきに把は握あくしている者がまだいないから。あなたたちをふくめて、ね。その秘密が解き明かされてしまえば、あなたたちはまたたく間に消しよう滅めつの瀬せ戸と際ぎわに立たされることでしょうね。そうでなくとも数百年後、千年後まで、あなたたちはあなたたちでいられるのかしら？　その保証がどこに？　肉体を捨ててプラスマル・ボディを手に入れるというあなたたちの選せん択たくは、長い歳月をかけて恒こう常じよう性を獲かく得とくし、これを磨みがきあげてきた生物と同等の厳しい時の試練にさらされていない、検証されていない道なのよ。それを選んだあなたたちは、勇ゆう敢かんで、度しがたくロマンチックで、興味深いほど幼よう稚ちで、頭の中をくわしく見てみたい。そうすることも可能なのではないかと、わたくしは思っているのだわ」

（……魔女め！　わたしのことだけならまだしも、わたしのお師様を愚ぐ弄ろうするかのごとき言い様ようは……！）（よすがいい、エヴァンジェリン）（しかし、お師様！）（マチルダの言にも理はある。我はたしかに蛮ばん勇ゆうをふるい、プラスマに己おのれのすべてを託たくしたのだ。もっとも、悔くいてはおらぬ。目に見え、耳に聞こえ、鼻で嗅かぎとり、手でふれられ、舌に感じられるもののみを追い求めることに、何の喜びがあろう。我はまだ見ぬ道を進むのだ。道なき道を歩むのだ。それこそが我が魔道なり）（お師様！　わたしも、まったく同じ思いです！　お師様は……すてきです！）（いやいや、それもこれも我と道行きをともにする我が

娘、エヴァンジェリン、おまえあってこそ）（もったいないお言葉……！　わたしなど、お師様の影かげを踏ふむことしかできない未熟若じやく輩はい者でしかありませんのに！）

「……つきあいきれないのだわ。あなたたち、はっきり言って、気持ち悪いのよ」

「クルオもそう思うな。師し弟ていで愛人とかになっちゃうよりも、ある意味、タチが悪いよね。その気になれば、きみたちって、とけあって一つになったりもできちゃいそうだし」

（……お師様）（ま、待て、エヴァンジェリン、待つのだ、いかんぞ、それはいかん。今はまだ──）（まだ、ということは、いつかそうなってもよいと、お師様もお考えなのですね……？）（も、とは……？）（はっ。わ、わたしとしたことが、つい、本音が……）

「だから、ダダ漏れだと言っているでしょう？　少しは慎つつしんだらどうなのかしら。羞しゆう恥ち心しんというものが完全に欠落してしまっているのでなければ」

（敬愛するわたしのお師様と一心同体となることに、なぜ恥はじらいなど覚えねばならないのか、わたしにはまるでわからない）（……オホン。エヴァンジェリン、そのへんにしておくのだ）

「あら。あなたのお師様は恥ずかしいようね？」

（お師様、そうなのですかっ!?）（──そ、そのようなことはないっ！　そのようなことは、断じて、決して……）

「まあ、どうでもよいのだわ。それより、どうなのかしら。動きはつかめている？」

（うむ……）

　超賢者はプラスマを凝ぎよう集しゆうさせて人の姿となさしめ、遥はるか北方を指し示した。（まずは北のモトローリィに、大きな力が集まっておる。マチルダ、おまえの弟子の魔ま術じゆつ士と、おそらくは紫しのヴェロニカ。それから、さらに大きな、大きすぎる力を持つ何者かが。エルデンの王、あの最後の魔導王も、そちらにおるようだ。魔導王は巨きよ大だいなる九レガ頭竜シオス大・ノ骨格・インを玉座とし、Ｍ．Ｔ．Ｄ．の深しん奥おうから出いでし人じん竜りゆうを友としておるらしい。また──）と、超賢者は、今

度は南に視線を向ける。（ワールオックの麓ふもとに、これまで例を見ないほどの悪魔、その他異界フリー生物クスどもの軍勢が集結しておる。先ごろ、この地点にマチルダ、おまえの弟子の一人とおぼしき力が現れた。悪魔どもに抵てい抗こうしておる人間たちに加勢しておるようだ。彼らは現在、人間の勢力の中でも最有力といってもよいが、圧あつ倒とう的に不利な状況におかれておるため、敗北は必至であろう。あとは、ラフレシアを転戦しておる集団、中部ミッド諸国域ランズを移動しつづけておるいくつかの集団━めぼしい勢力というとこのくらいか）

「悪魔たちの勝利は、目前といったところなのね」

（左様。そう言ってもかまわぬだろう。人間が絶滅することはおそらくなかろうが、生存に有利な土地はほぼすべて悪魔どもに奪うばわれ、辺境に逃のがれた人間のみが、かろうじて生きながらえる。あるいは、悪魔どもに抗こうしうるごく少数の異い端たん、異能の人間たちだけが、生存域を確保し━悪魔どもと戦いつづけるのか、共存することとなるのか、それは我にもわからぬが、遅おそかれ早かれ、そのようになるであろうな。人間は淘とう汰たされる）

「予想どおりっていうわけかな？」踊り羊が魔女の肩の上で腕組みをして、首をひねってみせる。「不確定要素はあの魔導王で、ぜんぶ彼次し第だい」

「それは違ちがうのだわ」魔女は失われた自らの右腕に目を落とした。「絵を描いているのはキング・グッダーではないのよ。イディオット・デーモン。キプリス・モルフォ。ルイ・アシュモダイ・大智マグナス永世イキス・アデモンディオ。━ジュジ。すべてはあの男の描いた図面どおりになるべく進められているのだわ。わたくしはその先を見たい」

　魔女の双そう眼がんがきらめく。満天の星空よりまばゆく。それは、たとえどれだけの夢を抱いだこうとも、肉体を持たぬ者には備わることのない輝きだ。

「その先にある世界を。ありのままではたどりつくことができなかった、可能性の世界。そこにきっと、わたくしの魔道があるのだわ」

空中要塞エルデン・シャイニンググローリーパレス

「すべて世は事もなし、か……」

　男は右手の中指と親指で片眼鏡モノクルの位置を直し、膝ひざの上で丸くなっている灰色の猫ねこの首を指先で撫なでた。顔を上げれば、壁かべ全面に嵌はめこまれたモニターが外の景色を映しだしている。直径七十七・七メーテルの完全な円形をなすシャイニンググローリーパレス王の間は、空中要よう塞さいエルデンの主制メイン御室ブリッジとして機能しているのだ。操縦や管制は、王の間中央に鎮ちん座ざしている、高さ十メーテル以上、水晶クリス様材タリン製で、竜を象かたどり、漆しつ黒こくに輝かがやく異界の真ネク影ロダ石イトや緋ひ色いろの液体金属ファガナグヌスなどで飾かざられている〝天からカラミ災厄のテイジ・時代をエン告げる者ジエル〟に座す、最後の魔導王キング・グッダーが行っている──というよりも、カラミテイジ・エンジェル自体にエルデンを自動で制せい御ぎょする仕組みが備わっている。かつてグッダーに屈くつ服ぷくして仕えることとなった九く頭ず竜りゅうノ・インは、骨に成り果ててもまだ王の強固な呪じゅ縛ばくから逃れることができずにいた。

　その偉い大だいなまでに驕きょう慢まんなる王は、玉座に腰を下ろして瞑めい目もくし、何を思うのか。おそらく眠ねむらずに夢でも見ているのだろうと、猫を愛あい撫ぶしながら男は考える。

　壁へき面めんから突つきだすアームによって支えられ、カラミテイジ・エンジェルを囲むように配置されている、口を開けた真しん珠じゅ貝がいのごとき形状の座席は、五つ。それらより低い位置に設しつらえられた鳥籠かごのような座席とも呼べないような座席が、一つ。いずれにせよ、玉座をふくめて、七つ。そのうち四つは、依い然ぜんとして空席だ。ここには王と、男と、それから、女が一人いるだけなのだ。

　女は男の隣となりの座席に腰を埋うずめ、黒目も白目もない、片時も休まず変化しつづける色とりどりのきらめきをたたえた双そう眸ぼうで、目の前に浮うかぶ黒い球体を見つめている。真珠のような鱗うろこに覆おおわれ、乳白色に輝いている、一糸まとわぬ彼女の身体からだは、じつに美しい。まだそのような存在ではなかったころの彼女を、男は思い浮かべる。驚おどろくべきことに、現在の

彼女にも当時の面おも影かげはあるのだ。暴ぼう虐ぎやくな竜どもの時代を生き抜ぬいて、竜に見入られた女。人の身でありながら、ついに竜となった女。彼女は人竜となって、この世界の深しん淵えんをのぞいた。そして、忘れていたことを思いだしたのだ。

　こんなはずじゃなかったことを。

　世界は間違っている。

　間違いは正さなければならない。

　男は低く呟く。「──そうでしょう、姉さん……？」

　鍵かぎは見つけた。この手の中にある。計画は順調だ。男が操コン作盤ソールの上に指を走らせると、正面のモニターに、茫ぼう々ぼうと渦うず巻まく長い髪かみを引きずるようにして歩く男の姿が映った。これで席が一つ埋まる。あの男は座ろうとしないだろうが、さしたる問題ではない。あの男はもうここに、エルデンにいるのだ。あと三人。一人は塵ゴミだ。いてもいなくても変わらない。だから、二人。

　ぼくらはとりもどすんだ。姉さん、ぼくらが失ったものを、本当は手に入れられたはずのものを、ぼくらの手で、とりもどす。姉さんだって、異存はないはずだよ。あのころに戻もどるんだ。いや、そうじゃない。戻るんじゃない。ぼくらは進むんだ。ようやく、進むべき方向へと進もうとしているんだよ、姉さん。進むんだよ、姉さん。こんな世界は間違っている。間違いを正すんだよ、姉さん。ぼくらがそれをやるんだよ、姉さん。そのために勝利を手にしないと、姉さん。ぼくらは勝たないといけない。打ち負かさないといけない敵は強大だよ、姉さん。とてつもなく強い相手だよ、姉さん。倒たおそう、姉さん。ぼくらの手で、一いつ緒しよに戦って、打倒しよう。姉さん、ぼくは知ってるんだよ、姉さん。姉さんは好きだろう。挑いどむことが。刃は向むかうことが。戦うことが。だから、姉さんは美しい。膝を屈くつしない、従わない、あきらめない、姉さんはきれいだ。相手が強ければ強いほど、大きければ大きいほど、姉さんは立ち向かわずにはいられないはずだよ。ぼくは知っているよ、姉さん。たった一人の弟だからね。用意したよ、姉さん。これ以上ない相手をね。姉さんはわかっているはずだよ。この機会を逃すべきじゃない。この戦いには、何を措おいても、万ばん難なんを排はいして、絶対に参加しないといけない。姉さんは強いけど、この誘ゆう惑わくには勝てないはずだよ。姉さんはぼくの

ことが嫌きらいなんだろう。わかっているさ、姉さん。それでも、姉さんはやってくる。ぼくのところに戻ってくる。姉さんはそうせざるをえない。それでいいんだ。姉さんがぼくのところに戻ってきてくれさえすれば、どうだっていい。

「グッダー」

　声をかけると、王は眠らずに見る夢からすぐに覚めたようだ。

「何だ」

「あれの案あん配ばいはどうです」

　王が、ふん、と鼻を鳴らすと、全面モニターの一部がどこか別の場所を映した。そこは暗い。とても暗い。だが、夜空にまたたく星のような小さな光があちこちで明滅している。彼は片眼鏡モノクルの位置を直して目を凝こらした。だんだんと闇やみの中にその輪りん郭かくが浮かびあがってくる。といっても全体像をつかむことはできない。それくらい巨大なのだ。

「間もなく起動する」王は髭ひげをしごきながら首を左右に曲げた。「━ナ・イン。死してなお有用な、余の手て駒ごまだ」

「ノ・インのほうも、こうやって」彼は薄うすく笑い、座席の肘ひじ掛かけを叩たたいてみせた。「しっかり役に立ってくれているじゃありませんか。まあ、どちらにしても━」

　そろそろだよ、姉さん。やるんだ。始めよう。そしてぼくらは勝つんだよ、姉さん。世界を変えよう。ぜんぶやりなおそう。ぼくらにはそれができる。そうだろう。

「姉さん」

　そのために、ぼくらは勝つんだ。

空中要塞エルデン第十一区

　風。ものすごい風だ。突とつ風ぷうが吹ふき荒あれつづけているみたいな。ちゃんと目を開けていられないので、細めている。寒い。とんでもなく寒い。寒すぎ。前を行くトマトクンは、胸から腹までべろっと肌はだが出ているあの変な鎧よろいしか身につけていない。大丈夫なのかな。大丈夫か。他人のことなんかよりも、自分の心配しろって？　そうかも。だけど見えてきた。第十一区。金こん剛ごう獅じ子し公園。木立があったり噴ふん水すいがあったりする、わりと公園らしい公園。食べ物なんかの屋台や露ろ店てんがちらほらあって、人通りはまばらだった。—だった。今はもう、人通りなんかあるわけがない。かつては大勢うろついていた魔導兵もいない。このへんにいるのはたぶん、いや、間違いなく、マリアローズたちだけだ。屋台も露店もない。木々はどれもすっかり葉が落ちて、枯かれ木の様相を呈ていしている。寒々しい光景だ。実際、めちゃくちゃ寒いわけだけど。それでもあの建物は健在だ。

　第二王立銀行。第一王立銀行に比べれば造りは質素で、一回りどころか二回りは小さい。でも、そのぶんかわいらしく見える。愛着があるせいかな。外観はそんなに傷んでいない。ほとんどあのころのままだ。懐なつかしいな。やけに、懐かしい。トマトと出会って、ここに連れてこられたんだよね。鉄てつ鎖さの憩いこい場から、ここまで。アジトがあって、それほど遠くじゃない。そんなふうに言っていたわりに、けっこう遠かった。で、たどりついた先が、第二王立銀行。アジトじゃなかったのかって、思うよそりゃ。まさか、銀行の中の部屋を勝手に使ってるなんて思わないし。ありえないよね、ほんと。

　トマトクンが扉とびらを開けようとしている。

　一いつ瞬しゅん、あのときのトマトクンと、今のトマトクンが、だぶった。

　ほんの一瞬、だけど。

　扉が開かれて、みんなぞろぞろと中に入ってゆく。マリアローズ

もつづいた。銀行の中は外よりも荒れていて、あんなに立派だった内装が、見る影かげもないというわけじゃないけれど、埃ほこりにまみれ、蜘く蛛もの巣が張っている。飾られていた甲かつ冑ちゆうは倒れてばらばらになり、壺つぼは割れて、破は片へんが散乱していた。思わず片づけたくなる。やめよう。ちょっとやそっと掃そう除じしたいくらいで、どうにかなるような状態じゃない。

　正面ホールの脇わきにある動くエスカ階段レーターは、トマトクンが足をかけても作動しなかった。壊こわれているのか、動力が遮しや断だんされているのか。歩いて階段を上るしかない。

　二階の広い廊ろう下かは、埃っぽくはあるものの、物がないぶん、さして荒こう廃はいした印象を受けなかった。十字路を二つ直進して、突きあたった壁の左手側にドアがある。木製じゃない、何かの合金でできた、頑がん丈じようそうなドアだ。そのドアに、木の札が釘くぎで打ちつけてある。札に書かれた、荒あら々あらしい個性的な筆ひつ跡せき。「ZOO'S OFFICE」。ＺＯＯの事務所。

　トマトクンは木札に一いち瞥べつをくれただけで、ドアを開けて中に入っていった。トワニングが、ロム・フォウが、アルファが、サフィニアが、ピンパーネルが、ハニーメリーが、きゅーが、トマトクンのあとを追う。

　どうしてか、マリアローズはその場から動くことができずにいた。

　ドアが閉まった。

「なちゅかしいわね」ユリカは飛フエイ燕ヤンと手をつないで、じっとドアを見つめている。「なんだか、しゅごく。あれから、十年も二十年もたったみたい」

「うん」

　マリアローズは目をつぶって、ゆっくりと息をした。

　目を開けて、閉まったドアの木札に指先をふれさせる。

　この札にさわったことなんて、なかったな、そういえば。

「ホントにね。まるで、生まれる前にいた場所に戻ってきた、みたいな、さ……そんな感じさえするよ」

「なッつかしィーねェー」飛燕は鼻の下をこすった。「そォーゆゥーモンかねェ。オレはあんま場所とかに対するコダワリとかはねェーかンなァ」

「きみは、あれだよね。過去を振ふり返ったりとかしなさそうなタイプだもんね」

「オウ。過去なんかなくッたって、ユリィは常に何よりも超ちよう絶ぜつ愛いとしいワケだしな？」

「や、やめて、飛燕。しょういうの、恥はじゅかしいから……」

「つっても事実だしなァ。しょォーがなくね？」

「はいはいはいはい、ごちそうさまごちそうさま、おなかいっぱい胸いっぱいです、もう勘かん弁べんして……」

　中に入ると、事務所名物の大円えん卓たくはちゃんとそこにあった。トマトクンが二本の剣けんを大円卓に立てかけて、椅い子すに腰こしかけている。トワニングも座っている。ピンパーネルとハニーメリーも。きゅーはトマトクンとトワニングに挟はさまれるような恰かつ好こうで、ちょこんと床ゆかに腰を下ろしている。ロム・フォウは窓まど際ぎわに立っていて、アルファはその足あし許もとに座っている。あんなことがあっても、ロム・フォウとアルファの距きよ離りは以前と変わらない。サフィニアはトマトクンのそばに座りたそうだが、決心がつかないみたいで、うろうろしている。

「お茶は残っているかしら」ユリカが棚たなのほうへと駆かけてゆく。飛燕はまぶしそうにユリカの後ろ姿を目で追っている。

　マリアローズは立ちつくしている。

　外がい套とうの中からクルルが顔を出して、くるる、と喉のどを鳴らした。

　不意に、強く、強く、思った。

　あのころに戻もどりたい。

　仲間たちがいて、僕は分不相応だと思いながら、ここにいたくて、でも、やっぱり自分なんかという考えをなかなかぬぐい去れな

くて、ひりひり、じりじりしながら、同じようなことを飽あきもせずに繰くりかえしながら、それでもなんとかちょっとでも前に進もうとしていた。そんな日々が、僕にはとても大切だった。

　いろんなことがあったよね。

　その一つ一つを、思いだそうとすれば思いだせる、だけど、怖こわいよ。思いだしたら、立っていられなくなりそうで。



　でも、楽しかったな。うん。楽しかった。そのときはとてもそうは思えなかったりもしたけど、やっぱりすごく楽しかった。

　あのまま何年も、十年、それ以上、楽しい時間がつづくなんて、そんなこと、これっぽっちも思ってやしなかった。望んではいたけれど、そうはいかない、だいたいのことはうまくいかないものだ。

人生ってそんなものだ。えるものがあれば、失うものもある。きっと、失うことのほうがちょっと多い。何にだって終わりがある。ときには突然、何の前ぶれもなく、終わってしまう。奪うばわれてしまう。しょうがないんだ。そういうものなんだ。いちいち悲しんでなんかいられない。振り返ったって意味がない。どうにもならない。振り向いて手をのばしても、決して届かない。もう戻れない。

　あのころは戻ってこない。

　反へ吐どと塵ごみと屑くずと滓かすと血と汗あせと涙なみだと苦い、甘い、しょっぱい、すっぱい、捨てたくて、捨てられない思い出と、ぬくもりと、握にぎりしめた欠片かけら、散らばった破は片へん、見捨てられた夢、幻まぼろし、笑っちゃうような出来事、笑うしかない現実、クソッタレで、超最低ＳＵＣＫなエルデンは今、空を飛んでいる。高度数千メーテル。ふざけるな。どうせなら、ぶっ壊れちゃえばよかったんだ。跡あと形かたもなく消し飛んでしまえば。こんな形で残るなんて。見せつけるみたいに。もう戻れやしないんだと、思い知らせようとするみたいに。

　カタリ。生きてるよね？　生きててくれないと、やだよ。

　僕らはもう戻れないんだ。戻りたいけれど、戻ろうとなんか、しない。できないことを願ったって無む駄だだ。ただ、これ以上はなくしたくない。僕はいつか、何もかもを失ってしまう。最終的には、自分自身の喪そう失しつという形で。それでも、僕はしがみつきたい。そのときがくるまでは、必死に。これは無駄じゃない。この願いは無駄なんかじゃないって、信じたいんじゃない、信じている。

　さあ、感傷はいい。

　向きあうときだ。

　マリアローズは歩く。歩いてゆく。

　椅子を引いて、座る。トマトクンの隣となりに。

「トマト」

「ああ」

「わかってるだろうけど、ルーシーは死んだよ。僕の目の前で。そ

れから──」あのことを言うか言うまいか、迷う。濁にごった赤い眼め。屍かばね玉だま。吐はき気けがする。言う必要はない。言って何になる？　嘘うそをつくわけじゃない。黙だまっていることにした。「……なんでもない」

　トマトクンはでっかい手でマリアローズの頭を撫なでた。「そうか」

　やめてほしいと思うのと、やめてほしくないと思うのと、半々だ。結局、マリアローズは身をよじってトマトクンの手から逃のがれた。ため息が出た。もうちょっとだけ、おとなしく撫でられていればよかった。「──ジョーカーはなんで残ったのかな」

　ジャン・ジャック・ド・ジョーカー。そして、クローディア。あの二人はエルデンに乗りこまず、モトローリィの地に残った。チーロ・パンカロ以下パンカロ・ファミリーと数百人の避ひ難なん民みん、遅おくれて合流したウィリアム・タイガーボーン率いる武士団も、ジョーカーと行動をともにすることを選んだ。着陸したエルデンを前にして進もうとしないジョーカーにトマトクンが「どうした、ジョーカー」と問うと、ややあって「己おれは行かん」という答えが返ってきたのだ。「貴様らが行くというのならば好きにするがいい。止めはせん。だが、己おれを翻ほん意いさせられうるとは考えんことだ。己おれは行かん。己おれはここで己おれの戦いを継けい続ぞくし、完かん遂すいする。自身の意志と、力で。己おれは己おれの道を征ゆく。それは貴様らの道とは異なるものだ。二度と見まみえることはあるまい。貴様らはどこへなりとも征ゆけ」と。

　マリアローズは腰に吊つるしてある剣の柄つか頭がしらにそっと掌てのひらをあてた。

　──それからジョーカーが軽く顎あごをしゃくってみせると、クローディアが進みでてマリアローズにこの剣を手て渡わたしたのだった。

　赤のレッド・男ツエペ爵リオンならぬ赤のレッド・伯爵テリオンが所有していた、焼きバーつくしニング刺しレイ貫く剣ピア〝劫ごう火か〟。

　どうやら正真正しよう銘めいの本物らしい。

　ジョーカーは言った。「己おれの手許に置くには趣しゆ味みが悪

すぎる。持ってゆくがいい」

　べつに悪趣味な見た目でもないと思うんだけど。てゆうか、性能があれだし。わりと、それなりにものすごいわけだし。僕に使いこなせるかっていうと、微び妙みようすぎるけどね。

「まあ……」トマトクンは大円卓の上に手を置いた。「全員で出かけていって、その間に帰る場所がなくなったら、それはそれで困るしな」

「僕らのために、ジョーカーはあえて残る選せん択たくをしたってこと？」

「俺はやつじゃないから、わからんがな。プライドの高いやつだし、相手や目的が何であれ、単純に利用されるのがいやなのかもしれん」

「……やっぱり、キング・グッダーはトマトを利用しようとしてるんだ」

「グッダーか、ジュジか。あいつらは結けつ託たくしてるから、同じことか」

「ジュジ」

「そうだ」トマトクンは大円卓の上に置いた手をぎゅっと握って、苦いものでも嚙かんだように顔をしかめた。「気がつくと、いつでもあいつが裏で糸を引いてる」

　トワニングが腕うで組ぐみをして、フゥンッと鼻から息を吐いた。「いったい何を企たくらんでおるのだ、そのジュジと申す男は」

「それはたいして重要じゃない」トマトクンは軽く首を振る。「やつが俺を利用するつもりなら、逆に俺がやつを利用してやる」

「利用って」マリアローズは眉まゆをひそめた。「トマト、何をする気なの？」

「俺は敵を叩たたく」

「悪あく魔まを？」

「ああ。だが、連中を殺し尽つくすのは無理だ。数が多すぎるからな。連中だって、俺たち人間を全ぜん滅めつさせることなんてできんだろうが」

「じゃあ、どうやって？」

「頭を潰つぶす」

「頭」

「俺は前にも連中とやりあった。そのことは知ってるな」

「うん。ソオルが話してくれた」

「俺だって、何のあてもなく突つっこんでいったわけじゃない。戦やるからには勝つつもりでいた。連中は数が多い。船頭多くして船逆上がり、だったか」

「……船頭多くして船山に上る、ね」

「それだ。だからつまり……何だ？　まあいい」

「よくはないよね？　悪魔は頭数が多いぶん、統制がとれてないってこと？」

「うむ。とくに、公ヴエリ爵オンだの侯爵ラデオンだのは、好き勝手にやってる。それでも、一つの方針に従って動いてることは間ま違ちがいない。今の場合は、地上の占せん領りようだろうな」

「号令をかけてる、王様がいるってこと？」

「地じ獄ごくの帝てい王おう。やつには誰だれも逆らえない。地獄ヘルの何とか……何だったかな。ヘル……ブラブラ？　あとは、ヘル……ブレブレ？　ヘル……サマンサ？　どうも違うような気がするな。まあ、そんなような名前の殲せん滅めつ師団とかってやつらもいる。地獄軍六百六十六師団だったか。あとは、大地獄竜りゆう騎き兵へい団、それから、大だい邪じや竜りゆう兵団。こいつらは帝王の手足になって働く直ちよつ轄かつ部隊らしい」

「……いったい……どれほどの戦力が……」サフィニアが身み震ぶるいをした。いいかげん、座ればいいのに。

「地獄ってのは」トマトクンは片方の眉をつりあげて、首をかたむけた。「はっきりしたことはわからんが、この世界と同じくらいの広さはあると考えられてる。その地獄にいる生き物はぜんぶ悪魔だ。悪魔は悪魔を殺して食くらう。縄なわ張ばり争いをする。人間と変わらんような暮らしをしてる悪魔もいるみたいだけどな。どんな悪魔も、帝王には従う」

　ピンパーネルが静かな砂色の瞳ひとみでトマトクンを見すえた。「その・帝王ヲ……？」

「頭さえ潰せば」トマトクンは顎をこすった。「もともと一枚岩じゃない悪魔どもは、ばらばらになって共食いを始める。自分が次の頭になろうとするやつだっているだろう。それを阻はばもうとするやつもいるはずだ。他の異界フリー生物クスだって、悪魔どもから離り反はんする」

「でも──」マリアローズは大円えん卓たくに目を落として、自分の手を揉もんだり指を引っぱったりした。唇くちびるを軽く嚙む。「……でも、できなかったんだよね？　トマトは千年前、それをやろうとした。だけど、うまくいかなかった」

「そうだ」

「今回は、できるの？」

「あのときの俺は一人だったからな。今は違う」トマトクンはわずかに目を細めて仲間たちを見まわした。「お前たちがいる」

「ソレってよォ」椅い子すじゃなくて大円卓に腰こしかけている飛燕が、頭の後ろで両手を組みあわせた。「オレも入ったりしちまってんの？　ＺＯＯじゃねェーんだケド、オレ」

「お前次し第だいだな。強制するつもりはない。自分で決めろ。とりあえず、ここじゃあ味わえない戦いが待ってることだけはたしかだぞ」

「ホッホォー。そいつァーケッコー毛だらけ猫ねこ灰だらけってヤツだな。まッ、そもそもオレはもォーユリィから離はなれるつもりは基本的にミジンコほどもねェーワケだけどよォ」

「その帝王って、どこにいるの？」ハニーメリーは興きよう味み津しん々しんといった様子で蛍光ルミナス緑グリーンの双そう眸ぼう

を輝かがやかせている。「地獄の帝王なら、当然、地獄にいるんだろうけど」

「地獄の中心だ。そこに──」

　トマトクンが口にしたその言葉が、事務所の空気を瞬しゅん時じに凍いてつかせた。

「〝世界の終わり〟がある」

　窓から外を見ていたロム・フォウが、振ふり向いてトマトクンを見た。アルファも。お茶の用意をしようとしていたユリカも。事務所の中にいる全員が。

　マリアローズはおそるおそるその言葉を発音してみた。「……世界の終わり？」

　トマトクンは顎を引くようにうなずいた。「ワールドエンド。帝王の城だ。エルデンはそこに向かってるはずだ」

「地獄、に──」喉のどが渇かわいていて、声が途と切ぎれてしまった。「……ジュジの目的も、それなの？　地獄の帝王を倒たおすために、トマトの力を？」

　黄玉トパーズの瞳がマリアローズを見つめる。まるでマリアローズの内側をのぞきこもうとするみたいに。え？　何……？

「心配するな」トマトクンはかすかに口くち許もとをゆるめて、マリアローズの髪かみの毛をくしゃくしゃにした。「あいつらの勝手にはさせん。俺がけりをつける」

北ワールオック山麓・孤城

　──私はこの手に何を握にぎりしめている……？

　旗。

　旗だ。

赤地に、黄色い太陽の紋もん章しよう。国旗。それは、新生太陽王国の国旗―だった。

旗は汚よごれ、ちぎれて、もはや見る影かげもない。今、フランク・ゴールディング・レイヴンズクロフトが握りしめているものは、ぼろきれをぶらさげた、単なる棒きれだ。

彼は掩えん壁ぺきの上に立って、棒きれを振る。エェーイ、エェーイ、エェーイと振る。私はここにいるぞォッ！　元気でやっているぞォッ、まだまだ元気いっぱいだぞォッ！　嘘ではないッ、本当の本当に本当だぞォッ！　証明するために、彼は棒きれを振りながら、声をかぎりに叫さけぶ。叫ぼうとしているが、声が出ない。すっかり嗄かれてしまっている。喉の奥からもれてくるのは叫び声などではなく、ヒィー、ヒィー、ヒョォー、といったような音でしかない。どうしたのだッ、私ッ！　気合いだ、気合いッ！　気合いが足りていないのだッ！　ここは一つ、もっと気合いを入れねばならんぞォッ！　そうではないかッ!?

彼は胸をドンドン叩く。喉をかきむしる。ヒィー、ヒョーッ、ヒョホーッ、ヒャヒョーォッ。これではッ、これでは私の声がッ、皆みなの者に届けられんではないかッ、情けなァーいッ！　やむなく彼は、ただの棒きれを振って、振って、振りまくる。見よッ！

壊こわれた城門から、また味方の雄お々おしき一団が出しゆつ撃げきしてゆくではないかァッ！

先頭はあの悪逆非道、豪ごう腕わん鬼き畜ちくＳＩＸだ。それにごく少数、十人に満たない、ヨハン・サンライズ以下、銀色の鎧よろいをまとった秩序のモラル・番キー人パーズの勇士たち。そして、ＺＯＯのおしゃべり猛もう烈れつ半魚人カタリも加わっている。ガンバレ。ガンバレ。ガンバレ。ガンバレ。ガンバレッ。ガンバレッ！　ガンバレェェッ……！　彼は棒きれを前後左右上下に激しく振ってエールを送る。押しよせる敵軍を防ぐべく、掩壁にしがみつくようにして勇戦奮ふん闘とうしている者たちの顔にも生気が蘇よみがえった。ＳＩＸらが、ほとんど破られている城門を死守するだけではなく、ああしてたびたび打って出ているのは、味方への激げき励れいでもあるのだ。我々はまだやれる。終わってなどいない。戦える。戦いつづけられる。そう示してくれている。まったくもって、そのとおりだッ！

「ヒェーイ、ヒェーイ、ホォォーッ！」ファニー・フランクは、棒

きれと一いつ緒しよに拳こぶしを突きあげる。「ヒェーイ、ヒェーイ、ホォォーッ、ヒェーイ、ヒェーイ、ホォォォーッ、ヒェーイ、ヒェーイ、ホォォォォー……ッ！」

　やはり、どうしても声らしい声が出ない。それでも周りの者たちは、彼の意を汲くんで唱和してくれた。「エーイ、エーイ、オーッ！」「エーイ、エーイ、オーッ！」「エーイ、エーイ、オーッ！」「エーイ、エーイ、オーッ！」「エーイ、エーイ、オー……ッ！」

　どうだッ。涙なみだがちょちょぎれるゥゥゥーッ。まるで勝かち鬨どきのようではないかッ。我々が勝っているかのようだッ。これでいい。これで、これでいいのだッ。気持ちでは決してッ。負けんぞォォーッ。負けてなるものかッ。勇気百倍、皆、裂れつ帛ぱくの気合いとともに槍やりを突きだし、剣けんを振りおろして、城じよう壁へきを上ってくる悪魔どもを、蜥蜴とかげ人どもを撃退する。彼らの槍はすでにただの突き棒でしかなく、剣はなまくらだ。それでもってぶん殴なぐる。しゃにむにそれを叩きつける。武器を失い、敵に一ひと太刀たち、二太刀浴びせられて己おのれの死期を悟さとった者は、眼前の敵に飛びかかり、組みついて、敵もろとも城壁の下へと落ちてゆく。そのような死に様を、ファニー・フランクはいくつも、数えきれぬほど目にしてきた。そのたびに湧わきでた涙の泉も、いつしか干ひあがってしまったのだろうか。涙は流れずとも、彼の胸は引き裂さかれた。何度でも、何度でも。その痛みは薄うすらぐことがない。むしろ強まる一方だ。キミのことはッ、キミタチのことはッ、忘れはしないぞ何があろうとッ！　彼は心に決めていた。私はッ！　私はここに立ちつづけるぞォッ！　最後の最後までここに立っていてやるぞォッ！　私はッ！　すばらしく勇ゆう敢かんで気高かった、誇ほこらしいほどかっこよかった、そんなキミタチの記き念ねん碑ひだッ！　私には、キミタチの名がしっかりと刻まれている、私はキミタチの墓標だ……ッ！

　一いつ匹ぴきの蜥蜴人が、城壁にかけた梯子はしごから彼に向かって槍をのばしてきた。彼は槍の穂ほ先さきを肘ひじで払はらい、蜥蜴面づらを「フヘイッ！」と蹴けっ飛ばす。やれるものならッ、やってみるがいいのだッ、やれるものならッ！　彼はあえてふんぞり返って大笑いした。「――ヒホヒホファホォーッ！」豚ぶた面の悪魔が、彼の腹めがけて剣を突きだす。彼は棒きれでそれをチョイッと打ち払う。旗。たしかにこの棒きれはかつて旗だった。彼が樹立した国の象しよう徴ちようだった。だがもういいッ。旗な

どより、もっともっと大切なものがある。彼は棒きれを豚面にぶちこむ。「ヒェイ、ヒェイッッ！」豚面悪魔がたまらず梯子から落下する。ザマミロッ、だッ──と、何者かに足首をつかまれた。グイグイ引っぱられる。見れば、腕うでが四本もある鳥みたいな頭をした悪魔の仕し業わざだった。「ヒヘェイァッ！」彼は脚あしを振りまわす。悪魔の手を振りほどこうとする。悪魔は放そうとしない。のみならず、逆の足首を、それから膝ひざを、腿ももを引っつかむ。腕が四本ということは手が四つもあるので、こここッ、これは大変だッ、しかし私は慌あわてずッ、騒さわがずッ、落ちついてッ。「ギャホォォォーッ！」棒きれで四ツ腕鳥頭悪魔の顔面を突く突く突く突く突く突くボーシッ。なッ、何なのだツクツクボーシとはいったいッ!?　そんなことはどうでもよろしいッ、こんなものッ、こんなものッ、くぅんなものォッ。やっとのことで四ツ腕鳥頭悪魔を引っ剝ぱがして、ホッと安あん堵どの息をついたのも束つかの間、四ツ腕鳥頭悪魔の次に梯子を登ってきたのはよりにもよって、角を生やした鉛なまり色いろの筋きん骨こつ隆りゅう々りゅうすぎる悪魔の中でも要注意中の要注意、ゼオルクスギャンドとかいうヤバイ、激ヤバの悪魔ではありませぬかァーッ!?　ヤ、ヤバイィーッ、超ちようヤバッ、これはオサレになっておりませんぞオサレではなくシャレだ、明日あしたはどっちだァーッ!?　いや、ここにある、私の明日はここに──とばかりにゼオルクスギャンド通つう称しようゼオルの顔に棒きれを叩っこんだら、あっさり砕くだけてしまった。なんたる。なんたることだ。「フィアハァーッ!?」嘘うそぉーん。そォーんなに硬ィーん？　嘘だと言っておくんなましベイベェーッ。だがこれは現実なのだ。これこそが現実なのだ。「フィホハァッ、フォファヒハフヘェファファヘェーッ！」くるなッ、こないでくれたまえとファニー・フランクは懇こん願がんする。どれだけ真剣に願っても、聞き入れてはもらえないだろう。承知の上なので、ヤツの頭を足蹴にしようとしたら、間違えて角に足が当たってしまった。オウチッ。

　ＦＵＭＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨ……！

　ゼオル君が掩壁の上じよう端たんに左手をかけ、右手で背中にくくりつけてあった戦せん斧ぷを抜ぬく。やめたまえやめてくれたまえェィッ!?　そんなことをされたら私はおしまいだァッ!?　ゼオル君はさらに身体からだを押しあげ、そして戦斧を振りかぶったァ!?　ふッ、振りかぶってしまったァッ!?　ファニー・フランクは「フンヌゥ……」と唸うなって、これは内ない緒しよなのでどう

か秘密にしてほしいのだが、観念した。マァーイ・センチメンタルジャーニーもこれにて終了かァ。どうせなら、もうちと劇的なファイナルがよかったねェ。たとえばの話だが、ラスボォース的なヤァーツに死し闘とうの末、力及およばず敗れるとかねェ。しかし私は私なりに精せいーいつ杯ぱいやった──のかねェ。イヤッ。イヤイヤッ。まだだよッ。私はまだ終わらんよッ。終わってたまるもんかとはいえどうすれば……ッ⁉

「ぅおらぁ……っ！」

　それはまことに勇ましい雄お叫たけびであったッ！　にもかかわらず、乙女おとめの純情を秘ひめた声であったッ！　ようは女性の声だった。女性なのだが、なぜか口くち髭ひげを生やしているのではない付けている、そう、麗うるわしの付け髭ひげ公とはキミのことだ軍師どのッ。軍師どのがシュパァァッと飛んできて、ゼオル君の分厚すぎる胸むな板いたに華か麗れいなるフライングキックをお見み舞まいしたのだ。梯子に両足をかけたまま、両手持ちした戦斧を振りおろそうとしていたゼオル君は、少々迂う闊かつだったと言わざるをえまい。おそらくは油断していたのだ。何を隠かくそう、それが命とりになった。ゼオル君はＦＵＧＯッとひっくり返った。サヨォーナラァァー。また会う日までェェー。もう会いたくなどないわけだがッ。一方、軍師どのはくるっと空中で一回転して掩壁の上に降りたった。「……大事ないな、陛下」

　ファニー・フランクはコクコクうなずいてみせ──だッ、だがしかしッ、私は大丈夫だが、軍師どのは──マァーイ軍師どのときたら、全身傷だらけの血まみれで早い話、満身創そう痍いというヤツではないかねッ⁉　いッ、いつからッ⁉　いつの間にッ⁉　見た目ほどひどい状態ではない──ということもなさそうだ。軍師どのは掩壁から転がり落ちそうになって、ファニー・フランクが抱だきとめなければあぶないところだった。

「ぐッ、軍師どのッ、ジャン・スタンバック……ッ⁉」

　オホッ。声が出よったわいッ。ンなことはどうでもよろしいッ。

「……平気だ。死にはしない」

　軍師どのはそう言うが、ファニー・フランクの腕を振りはらおうとしない、胸に抱かれたままでいることこそが、平気などではありえないという真実を示している。

「ぐ、ぐッ、軍師どのッ。ジャン・スタンバァーックッ」

「……どうした、陛下。笑え」

「だがッ」

「こんなときにこそ、笑ってみせろ。それがあなたの取り柄えだ。それはえがたい資質だ。私は、だから、あなたに賭かけたのだ。私を後こう悔かいさせるな、フランク・ゴールディング・レイヴンズクロフト」

「──モ、モ、モ、モッ、モモモモッ、モチロンだとも……ッッ！」

　ファニー・フランクは掩壁の上に堂々と立った。軍師ジャン・スタンバックを抱かかえたままだ。まあいわゆる一つのお姫様だっこというやつだ。いつものジャン・スタンバックならば、このような真似まねは断じて許さないだろう。指一本ふれることもできないくらいなのだ。ゆえに、ここは「ラッキ～♪」と思おうではないか。ジャン・スタンバックは口髭を付けて男装していようともステキなレディーだ。そんな彼女をプリンセス扱あつかいできるのだから、これはもう幸せにつきるというものではないか。「──まだまだつきあってもらうぞッ、ジャン・スタンバック！　そして、この戦いに見事勝利した暁あかつきには、この私とッ！　どうか結婚してくださァァァーい……ッッッッ！」

　間が、あった。

「……たわけたことを」

「いいや私は本気だッ！　私はキミに結婚を申し込むッ。キミには新生太陽王国国王の后きさきになってもらいたいッ。なぜなら私にはキミが必要だからだッ。キミがいないと私はダメなのだッ。私はキミなしでは馬の骨にも劣おとる男だッ。キミがいてくれないと困るッ。大いに困るッ。キミにはいつも私のそばにいてほしいッ。私をうまく操縦してくださいッ。いいなッ、ジャン・スタンバック、まだまだつきあってもらうぞ……ッ！」

　彼女は付け髭をかすかに笑わせた。それが彼女なりのアンサーだと彼は受け止めた。



　力がみなぎってくる。城門付近ではＳＩＸらが悪魔どもを殺して殺して殺しまくっている。城壁の上では同志たちが文字どおりの死戦を繰くりひろげている。生きてもがく者たちがいる。夢半ばで死んだ者たちがいる。この果てなき戦場には血肉と糞ふん尿にようの濃のう厚こうな臭においが立ちこめているはずだが、もうまったく感じない。凄せい惨さんだ。酸さん鼻びをきわめる。だが悲ひ惨さ

んではない。絶望的な光景などでは決してない。誰だれも彼も希望のために戦った。戦っている。ならば私は笑おう。笑ってやろうではないか。ジャン・スタンバックが言ったように、それこそ私がやるべき唯ゆい一いつのことだ。「ワッハハァーッ、ワッハハァーッ、ワッハッハッ！　ワッハハァーッ、ワッハハァーッ、ワッハッハッ！　ワッハハァーッ、ワッハハァーッ、ワッハッハッ！　ワッハッハッハッハッハッハッハッハァァァァァー……ッ！」

　とうとうあいつイッちまったか。そんなふうに思う者は皆かい無むだろう。皆みな、知っているはずだ。フランク・ゴールディング・レイヴンズクロフトが、こういう男だということは。

「さあさあキミタチーッ！　ここらでいっちょ気分一新、おニューな気持ちでファイトしようではないかァッ！　楽しもうッ、楽しんでやろうッ、我々が生きる一いつ瞬しゆん一瞬をッ！　我々が手にする一秒はフォーレヴァー永遠なのだァッ！　永遠ッ！　それはァッ！　幻まぼろしなどではないッ！　リアル永遠ッ！　燦さん々さんと輝かがやく、輝きつづけるエターナル永遠ッ！　私が何を言っているのかわかるだろうかッ、私にはさァーッぱりわからぬァーいッ！　だがそれでいいッ、それがいいッ！　私の言葉などキミタチの生命が燃焼するキラメキに比べればオナラのようなモノだからだッ！　キミタチはすンごいッ！　カァーックイィーッ！全員だオールだエーヴリワンだ、すンばらスィーッ！　私はキミタチが大好きだ愛しているキミタチは人類の誇りだッ！　安心して生きてほしい戦ってほしいッ、そして今日ここでもし万が一死んだとしても、キミタチの栄光には毛ほどの傷一つついたりはしないから、そこんとこは気にしないでもらいたいッ、キミタチは最高だッ！　ワハッ、ワハワハッ、ワハハハハッ、ワッハッハッハッハッハッハッハァー……ッ！」

〝おかしなフアニー〟フランクは笑う。こんなたわごとなど聞いてくれなくてもいい。だが、このパワァーだけは皆に分けてあげたい。このパワァーの源は皆の敢かん闘とうだということを知ってほしい。キミタチの戦いぶりが私の力となり、私はその力でキミタチを少しでも元気づけたい。言ってみれば、これは魂たましいの永久機関だ。彼は掩壁の上をスキップしはじめた。

「フンフッフ～ンッ、ワッハッハァーッ、フンフッフ～ンッ、フンッ、フンフッフ～ンッ、ワッハッハァーッ、フンフッフ～ンッ、フン～ッ♪」

　鼻歌交じりに笑いながらスキップするのだ。ジャン・スタンバックを抱きかかえたままで。もちろん、城壁の上の塀へいである掩壁は激戦熱闘の現場だ。人間たちは掩壁を乗り越こえられまいとして、死にものぐるいで力戦している。悪魔とその他の異界フリー生物クスたちはなんとしても掩壁を越えようと、何度退けられてもあとからあとから襲おそいかかってくる。交かわされる刃と刃、ぶつかりあう肉と肉、骨と骨、火花を散らす金属と金属、舞まい散る血と臓物の真っ直中を、ファニー・フランクは軽かろやかなスキップで駆かけてゆく。そのとき、ファニー・フランクの通りすぎたあとに七色の虹にじを見た者もいるとかいないとか。ともかく敵は呆あつ気けにとられ、味方は鼓こ舞ぶされた。「──ウオオ！」「やるぞォラッ！」「いったれ！」「爆ばく発はつだッ！」「俺たちの青春は爆発だゴラァッ！」「何が青春だ、くたばれ！」「一匹殺やれ！」「二匹殺れ！」「死ぬなら十匹殺ってからだ！」「立てよ！」「立てねえやつァ歌え！」「笑え！」「根こん性じよう見せるぞ！」「俺たちは！」「わたしたちは！」「まだ終わってない！」「これから！」「これから！」「これから！」「これからだ……！」

「そうだァッ！　そうだぞォ、キミタチッ！　キミタチならできるッ！　私にはできないが、キミタチには何だってできてしまうのだァーッ！　ワッハァー……ッ！」

　苦境といえば、苦境。そうかもしれないが、生まれてきてよかったとファニー・フランクは心の底から思っていた。生きてきてよかった。最悪のドツボに追いこまれても、こうして感動できる。命とは、なんとすばらしい……！

　孤こ城じようの勢力は盛り返そうとしていた。あッたりまえのコンコルドではないかキミィーッ。これが我々の底力だよ真の実力だよ我々は独力で勝利をつかみとることさえしうるのだよ。ホレ、見てみろィッ。あの黒い鳥みたいなのッ。アジアン君だよ、アジアン君。かの有名なクラン昼ラン飯チタ時イムのアジアン君だよ。飛んでしまっているよ黒い翼つばさなんか生やしてさァ。すさまじいねェ。敵をバッタバッタとぶっ倒たおしまくってねェ。ニャーンとワンダフルッ。魔術士もいるよッ。彼女もビュンビュン飛んでしまっているねェ。昼ラン飯チタ時イムのベティ君だったかなァ？　あの〝垂ベテイれ・ザ・目ドウルーのベピングティアイズ〟だよキミィ。彼女もその筋では有名人だねェ。まったく魔術はゴイ

スーッ。バーンだよギューンだよバッコンドッカーンだよ何がなんだかわからないよッ。ヴェーリィーナイスッ。クレイズィーッ。昼ラン飯チタ時イムのメンバーたちが息のあった連れん係けいプレーを見せつけているよ。秩序の番人の諸君もバリバリガツガツ敵を喰くらうように刀を振るっているよ。死神こと羅叉ラサがいる。マシュー・シュナイデル副長がいる。シャルロット・リンデ君がいる。ラッド・ワーノン君の姿もある。それから、それから━名うての剣けん士しが幾いく人も幾人も斃たおれた。そうだとしても、刀握にぎり血花を咲さかす勇者はまだ絶えていない。

「ワハハッ、ワハハハッ、ワハハハハッ！　ウワッハッハッハッハッ、ワッハッハッ、ワハワハワハワハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハァーッ……！」

　私は信じるぞォ。信じ抜くぞォ。たとえ最後の一人となっても未来を信じるのだ。太陽は必ず昇のぼるのだ。昇らなければ私が太陽になっちゃえばいい。それだけの話ではないか。そうだろう、軍師どのッ、ジャン・スタンバック。

「私はァーッ！　新生太陽王国初代国王ッ！　フランク・ゴールディング・レイヴンズクロフトであァーるッ！　私はキミタチにィッ！　笑え顔がおを約束するッ！　いつまでも、いついつまでも、とびっきりのスマイルをッ！　ンン……ッ!?」

　どうしたというのだ。

　何があった。

　彼にもわからない。なぜか、どういうわけか、彼の足が止まっている。動けない。一歩も進めない。退ひくこともできない。歯を食いしばって、息を詰つめていることしか。

「……陛下？」とジャン・スタンバックが細い声で問うた。

　彼はうなずいてみせる。それだけで精せい一いつ杯ぱいだった。何があったのだ。私の身に、何が。

　確かめる。程ほどなく判明した。なんのことはない。矢だ。矢が刺さっている。脇わきっ腹と、左の、左の肩かたに、矢が、一本ずつ。なァーんのこれしきッ。シーンパーイナイサァーッとばかりにスキップを再開しようとしたら、ヴゲッと何かがこみあげてき

て、彼はそれをゴハァッと吐はきだした。赤い。血。血だ。頭がふらついて、思わず彼は片かた膝ひざをついた。

「陛下……！」

　いかん。軍師どのに心配をかけてどうする。シーンパーイナイサァーッ。しかし身体からだが持ちあがらない。どうしてだ。ジャン・スタンバックだけではない。周りの者たちも動どう揺ようしている。何しろ、ファニー・フランクはこれまで、目立ちに目立ちまくる掩えん壁ぺきの上で、ほとんど不ふ眠みん不休で味方を応おう援えんしつづけてきたのにもかかわらず、傷らしい傷を負わなかった。ときに雨のように降りそそぐ矢も、不思議なことに彼を射い貫ぬくことはなかった。一度たりともだ。彼は明らかにツイていた。無能かもしれないが、運だけには恵めぐまれまくっていた。そして、それは周知の事実だった。誰しもが彼にあやかりたい、その運を自分にも分けてほしいと思っていた。彼も運を配るつもりで声援を送った。彼の声援には何らかの御ご利り益やくがある。はっきりとではないにしろ、なんとはなしに皆、そんなふうに考えていたきらいがある。彼には矢が当たらない。その幸運に大勢が励はげまされていたのだ。その神話が、崩くずれた。──いかんッ。

　いかんいかんいかんいかんぞォッ。

　途と端たんに押されはじめた。何匹もの悪魔が掩壁の守りを突とつ破ぱして乗り越えてくる。すぐに押し返さねばッ。このまま一気に城内になだれこまれでもしたらッ。やらせんぞォ、そうはさせんッ。心はちっとも折れてないのだ。それなのに、身体が言うことを聞いてくれない。どうしたッ、私ッ。まるでいきなり五十も六十も年をとったかのようだ。こうして片方の膝ひざをついているだけでやっとだ。少しでも身動きしたら、全身の骨が砕くだけ散ってしまいそうだ。「──ッッッッッッッッッッッッッッッッッッ……！」しぼりだした声は音にすらならない。顔の筋肉が乾かん燥そうしてパリッパリになってしまったかのようだ。笑うことができない。これではッ。このままではァ……ッ。

「おおっ」という声があちこちであがった。何が。なんで。どうして。「──空だ！」と誰かが叫さけんだ。味方のみならず、敵まで空を見上げた。浮ういている。何かが。とても、非常に大きな物体が。飛んできたのか。そして、降りてこようとしている。孤城の上に。あれは。彼の腕うでの中で、ジャン・スタンバックが呟つぶやく。「……エルデン？」

空中要塞エルデン南門跡

え!?　何!?　は!?　どういうこと!?　や、もうね、そこまで激しくびっくりしてはないけどさ。今は、ね。驚きよう愕がくは通り越しちゃってるけど。それにしても―と、かつて南門があった場所からちょこっとだけ身を乗りだして下を見ながら、マリアローズは思う。地じ獄ごくに行くんじゃなかったの？　こっちはそのつもりでいたんだけど。心の準備とかもしてたんだけど。てゆうか、ここ、どこなんだろ。モトローリィよりはだいぶ南だ。それは間ま違ちがいない。たぶん、サンランドよりも南。中部ミツド諸国域ランズの南部？　かなり大きな山脈がすぐ南に見える。マリアローズは地図でしか知らないが、ワールオック山脈かもしれない。眼下には、城。古い城があって、悪魔のものすごい大軍に包囲されている。人間たちが立てこもっているのだ。抗こう戦せんしている。あの人たちを助けようってこと？　それはそれでべつにいいんだけど、キング・グッダーだのジュジだのがそんな善意で行動するとはどうも思えない。何か狙ねらいがあるのか。ここに用があるとか。どんな用が？　わからない。見当もつかない。振ふり返る。ずっと先にシャイニンググローリーパレスがある。キング・グッダーはあそこにいる。たぶん、ジュジも。アルファがうるぉぉぉぉぉぉぉぉぉんと吠ほえた。目をやると、アルファのそばにしゃがんでいるロム・フォウと目があった。ロム・フォウは元気がない。表情も乏とぼしい。大丈夫かな。何度か声をかけもした。でもロム・フォウは、ただうなずいてみせるだけだった。トマトクンもサフィニアもユリカもトワニングもきゅーもピンパーネルもハニーメリーも、おまけに飛フエイ燕ヤンもマリアローズのそばにいる。リルコは見あたらない。そういえば、エルデンに乗りこんでから、ほとんど姿を見ていない気がする。どこに行ったのかな。いいけど。どこだって。このまま二度と顔をあわせることがなくたって、ぜんぜんかまわない。そんなことより、ロム・フォウとアルファだけは少し離はなれた場所にいる。見ようによっては、なんだかいじけているみたいだ。もしマリアローズが同じような行動をとっていたら、ユリカやサフィニアが気にして世話を焼いてくれるだろう。だけど相手がロム・フォウだと、なんかね。もともとあちこちを旅して回っていて、めったに会えなかった、みんなと一いつ緒しよにいることのほうがめずらしい人だし。なんでも一人でどうにかしちゃいそうだし。トマトもト

マトだよね。悪魔に操あやつられたりとかいろいろあったわけだし、何？　フォローっていうの？　してあげたっていいと思うんだけど。僕なんかよりも遥はるかに長いつきあいなんだからさ。だから、とか？　つきあいが長すぎて、今さら細かいことでいちいちどうこうするのも、みたいな感じだったり？　あからさまに、そこまで考えてなさそうではあるけど。

　でもやっぱり、よくないと思うんだよね。このままってのはさ。あんまりね。うん。

　マリアローズは中ちゆう腰ごしに近い姿勢で移動した。エルデンはゆるやかに降下中だ。ともすると、というか、常に身体が浮きあがってしまいそうでおっかない。ロム・フォウの隣となりで膝を折ると、アルファが少し牙きばを剝むいてぐるぐると威い嚇かくしてきた。怖こわいんですけど。おれの女に近寄るなって？　ただ、アルファがこんな態度をとるということは、ロム・フォウ本人も仲間たちと微び妙みように距きょ離りを置きたがっているのかもしれない。仮にそうだとしても、それが本心だとはかぎらない。もし本心だったとしても、本当の望みじゃなかったりすることもあるっていうか。あくまで僕の場合だけどね。頼たのむから一人にしてくれない？　そんなふうに言っちゃうときは、実際、本当に一人になりたいと思っている。それでいて、いざ一人きりになってみると、けっこう寂さびしかったりして。馬ば鹿かな話だけどさ。ないかな。そういうこと。僕はわりとあったりするんだけど。ロム・フォウが僕みたいな大馬鹿野や郎ろうだとは思えないけど、自分とは違うはずだから黙だまって遠くから何もしないで見守ってますっていうのは、なんか納なつ得とくがいかないっていうか。

「ロム・フォウ」

「何？」

　予想以上にそっけない返事だった。

　やっぱ。しくじった？　もしかして、やめといたほうがよかった？　ひょっとして、本気の本気で純じゆん粋すいに放ほうっておいてほしかった？　だけどもうあとには退ひけない。マリアローズは勝手に退路を断たたれた気分になって、それで思わず、ズババッと核かく心しんに切りこんでしまった。「ロム・フォウは、トマトのことが好き……なんだよね？」

　ロム・フォウは目をぱっちりと瞠みはって、それからまばたきを何度かした。

「あ、や、そ、その……」マリアローズは口ごもった。いきなり何を言っちゃってるんだよ、僕。「す、好きっていうのは、ほら、僕がトマトとかユリカとかサフィニアとか──ロム・フォウもだけど、みんなを好きっていうのとは違ちがくて、そうじゃなくて、なんていうか、もっとこう限定的な……」

「どうなのかな」ロム・フォウは目を伏ふせて一いつ瞬しゅん、唇くちびるをきゅっと引き結んだ。「正直に言うとね。そういう気持ちもあるのかなと思っていた。だけど、わからなくなった。サフィニアを見ていてね。あたしには、あんなふうに求めることはできない。トマト以外の男にそういう気持ちを抱いだいたことがないからわからないけど、やっぱり違うのかもしれない」

「えーと、まあ、何しろ僕の言うことだし、あてにはならないと思うけど……そういうので、なんていうか、こうじゃなきゃダメみたいな形があるわけじゃないだろうし、サフィニアにはサフィニアの、ロム・フォウにはロム・フォウの想おもい方っていうか、そういうのがあってもいいんじゃないかなあみたいな……や、ホントに僕なんかが何言っても説得力ゼロっていうか、マイナスなんだけどね？」

「そんなことはないよ、マリア」ロム・フォウの口くち許もとがゆるんだ。「きっとマリアの言うとおりなんだろうね。でも、あたしは気づいたんだ。あたしがどこに行っても、何をしても、どれだけ時間がたっても、トマトは変わらない。トマトだけは。あたしには行き場所が、居場所がある。あたしにとって、トマトはそういう存在だったんだ。だけど、いつまでもそうじゃないのかもしれない。そう思えて、どうすればいいのかわからなくなった」

「なんか……あれだね。親おや離ばなれしなきゃいけなくなった子供みたいな。あっ、ロム・フォウが子供だって言いたいわけじゃないよ、そうじゃなくて」

「いや。あたしは子供なのかもしれない。トマトのことだって、父親みたいに思っていたのかもしれないね」

「トマトが、お父さん……」

　ロム・フォウは首をかしげた。「やっぱりちょっと、違うかな。父親とは」

　マリアローズは少しだけ笑って、いくらか迷ったけれど、迷うことなんかないと思いなおし、ロム・フォウの肩に手を置いた。──と、エルデンが揺ゆれはじめた。

　ロム・フォウがへりに手をかけて、ひょいと顔を出した。「これは……」

「え？」マリアローズもロム・フォウのすぐ隣で見おろしてみた。「──ちょっ……！」

　もうかなり高度が下がっている。城だ。真下に城がある。古い城だ。城じよう壁へきに囲まれていて、いくつかの塔とうを備えた天守を中心に、頑がん丈じようそうな建物が配置されている。悪魔どもは城壁を取り囲んでいるだけじゃない。城壁にとりついて、梯子はしごをかけ、中に入りこもうとしている。人間たちが迎むかえ撃うち、懸けん命めいに防ごうとしている。いや、防ごうとしていた、と言うべきか。今は悪魔も人間も戦いの手を止めている。仲よく、というわけじゃないだろうが、敵も味方もなく、呆ぼう然ぜんと見上げている。何を？　言うまでもない。これだ。

　エルデン。

　彼らは空中要塞エルデンを見上げて、仰ぎよう天てんしたり惚ほうけたり慌あわてふためいてわめいたりしている。逃にげだそうとしている者もいた。梯子を登るのではなくて、降りてゆく悪魔ども。人間たちが城壁の上を駆かけまわっている。だけど逃げるって、どこへ？　エルデンは依い然ぜんとして降下しつづけている。止まらない。降下というか、下にいる者たちにしてみれば、落ちてくる。エルデンは彼らを押し潰つぶしてしまおうとしている。

「グッダー、ジュジ、あいつら、どういうつもりだ……！」トマトクンが怒ど鳴なった。

　ホントだよ。何だよこれ。なんでこんなこと。「やめっ──」マリアローズはそこまで言って口をつぐんだ。てゆうか、やめ？　その先、なんて言おうとしたんだろ、僕。わからない。それどころじゃない。いきなりマリアローズの身体が後ろのほうに引っぱられた。いや、逆か。前に押しだされたのか。どっちでもあるような、どっ

ちでもないような。何はともあれ、マリアローズはエルデンから放りだされた。「──わっ……!?」

「マリア……ッ！」とっさにロム・フォウが手をのばしてマリアローズの外がい套とうをひっつかんでくれなかったら、そのまま落下する羽目になっていたかもしれない。かもしれない、じゃなくて、確実にそうなっていた。瞬間、「ぐぅぅえぇっ」と首が絞しまる形になったが、ロム・フォウはすぐに外套を手た繰ぐりよせてマリアローズの腕をとり、エルデンの上に引っぱりあげてくれた。「大丈夫かい、マリア!?」「う、うん、ありがと、僕は大丈夫──だけ、ど……っ!?」何が起こったのか。もちろん、マリアローズが自発的にエルデンから飛びだしたわけじゃない。エルデンだ。南門跡あとが向いているほうを前方とするなら、エルデンが急に後退した。その結果、どうなったかというと、どうやら空中要塞エルデンは城を直ちよく撃げきするコースからそれたみたいだ。「着陸しマス……！」とピンパーネルが叫んだ。そこからはあっという間だった。トマトクンに「備えろ！」と言われたような気がするけど、備えるって何に!?　どうやって!?　マリアローズはただロム・フォウにしがみついていた。ロム・フォウはマリアローズを抱だいてくれていた。ロム・フォウは日向ひなたの匂においがした。おかげで落ちつくことができた。と言いたいところだけれど、とても無理だ。思わず「うぁあぁぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁぁぁあぁぁあぁぁあああぁぁぁぁぁぁ……」みたいな声を出してしまった。きた。ものすごい。突つきあげるような衝しよう撃げき。とてつもなかった。すでに収まっているのに、まだ全身が痺しびれている。土つち煙けむりが立ちこめていて、よく見えない。でもなんとか、どうやら無事、エルデンは着地を果たしたらしい。たぶん、城をぺしゃんこにすることなく。よかった──んだよね……？

「いるぞ」トマトクンが右手に大カタ殲スト滅ロフ刀アー、左手に聖断罪の剣を持って、顎あごをしゃくってみせた。「敵だ」

「ムウッ……」トワニングが筋肉を不気味なほど怒ど張ちようさせて身構える。ピンパーネルは両手に雌し雄ゆう一対ついの短剣を握にぎった。ハニーメリーも拳けん銃じゆうを抜ぬいている。ユリカが極クライ限マツ九クス手ナイン棍ポールをスッと前に突きだし、飛燕がその傍かたわらでわずかに膝ひざを曲げた。ロム・フォウが弓を手にして矢を一本つがえる。きゅーもアルファも臨戦態勢だ。サフィニアは浮うきあがってトマトクンの斜ななめ上に位置どった。マリアローズも一応、ロム・フォウとアルファの後ろで息を殺

し、刧ごう火かの柄つかに手をかけた。こんな立派な剣を持っていても、どうせたいしたことはできない。それでも、心の準備だけはしておかないと。土煙はいまだ晴れない。エルデンの着地点は、そうはいっても城のすぐ近くだろう。敵。敵がいるとしたら、城を攻せめていた悪あく魔まどもだ。こっちにはトマトクンがいる。他ほかのみんなもいる。そんじょそこらの悪魔なんて物の数じゃない。でも気を抜いちゃダメだ。僕にはそもそも気を抜く資格なんかないわけだし。マリアローズは唇を舐なめた。土煙が少しだけ薄うすらいだような気がする。トマトクンの肩かたがぴくりと動いた。「──む……？」

「Ｋｕ□ｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙ□Ａｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈ……！」

　奇き声せい。土煙の向こうから何かが飛びだしてくる。人じゃないと最初は思った。どう考えたって、あれは人じゃない。だけどそれは人の形をしていた。大きい。かなり大おお柄がらなトマトクンよりも。ほとんど裸はだかみたいな、変態っぽい恰かつ好こうをしている。髪かみは黒。肩くらいまである。鬼おに火びのような光をともす双そう眼がん。「──貴様は……！」トマトクンは剣ではなくて足を出した。足といっても、あんなものをまともに食くらったらたいていの人間というか生物は死んでしまうだろう。そんなものすごい前まえ蹴げりを、やつは両りよう腕うでを交こう叉させてがっちりと受け止めてみせた。「──ディィィィオロットォォォォ。こんなところでＥＥＥＥＥＥ、こんなふうにＹＹＹＹＹＹ、お前とまＡＡＡＡＡた会うとはねえ。しかも、今のお前はまるで、あのころのお前みたいじゃないか。一番危険だったころのねＥＥＥＥＥ」

「いろいろあってな」トマトクンは、ふん、と鼻を鳴らして、足を引っこめはしなかった。そのまま足でやつを押しのけた。ＳＩＸは逆らわずに跳とび下がり、トマトクンは右みぎ肩かたを軽く回した。「ずいぶん元気そうじゃないか、ＳＩＸ」

「わかってるだろう、ディオロット。俺はゴキブリよりもしぶといんだよ。生きてるかぎりは元気でいるしかないのさ。愉ゆ快かいで残ざん酷こくなことにねえ」

「──ッ……!?」と、眼鏡をかけた男がＳＩＸにつづいて土煙の向こうから姿を現した。そうとう汚よごれているが、銀色の鎧よろい。秩序の番人だ。「先代……なのか」

　トマトクンは唇の片かた端はしを吊つりあげてみせた。「久しぶりだな、ヨハン」

　総長ヨハン・サンライズだけじゃない。あれはたしか、コンラッド・アシャー。それから、ユキシ・庚コウ。〝小羅刹〞李イ童ドウ晏アンに、チェス・ピードもいる。そして、彼ら番人のあとから
「やいやいやいやいッ！　魚うおら魚ら魚ら魚ら魚らァ……ッ！」と二本の変形斧おのを振ふり振り、離はなれた左右の目を魚ぎよろつかせて、彼はやってきた。「──って、魚ぎよほぉ……⁉」

　何か、頭の中で、パァン……ッと弾はじけるような音がした。本当に弾けたわけじゃないと思うけれど、抑おさえきれない。マリアローズは駆けた。ぐんぐん走って、体当たりするみたいに彼に抱きついた。「──カタリ！　カタリだ！　カタリ！　カタリ……！」

「……お、おう。ま、まあ、そらアレやけども。わしはわしなんやけども。生まれてこのかた、わたしはずぅーっとカタリっちゅうたらカタリやけどもやな……」

「そんなことわかってるよバカっ！　きみなんかどうしたってカタリだろ、カタリ以外のわけないだろ、何があったってカタリでしかいられないだろ、そんなことわかりきってるんだよバカっ！　半魚人のくせに！　人間になりきれないからそんなくだらない愚ぐにもつかないようなことしか言えないんだろうけどさ！　ホンッッッ──────ットにバカなんだから！　死んじゃえなんて思うわけないだろバカっ、生きててよかったなんて思ったりもしないけどさ、だって無事でいるに決まってるんだからあたりまえだし、そう思ってたし！　よかったよもうバカバカバカバカバカバカバカバカ馬ば鹿か魚……っ！」

「ずッ、ずいぶんやなッ！　感動の再会シーンやないんかい！　そこまでバカバカ連呼することないやろ！　あと、わしは魚やあらへん、れっきとした人間じゃダァホーッ！」

「それはおいとくとして」

「おいとくなやっ！　わりと大事なことやで⁉」

「怒おこってるようなこと言いながら、なんで満面に笑えみとかたたえちゃってるわけ？　魚顔に。気持ち悪いよ？」

「そッ、そんなんなぁ、そんなん……ッ」カタリは変形斧を放り投げてマリアローズを抱かかえあげ、ぐるぐるぐるんぐるん回転しだした。「──うれしいからに決まっとんのやないかァーッ！　わあああああああああああああマァーリアローズゥッ！　よかったなあ！　みィーんないるやんかっ！　ユリカもロム・フォウもきゅーもアルファもなあ！　ついでに飛燕も！　サフィニアァッ！　飛んどるのお、飛びまくっとるのおッ！　髭ひげもおるんかァーいッ！　ピンプッ！　ピンプ、ピンパーネルゥゥッ！　ハニーメリーもッ！　うっひょおおおおおおおぉぉぉぉぉーッ、目め出で鯛たいッ！　鯛、鯛、鯛、鯛、鯛ッ！　魚うおろ……？　ト、トマトクン……なんか？」

「ああ」

　トマトクンがうなずいてみせると、カタリはマリアローズを置物みたいに地面に下ろした。トマトクンにスススッと歩みよる。腰こしをかがめたり首をかたむけたり顎を撫なでたりフンフンフンフン言ったりしながらトマトクンの周りを回って、血走った半魚眼でじろじろまじまじと見ている。「……オオ。オオッ。オオオオオオッ……⁉　な、なんちゅう……なんちゅう装備やッ！　もちろん見たこともあらへんし、どないな由来があるんか想像もつかへん！　せやけど、ドえらいブツやでえ！　それは百パー、いやッ！　千パー間ま違ちがいない！　トマトクン！　それ、わ、わ、わ、わしに……くれッ！」

「まあ」トマトクンは片方の眉まゆを大おお仰ぎようにつりあげた。「用がすんだらな。事が終わって使い途みちがなくなったら、べつにくれてやってもいいが」

「魚ぎよわほほおおおおおおぉぉぉぉぉーうっ！　お宝ゲェーツッ！　わしのコレクションに超ちよう絶ぜつ強力な一品が、いやッ、一品といわず二品も三品も……ま、こないなご時世やし、コレクションもへったくれもないけどな！」カタリは、ヘッ、と笑って、皆みなに手をあげてみせた。「──あらためて、まいどっ！　わしがきたからには！　きてもうたからには、八万人力やでぇっ！　ちゅうか、きたのんはわしやなくてジブンらやけども！　って、どこでどないして合流したん⁉　なんでジブンらエルデンに乗ってきよったんや⁉　どういうわッけや……ッ⁉」

「そのあたりの事情は──」ロム・フォウがつがえていた矢を放った。「あとまわしでいいんじゃないかな」糸を引くように矢が飛び

はじめるやいなや、ロム・フォウはただちに次の矢を用意した。マリアローズの目には、二本の矢がほぼ同時にそいつの両目にぶっ刺さったようにさえ見えた。ＧＵＭＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨ……！　角が生えていて皮ひ膚ふが鉛なまり色いろで身みの丈たけ二メーテルを超こえるデカブツ悪魔。マリアローズたちは鉛なまり鬼おにと称しようしている。悪魔の中でもヤバい種類だ。その鉛鬼が列をなしている。十や二十じゃない。桁けたが上だ。連中の向こうに城壁がそびえている。城壁というか城門だ。城門は破城槌つちだの何だの、攻こう城じよう兵器によってだいぶ破損しているみたいだ。つまり空中要よう塞さいエルデンは、人間と悪魔が激げき烈れつな攻防戦を繰くりひろげている孤こ城じようの城門前に着陸したのだ。

「──地じ獄ごくの殲せん滅めつ師団か」トマトクンがそう呟つぶやくなり、跳んだ。

　あれはもう剣技なんかじゃない。技術を超ちよう越えつしている。力。ただの、圧あつ倒とう的な力だ。あれこそが暴力だ。真性の、暴力の威い力りよくだ。

　大カタ殲スト滅ロフ刀アーが吼ほえて、身を躍おどらせた。

　さながら、鉛鬼どもに殺さつ到とうして食らいつき、食い荒あらす千万の肉にく食しよく獣じゆうのようだ。

　聖断罪の剣は歌うがごとく踊おどった。

　その波打つ刃やいばが描えがく曲線は、まるで乱らん舞ぶする光だ。鉛鬼どもはなすすべなく光に斬きり刻まれた。

　いくら相手が悪魔でも、決して共存しえない最悪の敵であろうとも、あんな殺され方はあまりにも無残だ。しかし、見とれてしまう。未み曾ぞ有うの天変地異みたいなものだ。あらがうことなどできはしない。自分自身の身に危険が迫せまっていても、つい見入ってしまう。驚きよう異い的で、たまらなく恐おそろしくて、それはいっそ感動的ですらある。何十もの鉛鬼がまたたく間に肉にく片へんと血の海に変えられてしまった。こんなショーにはそうそうお目にかかれるものじゃない。しかも、最前列に近い特等席で。この僥ぎよう倖こうに、マリアローズは感謝するべきなのだろう。彼が仲間で、ＺＯＯの園長マスターで、大切な、かけがえのない友だちだということに。や、そりゃもうね。めっちゃくっちゃ感謝しまくっ

てるけどさ。これ以上ないってくらい。「──みんな、トマトにつづいて……！」

　自分みたいな者が生意気だと思いながら、気き後おくれも照れも恥はじも外聞もスパッと捨てる。捨てられなくても絶対に意地でも見せたりしないでマリアローズが号令をかけると、まずトワニングが暴走を開始した。「ムハハハハハァーッ！　拙せつ僧そうとともにィィィィィ筋肉の楽園へとォォォォ逝ゆこうではないかァァァァ筋肉ハイパー万歳マツソォォォォォ……ッ！」「そんな楽園・ナイ……」と言いながら、ピンパーネルも砂色の旋せん風ぷうとなって戦場へと飛びこんでゆく。「援えん護ごするから！」ハニーメリーは拳銃をぶっ放しつつ前進する。「くうぅぅぅぅ……っ！」きゅーがもふ毛を逆立てて突き進む。ロム・フォウはまさしく矢や継つぎ早ばやに矢を射る。近づいてきた鉛鬼がアルファに突き倒たおされた。「スォラァッ！」飛燕がその鉛鬼のド頭タマに飛び蹴りをぶちこむと、頭ず蓋がいだの脳だの角だのがヴォジャァッとぶちまけられた。「──行こォーゼユリィ！　オレらもガーンとよォッ！」「ええ……！」ユリカと飛燕が並んで敵の只ただ中なかに突っこんでゆく。サフィニアがスゥーッと敵軍の上空に移動して右手を突きおろす。稲いな妻ずまがズガゴゴ落ちる。藍あい色いろの炎ほのおが舞まう。まばゆい白光が敵を、大地を引き裂さく。「フハーッ！」カタリは拾いあげた二本の変形斧をガッチンガチン打ちあわせた。「コレやコレッ！　やっぱしコレやがな！　コレやないとあかんがな！　いくでいてまうでいてこましたるでェッ！　わしもな！　漢おとことして！　何よりわしは天下のＺＯＯやあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……ッッッ！」「──我々も征ゆくぞ……！」ヨハンが血刀を掲かかげて高らかに叫さけぶと、十人に満たない番人たちが百人も、それ以上もいるかのように声をそろえた。「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応！」「応……！」

　言うまでもないことだが、それは決して心あたたまる風景なんかじゃない。胸を躍らせているような場合でもないはずだ。でも、気分が浮うき立ってしょうがない。そんなことはないんだけど、あるはずないんだけど、まるですぐそこに勝利が小石みたいに転がっていて、あと一歩でそれに手が届くんじゃないか。そんな錯さつ覚かくさえ起こしてしまう。

　マリアローズは走りだした。僕だけ置いていかれたらたまらないし。せいぜい邪じや魔まにならないように気をつけないと。あえて

後ろ向き気味なことを考えて、放ほうっておいたら天にも昇のぼりそうなテンションを強ごう引いんに抑えつける。冷静に。こんなときこそ、僕は冷静に。落ちついて、状況を把は握あくして、何があってもすぐ察知できるように。対処できるように。最低でも、そのための手助けくらいはできるように。僕にはそれくらいのことしかできないんだから。それが僕の仕事なんだから。自分にそう言い聞かせて、マリアローズは仲間たちを追いかけた。足どりが軽くなるのはどうしようもない。そうはいっても、頭を冷やして、目を見開いて、耳の穴をかっぽじっておくことはできる。そのはずだった。

ーいつ瞬しゅんで、何もかも吹ふっ飛んでしまった。—黒い。

黒い翼つばさが、羽ばたいて。

最初にその音を聞いたのか、影かげが目に入ったのか、それとも何かを感じたのか。わからない。でも、それが何かはすぐわかった。

それが、誰だれか。

どうしてか、振り仰あおぐ前に、振り仰いでいたように思う。その姿を視界に収める前に、その顔を見る前に、見ていた。先に思い描いていて、そのとおりだった。

なんでここにいるんだよ。そう思ったような気もするし、思わなかったような気もする。不思議だったし、不思議じゃなかった。それは不自然で、とても自然なことでもあった。今ここで会うことは百年前、千年前、一万年前から決められていた。そんなこと、ない。単なる偶ぐう然ぜんだ。会うかもしれなかったし、会わなかったかもしれない。

頭が、胸の中が、からっぽになって、そうしてできた空くう洞どうはどうしたって、何をどこから持ってきたって、とても埋うまりそうにないのに、流れこんでくる。どんどん満ちてゆく。もうすぐいっぱいになる。

自分がひどい間ま抜ぬけみたいに口を開けていることに気づいた。みっともない。口を閉じなきゃいけないと思った。目が痛い。まばたきしなきゃ。べつに見ていたいわけじゃない。見たくなんかない。どうでもいい。目が離せないわけじゃない。ただ、身体から

だが動いてくれない。理由なんてわからない、ただそれだけだよ。きみのことなんかどうでもいいんだ。知ったこっちゃないんだ。二度と会えなくてもよかったんだ。本当にそうなんだ。嘘うそなんかついてない。嘘をつく必要がない。そっか。生きてたんだね。その程度だよ。それ以外に思うことなんてないよ。一つもないんだよ。

　何やってるんだよ。そんなところで。飛んできてさ。黒い翼を羽ばたかせて、とどまっている。どっか行ったら？　いつまでもそこにいることないだろ。何、ぼうっとしてるんだよ。バカじゃないの。知ってるけど。きみがバカだってことは。とっくに。馬鹿一号だしさ。そこに――そこに、いないでよ。いなくなってよ。

　無理やり、目をつぶる。

　心臓の、音がする。

　耐たえきれない。何に？　とにかく耐えられなくて、目を開ける。ちょっとだけ、期待したのか不安に駆かられたのか、きみはもういないんじゃないかと思った。それならそれでいいや。しかたないし。そのほうがいい。問題が片づくわけだし。

　だけど、きみはいる。

　変わらず、そこにいる。

　思わず、きみの名を呼びそうになった。唇くちびるが動く。声に、ならない。

北ワールオック山麓

　これは夢なのだろうか。そんなふうには微み塵じんも思わなかった。夢ならもう百万遍べん見ている。一秒でも眠ねむりに落ちればキミの顔が浮かぶ。キミのいろいろな表情が。ありとあらゆる仕し種ぐさが。声が聞こえることもある。キミがどこかで話している。おそらく、たわいもない話だ。内容はほとんど頭に入らない。キミが何か話している。それしかわからない。だけどキミの声だ。確信して、キミを捜さがす。キミはどこにもいない。そんなことを何度繰りかえしただろう。いちいち数えていない。とうてい数えきれな

い。いくつの夢、白昼夢、幻げん覚かく、幻げん聴ちよう、思いすごし、勘かん違ちがいを積み重ねてきただろう。無量大数だ。

　おかげで、とっくに区別がつくようになっている。これは違うと、すぐにわかる。悲しいほどに、わかってしまう。

　ぜんぶ違う。キミはいない。この手でふれられる範はん囲いには、目に見えそうなところには、声が聞こえる距きょ離りには。もうわかっている。思い知らされてきた。だから、信じられない、でも信じるしかない。

　本物だ。

　キミが、そこにいる。

　それでも念のため、自分が呼吸をしているかどうか確かめる。しているみたいだ。自分は、ちゃんと息を。ということは、キミがいる。そこにキミが。キミに近づきたい。少しでも。だけどその方法がわからない。近づくことなんかできるのだろうか。きっと不可能だ。そんなこと、できるはずがない。許されるわけがない。抜けてゆく。時間がたつごとに、足の、手の先から、自分自身を構成する物質が少しずつ。自分が薄うすくなってゆく。このままだと自分はなくなってしまう。いなくなる。そうしたらキミはどうなる？　いなくなりはしないだろう。キミはありつづける。キミさえいればいい。キミがいてくれるだけで、世界は意味を持つ。キミなしの世界なんて、存在していないのと同じだ。自分なんかどうなったっていい。消え去ってもいい。キミがいてくれるのなら。でも──、

　キミは見ている。見上げている。じっと、こっちを見ている。目をそらそうとしない。キミがまばたきをする。その瞬間、世界から赤や青や緑といった主な色が失われたように感じる。世界は灰色になる。世界は転落する。暗い淵ふちへと。それがたちまちのうちに一変する。キミが目を開けた途と端たん。

　世界が蘇よみがえる。しかも、キミはまた、まだこっちを見ている。

　キミの唇が動く。何か言おうとしている。声にならない。

　だけれど唇の動き方でわかる。

ア

ジ

ア

ン

　ああ。それだけでキミは破は壊かいしてしまう。ボクは打ち砕くだかれる。粉々になる。ボクはなんて小さいんだ。儚はかなくて、脆もろいんだ。とるにたらないんだ。キミはなんて大きいんだ。広大なんだ。膨ぼう大だいなんだ。キミがあふれる。全世界がキミ一色に染まる。キミは何もかもを手にしている。そのことを、キミはわかっているだろうか。もしわかっていなくても、それは真理だ。揺ゆるがない。ああ。キミがそこにいる。なぜキミはそこにいるのだろう。理由じゃない、その仕組みが知りたい。解き明かしたい。キミがそこにいる、そこにキミがいることの秘密を。それは大いなる神秘だ。キミはきっとそのことに気づいていない。

　ボクは降りる。

　降りてゆく。

　まるでこうするためだけに生まれてきたかのように、慎しん重ちように。この瞬間だけのためにこの世に生を受けて、そのために地下で何年も幼生としてじっとしていた昆虫のように。そして、ボクは羽う化かする。この瞬間をふいにしてたまるものか。何よりも重要で重大なんだ。ボクとキミとの距離が狭せばまる。嘘みたいだ。星と星ほども離はなれていたのに。どうしたって近づくことがなさそうな互たがいの距離だったのに。キミが逃にげてしまうんじゃないか。あるいは、ボクがしりごみしてしまうんじゃないか。懸け念ねんはぬぐえない。ボクは心底怯おびえている。怖こわくてたまらないヨ。キミはどうなのかな。現在進行形のこの出来事を当然のように受け止めているのかな。一秒が百年にも感じられるようなこの

時間を。永久凍とう土どのように奥の奥まで凍いてついたこの時間は溶とけてしまうのかな。また普ふ通つうに流れはじめるのかな。もったいないような気もする。終わらない時の中でいつまでもこうしていたい。だけどそんなわけにはいかないんだ。ボクはキミに会いたい。もう会っている。でも、まだ足りない。もっと近づきたい。キミをよく見たい。キミの声が聞きたい。キミの吐と息いきを感じたい。キミの心音に耳を傾かたむけたい。本当のことを言うと、ボクはキミにふれたい。

　時が、解き放たれたように、流れだす。

　ボクとキミとの間にあったすべてのことが駆け抜けてゆく。キミと初めて会ったエルデン第五区のあの夕暮れ。二度目にアンダーグラウンドＤ13上層テトルアープでキミと会った日。三度目。四度目。五度目。六度目。七度目。遠くからキミを眺ながめた日々。キミの胸で泣いた日。ボクがキミに救われた日。何もかもがボクをつくっている。まるでボクはキミのようだ。キミはあまりにも大きくボクに影えい響きょうを与あたえすぎている。少なくとも、ボクの半分はキミでできている。キミはきっといやがるだろう。情けないやつだと呆あきれるだろう。ボクだってそうさ。こんなボクになりたかったわけじゃない。キミがいなくたって、ボクはボク以外の何者でもない。そう胸を張って言えたらどんなにいいか。でもダメなんだ。遅おそいんだ。手て遅おくれなんだ。ボクはキミと出会ってしまった。他ほかの誰でもない、キミと出会ってしまった。キミと出会って、わかってしまった。キミの見開かれた瞳ひとみにそれを見つけてしまった。この出会いは特別なんだ。この先、千年生きたとしても、キミのような人とは決してめぐりあえないんだ。なるほどキミは美しい。真しん紅くの髪かみ。鮮あざやかな橙だいだいの眼め。一分の乱れも隙すきもない顔の造作。しなやかな身体つき。だけどそんなの、どうでもいいことだ。美しいからキミがキミであるわけじゃない。美しさがキミをキミたらしめているわけじゃない。美しさはキミにとって要素の一つでしかない。いつかボクは言ったネ。キミがたとえ犬だろうと猫ねこだろうと異界フリー生物クスだろうと大脂羽蟲ゴツキーだろうと、ボクはきっとキミを探しだしただろう、と。あれは大おお袈げ裟さでも修辞でも比ひ喩ゆでも何でもない、本当のことなんだ。キミという存在に刻まれているんだ。その刻印は消し去ることができない。キミはいるだけでボクにとって特別なんだ。でもこの気持ちを、ボクがキミについて感じていること、考えていることを、すべてキミに伝えることはできないだろう。言葉にできることはかぎられている。表現には限界があ

る。ボクは、だから、そのことについてはもう何も言いたくない。何か言えば言うほど、ボクが抱かかえているものから離れてゆく。そうじゃないんだ、こうなんだと叫さけべば叫ぶほど、何か違うものになってしまう。

　ボクは、降りたつ。

　キミの前に。

　音のない、世界。

　ボクは集中している。キミの声だけを聞きたい。

　キミの輪りん郭かく。形。

　キミの色。

　キミがそこにいなければ、一面の、不毛の荒こう野やだ。

　キミは花だ。

　キミだけが、たった一つの、花だ。

　キミという花を咲さかせるためだけに、この世はある。

　光も、闇やみも、森しん羅ら万ばん象しよう、ありとあらゆる養分が、キミを咲かせている。

　ボクはキミを畏おそれ、敬い、崇あがめるべきなのかもしれない。

　だけど、ボクはもう、戸と惑まどうことも、怯ひるむことも、しない。

「やあ」

　と、ボクはキミに声をかける。

　ボクは、そして、笑う。笑ってみせる。

　キミは透とう明めいな眼まな差ざしでボクを見つめている。

　ボクはすっかり見抜かれてしまう。でも、ボクは恐おそれない。

「やあ」

　と、キミは、呟つぶやくように言う。表情は、動かない。

　キミと何を交かわそう。

　どんなことだって、今ならできる。

　何もしなくたっていい。キミが目の前にいる。これ以上、何もできなくたってかまいやしない。

　キミがいる。

　それなのに、ボクは手をのばしている。キミに向かって、手を差しだしている。

　キミはボクの手に目をやる。それが何なのかわかりかねているように、キミはほんの少しだけ首をかしげる。しくじったとボクは思う。何をやってるんだ。ボクは、何を。誓ちかってこんなことがしたかったわけじゃない。永えい劫ごうみたいな後こう悔かい。

　キミは、でも、ボクの手をとる。ボクの指を握にぎる。

　ボクの右みぎ腕うではアルカーディアで、左腕はジャシュギシュだ。キミが今、握っている右手は、黒い、細い管が縒よりあわされて、人間の手みたいな形をなしている、擬ぎ態たいしている、その紛まがい物ものの、醜しゅう悪あくなボクの右手の指を、キミは平然と握りしめる。

　アルカーディアを通じて、ボクはキミの体温を感じる。キミの皮ひ膚ふの感かん触しょく。

　ボクはキミを引きよせる。抱だきよせる。抱きしめる。ずいぶんのびたキミの髪に顔を埋うずめる。ボクは胸や腹が押し潰つぶされて一サンチか二サンチの厚さになったかのような感覚に襲おそわれる。視界が細かく揺れている。

「汚きたないよ、僕。汚よごれてるよ」

　と、キミが言う。

　キミの身体からだには、余計な力なんか、一つも入っていないよ

うだ。

　ボクはキミの髪の毛に口づけをする。怖い物知らずにも、そんなことをする。キミの頭に鼻を押しつける。目をつぶって、開ける。息を吸う。吐きだす。

「そんなことはないサ。あるわけがないヨ」

「バカだね。きみって。知ってるけど」

「飛ぼう、マリア」

　唐とう突とつに、ボクは言う。答えを待ったりしない。

「──っ……！　は、放し……っ」

「放さない」



　キミは怒おこるかな。怒ったっていい。怒らせてしまってもしょうがない。ボクはこうしたいんだ。こうせずにはいられないんだ。こうするしかないんだ。

　ボクは翼つばさを羽ばたかせて飛びたつ。すぐに高度百メーテルに達する。二百メーテル。三百メーテル。このままキミを連れ去っ

てしまいたい。

「ちょっ──どこへ……!?」

「どこへでも」

　ボクには羽がある。見るといい。ボクらはこの終末の世界に閉じこめられていると思っていた。でも、そんなことはない。世界はこんなにも開かれている。果てしなくつづく。ボクは、ボクたちは、どこまでだって行ける。

「キミはどこに行きたい？　何か見たいものはあるかい？」

「え、や、そんなっ」

「遠えん慮りよなんかしなくていいんだヨ。遠くてもいい。遥はるか遠くでも。近くだっていい。すぐそこでも」

「そういう問題じゃ──」

「だったら、どういう問題？　そもそも、何か問題があるっていうのかな。ボクが思うに、どんな種類の問題も存在しない。あるような気がするだけなんじゃないかな」

「……アジアン、きみ……」

「何？　ボクがどうかした？」

「どうかしたっていうか、どうかしてるっていうか」

「仮にそうだとしよう」

　ボクはキミの顔をのぞきこむ。キミの瞳を。キミの外がい套とうの中から、小さな生き物が首を出す。リスのような、子こ猫ねこのような、見たことのない獣けものだ。頭の奥で、火花のようなものが散る。それがどうしたというのか。些さ細さいな、いや、些細ですらないことだ。

「だとしても、何がおかしいのかな。ボクがどうかしているとして、それが異常なことかな。むしろ、しごくまっとうなんじゃないかな。そうは思わない？」

「お、思わない、けど……？」

「どうして？」

「どうしてって」

「だって、キミがいるんだヨ？　どうかしないほうがおかしい。何しろ、キミがいるんだから。なんでだろうネ。どうして奇き跡せきってやつはこう、ときにあたりまえのように起きてしまうんだろうネ。もし、どこかに奇跡の担にない手がいるのなら、抗こう議ぎしたいヨ。前もって言っておいてくれってサ。こっちにだって、事情というものがある。いきなりは困るヨ。だから、こんなことになってしまう。どうかするヨ。するに決まっている。どうかしないわけがないだろう？　だって、キミがいるんだ。どうか聞かせてほしい、マリア」

「……な、何を？」

「キミはどう？　何を感じている？　今、何を思っているのかな。本当のことを言ってほしい。嘘うそなんかつかなくていいヨ。何を言われてもボクは傷つかない。約束するヨ。ボクはただ、キミの気持ちが知りたいんだ」

「そ、そんなこと、言われてもっ」

「知りたいんだヨ、マリア」

「いっ……言える、わけ……！」

　キミは目を回している。キミは暴れる。ボクの腕から逃のがれようとする。キミの意思はできるだけ尊重したい、でも、放すわけにはいかない。ここは地上数百メーテル。手を放したりしたら、キミは真っ逆さまだ。ボクはキミを放さない。キミは顔を真っ赤にして、大声を出す。

「言えるわけないだろ、そんなこと！　バカ……っ！」

「──で？」

　と、キミでも、ボクでもない、声がする。

　近くだ。正面方向。

　癖くせのある髪をかきあげて、彼女はため息をついてみせる。これ見よがしに。

「このクソ忙いそがしいときに、あんたたちはいったい何をやってるわけ？　もしかして、シバかれたいの？　それだったら、お望みどおりにしてあげなくもないけど、今のあたしは手加減なんかしてあげないわよ？」

「べ」

　とだけボクは言って、声を失う。

「ベティ」

　と、キミは彼女の名を呼んで、つけたす。

「……さん」

　そして、ボクらは同時に頭を下げる。

「ごめんなさい」

クライド大山脈

　背部・腰よう部ぶ・脚きやく部ぶスラスタ五十％展開。クラナム粒りゆう子し放出限界率を同じく五十％に設定。放出。視覚聴ちよう覚かく野やを補正。良好ＧＯＯＤ。彼女は飛ひ翔しようする。飛びまわる。自在に。彼女は全身の関節という関節の可動域を設計段階で想定していた以上に広げることに成功した。もはや彼女は人の形をしていない。彼女の腕も脚あしも各関節が二百十度から三百六十度回転する。揚よう力りよくと推力を生むクラナム粒子を放出するスラスタはどの角度にも向けることが可能だ。彼女の主要な武装は以前と変わらず両腕に収納されているアルティメットブレイド・〝ギャラクシー〟・ダブルオーセブンティーエイト・メタルデス〝緋ノ魂滅〟だが、彼女はそれをあえて振ふるうことはない。ただその刃やいばを突つきだして、身体を移動させる。その速度で、勢いで、斬きる。出力五十％でも、超ちよう高こう速そく移動する彼女は何十人、何百人、それ以上にも見える。クラナム粒子が千人以上の彼女を輝かがやかせる。この程度の速さは必要だ。やつを殲せん滅めつするには。

　認めてやってもいい。やつはそれほどの敵だった。もう違ちがう。

　やつは敵ではない。敵にはなりえない。

　蝶ちようが飛び交かっている。赤と黒の、白と緑の、黄と橙だいだいの、銀色の、金色と黒と赤の、青の濃のう淡たんの、黄土色と褐かつ色しよくの、紫むらさきの、黄と青の、緑と黒の、白と黄と灰色の、薄うす紅べに色いろの、青紫とターコイズブルーの、青竹色とえび茶とオーキッドの、苔こけ色いろとストロベリー色の、鱗りん粉ぷんと鱗毛で覆おおわれた葉のような二対ついの翅はねを持つ無数の蝶が、そこらじゅうにいる。雪山を埋めつくしている。

　彼女はそれらの蝶を、一羽一羽、斬る。斬ってゆく。もしくは、同時に斬る。

　彼女の斬ざん撃げきはただの斬撃ではない。切断するだけではす

まない。衝しよう撃げきを生む。途と方ほうもない衝撃を。彼女の刃に斬られたものは即そく座ざに消し飛んでしまう。ばらばらになって、粉こな微み塵じんになり、物質を成り立たせている最小単位にまで分解される。いかなる化物であろうと、もとに戻もどることはできない。

　瞬しゅん滅めつ。

　百万の、千万の、一億の蝶たちが、彼女によって消し去られてしまう。全滅。

　──否いな。

　一羽だけ。

　それは一見、何の変へん哲てつもない、世界中の温帯から亜あ熱帯に分布するモンシロチョウとしか思われない。もっとも、それがモンシロチョウなどではないことは一目瞭りよう然ぜんでもある。なぜなら、ここは高地だ。しかも、雪が残っている。モンシロチョウにかぎらず、こんな季節に飛ぶ蝶がいるはずもない。それはモンシロチョウではない。蝶ですらない。

　彼女はクラナム粒子の放出を停止して各関節を調整し、人の形をとりもどした。緋ノ魂滅の切っ先を蝶ならざる蝶に突きつける。
「──終わりだ、アウトルマ・ファッルーカ。それとも、貴様にはまだ何か残っているのか。あるのなら見せてみろ。何もなければ、貴様は用ずみだ」

　蝶はひらひらと翅を動かして心こころ許もとなげに上下動している。まるで自分はただの蝶にすぎず、何のことかわからない、どうか見み逃のがしてほしいと訴うつたえているかのようだ。声も震ふるえていた。「──りりぃ。あなたはすてきだ。よもやここまでとは思わなかった。あなたはじつにすばらしいよ、りりぃ」

「言い残したことはそれだけか、ファッルーカ」

「私を滅ほろぼすつもりかい。あなたは、あなたならば、そうすることもできるかもしれない。ただし、そうしないこともできる。あなたは選ぶことができるのだよ、りりぃ」

「あたしは何も選ばない。ただそれをなすだけだ」

「時が満ちたのだよ、りりぃ。帝てい王おうはこの世界をご所しよ望もうだ。人間あなたたちの世界を手に入れることで、悪魔我々は真に安定する。これはリソースの問題なのだよ」

　彼女は静かに呼吸をする。「──貴様は何を知っている」

「何も」蝶は、純白の雪をかぶり頭を垂れている雪下草にとまって、翅を休めた。「私は何も知りはしないよ、りりぃ。ただ、人間あなたたちと悪魔我々はある有限のものを奪うばいあっている。帝王はすべて我が物とするつもりだ。さながらそれが義務であるかのように。あるいは当然の権利であるかのように。人間あなたたちがおり、悪魔我々がおり、多種多様な生き物がおり、たくさんの世界があってこそ、美しさは保たれるというのにね。帝王は美や豊かさになど関心がないご様子だ。帝王は悪魔我々をお創つくりになった。帝王は創造主だ。りりぃ、私は帝王の何番目かの被ひ造物の末まつ裔えいなのだよ。私は最前、何も知らないと言ったね。私が道どう化けであり、虚きよ言げんを弄ろうする者であることはあなたも承知しているだろう？　そうはいっても私は謝罪するよ、りりぃ。私にも知っていることはある。いくらかはね。たとえば愛の不在について、私は知っている。吐はきだすように、空白を埋うめるように、突き動かされるように、憑つかれたように、そうせざるをえなかったかのように悪魔我々を生みだした帝王は、悪魔我々を愛してなどいない。愛することができなかったのかもしれない。帝王が自らの手でつくりだした地じ獄ごくも、愛されていない。ゆえに、地獄は地獄なのだ。帝王にとって、地獄は監かん獄ごくなのだ。悲しいことに、悪魔我々は親に愛されぬ子供たちなのだ。悪魔我々は愛を求めている。本能的に。それは悪魔我々にとって、逃れえぬ衝動なのだ。悪魔我々は愛に餓かつえている。悪魔我々は帝王すら追い落とさんと志す。ときには、自らの創造主であることも知らずに。それも、だが、愛を欲ほつするがゆえなのだ。悪魔我々の愛はかくもゆがみ、壊こわれているのだ。当然のことながら、私とて例に漏もれない。私がなぜあなたに魅みせられているのか、これでわかっただろう？　手品はいつも種が割れれば興きよう醒ざめするほど単純で哀あわれみすら誘さそう。あなたの壊れた愛は、私が求める愛と似ているのだ。それがために私はあなたという炎ほのおに惹ひかれて飛びこみ、この身を焼かれたというわけなのだよ、りりぃ」

「たしかに貴様は哀れだ」

　前頭顔部装そう甲こうを開放。露ろ出しゆつした顔面に、冷やや

かで清せい澄ちような大気がふれる。あたしにはもう、こんな顔なんていらないはずだと彼女は思いあたる。これは失ったものの、捨てたものの残ざん骸がいだ。

「愛など存在しない。いかなる形態の愛もない。ありもしないものを、さもあるかのように語る。貴様は滑こつ稽けいだ、ファッルーカ」

「では、あなたは何も愛していないというのか」

「むろんだ。かつて愛だと思ったものは、あたしの中で解体され、適切に処理された」

「あなたは何のために生きているのだね、りりぃ」

「愚ぐ問もんだな。生きる目的。生きる意味。それもまた愛と同じだ。生き物はひとたび生を受ければただ生きる。それがどのような生き物であろうとも」

「寂さびしくはないのか」

「貴様はどれだけ生きてきた。あたしはもうずいぶん生きた。その大半をあたしは一人で、ただ生きてきた」

「何も求めることなく？」

「足が向く方角にひたすら進んできただけだ。食くらい、眠ねむり、また食らう獣けもののように」

「あなたは獣ではないよ、りりぃ。どこからどう見ても」

「ああ、そうだ。あたしは獣にはなれない。あたしは敵を見つけ、これを挽ひき潰つぶすだけの、一個の機械だ」彼女は唇くちびるを微笑ほほえませる。なぜ自分が微笑んでいるのか、彼女自身にもわからないまま。「あたしは機械でいい」

「どこまでも敵を求めるというのかね。だが、私以上の敵などそうそういはしないよ、りりぃ。むなしいだけだとは思わないかい」

「敵はいる」クラナム粒子放出。彼女は急速で推進する。緋ノ魂滅が蝶を斬り裂さく。消滅させる。「━悪グラ魔ンヴ大エリ公オンアーマン。そして、地獄の帝王。敵はまだいる」

「そうだろうね、りりぃ」声が、広がる。あふれる。「そうだろうね」「そうだろうとも、りりぃ」「そうだろうね」「そうだろうと思うよ、りりぃ」「そうだろうとも」……━雪。雪が、こびりつくように山やま肌はだを、木々を白く染めている雪が、いっぺんに色を変えた。赤。青。緑。紫。銀色。金色。橙。黒。黄土色。褐色。臙えん脂じ。灰色。朽くち葉ば色いろ。群ぐん青じよう色いろ。琥こ珀はく色いろ。雪が無数の蝶と化して、一いつ斉せいに飛びたつ。鱗粉が舞まい散り、きらめきの渦うずとなる。「見ているよ、りりぃ」「あなたを」「あなたの戦いを」「私は見ているよ」「いつまでも」「終わりのときまで」「片時も目をそらすことなく」「私はここにいるよ」「そこにいるよ」「どこにでもいる」「私は鏡を磨みがきたる者」「力と技わざの卓たく越えつ者」「いたわり偽いつわり欺あざむく者」「蝶の星」「あるいは、穢けがれの象しよう徴ちよう」「ジルマイヤ酒しゆ血ち湖こ及およびハ・マーン淫いん楽らく街の領主」「道ジエ化ステのル・大ハイ公ヴエリ爵オン」「私はファッルーカ」「アウトルマ・ファッルーカ」「ジェンバジェンガ・フルミネンセ・パルートルメイヒヨーケンデール・クライストリスト・オーラル・ド・リリカル・ラーヴィア・カント・ヴ・アギナ・スーペルファルシャワード・カムイヨラセナイムクロミ・ダイ・アマント・グランド・セクスィ・マスター・アウトルマ・ファッルーカ」「愛しているよ、りりぃ。私はあなたを愛している。愛しているのだよ」

　前頭顔部装甲を閉へい塞そく。彼女は装甲の奥でため息をつく。「傍はた迷めい惑わくだ」

北ワールオック山麓

　天守を目指して、石いし畳だたみの道を走る。

「ま、待ってくれ、マリア！　どこにだってボクが連れていく！　そうすれば、あっという間に……！」

　あーうっさいうっさいうっさいうっさいうっさいうっさいうっさい。聞きたくない聞きたくない聞きたくない聞きたくない聞きたくない聞こえない。何も聞こえない。頭上から降りそそぐやかましい調子っ外れの声を無視して、マリアローズはひた走る。

なんていうかもう、あれはぜんぶ気の迷いだった。僕としたことが迷いすぎた。できることならなかったことにしたい。とりあえず忘れたい。てゆうか、誰だれか忘れさせてくれない？　頼たのむからさ。誰かって誰っていう話だけど。いないよね。ピンポイントで不要な記き憶おくを消去してくれる便利な人なんて。そんな都合のよすぎる人なんて、いるわけないよね。そりゃそうだよね。わかってはいるんだけど。無む駄だなことを考えていないで走れ走れ走れ。悪魔だの蜥蜴とかげ人だの鳥人ジャドーだの、それから人間だのの屍しかばねを乗り越こえて進め。

「マリアローズ……！」と名を呼ばれて、思わず「ひゃぁっ!?」とすっとんきょうな声を出してしまった。知っている声だったからだ。誰だろうなんて考えもしない。すぐに、一発でわかった。「――リーチェ……！」

　振り返ると、少し先の角から金きん髪ぱつをなびかせてベアトリーチェが飛びだしてきた。胸当てをつけて、刀を提さげている。身体中血まみれだ。だいぶやつれている。だけど光り輝いて見えるほど、彼女はきれいだ。

「リーチェ！　リーチェ、リーチェだ！　ベアトリーチェ！　リーチェ……！」

「マリアローズ！　無事だったんだな、マリアローズ……！」

　抱だきあって、背中やら肩かたやら頭やらを撫なでさすりまくって、至近距きょ離りから顔を眺ながめて、また抱きあって、お互たがいにちゃんと息をしている、幻まぼろしでも幽ゆう霊れいでもない、多少疲つかれたり怪け我がをしたりはしていても大丈夫だということを、ぞんぶんに確かく認にんしあった。なんでこんなに笑えるのか不思議なくらい笑えて、笑えて、しょうがない。どうしても笑え顔がおと笑い声がこぼれる。

「エルデンか!?　エルデンに乗ってきたのか、マリアローズ！」

「そう、そうなんだよ！　エルデンに乗ってきたんだよ！　話せば長くなるんだけど！」

「奇き遇ぐうだな！　わたしはあのとき浮ふ上じょうしたエルデンに取り残されて、着陸した隙すきに降りたんだ！　そのエルデンに、お前が乗ってきたなんて！」

「変なの！」

「本当にそうだ！」

「──あ、僕、天守に向かう途と中ちゆうだったんだ！」

「母様か!?」

「そう！　モリーがいるって聞いたから！」

「よし、行こう、わたしが案内する！」

　ベアトリーチェに導かれて、間もなく天守に到とう着ちやくした。天守の出入口は申し訳程度に武装した少年少女たちによって守られていた。見覚えのある顔もその中にはあった。たしか、あの子はタシー蝶デイエだ。口をきいたことはないけれど、龍りゆう州しゆう連合に保護されて、その後、アサイラムに引きとられたという、わりとめずらしい、謎なぞといえば謎な経歴の持ち主なので覚えている。ベアトリーチェが声をかけると、少年少女はただちに道をあけてマリアローズたちを通してくれた。入ってすぐの広間ホールは重傷者と、それからたぶん、運びこまれたものの治ち療りようもむなしく──もしくは、手の施ほどこしようがなく息をひきとった者たちであふれかえっていた。モリーは今も一人の命を救おうと手を尽つくして、でも残念ながら及ばなかったのだろう。天てん井じようを見上げて、首を左右に曲げた。そして、こっちを見た。目を大きく瞠みはる。まばたきをした。「あら。マリアじゃない。久しぶりねえ。髪かみ、のばしてるの？」

「……そういうわけでもないんだけど」

　力が抜ぬけた。いい意味で。

　モリーだなあ、とマリアローズは思った。モリーはやっぱりモリーだ。モリー・リップスだ。すごく疲れてはいそうだし、髪なんかもボサボサだし、着ている女性用ナース医術士服・ユニだって汚よごれ放題だが、ちっともみじめじゃない。必ずしもきっちりしているわけじゃない、だらしないところはけっこうだらしなかったりするのに、凜としている。明らかに無茶をやっているのに、無理をしているようには見せない。モリー自身、無茶だとも無理だとも思っていないのだろう。何があってもくじけない。何にも屈くつしない。悠ゆう々ゆうと、飄ひよう々ひようとしている。しなやか

に、強い。僕のモリーだ。

　マリアローズは息を整えながら、ゆっくりとモリーに歩みよる。モリーはしゃがんだままだ。マリアローズを見上げて、笑ってみせる。マリアローズは少しかがんで、モリーを抱きよせた。自分の胸にモリーの顔を押しつける。「モリー、お疲れさま」

　モリーは何も言わなかった。しばらくの間は黙だまってマリアローズに身を預けていた。しばらくというか、ほんのちょっとの間は。

「わはははははっ!?　あはっ!?　きゃはははははは っ!?」マリアローズはモリーを突つっ放そうとした。「ちょ、モリー!?　やめて!?　くすぐったいってばねえ！　あはは!?　やはははははははは!?　きゃはははははははははははは……!?」

「い、や。やめない」

　モリーはマリアローズのおなかに鼻はな面づらをこすりつけて、ぐりぐりする。脇わき腹ばらをこちょこちょする。脇の下に手を突っこむ。

「ダ、ダ、ダメだってばそこは！　ダメっ！　ダメだからホントに、ね!?　あぁ、もぉっ、ちょっ、うぁっ、は……んっ！」

「いーぃ声。ご馳ち走そう、ご馳走。これにまさるご馳走って、思いつかないわー」

「や、そんな……とこっ！　いっ……くら、モリーでも……あっ、うっ、はっ、こ、こ、こら……っ！　モリー、お願いっ、だか、ら……っ」

「なんか、気持ちよくなってきちゃった。ねえ、いい？　このまま――」

「いいわけないだろっ！　てゆうか、何がだよ！　ダメ！　ダメ、ダメ！　絶対ダメ！　はーなーれーてーっ！」

「……ちぇっ。相変わらずねえ。減るものでもあるまいし」

「減るの！　僕の場合は！　しっかり減るんだから！」



　ベアトリーチェがくすくす笑っている。彼女だけじゃない。広間ホールにいる人たちも、半分くらいは呆あきれているかぽかんとしているが、残りの半分はにやにやしたり大笑いしたりしている。今も戦いは行われていて、人が死んでいて、ここにも死んだ者たちが大勢いるわけで、不謹きん慎しんといえば不謹慎なのだろう。でもこの悲ひ愴そう感のなさは、おそらく、どんなときも暗くならない

モリーの影えい響きようで、それは決して悪いことではないはずだ。

「──って、僕はこんなことしにきたんじゃないし！　避ひ難なんだよ、避難！　避難ってゆうか、退避!?　退避ってゆうか、移動!?　僕たちはエルデンに乗ってきたんだ！　この城はもう保もたない！　先のことはわからないけど、とりあえずエルデンに引っ越すってことで、ヨハンとも話がついてるから……！」

　モリーはすぐにてきぱきと指示を出しはじめた。さすがモリーだ。やるとなったらとにかく迅じん速そくだし、無駄がない。とはいえ一つだけ、死者の扱あつかいに関してだけは、モリー・リップスといえどもいくらか迷ったみたいだ。それでも何秒か考えこんだだけで、モリーは決断を下した。「全員運ぶのは不可能ね。退去が完かん了りようしてから、火をかけましょう。それ以上のことはしてあげられないわ。お別れをしたい人は今すぐすませて。そう長い時間はあげられない。さあ、急いで！」

　マリアローズは広間ホールを見まわした。とりたてて目的も意味もない。なんとなくだ。何か虫の知らせめいたものがあったとか、あとづけしようと思えばできないこともないけれど、そんなものはなかった。

　目がとまった。

　一人の、床ゆかに身を横たえている男に。

　ひどい有様だ。上半身と下半身が、切り離はなされているというか、腰こしのところが吹ふっ飛んでしまっている。頭も割れている。男は目を閉じている。当然、動かない。生きていない。明らかに。死んでいる。完全に。

「荊王ジンワン」

　目を疑ったとか、心底魂たま消げたとか、そんなことはなかった。だって、ありうることだ。戦いなんだから、人が死ぬ。誰が死んでもおかしくはない。まあ、こういうことだってあるよね。それだけのことでしかない。

「……マリアローズ」と、ベアトリーチェに声をかけられた。

　マリアローズはベアトリーチェのほうを見なかった。荊王を凝ぎ

よう視ししていた。

　穏おだやかな顔をしている。もっとも、だいたいの死者はそうだ。筋肉も何もかも、死ねば崩ほう壊かいが始まる。死んだ者は苦痛にゆがんだ表情を維い持じすることさえできない。ただ、生きている者の目には安らかな顔つきのように映る。それだけだ。荊王がどうやって、どんな思いを抱かかえて死んだのか。最さい期ごの瞬しゅん間かんに何を見たのか。マリアローズにはわからない。べつに知りたくもないし、知らなくたっていいことだろう。

「マリアローズ。あの男は、ここを守って死んだんだ。あの男が命を捨てなければ、天守は敵に蹂じゅう躙りんされていたかもしれない」

「そっか」マリアローズは頭を振った。聞きたくない。どうでもいい。僕は嫌きらいだった。最初からして、印象は最悪だったし。実害も被こうむった。歯を抜かれたりもしたし。とんだ変態野や郎ろうで、気色の悪い、わけのわからないやつで、大っ嫌いだった。悲しくなんかない。もちろん、寂さびしくもない。「……そっか。人の役に立って死んだんだったら、悪くないよね。よかったんじゃないかな。それなら、それで」

　なんだか変な感じだ。僕は妙みようなことを言っている。思ってもいないことを。まるで社交辞令みたいな。そんな当たり障さわりのないことを言う必要なんかないのに。ぴったりな言葉がどうしても出てこない。見つからない。きっと、何もないんだ。僕はなんとも思っていない。どうってことはないのに──なんだろう、張りあいを失った、みたいな。張りあいも何もないんだけど。まあ、無関係とまでは言えないしね。知ってることは知ってるし。仮にも面識のある人が死んだら、こんなものだよね。僕だって、そこまで冷血でも非情でもないし。人並みの情は一応、持ちあわせているわけだから。べつに、おかしくはないよね。そっか。死んだんだ。死んじゃったんだ。そうだったんだ。そっか。

　天守には自力で動けない者はほとんどいなかった。歩行が困難な者の補助は元気な子供や老人に任せた。モリーとベアトリーチェが中心となって、天守からの撤てつ収しゅう作業は粛しゅく々しゅくと進められた。マリアローズも多少は手伝った。天守の中に生きている者が一人もいなくなると、そこらじゅうにばらまいた燃料にモリーが火をつけた。火はあっという間に燃え広がった。煙けむりをあげる天守に背を向けて城門付近まで行くと、番人たちが護衛につ

いてくれた。そういえば、アジアン、いないな。いいけど。いなくたって。いないほうがいいんだけど。あんなやつ。

　とりあえず今のところ、城門一帯から敵はほぼ駆く逐ちくされている。安全とまではいかないが、大きな危険はない。おかげで、半ば以上破壊された城門から出る際も、混乱らしい混乱は起こらなかった。そこからエルデン南門跡あとまでは、おおよそ百メーテルといったところだ。たいした距離じゃない。人々が列をなしてエルデンへと向かい、番人や昼ラン飯チタ時イム、その他の武具を携たずさえた男女が列の両側について、これを守る。エルデンが着地時に相当数の敵戦力を押し潰つぶしてしまったことも効いているようだ。敵の動きはすこぶる鈍にぶい。引っ越しは思いのほか順調に運んだ。非戦せん闘とう員はもうエルデンに収容されつつある。あとは戦闘員が戻もどってくれれば完了だ。

　懸け念ねんはある。キング・グッダーなりジュジなりと示しあわせているわけではないので、いつエルデンが浮ふ上じようするかわからない。もしかしたら、エルデンはこのままここに居座ってしまうかもしれない。

　ただ、そんなに心配することはないだろうと、あまり楽天的じゃないマリアローズでも楽観視していた。エルデンがここにとどまる理由はなさそうだし、籠ろう城じようしていた人々を救うのでなければ、キング・グッダーやジュジもあえてこんな位置にエルデンを着陸させたりしなかったはずだ。きっと何か企たくらみがあるのだろうが、そのへんは今あれこれ考えてもしょうがない。

「エルデンに……！　みんな、エルデンに入って……！　早く……！」

　マリアローズは声を張りあげながら、敵も味方もまばらな戦場を駆かけまわった。次々と味方が引き返してくる。その中にユリカと飛フエイ燕ヤンの姿があった。──飛燕。

　マリアローズは足を止めて、胸に手を押しつけた。

　飛燕はユリカの手を握にぎっている。ユリカはいやがっているけれど、本気じゃない。場ば違ちがいなくらい、飛燕は楽しそうにけらけら笑っている。

　荊王あの男のこと、飛燕になんて言おう。

暁のエルデン第九区旧闇市

　この扉とびらまでたどりつくには、地上から地下に入って、また地上に出て地下へ下りなければならない。

　鍵かぎはなくしてしまった。処分したのだったか。ふたたび戻ってくるとは思ってもみなかったし、よく覚えていない。しょうがないので、ノブを壊こわして扉を開けた。その先は狭せまい小部屋になっている。さらに扉を開けた。真っ暗だ。手て探さぐりで照明をつける。半永久灯は生きていて、ちゃんとついた。

　さして広くはない。革かわ張りの長なが椅い子すが置いてあって、台所がある。小さな冷蔵庫がある。それだけの部屋だ。その気になれば何日でも暮らせるが、何しろ地下室だし住み心地ごこちがいいとは言えない。この部屋はあくまで隠かくれ家がの一つにすぎなかった。

　飛フエイ燕ヤンは長椅子に腰を下ろした。

　右の拳こぶしで左の掌てのひらを叩たたく。何回か。

　何度も。

「──ぁーンでオレ、ココにきたンかなァ。さんざん闇市回って……つゥーかよォ、ココじゃなくたってよくね？　ン～。なんでかねェ。しィーてゆえばアレか。テメェーはたまにココで料理とかしてたよな。ほッとんどココでしかしてなかったっぽいよな、タブン。何？　趣しゆ味みっつゥーの？　そォーゆーの何ッにもねェーテメェーがよォ、自分で料理してたよな。たまァーに食わせてくれたよな。ウマかったんだよな、アレ。テメェーはよォ、妙に器用で、ワリと何でもできちまうヤツだったんだよな。ケド、料理はなんッか違ったよな。ケッコー地味に楽しんでたっぽくね？　凝こってたしな。玄人くろうとハダシっつゥーの？　見み栄ばえとかもそれなりによかったりしてな。ウマかったんだよ、テメェーが作ったメシは。ユリィは、まァ、アレだかンな。ココだけの話だけどよォ、上手とか下手とかそォーゆー問題じゃなかったりするしよォ。ユリィが作ってくれたらそりゃァー味とか度外視でウメェー

に決まってるっつゥーか。テメェーのメシは、でも、ウマかったよ。だから何なんだよってカンジだけどな」

　言葉が途と切ぎれると、思考も途絶えた。

　考えようとする。ここにきたわけ。エルデンの、闇市の外れにある、この隠れ家に、しかも、一人で。あいつの作ったメシはウマかった。それが理由か？　そんなのが？　違うとして──じゃあ、他ほかに理由が？

「さァーね……」

　長椅子の背もたれに背中をあずけて、脚あしを軽く組む。

「なんッか、すッげー疲つかれたなァ。オレっぽくねェーケド……」

　それが果たして、本当に疲ひ労ろうなのかどうかも定さだかではない。飛燕は上体をのけぞらせて、胸の上で両手を握りあわせる。

「脳が動かねェーよ、ジン」

　いつかこォーなるかもなァーなんて、オレァ考えてたかな？

　どォーだろうな。

　考えてなかったかもな。

「テメェーを失うなんてよォ……」

　ため息が出る。あるいは、ため息しか出ない。

　正解はどっちだ？

「ハ……ッ！」

　だしぬけに叫さけび声のような、気合いのようなものを発して、飛燕は跳とび起きた。冷蔵庫に襲おそいかかる。蹴けりを入れると、冷蔵庫は壁かべに激げき突とつして、こっちに倒たおれてきた。そこをまた蹴った。金属製の冷蔵庫は蹴るごとにひしゃげた。何発目かで扉がぶっちぎれた。バラッバラになって、わずかな中身をぶちまけた。破は片へんを踏ふんづける。踏んで、踏みにじっ

て、壁めがけて蹴飛ばす。壁を蹴る。穴があいた。さらに蹴る。蹴り破って、蹴り崩くずす。蹴る。何度でも蹴る。回し蹴り。後ろ蹴り。回し蹴り。蹴る。蹴る。蹴る。蹴る。蹴る。蹴る。蹴る。蹴る。蹴る。蹴る。蹴る。蹴る。蹴る。蹴る。蹴る。蹴る。蹴る。蹴る。

　息があがっている。

　長椅子に、倒れこむように座った。

　隠れ家は、壁といわず床といわず天てん井じようといわず、めちゃくちゃだ。長椅子と、それから台所をのぞいて。

　台所に立ってフライパンを振ふっている相棒の姿が、ふと目に浮うかんだ。

「相棒……な」

　同郷で、いわば同業者だった。話が通じそうなやつだと見こんで手を組んだ。お互たがい様さまだろう。ようは利害が一いつ致ちしたということだ。それ以上でもそれ以下でもなかった。こんなつきあいになると少しでも想像しただろうか。しなかった。一人の男としては、とくに好きでも嫌いでもない。好き嫌いなんて問題じゃない。飛燕には致ち命めい的てきに足りない部分があり、それは荊王も同じだった。その不足と不足を補いあうことが自然とできた。二人は嚙かみあっていた。まるでまったく似ても似つかない双ふた子ごのようだった。

「頭ァ、バッコシ、真っ二つに割られちまったみてェーだ」

　涙なみだは出てこない。

　喪そう失しつ感かんは間違いなくあるが、悲しくはない。

「何くたばってやがんだよ、ジン。テメェー、なんでくたばりやがった、バッカヤロォーが。テメェーなんかクソバカヤロォーだ。子分どもだって、ろくすっぽ残っちゃいねェー。どこもかしこもヒデェー有様だ。でも、オレとテメェーさえいりゃァー立て直せたんだ。どうにでもなったんだ。テメェーがいなくなっちまったら──クソッ……」

　長椅子に寝ね転ころがる。身体からだを丸める。右手の親指を嚙んだ。きつく、嚙んだ。こんな姿、ユリィに見せらンねェーと飛燕

は思う。たかが相棒がくたばったくらいでよォ。たかが、じゃねェーケド。ユリィ、メッチャクッチャやさしくしてくれて、慰なぐさめてくれそォーだけどよォ。ユリィだし。きっと、慰めてくれよォーとしてたんだけどよォ。断っちまったじゃねェーかバカヤロォ。ハゲ。クソがァ。だァーってよォ。今は、そォーゆゥーのは、な。なんッか違う気もするしな。そりゃァーな？　やさしくされてェーけどさ。慰めてもらいてェーよ。でも、オレはむしろ、ユリィにやさしくしてェーワケだし？　カッコつけてェーじゃん、ソコはヤッパ。カッコいいオレでいてェーワケじゃん。百パーはそうじゃいらンねェー、無理の無理スケだって、ユリィにはバレてんだろォーけどな。見破られちまってんだろォーケド。でもさ。それでも……さ。

「……アホスケがァ。ジン、テメェーのせェーだぞ。テメェーがオレに断りもなく死んじまったりすッからよォ。どォーせテメェーはそォーゆゥーヤツだよ。テメェーのコト、軽く考えすぎなんだよ。ンな軽いワケねェーだろォーが。調子ぶっこいて自己犠ぎ牲せいとかしてンじゃねェーよタコ。今テメェーがオレの前にいたら、ゼッテェー張っ倒す。半殺しにしてやるトコだっつゥーの。まァ、できねェーケド。アァ……ちぴっと、すっきりしてきたな。しゃァーねェーしな。テメェーはテメェーなりに選んだんだろォーしな。なんとなくテメェーらしィーッちゃァーテメェーらしィーカンジもするよな。結局、そォーゆゥーモンだよな。オレもオレっぽくしか生きらンねェーワケだし。いかにもオレっつゥーカンジで死ぬ予定だし。オレはモチロン、まだまだそっちには行かねェーけどよォ。一人で茶ァーでもすすってやがれ。オレはオレでユリィと楽しくやるっつゥーの。イヨシッ！」

　グルンッと身体を横回転させて長椅子から下りるなり、勢いよく立ちあがった。

　両頰ほおをピシャリと叩く。

「終わり終わりッ！　コレでオレァ完かん璧ぺきもとどォーりだぜッ！　ンじゃァーな、あばよ、ジン。もォーテメェーのことなんざァ思いだしてやンねェーかンな。ゼッテェー思いださねェー。先にさっさとくたばりやがったテメェーが悪わりィーんだよ。さァーて、まだ早はえェーけど、ユリィに会いに──ウオ……ッ⁉」

　地面が大きく揺ゆれて、少し傾かたむいた。

　エルデンはとうに浮上して、現在、飛行中だ。急に方向転てん換かんでもしたのか。

「──イヤ」飛燕は唇くちびるをぺろっと舐なめた。胸が躍おどっている。「違うな。コイツァなんッかあったかァ……？」

第四区・銀の砦

　今、揺れた……よね？

　目が覚めた瞬しゅん間かん、そう思って起きあがった。部屋の中は暗い。でも、厚いカーテンの隙すき間まから、薄うすく細い光が射さしこんでいる。外はもういくらか明るいのか。誰だれか身体を起こしている。「……トマト？」

「ああ」

「揺れたよね？」

「うむ」

「魚ぎよひょっ!?」と、カタリが跳はね起きてきょろきょろした。「な、なんやぁっ!?　ここでわしの出番かァーイ……ッ!?」

「……それはどうかわからないけどね」

　マリアローズは窓に近づいてカーテンを開けた。日はまだ昇のぼっていないみたいだが、そろそろ早朝と言ってよさそうな具合の空だ。遠くに何か光みたいな、炎ほのおみたいなものが見えた──ような気がする。いや、気がするじゃない、見えた。一度じゃない。何度も。

　サフィニアがマリアローズの隣となりにやってきて、眉まゆをひそめた。「魔術……？」

　ユリカが、くふん、こほん、と咳せきをして、身体を起こした。「……え？　何か……どうかしたの……？　みんな、起きてりゅの……？」

なんか、る、が、りゅ、になっていて、やたらとかわいい。ユリカは昨夜、眠ねむるのが遅おそかったみたいだ。ちょっと寝ねぼけているのかもしれない。

「傾いて・イル……」とピンパーネルが、それからハニーメリーが「あ……ほんとだ」と呟つぶやいた。

言われてみれば、たしかに床ゆかがちょっとだけ傾かしいでいる。

「敵の襲しゅう撃げきかな」ロム・フォウがドアを開けると、アルファがぶるんっと身を震ふるわせて外に飛びだしていった。ロム・フォウがつづいて、きゅーも「くうっ！」とあとを追う。

「トマト」とトワニングが声をかけると、トマトクンが鼻をひくつかせてから一つうなずいてみせた。「──どうも不愉ゆ快かいなにおいがするな。行くか」

ＺＯＯは銀の砦支し塔とうの一室と寝しん具ぐを借りて雑魚ざこ寝ねしていた。ＺＯＯだけじゃない。今、エルデンにいる人間の大半は、銀の砦とその周辺に集まっている。堅けん牢ろうさからいっても、設備からいっても、広さからいっても、銀の砦にまさる建物はまずないので、とくに反対する者もなくそういうことになった。部屋を出ると、支塔の中は騒そう然ぜんとしはじめていて、外にも番人がちらほらいた。

見張りが立てられていたので、その報しらせを受けて駆かけつけてきたのだろう。ヨハン・サンライズが刀を引っ提げて主塔から出てきた。「──先代！　空襲のようです！」

「みたいだな」トマトクンはあからさまに邪じや魔まそうな髪かみの毛をかきあげ、空を見ている。

「……トマト、その髪、切ったげようか？」

「む？　ああ、そうだな。今はあれだし、そのうち頼たのむ」

「わ、わたしがっ……」サフィニアが猛もう然ぜんと挙手した。「き、き、ききき切り、切り、切り、切りましょう……か……っ？」

「あっ」マリアローズは手で口をふさいだ。「そっか。だよね。サ

フィニアは料理とか上手だし器用だから僕なんかよりうまいだろうし、サフィニアに切ってもらえれば？」

「とりあえず」と、ロム・フォウが、ささっとトマトクンの髪の毛をくくって、ポニーテールにした。「こうしておけばいいんじゃないかな」

「おお」トマトクンは片方の眉をくいっと動かして、肩かたを上下させた。「意外といいな」

　サフィニアが「っ……」と唇を噛んで、横目でロム・フォウを見た。微び妙みようにヒヤッとしないでもなかったが、サフィニアの視線を受け止めて、ふふっ、と悪戯いたずらっぽく笑ってみせたロム・フォウの表情が、なんというか、サフィニアをからかって楽しんでいるわけじゃなくて──マリアローズの気のせいかもしれないが、どこかお姉さん目線で、サフィニアを煽あおりつつ、本当にトマトが欲ほしいなら、もっとがんばらないとだめだよ、と応おう援えんしている、みたいな。考えすぎかな。

「空襲か」ロム・フォウは振り仰あおいで目を凝こらした。「──いるね。邪じや竜りゆう？　いや。邪竜にしては小さいかな。数は多い。でも、あれはかなり大きい……」

「ヨハン！」トマトクンが怒ど鳴なった。「地じ獄ごくの竜りゆう騎き兵へいどもだ！　ここを見つけたら、おそらく押しよせてくる！　戦えるやつ以外は奥に引っこませておけ！　戦えるやつは全力で砦を守るんだ、防戦に徹てつしろ！　いいな！　俺たちはやつを引きつける！」

「わかりました！」ヨハンは腕うでを振って指示を出しはじめた。「総員、持ち場について守りを固めろ！　別命あるまで、銀の砦から出ることは罷まかり成らん……！」

　トマトクンが駆けだした。ついてこいとも、くるなとも言わない。でも、トマトクンは、俺、じゃなくて、俺たち、と言った。ＺＯＯは即そく座ざに追いかける。

「トマト、やつって……!?」

「アーマンだ」トマトクンは振り返らずに答えた。「たぶん、やつがくる」

　悪グラ魔ンヴ大エリ公オンアーマン。マリアローズはまだ出くわしたことはない。ただ、ソオルから、そしてトマトクンから、話だけは聞いた。数いる悪魔の中で、もっとも警けい戒かいすべき悪魔。マリアローズなんかだと警戒したって無む駄だだろう、恐おそろしい悪魔。その実力はあの大ハイ公ヴエリ爵オンより一段も二段も上らしい。というか、別次元らしい。トマトクンは獄ジエのイルネ獄イルに囚とらわれていた。トマトクンを捕とらえたのがアーマンだ。地獄の帝てい王おうの息子むすこ。あるいは、分身だともいう。見たことがないのでわからないが、きっとものすごく、とんでもなくおぞましい姿をしているのに違ちがいない。アホみたいにでっかかったりとか。

　ふと、生きて戻もどれるかな、とマリアローズは考えた。モリーとリーチェに、もう一回、会っておけばよかったかな。きりがないか。いつだって、これが最後かもしれないって思ってるし。覚かく悟ごはとっくにできている。

　荊王ジンワンのことが頭をよぎった。死ぬときは死ぬんだ。いつ死んだっておかしくない僕は、でも、まだ生きてる。

　銀の砦をあとにすると、風が強まった。何しろエルデンは空を飛んでいる。どれくらいの速度で飛んでいるのか。よくわからないけれど、馬車よりは遥はるかに速いだろう。上空だとただでさえ地上よりも風が強かったりするらしいが、高速で移動しているぶんさらに強きよう烈れつな暴風が吹ふき荒すさぶ。正直、マリアローズは走るのがやっとだ。というか、前にも横にも仲間がいて風よけになってくれているので、なんとか全力疾しつ走そうできている。

「マリア……！」

　──と、変な、気持ち悪い声が聞こえた。

　見上げると、黒い馬ば鹿かが飛んでいた。

　マリアローズはうつむいて舌打ちをした。「……なんでくるかな」

「ちょうどいい！」トマトクンが顎あごをしゃくってみせた。「アジアン！　お前はけっこう速そうだ！　囮おとりになれ！」

「ハアアアア

アァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ!?　このボクがキミの指図を受けるとでも……!?　だいたいボクは、もう何一つ後こう悔かいしたくないから、マリアのそばにいるために……！」

「マリアローズッ！」カタリがマリアローズの肩を叩たたいて、片目をつぶってみせた。もとい、片半魚眼をつぶった。こんなにへたくそで不ぶ恰かつ好こうなウインクもそうそうないだろうと思わざるをえない、ひどいウインクだ。「ここはいっちょジブンのアレやで！」

「何だよアレって。脳が魚並みだからそうやって何でもアレとかコレとか指示語ですませて、そういうことやってると脳がもっとアレなんだから……」

「ジブンも今、アレってゆうたやん？」

「うっさいな！」マリアローズはカタリの後ろ頭をひっぱたいた。カタリは痛いとも言わずに「魚ぎよっほほほほ」と笑っている。あーもうむかつく。やだなあ。でも、こういうときだし。危急の際だし。しょうがない……のかな？　むちゃくちゃいやなんだけど。なんだか、泣きたくなってきた。泣かないけど。ちょびっとだけ、涙なみだ目めになってしまっているかもしれない。風も強いし。

　マリアローズは足を止めて、胸を押さえ、一度、深呼吸をして、アジアンに視線を向けた。アジアンは黒こく翼よくを力強く羽ばたかせ、強い風に逆らって、食い入るようにマリアローズを見つめている。マリアローズは唇をすぼめて息を吐はいた。やだやだやだやだ。やなことはさっさとすましちゃおう。「──お願い、アジアン。囮になって、敵を遠くに誘ゆう導どうして。みんなの安全のためなんだ」

　馬鹿一号は「フッ……」と笑って親指を立ててみせた。「任せてくれ、マイスウィーテスト。ボクにかかれば、すべての敵は遥か彼方かなたまで誘導されて二度と帰ってこないヨ。というかむしろ、ボクが全ぜん滅めつさせてやるサ。もしキミがそれを望むのならネ」

「あ、そお？　じゃ、がんばって？」

「オーケイ。お安いご用サ」

　馬鹿一号はそう言うと、両手の親指と人差し指を組みあわせてみせた。

　何だろ、あれ。

　もしかして、ハートマーク……？

「極ラヴ限マツ愛クス」

「……うん」

　早く去れ。光の速さで。

　てゆうか、消えろ。永遠に。

　口に出してしまわないように、必死で我が慢まんした。

　馬鹿一号は幸せそうな顔をしてピューッと飛んでいった。そっちの方向に目をやると、雲うん霞かのごとき黒い点が空を汚よごしている。まだ距きょ離りがあるので、マリアローズには黒い点にしか見えないが、トマトクンが言っていた地獄の竜騎兵どもとやらなのだろう。どうやらすっごい大軍っぽい。さすがにあの馬鹿一人で大丈夫なのかなと思わなくもないけれど、やばかったらやばかったでまあ、どうにかする――んじゃないかな。

「……平気、だよね」

　ひとりごちて、マリアローズは仲間たちを追った。仲間たちはかなり速度をゆるめてくれていたので、すぐに追いつくことができた。

　トマトクンがちらっと振ふり向いた。「あいつが心配なのか、マリア」

「しっ、心配なわけないだろ、あんなやつ、だ、誰だれがっ」

「大丈夫だと思うぞ。あいつはなかなかやる。自力で飛べるしな」

「だ、か、らっ！　べつに、心配なんかしてないってばっ！」

「いいけど、動どう揺ようしすぎじゃない？」ハニーメリーに平然と突つっこまれて、思わず理性を失ってしまいそうになったが、こ

らえろこらえろこらえろ。こらえるんだ。負けるな。こらえろ。石の上にも千年。万年。じゃなくて、三年？　三年だ。だけどそもそも、石の上にも三年ってどういう意味だったっけ。ええとたしか、ひやっこい石でも、三年くらい座りつづければあったかくなるよ、みたいな？　根気強くやりつづければ成し遂とげられるものだよ、みたいな？　だとしたら、なんか関係なくない？　いいか。どうでも。いいよ、どうだってもう。

　ＺＯＯは環かん状じよう通から中通りに入った。このあたりは大食グラトン小路アレイだ。あのサイコロ型の小さな建物。かつて外がい壁へきをびっしりと埋うめつくしていた青イン藍色デイゴのタイルが、あちこち剝はがれてしまっている。ヌー・ベイル。ヌー・ベイル・アデフェット・ウィットだ。予約しないとまず買えない至高のチョコレート、あのおいしさというよりも官能的な感覚は、蘇よみがえらせようとして蘇らせられるものじゃない。味わわないと絶対に体感できない。ソング・マニシュッテ・ラクレーロは無事だろうか。もし彼がどこかで命を落としていたりしたら、全人類的な観点からいって大きな損失だ。なんとか生きていてくれるといい。できることなら、また彼がつくった菓か子しの数々を賞味したい。この状況では、きっとそれはとても贅ぜい沢たくな、贅沢すぎる望みなのだろう。生きていられれば御おんの字なのだ。とくにマリアローズのような者にとっては。それはわかってるんだけど。

　エルデン。やっぱり、この街はつらい。どうしてもあの日々を思いだしてしまう。ここにも、あそこにも、思い出がこびりついている。いいことばかりじゃなかった。超最低ＳＵＣＫなこともいっぱいあった、ありすぎたくらいだ、それなのに、この街が自分の身体からだの一部みたいに感じられて、荒こう廃はいしきった街並みを見ているだけで胸が苦しくなる。

　不意にマリアローズは思った。こんなふうに何もかもぶち壊こわされて、とりもどすことなんてできそうにない、だったら僕たちは何のために、何をしているのだろう。

　頭を振る。ダメだ。余計なことを考えるな。失ったものはいろいろあるけれど、何もかもなくしてしまったわけじゃない。僕には仲間がいる。友だちがいる。みんなで一いつ緒しよにいられる場所を見つけて、確保するんだ。これはそのための戦いだ。振り返るな。前を見ろ。前だけを。

「くる……！」とロム・フォウが叫さけんだ。ああ。きた。きた

よ。きちゃったよ。それは緑色だった。蜥蜴とかげみたいな。もちろん蜥蜴なんかじゃない。蜥蜴にしてはでかすぎるし、第一、それには羽があって、飛んでいる。飛んでくる。長い胴どう体たいと尻尾しっぽをときおりくねらせて。四し肢しはしっかりしている。手指は器用そうだ。「──竜……」まぎれもない。竜だ。竜もどきと言うべき悪あく魔ま、邪じや竜りゆうとは明らかに違う。なんというか、立派だ。どこからどう見ても、たぶん誰が見ても、一目でそれは竜以外の何物でもないと確信するだろう。だいぶ近い。そう思ったのは竜があまりにも巨きよ大だいだからだった。どうやらまだ遠い。それなのに、あんなにでかい。遠近感が狂くるう。怖こわい。やばい。何、この恐きよう怖ふ感かん。身体が痺しびれる。心まで痺れている。竜。あの竜は獣けものじゃない。怪かい物ぶつでもない。きっとあの竜は賢かしこい。もしかしたら、人間なんかよりもずっと。だけど竜？　なんで竜が？　ひょっとして竜まで敵に回っちゃった？　悪魔と手を組んで？　そんな。竜がこっちに首を向けた。身体の向きもこっちに変えようとしている。口を開けた。息を吸いこむ。

「息吹ブレスだ……！」トマトクンが大カタ懺スト滅ロフ刀アーを振りあげた。「全員、俺の後ろに！　サフィニアは魔術で防げ……！」「は、はい……っ！」サフィニアはただちにトマトクンのすぐ後ろについて、白い光を放った。光がマリアローズたちを包みこむ。トマトクンはひとり前に出て大カタ懺スト滅ロフ刀アーを展開させ、大きな盾たてみたいな形にした。その直後だった。ＶＡＡＳＳＳＳＳＳＳＳＳＳＳＳＳＳＳＳＳＳＳＳＳＳＳＳＳＳＳＳＳＳＳＳＳＳＨＨ……！　炎ほのおなのか稲いな妻ずまなのか。よくわからない。何かそんなようなものが竜の口から噴ふきだした。いやー。これはね。死ねるわ。普ふ通つう、死ぬって。間違いなく。「おお」これ、僕の声？　それとも、誰かの？　仲間の？　どうなっちゃってるの、今？　マリアローズは何かにしがみついている。そうせずにはいられなかった。吹っ飛ばされるっていうか、かき消されちゃいそうで。「あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ……！」「ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご……！」「う、う、う、う、う、う、う、

う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う……！」苦しいんだか、痛いんだか、おっかないんだか、逆に楽しいんだか、何がなんだか。とにかくもうダメかも。音をあげそうになったころ、ようやくそれは終わった。それ？　それって何って感じではある。まあなんにしても、死にはしなかったみたいだ。気がつくとマリアローズはユリカとしっかり抱だきあっていた。
「……な、なんかごめん、ユリカ……」「わ、わたしこしょ……」「─こ、これがホンマモンの息吹ブレスかい……！」カタリは人間じゃないだけに、半魚人だけあって、無む駄だに元気みたいだ。「初めてまともに食くろうたわ！　ちゅうか、食らっとったら、いっくらわしでもひとたまりもなかったかもしれんけども！」「カモじゃない……」ピンパーネルが冷静にもっともなことを言った。「ヌウウムッ……！　だがしかし、なぜ竜が……!?」とトワニングが全身の筋肉をピクピクさせて吼ほえたら、なんと─返事があった。

　ワ　われは　リュ　りゅう　デア　である　リュ　りゅう　ニシ　にして　ジゴク　じごくの　テイオウ　ていおうへいか　ニに　ツカエ　つかえるものでエエエ　アル　ある　ワ　ワ　われは　リュ　りゅうの　ダイ　ダイコウ　だいこうしゃく　ドラゴどらごにる　ハイヴェ　はいヴェりおん　ワ　ワ　ワ　ワアアアア　われは　ワ　ワガ　わがなはアアア　ゲルマニオン─ワッヴァール─パプティアン─ブリッケス─フォンドール─グェハブナス　デ　デ　デ　デ　デエエエエエエエ　であるウウウウ

「てゆうか……吐き気が……」頭も痛い。マリアローズはえずきそうになった。何だよ、あの声。ぐわんぐわん鼓こ膜まくを震ふるわせて、内臓にまで響ひびく。「竜の大公爵だと？」トマトはぜんぜん平気みたいだけど。「そんなやつがいるとはな。物好きな竜だ」「……わたしが、相手を……！」サフィニアが飛びあがるなり、ゲルマニオンとかいう名前らしい竜に何十本もの白い光線を浴びせた。光は竜の鱗うろこを貫つらぬいてはいるみたいだ。でも、竜は何の痛つう痒ようも感じていないようで、悠ゆう然ぜんと羽ばたいて滞たい空くうしながら、ゆったりとサフィニアを目で追っている。ニ　ニ　ニ　ニンゲエエエエン　の　マ　マ　まじゅつしイイイイイイ─あああああああああああもうやめて、その声。とか言ったって、やめてくれるわけないけど。ゲルマニオンが、ふうっ、とサフィニアに息を吹ふきかける。といっても竜の息だ。帯のような炎がサフィニアに襲おそいかかる。サフィニアは真っ白い突とつ風ぷうのような光でそれを振りはらう。ヤ　やるでは　ナ　ないかア

アアアア──ゲルマニオンは、ふうっ、ふうっ、と立てつづけに細い息吹ブレスでサフィニアを狙ねらう。サフィニアにはきかない。そんなことはゲルマニオンもきっとわかっているはずだ。どうもゲルマニオンはその竜顔に笑えみを浮うかべているように見える。遊んでいるのか。ゴハ　ゴハハ　ゴハハハハ　ゴハハハハハハハハハゴハ──マリアローズは手で耳をふさぎ、「うひぃ……」と情けない声をもらしてしゃがみこんだ。たぶん笑い声なのだろう。たまらない。きっつい。おまけにゲルマニオンは尻尾でビタンビタン地面を打ちはじめた。ビタンビタンというかドッカンドッカンだ。ゲルマニオンの尻尾が打ち振るわれるたびに、建物が粉ふん砕さいされる。何軒けん、何棟とうもの建物が弾はじけ飛ぶ。エルデンが揺ゆれる。揺り動かされる。エルデンを破は壊かいしながら、ゲルマニオンがゴハゴハゴハゴハ笑っている。「──こ、これはなんとも……ッ！」トワニングが体勢を低くして呻うめいているくらいだから、よっぽどだ。マリアローズは当然としても、ロム・フォウも、ピンパーネルも、ユリカも、カタリも、ハニーメリーもきゅーもアルファも、何もできない。無力だなんて。

　今さらながらに思い知らされる。

　僕らがやりあっているのは、こういう敵なんだ。

「む……！」と、トマトクンが匂においを嗅かぐ仕し種ぐさをした。「──全員、下がれ……！」

　まだ何かあるのか。そりゃあるよね。あるに決まってるよね。マリアローズは這はうようにして近くの建物の陰かげに飛びこんだ。顔だけ出して見ると、さっきまでトマトクンがいた場所に、今は別の男がいる。トマトクンは十メーテル、いや、二十メーテルほども離はなれたところに移動していた。あいつは。

　何だ、あいつ。何ものなんだ。

　その印象を一言で表すと、どうってことない。それでいて、あからさまに変だ。ぜんぶがずれている。なんとなく、この世のものじゃないと思える。それなのに、どうってことないのだ。

　なんであの男はそんなところにいるのか。場ば違ちがいだ。違い和わ感かんしか覚えない。でも、一度目をそらしたらすぐ見失って

しまいそうなほど、存在感が薄うすい。所々に切れこみが入っていて肌はだがのぞいているゆったりした黒と紫むらさきの衣ころもも、にじむような黒々とした瞳ひとみも、闇やみ色の、漆しつ黒こくの髪かみの毛も、何もかもが、よく見れば尋じん常じようじゃないのに。男。だけどあれは男なのか。女のようにも見える。外見年ねん齢れいは、せいぜい十五歳とかそのくらいだ。美び貌ぼうといえば美貌、しかし、どことなく汚けがらわしい。見たところ、どこも汚よごれていないのに、汚お穢わい、という言葉がよく似合う。

　あれにはさわっちゃいけない。マリアローズはそう感じた。あの存在にはふれるべきじゃない。無視したほうがいい。関かかわるべきじゃない。そうもいかないわけだけど。

　トマトクンは膝ひざを曲げ、やや前まえ屈かがみになって、右手の大カタ懺スト滅ロフ刀アー、左手の聖断罪の剣けん、両方の切っ先をその男に向けた。「出たな、アーマン」

　悪グラ魔ンヴ大エリ公オンアーマン。

　あれが。

「ひとを化物か何かのように」アーマンは額を押さえるようにして前まえ髪がみを少しだけかきあげた。「おまえのことはよく覚えている。たしか、二十九の公ヴエリ爵オンと三十四の侯爵ラデオン、二百二十一の伯爵テリオン、子爵アーロン、男ツエペ爵リオン、准ツエ男爵ペリア、二千三百あまりの毒どく竜りゆう殺さつ勲くん爵しやく士し、飛竜殺勲爵士、地竜殺勲爵士、血けつ涙るい一等、二等、三等勲爵士、十四裂れつ、八裂、四裂勲爵士、串くし刺ざし勲爵士、磔はりつけ勲爵士、首切勲爵士の各士爵デビルをたった一人で殺あやめた男だ。私がおまえを捕とらえ、獄ごくの獄に繋つないだのだった。その姿を見るのは、その力を感じるのは、じつに久しぶりだ。逃にげだしたのだな。とりもどしたと言うべきか」

「まあな」

　答えながら、トマトクンはアーマンとの距きよ離りを詰つめる。

　じりじりと。

「ここからまた獄の獄まで連れてゆくとなると一苦労だ。ずいぶん遠い」

「どうせできんから、苦労はしなくてすむんじゃないか」

「私はよく覚えている。おまえは私に負けた。同じ結果になるとは思わないのか」

「貴様とは意見があわなそうだ」

「それは残念」

「見せろよ、アーマン。うわずみ、だったか。違うな。こんがりか？」

「〝暗刈くらがり〟だ」アーマンが右手を横に突つきだすと、その先に黒い色をした炎の柱のような、剣のようなものが現れた。アーマンはそれを握にぎった。「私を知らないのか。おまえは私にふれることもできない。私がそう望まぬかぎりは。それを許さぬかぎりは。たとえおまえが地じ獄ごくの者たちを殺し尽つくすこと能あたうとしても、私と帝てい王おうには傷一つつけることはできない。私を知らないのか」

「知ってるさ。能書きはいい。かかってこいよ」

「では、そうしよう」

　アーマンが、消える。暗刈、というのか。あの黒い炎の剣みたいなものとアーマンが、しゅっ──と、一体化したように見えた。というか、合体した。のびる。暗刈が。トマトクンに向かって、音もなくのびてゆく。トマトクンはズッドォォーンと跳とんだ。ものすごい勢いで横っ跳びして、暗刈から逃のがれようとする。暗刈は追う。トマトクンを猛もう追ついする。マリアローズは「かっ──」と声を出した。トマト、そっちには壁かべが。建物が。もちろんトマトクンだって、そんなことはわかっているだろう。僕が心配しなくたって。「ガアアアアアアアアァァァ……！」トマトクンは大カタ懺スト滅ロフ刀アーを唸うならせ、向かう先の建物を粉砕した。そのまま飛び散る瓦が礫れきの中に突っこんでゆく。でも、暗刈はさらに追いかけに追いかけて、ダメだ、やばいって、とうとうトマトクンを、とらえる──その間ま際ぎわだった。トマトクンはグンッと身を沈しずませた。暗刈がトマトクンのポニーテールをかすめてゆく。よけた。ぎりぎりで、なんとか。トマトクンは転がる。すぐさま跳び起きて、駆かける。暗刈は地面でひょうんっと跳はねて──分かれた……？　分かれた。三つに。暗刈、黒い炎の剣が三本になっ

て、三方からトマトクンに襲いかかる。背後と左右から。「っ……！」マリアローズは声にならない悲鳴をあげた。あれはかわせない。でもトマトだし。何せ僕らの園長マスターなわけだし。だけどなんで。トマトクンはガンッッと地面を蹴けって、立ち止まった。え？　かわさないの？　振ふり返って、大カタ儺スト滅ロフ刀アーじゃない、そっちじゃなくて—聖断罪の剣だ。トマトクンが、にやぁ、と笑う。琥こ珀はく色いろの波打つ剣身が七色に輝かがやきだす。それはまるで、炸さく裂れつする虹にじ。レインボー。聖断罪の剣がきらめき振るわれる。三本の暗刈をまとめて、いっぺんに、叩っ斬っ—ＨＹＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＹＹＸＸＸＧＧＧＧＧＧＧＧ……！　マリアローズは一いつ瞬しゅん、ほんの一瞬だが、気を失った。強きよう烈れつすぎるって。なんて音だ。金属を金属で引っかいた音を一万倍、いや、十万倍に無理やり増ぞう幅ふくしたみたいな。その音はマリアローズの全身をゴッソリ削けずりとった。皮ひ膚ふはおろか、筋肉も脂し肪ぼうも、骨までも削られてしまった。そんなふうにさえ感じられた。そう錯さつ覚かくするくらい危険でおぞましい音だった。その激げき烈れつな音に見あうだけのことが起こったということだ。たぶん、暗刈を斬きるというのは、そういうことなのだろう。おそらく、ありえないことなのだ。それをトマトクンはやってのけた。そして斬られた暗刈はといえば、もともと三本だったのが七つか八つに分断されてヒョロヒョロ地面に舞まい落ちると、そこに淀よどむ汚けがれた闇のごときものに成り果てた。



　こぉぉほおおぉぉれはぁぁああぁぁぁ……わぁぁぁたしにぃぃぃぃふぅぉおぉぉぅれぇぇぁるとぉぉぉぉぅぅぅぅぉおぉはぁぁぁぁぁぁ……そのぉぉぉぉほぉぁぉちぃかぁぁぁらぁぁはぁぁぁそのぉぉぉほぉぉぉつぉぅぅるぎぃぃいぃぃひぃぁぁぁぁぁ……。

「俺とお前は、無む駄だ口ぐちをたたきたくなるような間あいだ柄がらじゃない」トマトクンは淀む闇に駆けよる。「違うか？」

　なぁぁるぉほぅぉどぉぅぉぉたぁぁぁしかぅぁにぃぃいぃぃぃ……──闇が、滑すべるように移動する。風に吹かれた暗雲のように……──わぁぁたしとぉぉおぉぉまえはぁぁあぁぁそのぅぉよぉおなぁぁあぁぁいだがらぅあぁぁではぁぬぅあぁぁあぁいぃぃひぃ……。

「めずらしく意見があったな」トマトクンが聖断罪の剣を振りあげる。すくいあげるように。あふれて弾ける七色の光。淀んだ闇はＨＹＧＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧと引き裂さかれ、散り散りになって、逃げてゆく──ていうか、こっちにもくるんだけど。「──や、ばっ……！」マリアローズは走った。方向とか方角とか考えていられない。とにかく淀んだ闇から遠ざからないと。トマトクンの邪じや魔まをしたくない。足を引っぱりたくない。必死に、ひたむきに、懸けん命めいに、マリアローズは駆ける。振り返らず、腕うでを振って、直感というか本能に従い、ひたすら駆ける。わりと得意だったりするし。逃げるのは。どうしても逃げざるをえないことが多いし。逃げるしかないっていうか。おかげで逃とう走そう能力は勝手に、否いや応おうなく磨みがかれている。地味に自信がなくもない。ちょっとくらいはうぬぼれさせてくれたっていいんじゃないかと思うんだけど、ダメ？　あ、ダメなんだ。そうですか。だよね。マリアローズは「っ……！」と歯を食いしばってちらっと後ろに目をやる。淀んだ闇はまだ追ってくる。引き返せない。右にも左にも建物がある。残念ながら前に進むしかない。ところが、その前方がひどいことになっているので、正直、まいった。竜だよ、竜。ゲルマニオン。あの竜が尻尾しつぽでグワッシャグワッシャ建物だの地面だのをぶっ壊こわしまくっている。サフィニアがゲルマニオンの周りを飛んで白光をズッサズッサ浴びせているようだけれど、相変わらずゴハゴハゴハゴハ笑っているので竜は平気みたいだ。ただ笑っているだけじゃなくて、竜はときおりサフィニアに向かって手をのばす。首をのばして噛かみつこうとする。サフィニアはヒュイッとよける。サッとかわしつつ、白い光をビャァッと放つ。それで鱗うろこが傷つくと、竜はかえってゴヒィーゴヒィーとなんだか嬉うれしそうだ。マゾなのかな、あの竜。変態なんじゃないの。悲しいことに変態には事欠かない人生を送ってきたマリアローズだが、出会った竜まで変態となるともう、変態に呪のろわれていると

しか思えない。しかも今のマリアローズには、そっちのほうに突っこんでゆく以外に道がないのだ。なんてことだ。「──変態、禁止……！」

　自分でもよくわからないことを吐はき捨てながら、ついでに半べそをかきながら、マリアローズは足を動かす。外がい套とうの中からクルルが出てきた。何だろう。クルル、すっごい見てる。僕の顔を。「──危ないから、引っこんでて、クルル！」言っても、クルルは聞かない。変な感じがした。その視線。眼まな差ざし。何か思いだしそうだ。夢──夢？　そうだ。夢を見た。クルルの目がおかしかった。光こう彩さいが赤あか錆さび色で、黒い瞳どう孔こうが縦に裂けていて。違う。クルルの目はあんなふうじゃない。だけどあれを思いださせるような、何かが。マリアローズは頭を振る。夢だ。あくまで夢でしかない。「クルル！　入ってて！」もう一度、さっきよりだいぶきつく言うと、クルルは外套の中にもぐりこんだ。ちらちらと後ろを見る。淀んだ闇とはつかず離れずのいい関係を維い持じしている。ぜんぜんいい関係じゃないって。距離が狭せばまっていないのが救いではあるけど。淀んだ闇から逃げれば逃げるほど、竜に近づくことになるわけで。あと、どれくらい？　何百メーテル？　そんなにあるかな？　ないかも？　竜がでかいせいで測りづらい。のんびり距離を測っている場合でもない。竜の馬ば鹿か野や郎ろうがどこかの建物を破は壊かいした、たぶんその余波だろう。マリアローズから見て右前方の建物がいきなり崩くずれはじめた。瓦礫が落ちてくるんですけど。「もうやだ……！」と叫さけびながらも、マリアローズは道の左側に身を寄せる。踵きびすを返すわけにも立ち止まるわけにもいかない。瓦礫が当たらないように祈いのるくらいしかできることはない。怖こわい。瓦礫はがんがん降ってくる。マリアローズは目をつぶって足を速めた。やっぱり目を開けた。そんな運任せみたいなことをするのはまだ早い。ぎりぎりまで粘ねばって、やれることをぜんぶやりきってからだ。言ってるそばから、や、言ってはないけど、一ひと抱かかえほどもありそうな大きな瓦礫が。マリアローズは半瞬しゅんだけ足を止める。瓦礫が目と鼻の先にズガーンと落ちた。また走る。小さな瓦礫はよけない。バツバツ当たっても気にしない。死にはしないんだから。拳こぶし大の瓦礫がゴーンと右側頭にぶつかったときはよろめいてしまいそうになったが、なんとかこらえて走りつづけた。瓦礫の雨をくぐりぬけると、達成感があった。どうだ、僕だってやればできる……！　まあ、その先には竜が待ち構えているわけなんだけど。待ち構えてはいないか。竜はマリアローズになんか注意を払はらっていない。サフィニアに夢中だ。そこに活路を見いだせないだろう

か。無理か。

　竜がサフィニアめがけて、ふぅっ、ふぅっ、ふぅっ、と細く熱い息吹ブレスを吐きかけながら、尻尾を振りまわした。震しん動どうにあわせて、マリアローズは「うわっ、わ、わっ」と踊おどった。というか、踊らされた。上手に踊らないとすっ転んでしまう。精せいーいつ杯ぱい上手に踊ろうとしたのだが、その甲か斐いもなくつんのめってしまった。「━くっ……！」

　地面に両手をついて見上げると、竜は思ったより近くにいた。なんだかもう尻尾が届きそうだ。そんなふうに見えるだけだろうか。そうかもしれない。そうだといい。そうじゃなかったら終わりだ。竜が次に尻尾を振ったときがマリアローズの最さい期ごだ。逃げないと、とは思った。同時に、でもどこに、という疑問が思考を停止させ、身体からだを硬こう直ちよくさせた。何かが左目に入った。血だ。さっき瓦礫が当たったところか。そこから流れだす血をぬぐった。それよりも先に、やるべきことがありそうなものなのに。こんなふうに選せん択たくを、判断を間ま違ちがって、きっと人は死んでゆくんだ。そんなことを考えた。これでおしまいなんていやだ。超最低ＳＵＣＫすぎる。とはいえ現実問題、マリアローズには打つ手がなかった。まあ、いつものことなんだけどさ。それにしても、こうくるとは。だしぬけだった。

　竜を、竜が襲おそった。

　ゲルマニオンはいかにも竜らしい竜だが、新しく現れた竜はあまり竜らしくはない。それでいて、それが竜以外の何かだと考えるのは難しいだろう。身体つきはゲルマニオンよりほっそりしていて、すばらしく優美だ。その全身を覆おおっている鱗がまた、とてつもなく美しい。まるで真しん珠じゆだ。真珠のような鱗。翼つばさは一対ついじゃない。蜻蛉とんぼの翅はねを思わせる、といってもすこぶる長大で透とう明めいな翼が十枚以上ある。なんて━なんてきれいな竜だろう。あんなにもきれいなのに、なかなか凶きよう暴ぼうらしい。真珠の竜はゲルマニオンの首をグァブッと嚙んで、その背に両手両足の鉤かぎ爪づめを突き立てた。き　キイ　キサマはアアアアアアア━ゲルマニオンが、あのすさまじい声で吼ほえる。ジ　じん　じんりゅう　れ　レインドゥラスううううう　ヴィ　ヴィシュ　ヴィシュクラトーォォォオォォォオオオォォォォオオォォォォォ……━じんりゅう。人竜？　レインドゥラス・ヴィシュクラトー？　ヴィシュクラトーと呼ばれた真珠の竜は、ゲルマニオンを押し倒たおすのかと思いきや、違った。十枚以上、たぶん

十四枚の翼を羽ばたかせる。ヴィシュクラトーは飛ぼうとしている。ブワァッと浮ういた。ゲルマニオンごと。ゲルマニオンは空中で身をよじる。長い首を曲げて、ヴィシュクラトーに嚙みつこうとする。だがヴィシュクラトーは、ゲルマニオンの首にがっちりと牙きばを食いこませている。ヴィシュクラトーが顎あごに力をこめると、ゲルマニオンはゲエエエエエエエエエエェェェェェェと唸って抵てい抗こうできなくなった。その間にもヴィシュクラトーは少しずつ上じよう昇しようしている。そのままどっかへ行っちゃってほしい。いなくなれ。消えろ。願いもむなしく、ゲルマニオンが再度反はん撃げきに出た。肘ひじだ。ゲルマニオンの両肘から、ニュキィンッと骨みたいなものが突きだした。ゲルマニオンは両腕を後ろに振って、その先せん端たんが尖とがった骨みたいなものをヴィシュクラトーの腹にぶっ刺さす。ゴアアアアァァァァ！　ゴアアアアァァァァ……！　真珠の鱗が突き破られる。血が噴ふきだす。ヴィシュクラトーもこれは痛かったのか、それでもただ放したわけじゃない、ゲルマニオンを放ほうり投げた。その方向がこっちだったら、マリアローズはありんこみたいにプチッと潰つぶされていただろう。助かった。逆方向だった。激震。ゲルマニオンは、しかし、その巨きよ体たいには似合わない素す早ばやさで、すぐさま翼をバッサバサさせて飛びあがった。そっくりかえるようにして、息を吸いこむ。息吹ブレスだ。ヴィシュクラトーも息を吸いこんでいる。やる？　やっちゃう？　息吹ブレス合戦？　そういうのは遠くの誰だれもいないところでやってほしいんだけど。「──やめてよ、もう……！」マリアローズは伏ふせた。光。熱。音。ぜんぶ一いつ緒しよに押しよせてきて吹ふっ飛ばされる。叩たたきつけられ、転がった。これは──さすがに、起きあがれない。すぐには、ちょっと無理。顔だけ上げてみた。空が、なんだか変な色になっている。赤黒い。空気が焼けてしまっているみたいに。空全体ってわけじゃないけど。その中心で、ヴィシュクラトーとゲルマニオンが対たい峙じしている。この頭を揺ゆさぶるような音は、声？　竜たちの声だろうか。ＩＧＲＥＮＮＥＭＯＲＥＣＥＮＲＲＤＯＮＧＲＡＤＤ！　ＧＯＲＥＢＲＥＮＮＤＵＭＢＲＡＳＳＥＧＯＡＤＡＲＲＡＮＮＤ！　ＦＡＲＥＲＵＭＭＤＥＬＨＡＮＮＣＥＮＤＡＮＮＤＯＯＤ！　ＢＧＤＥＣＡＡＡＬＣＥＮＮＥＤＤＯＯＬＬ……！　耳慣れない、これは──竜の言葉？　わからないけれど、竜たちはさかんに言いあっているようだ。なんだったら、そのままずっと口くち喧げん嘩かをしてくれていてもいいのに、竜たちにはそういうつもりはないようだ。ゲルマニオンが火か炎えんの息吹ブレスを、ふうっ、と吐く。ヴィシュクラトーがそれに真珠色の息吹ブレスを吹きかけて打ち消す。ゲルマニオンが何か叫びながら身体をくねらせてヴィ

シュクラトーに躍おどりかかる。ヴィシュクラトーは息吹ブレスを吐きかけて追い払おうとするが、ゲルマニオンはその身を焼かれても怯ひるまない。逃にげない。ゲルマニオンがパンチを繰くりだす。ヴィシュクラトーがこれを脚あしで払いのける。尻尾と尻尾が激げき突とつし、絡からみあう。パンチとキックの応おう酬しゅうだ。頭ず突つきも飛びだす。嚙みつこうとして、かわされる。かわして、嚙みつこうとする。ときおりどちらかが息吹ブレスを吐くと、相手も息吹ブレスを吐く。さかんに激しくやりあいながら、竜たちはたぶん、互たがいに罵ののしりあっている。ＢＲＥＮＮＤＡＮＮＤＯＯＯＬＬ！　ＡＣＥＮＮＦＡＮＡＣＳＯＬＭＥＮＤＤＡＡ！　ＶＥＧＥＮＮＣＩＬＥＧＩＤＲＥＮＮ！　ＵＮＢＡＣＥＴＲＥＮＡＮＮＧＥＬＥＥ……！　今のところは空中で繰りひろげられているあの苛か烈れつすぎる肉にく弾だん戦の舞ぶ台たいが地上に移ったら、いったいどうなることか。考えたくない。まあ、考えたって無意味だろう。そうなったら確実に巻きこまれる。巻きこまれたら、まず生せい還かんは望めない。

　何はともあれ、ヴィシュクラトーのおかげで命拾いした。感謝しつつ、さらに生きのびるために最善を尽つくすだけだ。てゆうか、そういえばアーマンは……？　身体を起こそうとしたら、「んん……っ……」と気が遠くなりかけた。膝ひざか。左膝だ。なんか、かなりやばい痛さなんだけど。とはいえ、じっとしているわけにもいかない。左脚を使わずに起きあがる。後ろを見た。淀よどんだ闇やみが見あたらない──と思ったら、いる。いる、というか、ある？　どっちでもいい。五十メーテルくらい後方だろうか。闇というよりも黒炎が渦うず巻まいて、立ちのぼっている。でも、黒炎だけじゃない。黒炎が竜たつ巻まきみたいに、大量の瓦が礫れきを巻きあげている。そうして黒炎と瓦礫とが混じりあい、何か別のものに、黒炎みたいに揺らめくようなものじゃなくて、もっとしっかりとした、形の定まったものへと変化してゆく。それは人に似ている。腕と脚が二本ずつあって、胴どう体たいから首が、首の上に頭みたいなものがのっかっているそのシルエットは、人間っぽい。でかいので、まあ巨きょ人じんか。人っていうか、誰かに似てるような。誰か？　誰だろう。そっか。わかった。りりぃだ。またの名を、剣けん聖せいヴァン・ヴラドＸＬ〝モータルレッド〟。サイズは別として、あれは黒いりりぃとでも言うべき姿をしている。もっとも、りりぃのフォルムは女性らしい。あれは違う。両りよう肩かたが大だい胆たんに暴力的に張りだしていて、姿勢がよくなくて野や蛮ばんそうで、頭部は双そう眼がんを潰されて牙を剝むく獣けもののような凶きよう悪あくそうな形状をしている。女性的というよ

りは男性的だ。

『少し身体をつくりかえてみた』

　アーマンなのか。アーマンなのだろう。

「無む駄だなことを……！」

　トマトクンの声が響ひびき渡わたった。どこだ。足あし許もと。アーマンの足許で虹にじ色いろの光が輝かがやいた。虹色の光がバアアアァァァァァァァァ……ッとのびる。アーマンは跳はねた。後ろに。飛びのいて虹色の光をかわすと、身をかがめて地面に右手を突っこんだ。何だ。何をするつもりなのか。アーマンは引っぱりだした。ズルズルズルッと。一気に。剣、なのか。いや、剣というよりも棒だ。地面やその下の岩やら合成コンク骨材リートやら何やらを棒状に固めてみました、みたいな。アーマンがたぶん、身みの丈たけ二十か三十メーテル。棒もそのくらいはある。アーマンはそれをヴォンッと振ふりまわした。薙なぎ払うように。トマトクンはよけずに大カタ憐スト滅ロフ刀アーで迎むかえ撃うつ。アーマンの棒は爆ばく発はつするみたいに砕くだけ散った──が、撒まき散らされたその無数の破は片へんが急に停止する。一いつ斉せいに方向転てん換かん。トマトクンに向かってゆく。いくらトマトクンでも、あれだけの破片をぜんぶ防ぎきることはできない。いくつもの破片がトマトクンの身体にぶち当たり、貫つらぬいた。トマトクンはそれがどうしたと言わんばかりに、アーマンめがけて突っこんでゆく。

『おまえは忘れたようだ。私はよく覚えている』

　──と、アーマンの巨きよ軀くが一いつ瞬しゅんのうちに分解された。棒。今度こそ棒だ。アーマンが、数十本、数百本、もしかしたらそれ以上の、先が尖っている、まっすぐな、黒い棒に為なり変わった。それらの棒の先せん端たんはすべて、トマトクンのほうを向いている。

『かつて私はおまえを捕とらえた。私はおまえを一度、完かん膚ぷなきまで打ちのめしたのだ』

　棒が動きだす。そんな。ああ、そんな。トマトクンは大カタ憐スト滅ロフ刀アーを展開して、迫せまりくる棒を破壊する。聖断罪の剣で斬きり払う。次々と。でも追っつかない。壊こわされても斬りのけられても、棒はくる。棒というか、槍やりか。前だけじゃな

い。横からも、上からも、後ろからも。まず一本がトマトクンの左肩に突き刺さった。二本目が背中、肩けん甲こう骨こつの下あたりに。三本目は脇わき腹ばら。四本目は右の鎖さ骨こつをぶち抜ぬいた。「──っ！　があああああ……！」それでもトマトクンは大カタ憹スト滅ロフ刀アーと聖断罪の剣を振るおうとしたが、槍が右みぎ肘ひじを刺し貫いた。そして左ひだり腕うでに二本の槍が。槍。槍が。槍が。槍が。トマトクンが槍だらけになる。槍のかたまりみたいに。やめて。やめてよ。マリアローズは駆かけだそうとして、思わず左足をついてしまった。息が止まるほど痛くて、転んだ。「トマトォォォォォォォォォォ……！」

　死んじゃうじゃないか。そんなことしたら、トマトが。いや。いや。いや……！　死なない。トマトは、死なない。死なないんだ、トマトは。無限の心臓がある。トマトは死んだりしない。でも──だけど、死ななくたって、あんなふうになったら。

「どうやら、おまえはとんだ愚おろか者のようだ」

　いつの間にか、トマトクンを貫かん通つうしている一本の槍の上に、アーマンが──十五かそこらの男とも女ともつかない、どうってことないのにあからさまに危険な、例の人間みたいな姿で腰こしかけていた。

「過あやまちから学習できない。おまえのような者は、いかなる力を持とうと無意味だ」

「ヒヒヒ」

　下げ卑びた笑い声。こんなときになんだけれど、ちょっと懐なつかしい。あの笑い方。おびただしい数の槍に埋うもれて、指一本さえ確かく認にんできない。でも、間違いない。トマトクン。トマトクンだ。

「それは……貴様のほうじゃないのか、アーマン……俺は、一人じゃないんだぞ……？」

「何？」

「サフィニア……ッ！　俺ごとぜんぶ、ぶっ飛ばせ……！」

「──はい……！」

まるでそう命じられることを予想していたかのようだ。槍のかたまりと化したトマトクンとアーマンの頭上に、サフィニアがいる。ゲルマニオンとヴィシュクラトーが決闘タイマンをおっ始ぱじめたので、フリーになった。それで、トマトクンを援えん護ごするタイミングを虎こ視し眈たん々たんと狙ねらっていたのだろう。今、そのときが訪おとずれたのだ。でも、俺ごとぜんぶ、ぶっ飛ばせって。さすがに躊ちゆう躇ちよしてしまうんじゃないかと危き惧ぐしたマリアローズは甘いのか。甘いというか、サフィニアのトマトクンに対する度外れな信しん頼らいの深さを見誤っていたのかもしれない。トマトクンがやれと言えば、サフィニアはやるのだ。逡しゆん巡じゆんするそぶりなんて微み塵じんも見せなかった。サフィニアはただちに、即そつ刻こく、両腕を振りかぶった。その両手の先で真っ白い火花が散っている。火花と火花が衝しよう突とつして、ぶつかりあいながら大きくなってゆく。みるみるうちにでかくなる。めちゃくちゃでかい。しかし一転、収縮を開始する。小さく、もっと小さく、さらに小さく。拳こぶしよりも小さくなる。サフィニアが両腕を振りおろすと、小さな白光球が飛んでゆく。槍のかたまりを目指して、まっしぐらに。

直撃した。

静かに、まるで吸いこまれるように。

槍と槍の合間から白い光がもれる。あふれる。広がってゆく。

アーマンが「ほう……！」と感心したような息をつき、槍を蹴けって逃げた。

槍が、とけるように、蝕むしばまれるように、白い光にのまれてゆく。

マリアローズは目を細めた。それでは足りなくて、目をつぶった。なんかきた。ブゥゥンンン……ッッ！　衝撃波。マリアローズは地面にしがみつく。それでも押された。身体からだがずり下がってゆく。やがて収まった。薄うす目めを開けると、球状の白い光がまだそこにあった。もうそんなにまぶしくはない。光の中に、人がいる。人の残ざん骸がいっていうか。残骸っていう言い方はあまりにもひどい。だって、あれはトマトクンなのだから。でも、肉体は両手両脚と胴体と頭、それらの一部くらいしか残っていない。あとは鎧よろいと、大カタ懺スト滅ロフ刀アーと聖断罪の剣だけだ。トマトは、死なない。死んだりしないんだ、トマトは。あんなふうに

なっても……？　そうだ。死なない。そのはずだ。どくん……と何かが脈打っている。どくん……どくん……どくん……━これは、心臓の音？　あれだ。トマトクンの、胸の中央。もっと言えば、胸の中央とおぼしき位置に、心臓が浮ういている。赤い、まがまがしいほどに赤い、脈動にあわせて鈍にぶく輝く、心臓が。無限の心臓。あれが引き起こしている現象なのか。何かが生成されている。たぶん、肉や、骨や、血管や、神経や、内臓が。そのもとのようなものが。それらは最初、極小の芽として虚こ空くうに出現して、急速に育ってゆく━どくん……━渦うずを巻くように。それらがくっついて━どくん……━接合され、融ゆう合ごうする━どくん……どくん……━組織をなして、生物体を構成してゆく。あっという間に形を整えてしまう━どくん……どくん……どくん……━浅黒い肌はだ。黄玉トパーズの瞳ひとみ。トマトクンだ。トマトクンは唇くちびるの両りよう端たんをつりあげた。「━俺は、一人じゃない。アーマン。今の俺は、あのときの俺よりも百倍強いぞ。あまり俺たちを侮あなどるな」

「侮っているつもりはない、が━」アーマンは三十メーテルばかり離はなれてトマトクンと向きあっていた。突然、顔を横に向ける。矢だ。矢が飛来してアーマンの眉み間けんに、突き刺さりはしなかった。抜けた。その瞬間、矢の当たった部分に穴があいた。そこを矢が通り抜けていった。そんなふうに見えた。矢は一本で終わらない。二本、三本、立てつづけにくる。ロム・フォウだ。ロム・フォウがアルファと一いつ緒しよに走りながら、矢を放っている。何の表情も浮かべずにロム・フォウとアルファを目で追っているアーマンの、今度は腹部を何かが貫いた。銃じゆう声せい。ハニーメリーか。どこからか狙そ撃げきしているらしい。二人の射撃を囮おとりにして、彼は標的に接近したのだ。合図があったわけでもないのに、ロム・フォウとアルファは遮しや蔽へい物になるくらい大きな瓦礫の陰かげに逃げこんで、ハニーメリーも銃撃をやめた。片足が義足なので以前のような滑なめらかさはないが、速度はおそらく変わらない。一いち陣じんの砂すな嵐あらしが吹ふく。ピンパーネルは胸の前で雌し雄ゆう一対ついの短剣を交こう叉さ させてアーマンに肉にく薄はくし、閃ひらめかせた。雄おすのグレアデと雌めすのリレッザはどれだけ複雑な軌き跡せきを描えがいたのだろう。マリアローズには見えなかった。アーマンは斬り刻まれる。細切れにされて、解体される。そうはならない。斬れないというよりは、斬られても無傷なのだ。かまわず風のように駆け去るピンパーネルにつづいて、半魚人がきた。「魚うおぅら魚ぅら魚ぅら魚ぅら魚ぅら魚ぅら魚ぅら魚ぅら魚ぅらぁ……っ！」まあ、魚っぽくわめきな

がら変形斧おのを振りまわしていっただけなんだけど。そこは所しょ詮せん、半魚人だ。やつのことはいい。なかったことにしよう。そんなことよりも、きゅーがきた。「ＧＡＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＨＨＨＨＨＨＨ……！」全身の毛を逆立て、静電気みたいなものを飛び散らせて、きゅーは光り輝く肉球の一撃をアーマンに叩たたきこむ。でも、やっぱり抜けた。「──きゅうっ！」きゅーはちょっと悔くやしそうだが、それでもすぐさまアーマンから飛び離れた。次はユリカの出番だった。「疾しっ……！」黄おう金ごん脚きやくを応用して猛もう速度で突つっこみ、螺ら旋せん状に回転しながら極クライ限マツ九クス手ナイン棍ポールを繰くりだす。アーマンはぶち抜かれて、上半身と下半身が離ればなれになった。たしかにそう見えたのに、なんともないなんて。「──筋肉ハイパー万歳マツソォォ……ッ！」だったらこれはどうだとばかりに、ピッカピカの黄おう金ごん権ごん化げとなったトワニングがアーマンの脳天に手刀を振りおろす。拳をぶちこむ。それから回し蹴りだ。間かん髪はつを容いれず、後ろ回り蹴り。突く。蹴る。蹴って突いて突いて蹴る。攻こう撃げきを重ねるごとに、トワニングの筋肉は膨ふくれあがってゆく。金色こんじきの闘気オーラも増ぞう幅ふくする。速度も増す。もはやマリアローズの動体視力ではトワニングの動きをとらえることができない。ただ、打撃を加えられるたびにアーマンの姿が揺ゆらめく。揺らいではもとに戻もどってしまう。まるで効いていない。それだけはわかる。「どけェオッサン……！」と、誰だれかというかこの声、口調は飛フエイ燕ヤン以外の何者でもない。飛燕がどこからかすっ飛んできた。「──オレとしたことが、ちょっち遅おそくなっちまったなッ！　飛燕参上！　愛してるぜユリィ……ッ！」そういうのいらないから。ユリカが「もおっ！」と顔を赤らめている。飛燕はアーマンに飛び蹴りを食くらわせた。いや、当たっていない。飛燕はアーマンを通りすぎる恰かつ好こうになった。「ンにゃろ！」飛燕は舌打ちをして反転、アーマンを攻せめる。攻めたてる。「アーッ、手て応ごたえねェーなしかしッ！」飛燕はアーマンの懐ふところに入りこんで土手っ腹に掌てのひらを押しつけた。「──そンならコイツでどォーだッ！　八十四散乱打奥おう義ぎ〝天テイエ位ンウエ無イウ法ーフア〟……ッ！」そうしてアーマンの中に、目には見えない爆発力のようなものを送りこもうとしたのだと思う。あれはたしか、そういう技わざだ。でも、アーマンの全身が一瞬、ぼやっとしただけで、あとは何の変化も起こらない。「──クッソ、マジかッ！」「どくのだァッ、筋肉の足りぬ小こ猿ざるめがァァッ！」トワニングがアーマンの後ろ頭に掌しよう底ていを叩きこんだ。「小猿ゆゥーな、オッサン……ッ！」飛燕が負けじとアーマンを蹴る。八連キック。「おぬしにオッサン呼ばわ

りされたくはない……ッ！」トワニングの十連パンチ。「つってもオッサンなんだからしゃァーねェーだろァ、オッサンッ！」飛燕の十六連キック＆パンチ。「黙だまれェイッ、筋肉不足の豆まめ粒つぶがァッ！」とトワニングが一秒に十八発の速さで黄金突きと黄金脚を繰りだせば、飛燕が「筋肉筋肉うっせェーんだよ……ッ！」と一秒間に二十発くらいの正拳、裏拳、上段中段下段蹴りをアーマンに浴びせる。そのどれもがアーマンには通じない。まるでみんな、水面に映っているアーマンを必死に叩いているかのようだ。水面が波打つ。アーマンの像は乱れ、崩くずれる。でも、間もなくもとどおりになってしまう。アーマンが突然、垂直に跳ちよう躍やくというよりも上じよう昇しようして、トワニングと飛燕を見おろした。「おまえたちは退たい屈くつだ。そろいもそろって、じつに無む駄だなことをしている」

「そうでもないさ」

　アーマンの、さらに上だ。

　トマトクンがいる。

　振ふりかぶられた聖断罪の剣が、虹にじ色いろの光を放つ。光が長大な刃やいばとなって、アーマンを猛もう襲しゆうする。ＨＹＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＸＸＸＸＸＸＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧ……！

　激げき甚じんな音。アーマンが縦に一刀両断された。が──、

「まだだ」

　トマトクンは真っ二つになったアーマンを光の刃で横よこ薙なぎにする。ＨＹＧＧＧＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＧＧＧＧＧＧＧ……！四つに分かたれたアーマンが、それぞれ黒く淀よどんだ闇やみと化して、四方に逃にげてゆく。闇が薄まる。アーマンが薄まって、広がってゆく。

「逃がすか……！」

　トマトクンが光の刃を振りまわす。光の刃は鞭むちのようにし

なって闇をとらえる。光の刃にふれると、闇は霧む消しようする。ＨＹＧＧＧＧＧＧＧＧＹＹＹＹＸＸＸＧＧ！　ＨＹＧＧＧＧＧＧＧＧＹＹＹＹＸＸＸＧＧ！　ＨＹＧＧＧＧＧＧＧＧＹＹＹＹＸＸＸＧＧ！　ＨＹＧＧＧＧＧＧＧＧＹＹＹＹＸＸＸＸＧＧＧ！　ひどい音を鳴り響ひびかせて滅めつ却きやくされながら、闇も、アーマンも、必死みたいだ。薄らぐ。拡散する。光の刃が届かないところへと。つかまえきれないか。このままだと取り逃のがしてしまう。でもそのとき、白い流れ星が。

「──興味深いのだわ……！」

　空を斜ななめに切り裂さいて、純白の流星が迫せまってくる。

「お姉様……!?」とサフィニアが叫さけぶまでもなく、マリアローズにもそれが誰だかすぐにわかった。間ま違ちがえようがない。マチルダ。閃せん光こうの魔ま女じよだ。魔女の右みぎ腕うでは失われている。ただ、腕の代わりに肩かたから白い光が噴ふきだして、長い尾おを引いている。少女のような魔女が背に負う白光は翼つばさみたいだ。「──悪グラ魔ンヴ大エリ公オンアーマン！　あなたはおもしろいのだわ！　どこまでわたくしを楽しませてくれるかしら!?　試ためしてあげる……！」

　魔女は急停止した。右腕代わりの白い光が、うねる。魔女の瞳の中で輝かがやく億万の星が踊おどりだした。魔女が何か口ずさんでいる。riv-rev-ral-vas-toi-ell-fel-melv-co-beyon-sa-zev-whelm-abaram-gel-iptim-sayrum-dam-rum-gum-dum-ipp-romm-emm-simm-roe-vic-semm……□□魔女の周りに円や多角形の魔ま法ほう陣じんが浮かびあがる。それらが回転する。入り交じる。右腕代わりの白い光が腕のような形になってゆく。その光の右腕が魔法陣を吸収してゆく。今や光と魔法陣が魔女の右腕を構成している。魔女は飛ぶ。その右腕を振って、闇の中へと突とつ入にゆうする。ＢＡＳＨＨＨ！　ＢＡＳＨＨＨＨＨ！　ＢＡＳＨＨＨＨＨＨ！　ＢＡＳＨＨＨＨＨＨＨ！　ＢＡＳＨＨＨＨＨＨＨＨ！　ＢＡＳＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨ！　空間がおぞましく震ふるえる。その震えにあわせて、闇が散っている。いや、散るだけじゃない。もしかして、効いているのか。少しずつかき消されている。闇が。アーマンが。

「案の定なのだわ！　わたくしの思ったとおり！」マチルダが高笑いする。「あなたの組成は、わたくしたちのそれとは根本的に異なっている！　わたくしたちの知っているこの世界、あの世界、すべての世界の枠わく組ぐみとはまったく別の仕組みで、あなたは動

いているのよ！　でも、仕組みはある！　それを解き明かすことさえできれば、あなたを滅ほろぼすことさえできるのだわ！　不世出の天才である、わたくしの手にかかれば……！」

（成る程ほど）別の、声──なのか。（不世出の天才であるか否いなかはさておき、魔女は我々と似たり寄ったりなことを考えておるようだな）今度は、青白い流星が。でもそれは、人の姿をしている。老人と、それから車くるま椅い子すに乗った女だ。二人が闇の中を飛びまわる。ＧＡＳＳＨＨ！　ＧＡＳＳＨＨＨＨＨＨ！　ＧＡＳＳＳＨＨＨＨＨＨＨＨ！　ＧＡＳＳＳＳＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨ！　ＧＡＳＳＳＳＳＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨ！　二人が闇を引き裂いてゆく。（ああ、やはり、お師様の仮説は正しかった！）（否、否だ、エヴァンジェリン、我が娘むすめよ。我の仮説ではない、我とおまえ、我々の仮説だ）（お師様……！）

「本当に仲よしでいいよね、モーグ。エヴァンジェリン。きみたちは」綿わた菓が子しみたいな髪かみの毛から羊みたいな角が突きだしている、水玉模様の服を着た男というか、子供だ。子供がヒューンッと闇の中に入ってゆく。そして、闇を手づかみした。目を輝かせる。「すごいや。こんなモノがあるんだ。食べたらどうなるかな？　おいしくはなさそうだけど」

　に。

　に。

　に。

　にに。

　ににに。

　ににににに。

　ににににににに。

　にににににににににんんんんげえええええええんんんんのおおおおおお。

　にににににににににににいにいにいにいいにいいいにいいいいにいいいいいいんげえええええんのおおおおおおおおおおまままままあああああままままあああままままままじゅつうううう

うしいいいいいいいいいどおおおおおもおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉおお。

　闇が、一いつ斉せいに、吼ほえた。そんなわけがないと思う、でも、見えた。闇の一つ一つ、区別することなんかできないはずなのに、それぞれの、百万の、千万の、一億、十億、もっと、それより多い闇が、泡あわ立だつように口を開けて、呻うめくような、唸うなるような声を、空を、大地を埋うめつくすように、しぼりだした。そんなふうに見えたし、聞こえた。闇は、アーマンは、憤いきどおっているのか。怖おじけているのか。なんにしても、おののいている。

「……お姉様……！」サフィニアがまた叫んだ。魔女がちらっとサフィニアに目を向けて、笑う。「まあ、何をしているのかしら、サフィニア！　さっさとわたくしの術式を読み解いて手を貸しなさいな！　あなたにはそれくらいできるはずなのだわ！　できなくても、やらなければだめなのよ！　あなたはこのわたくしに選ばれたのだから！」「──読み、解いて……は、はいっ！　やり、ます……！」サフィニアが目を見開く。その視線の先にいる魔女と同じだ。サフィニアの瞳ひとみに宿る億万の星が乱らん舞ぶする。ただ、呪じゆ文もんらしきものを唱えることはしなかった。円、方形、五角形、六角形、七角形、八角形、九角形、十角形、さまざまな魔法陣がサフィニアの周囲に浮うきあがる。それらの魔法陣が入り乱れながら凝ぎよう縮しゆくされて、サフィニアの双そう眸ぼうに吸いこまれてゆく。サフィニアが飛びたつ。垂直に。誰よりも高く上がって、両腕を広げる。「はあああああああああぁぁぁあぁぁぁぁああぁぁああああぁぁぁぁああぁぁぁぁああぁああぁあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！」

「あなたという子は……！」

　魔女の嘆たん息そく。

　それは幕状の、帯状の、光。

　降るような、天を覆おおいつくさんばかりの、極光オーロラ。

　なんて美しい。

　そして、恐おそろしい。

　これが、サフィニアの魔術。

　闇が──に、にいあ、にぃや、にげ、にんが、んげがぁっ、にやが、げのぉっ、んげんなぁっ、にんげっ、まっ、まあぐっ、まじゅあっ、にんげぁっ、ま、まじゅつごぁ、にぇがっ、にんげっ、にんげんごっ、にんげんごとぉきぁっ、に、にんげっ、にんげんごときぐぁっ、んげんのぶんざぁっ、にんげんのぶんざいでぁがっ、にっ、にんげぇっ、にんげん、にん、にん、にんげん、にんげん、にんげん、にんげん、にんげんがぁっ、にんげっ、にんげんがぁっ、にんげんのぶんざいでぇっ、にん、に、にんっ、にっ、にんげ、にんげんにんげんっ──闇が、苦く悶もんする。極光を浴びて、とけてゆく。消え去ってゆく。垂れこめていた暗雲が風に吹ふき飛ばされて晴れ間がのぞき、快晴の空が広がろうとしているかのようだ。人間の魔術士たちが勝って、アーマンが敗れようとしている。

　いや、しかしアーマンはまだ、あきらめていないようだ。闇が、ひとかたまりの闇が、もう空に自分の居場所はないと悟さとったのか、落下してゆく。地に逃れようとしている。闇は人に似たアーマンの姿をとりつつある。「──くっ、人間め！　我々の領域にまで入りこんでくるとは──このようなことは、決して……！」

「許されん、か？」

　トマトクンだ。

　先回りして、アーマンめがけて聖断罪の剣を振りおろそうとしている。

「でもな。それはお前らが決めることじゃない……！」

「──ぼおうっ……！」

　悲鳴。破滅的な音。虹色の光がアーマンの半身を削そぎ落とした。

　右半身のみとなったアーマンが、淀んだ闇を重そうに引きずって逃とう走そうする。

「ゲヘラッ……！」

　下げ衆すそのものとしか言いようがない、この笑い声は。

マリアローズは振り仰あおぐ。王だ。

キング・グッダーが、サフィニアのさらに上でふんぞり返っている。

「ゲヘラゲヘラゲヘラゲヘラゲヘラッ！　ゲェーハゲハァァァー……ッ！」何がそんなにおかしいのか。涙なみだを流す勢いで王は馬ば鹿か笑わらいしている。「──どうだ、悪魔ァァ。もったいなくも余が用意して遣つかわした揺ゆり籠かごで育はぐくまれた此こ奴やつらは、ついに汝うぬを滅ぼすすべさえ見つけだした！　千年！　千年だ！　たった千年費ついやしただけで、余は汝うぬらを打ち負かす力を手に入れたァァ！　魔術士どもよ、苦しゅうない、余は汝うぬらに世界の果てを見せて遣わす！　〝世界のワールド終わりエンド〟に、それはあるのだァァ！　ゲェーハゲハァァァ……ッ！」

──千年。

千年かけて、力を手に入れた？

用意した、揺り籠？

打ち負かすために──悪魔を……？

先の大戦で、人間は悪魔に勝てなかった。大ギガ穴ボロスをエルデンでふさぐことで、なんとか引き分けに持ちこんだのだろう。王は、でも、捲けん土ど重ちよう来らいを期していたのか。王とジュジ、だ。ジュジはラフレシア第三帝てい国こくを陰かげで操あやつっていた。帝国軍がサンランドを攻せめて、エルデンが浮ふ上じようし、大ギガ穴ボロスが姿を現して、悪魔どもが地上にあふれた。ジュジと王は最初からぐるだったのだろう。つまり、予定どおりなのか。何もかも、勝つために？　ジュジと王のシナリオだったのか。そのために、戦争を？　人が死んだ？　大勢が。

本当に、本当に、たくさんの人たちが。

もちろん、ルーシーもその中にふくまれる。荊王ジンワンも。

　死んでいった者たちの名前が、顔が、姿が、死に様が、勇ゆう敢かんな死が、立派な死が、哀あわれな死が、馬ば鹿かげているとしか思えないような死が、死の数々が頭を駆かけめぐった。

　僕だって死んでいたかもしれない。むしろ、なんで死んでないんだろ。どうしてまだ生きてるんだろ。

　僕は生きていて、彼らは、彼女らは、死んだ。死んでしまった。

「ふざ……けるな……っ！」

　マリアローズは歯を食いしばる。

　おかしくなりそうだ。

「何が……何が、王だよ！　キング・グッダーが何だって!?　魔導王が何だっていうんだよ！　高いところから見おろして！　偉えらいつもりなのかしらないけど、ただの下げ劣れつで外げ道どうで下品で超最低ＳＵＣＫな下げ衆す野や郎ろうじゃないか！　降りてこい！　今すぐ降りてこい！　ここに降りてこいったら！　まず一発ぶん殴なぐって、その長い髭ひげを口に突つっこんで黙だまらせてから、きみにわからないことを教えてやる！　わからなくても、無理やり叩たたきこんでやる！　いろんな人がどんなふうに生きて死んだか、教えてやる！　きみはきっと何も感じないだろうけど、それでも教えてやる！　キング・グッダー！　グッダー！　降りてこい……！」

　それにしても、ときには予想もしないことが起こったりするので、人生は不思議だ。

「フゥム……」王はマリアローズに冷たすぎる目をとめると、フンッ、と鼻を鳴らして髭をしごいた。「よかろう」

「え……」

　嘘うそ？

　マジ？

　くるの？　きちゃう？　ほんとに？　グッダー・ジョークとかじゃなくて？

　マリアローズはまばたきをする。ジョークでも嘘でもないらしい。王が降下してくる。と思ったときにはもう、目の前に着地していた。速っ。

　あと、けっこうでかっ。

　王はトマトクンよりも上背がありそうだ。厚みはそれほどでもないが、肩かた幅はばは広い。

　マリアローズは身じろぎもせずに王を見上げている。動けない。動かせない。指一本。息もできない。心臓も止まっていそうだ。そんなことはないか。

　だけど、何なんだよ、この威い圧あつ感かん。味わったことがない。自分は何でもない、とマリアローズは感じていた。王の前では、塵ちりですらない。目に入ることさえない。それなのに、王はマリアローズを見ている。本来、そんなことはありえない。だからもう消えるしかない、というのが正直な気持ちだった。いなくなりたい。どうか消してほしい。それが唯ゆい一いつの望みだ。それ以外のことは考えられない。

「降りてきてやったぞ。この余が、わざわざ、汝うぬごときのもとへ」王が手をのばす。そのやけにぶっとい、節くれ立った人差し指が、マリアローズの顎あごを持ちあげる。「何か申しておったなァ？　何？　まず余を一発ぶん殴りィィ……それからァ？　余の髭を余の口に突っこんで黙らせる、であったかァァ……？」

　謝りたい。ついでに泣きたい。というか、泣きながら全力で許しを乞こいたい。許してもらいたいというか、命乞いをしたい。殺さないでください。お願いします。だって、マリアローズなんか、王の指先一つで、いや、鼻息を吹きかけただけで消し飛んでしまうはずだ。自分はなんてちっぽけなのだろう。時間が経過するごとに、どんどんちっぽけになってゆく。とめどもなくちっぽけ化が進む。涙がにじんできた。視界がゆがむ。膝ひざを折りたい。ひざまずきたい。王の足を舐なめたい。動けないのに、それならできそうな気がする。王に服従することだけは。

　しないけどさ。

　するわけないだろ。そうだ。絶対、しない。気力を総動員する。精神力のかぎりを尽つくして、王の威い圧あつを撥はねのける。で

きるのか。そんなだいそれたことが。わからない。見み込こみはない。自信もない。それでも、やるんだ。やれ。やってしまえ。右手がぴくっと動いた。動かせる。よし。いける。やれる。一気だ。勢いでいけ。

　睨にらみつけるのと同時に王の顎にパンチを食くらわして、両手で髭をつかんだ。思いっきり引っぱっても、王はびくともしない。涙がもっとあふれそうになる。唇くちびるをきつく嚙かんで、こらえた。僕はちっぽけだ。そんなことはわかっている。ちっぽけじゃないと思ったことなんか一度もない。僕はどれだけがんばっても無力で、いつも重要人物じゃない。それでも、ここにいる。一人の人間として、生きている。大事にしろと言いたいわけじゃない。だけど、大事なんだ。僕にとっては。こんな僕を仲間だと、友だちと思ってくれる人もいる。ちゃんと重みがあるんだ。みんなそうだったんだ。

　一人一人の命の重さなんて、僕にはわからない。全員をよく知っているわけじゃないから、わかるなんて言えない。

　でも、王の鼻息で吹き飛ばされるような命にも、重みはあるんだ。

「きみが企たくらんでることなんて、どうでもいい。きみがやったことで犠ぎ牲せいになった人たちに謝れとも言わない。謝ったって何にもならないし、きみは謝らない。きみはクズだ。史上最低のクズだ。何千年生きてるのか知らないけど、長生きすればいいってものじゃないことを証明してるクズだ。クズはクズらしくしてろって言いたいところだけど、黙ってそこにいるだけでいかにもクズらしいクズ以外の何物でもないから、その必要はなさそうだね。何が王だよ。何がキング・グッダーだ。僕はきみを認めないし、許さない。僕はきみを否定する。全否定してやる」

「アァ。実げにむなしき言葉なァーり」

　持ちあげられた。

　王はマリアローズにふれていないのに、持ちあげられている。足が地面につかない。マリアローズは暴れた。身体からだが浮ういているので、むなしく手足がばたばたするだけだ。

　むなしい。

そうだ。

力が抜ぬけてゆく。僕の言葉には何の効力もなかった。どこまでも空くう虚きよだった。あまりにもむなしかった。

「言葉などぉォ」王は目をすがめ、髭に埋うもれた唇を舌でぺろりと舐めた。「何の意味もない。行動だ。実行だ。それこそが意味をもたらすのだ。余を否定しうるのも行動であり、実行であァーる。汝うぬにはそれがない。汝うぬだけではない。すべての者にその力がない。余を妨さまたげることはできぬ。よってあまねくものは、余に遣われるか、余にとって遣う価値がないかに二分される。その区分以外、余にとっては不要である。無用であァーる。汝うぬはせいぜい無む駄だ口ぐちをたたくがよい。余は痛つう痒ようを感じぬ。文句があるのなら余を阻はばむがよい。だが、汝うぬにはできぬ。汝うぬは吠ほえるがよい。許して遣わす。余は心寛ひろき王であるがゆえに」

「グッダァァァァー……ツッツ！」

トマトクンが怒ど鳴なると、マリアローズの全身もびりびりと痺しびれた。でも、王は平然としている。

「うっ……!?」

マリアローズは顔をしかめた。なんか苦しい。身体中を全方向から締しめつけられているかのようだ。王が目を細めた。これは王の仕し業わざなのか。トマトクンがまた声を荒あららげる。

「よせ、グッダー！　貴様……！」

「余に命令するな、ディオロット。汝うぬとて知っておるはずだ。頭ごなしに物を言われるのが、余の何よりも忌いむところのものなのだ。このモノを一息で挽ひき潰つぶすことなど、余には造作もないのだぞ。余がそれをすまいとたかをくくっておるのだとしたら、大おお間ま違ちがいだ。用意はできておる。万ばん全ぜんの用意が。余がそれを望めば、すなわち余はなすであろう」

やられてたまるか。思いどおりにされてたまるものか。抵てい抗こうの意思はある。でも、呼吸さえ満足にできない。血液が沸ふつ騰とうして、爆ばく発はつしそうだ。もう、見えない。何も。

助けて。

　叫さけべるものなら、叫んでしまっていただろう。

　助けて、トマト。

　──アジアン。

「何を……！」

　声が、聞こえた。

　気のせいだと思った。

　ここにあいつがいるわけがない。

　だから、気のせいに違いない。

「何をしている、長髭野や郎ろう……！　マリアに、何を……！」

　いるはず、ないんだ。あいつの声が聞こえるなんて、おかしい。きっと、耳がおかしくなったんだ。ああ。息ができない。捜さがそうとする。見えないけど。どうすれば見えるようになるだろう。方法なんてわからない。それでも、あいつを捜そうとする。

「ボクのマリアに、手を出すな……！」

　僕は、きみのじゃない。

　身体をがんじがらめにしていたものが、急に、ほどけた。

　落ちる。地面に。尻しり餅もちをついて、息を吸いこんだ。吐はきだす。見える。聞こえる。まばたきをする。黒い、黒いものが、無数の黒い管が、それに、黒い竜りゅうの首みたいなものが、王に殺さつ到とうしている。いや、殺到しようとして、王の十サンチか二十サンチ手前で食い止められている。何か目には見えない壁かべのようなものによって。それらは細かく震ふるえている。その壁をなんとかして突き破ろうと、貫つらぬこうとしているみたいに。僕は見上げる。きみがいる。黒い翼つばさをいっぱいに広げて、ものすごい形相で、薄うす青あおい瞳ひとみを煌こう々こうと光らせて、そこにきみがいる。僕はきみのじゃない、と、もう一度、思う。

「ルヴィー・ブルームが生みだしたる鬼おに子ごか」王は髭を揺ゆ

らしてせせら笑う。「生意気にも、余にふれようというのか。果たして、汝うぬにできるか。余の魔術を超こえること能あたうというのか。汝うぬごとき、人形に」

　かっちーんときて、そんなことしちゃいけないとか、そんなことをしたって無む駄だとか、一いつ切さい考えられなかった。それでいて、その部分を狙ねらうことだけは忘れなかった。本能かもしれない。マリアローズは跳とび起きて、低い姿勢から渾こん身しんの力を振ふりしぼり、王の股こ間かんを蹴けりあげた。

「──グッ、ム……ッッ……ッ……!?」

「人形とか言うな！　何も知らないくせに……！」

　叱しかり飛ばしてから、あれ、キック入っちゃった、クリーンヒットしちゃった、しかも悶もん絶ぜつしてるし、いくら僕がボンクラだからって、油断しすぎじゃないのこの王様、意外とたいしたことないんじゃないの、バッカじゃないの、と思って、それからぞっとした。

　やっばい。

　つい手じゃなくて足が出ちゃった。やっちゃった。絶対、仕返しされる。報復される。殺される。抹まつ殺さつされちゃう。

　すぐに開きなおった。それがどうした。今さらだ。傲ごう慢まんきわまりない王に向かって啖たん呵かを切ったときから覚かく悟ごしていたことじゃないか。この不ふ遜そんな王に一発かましてやったのだから、大満足だ。ざまあみろ、だ。すかっとした。本当に爽そう快かいだ。

「……お、おのれェェェ」

　でも王の瞳が、赤とも黄色ともオレンジ色ともつかない輝かがやきを帯びている。やっぱりこわい。半はん端ぱじゃない。王はマリアローズに向かって手をのばそうとした。その手首に黒い管が絡からみつこうとする。すかさず王は手を引っこめ、十メーテルばかりも飛び下がった。

「余を邪じゃ魔まするか、人形……！」

「マリアに手を出すなと言った……！」

　どうでもいいんだけど、馬ば鹿か一号の目が潤うるんでいる。

「……なんで泣いてるんだよ」

「いや、だって！　マリアがボクのために……！」

「だ、だっ、誰だれがきみのためにっ、な、何をしたっていうんだよ、僕がっ、僕は何もっ」

「こォォォォォォォォォォォォォの紛まがい物ども
がァァァァァァァァァァァァァ……！」

　王が頭を左右に振りながら、両手の指を曲げたりのばしたりしている。その全身からあの赤、黄色、オレンジ色の光が発せられている。長い髪かみと髭ひげが揺らめいている。すっごく、あっついんだけど。王の周囲に水蒸気が立ちこめている。陽炎かげろうが立っている。あからさまに危険だ。王の双そう眼がんから光があふれる。眼だけじゃない。鼻からも、口からも、耳からも。たぶん、毛穴からも。王の中で赤、黄色、オレンジ色の光が生みだされて、それが噴ふきだしている。喉のどがカラカラだ。目が痛い。肌はだがパサパサだ。干ひからびてしまいそうだ。

　もうちょっとで、本当に干からびていたかもしれない。あるいは、王の怒いかりが文字どおり爆発して、何もかもを粉こな微み塵じんにしていたかもしれない。

「やめろ、グッダー」

　トマトクンが王の背後に詰つめよって、その背に聖断罪の剣の切っ先を突つきつけなければ、きっと王はとんでもないことをしでかしていた。

「よさないなら、俺がお前を始末する」

「汝うぬに余を殺せるとでも？」

「ああ」

「汝うぬが余の命を絶つよりも早く、余の超々高熱極大魔術は、これらの紛い物どもを一いつ匹ぴき残さず焼き払はらうであろうな」

「だが、そのあとで貴様は死ぬ。俺が必ず貴様を殺す。やってみる

か？」

「フン……」

　王は鼻を鳴らし、ゆっくりと息をした。急に気温が下がった。正直、生きた心地ここちがしなかったが、助かったようだ。てゆうか、トマトに助けられたんだけど。あくまで、決定的に助けてくれたのはトマトであって、きみじゃないからね？

「マリア！」

　馬鹿一号がすぐそばに降りたって、両りよう腕うでを広げてみせる。何、その体勢。ハグするよ、みたいな。きて、みたいな。いかないから。いくわけないし。

「マリア……！」

「だから！」マリアローズは額を押さえた。「もう……あ、それより、アーマンは──」

　あたりを見まわした。いない。淀よどんだ闇やみも、アーマンらしき姿も、見あたらない。

「逃にがした……？」

「あなたのせいなのだわ」マチルダが胸を張って空中からマリアローズを指さした。「あなたがグッダーを責めたてている間に、アーマンは逃げてしまったのよ」

「うっ……や、でも、それは……ま、まあ、そうなのかもしれないけど……」

「けれど、わたくしもあなたの言ったことには同感なのよ。──グッダー」

　しかし、さすが閃せん光こうの魔女だ。王を呼び捨てにするだけでは飽あき足らず、星を宿す瞳でしっかり王を見おろしている。それも、堂々と。

「わたくしはあなたがつくったエルデンで育はぐくまれたわけではないのだわ。わたくしを育てたのはわたくしの才能なのよ。もちろん、あなたのものになるつもりもない。あなたに命じられて何かを

する気だってさらさらない。あなたはわたくしの王ではないのよ。わたくしにとっての王はただ一人、わたくし自身だけなのだわ」

（そも、我や我が娘むすめのごとき真の魔術士には、王など不要）と青く輝く老人が言うと、かたわらの車くるま椅い子すに乗っている女がうなずいた。（まったくもって、お師様の仰おつしやるとおりです。わたしに必要なのは、お師様と、それから、わたしの大切な友だけ）

「きゅう！　くう！　きゅううっ！」きゅーが跳びあがって叫んでいる。かなり喜んでいるみたいだ。

「興味はあるけどねえ」踊ダンりシング羊シープは空の上で何かに腰こしかけているように見える。そこには何もないのに。「クルオよりもずっと長生きしてるみたいだし。友だちにはなりたいけど、仲よくはなりたくないかな。なれないだろうしね？」

「魔術士だけやないで！」カタリが肩かたを怒いからせてフンフン鼻息を荒くしている。「わしかてなあ！　ジブンみたいにけたくそ悪い王様なんぞいらんのじゃボケェッ！　これでもわしは元王子やしな！　なんやったら、王様にはわしがなったるわ！　エッヘン！」

「魚王国の王様ですカ」

「だあっとれ、ピィーンプッ！　わしかてなあ、半分は人間なんや！　イヤイヤ！　半分やないわ、頭のてっぺんから足の先まで、ぜぇーんぶれっきとした人間やっ！」

「へー。そうは見えないけど？」

「ハニィィーメリィィー！　ジブンの目ぇは節穴かァーい！」

「自分が仕えるものくらいは」ロム・フォウは矢を弓につがえて、平然と王に狙いを定めている。「自分で決められるよ。そしてそれは、きみじゃない」

　ロム・フォウの隣となりでアルファが、うぉん、と吠ほえた。

「オォー」飛燕がウッシシと笑って、いつでも飛びだせそうな構えをとった。「いィーコトゆゥーじゃねェーか、テメェー。なんつったっけ、ランボーだっけかァ？」

「ロム・フォウでしゅ！」ユリカがすかさず訂てい正せいすると、飛燕は「そォーっかそっか。ロリポーな。ロリポー。悪わりィ悪ィー」と頭を掻かいてみせた。

「ロム・フォウだッ！」トワニングが飛燕を一いつ喝かつして、筋肉という筋肉をムキムキモキモキ怒ど張ちようさせた。「──筋肉コレさえあれば、何でもできるッ！　王などいらぬ……ッ！」

「ふぅぅぅぅぅぅぅぅ……」サフィニアは息を吸いこんで、キング・グッダーにゆっくりと両手を差しむけた。「……いつでも、いけます。たとえ相手が……魔導王でも……！」

「うつけどもがァ……」キング・グッダーは首を左右に曲げて、また体内から例の光をもらしはじめた。「つけあがりおってェェ。汝うぬらは余の手て駒ごまにすぎぬ。それがわからぬというのなら、思い知らせるも面めん倒どうだァァ。灰かい燼じんに帰さしめてくれるわァァァ」

「名案だと思うわ」

　いつからそこにいたのか。

　振り返る。

　女は今にも倒たおれそうなほど傾かしいだ建物の縁ふちに立っていた。

「でも、どうせなら、エルデンごと壊こわしてしまうのはどうかしら。すべてが壊れゆくさまを、あたくしは見たいのです」

「紫しのヴェロニカ、か」キング・グッダーが女に視線を向けると、その目からピンク色の光線が発射された。「しゃしゃり出てくるでない、道どう化け女がァァ……ッ！」

「失礼ね」

　女は、ヴェロニカは、リルコは、ふわっと浮うきあがって身体からだを一回転させ、光線をよけた。光線は建物をジュッと焼いて、三分の一ほども融ゆう解かいさせてしまった。

「やっと準備が整ったからそれを報しらせたくて、あたくしはやってきたのです、キング・グッダー。それから、あなた」

　リルコが誰を指して、あなた、と言ったのか。考えるまでもないし、誤解しようがない。リルコはなまめかしい笑えみを浮かべて、トマトクンを見つめている。

「今、ここには、あなたの大切な人や、あなたの大切な人が大事に思う者たちが、ほとんど全員いるのでしょう？」

「何……？」トマトクンは息をのんだ。「お前、まさか──」

「あたくしは、壊してしまいたくて。奪うばいたくて」

　リルコはいったい、何を言っているのだろう。

　愉たのしそうに。心底から、愉しくてしかたないといった様子で。

　リルコは何をするつもりなのだろう。胸の前で両手を合わせて。

「〝古こ代だい壊かい王おうの呪のろい〟」

「リルコ……ッ！」

　トマトクンが獲え物ものに飛びかかる猛もう獣じゅうのように跳ちよう躍やくした。大カタ懺スト滅ロフ刀アーが展開される。巨きよ大だいな食人花みたいに。

　リルコが合がつ掌しようしたまま両手を前に突きだす。

「起abo動rt.」

「させるか……！」

　トマトクンが咆吼して、大カタ懺スト滅ロフ刀アーの刃やいばが四方八方からリルコを取り囲む。リルコの胸を、腹を、刺さし貫つらぬく。リルコの右腕が斬きり破られる。左腕がちぎれ、右みぎ脚あしが裂さけ落ちる。リルコは血を吐はく。大量の血ち反へ吐どを。

「もう、遅おそいわ。始まってしまった。ああ、ようやく、あなた……あたくしを、見てくれたのね……」

「──馬鹿なことを……！」

　トマトクンが大カタ懺スト滅ロフ刀アーを引きよせると、リルコはばらばらと地面に落下して、散らばった。とても生きていられるような状態じゃない。よく即そく死ししなかったものだ。そうはいっても、虫の息だろう。

「あなたが、いつまでも……あたくしを、見て、くれない、から……」

「俺の」

　着地して、歯を食いしばったにしては、大きすぎる音だった。

　トマトクンは叫さけんだ。

「俺のせいだっていうのか！　俺のせいで、お前は……！」

「……そう、よ……みぃ……んな、あな……た、の……っ…………」

　リルコは声をあげて笑おうとしたのかもしれない。できなかった。目が半開きになる。口は開いたままだ。力ちから尽つきた。

　マリアローズはアジアンにしがみついてしまいそうになって、我が慢まんというか自制というか、とにかくやめた。光だ。光の柱がそこにも、あそこにも、遠くに、近くに、そこらじゅうに立っている。この魔術はシャッコーで見た。

　戦ストラ略テジ級ツク・魔マジ術ツクだ。

　超大規模な破は壊かいを引き起こす、古代魔術。

　光の柱が回る。回る。回っている。地面が揺ゆれる。揺れる。揺れている。光の柱が回転しながら高く、高く、のびてゆく。

「あら、大変」閃光の魔女が肩をすくめた。「この魔術は、いったん起動してしまったら途と中ちゆうで止めることはできないのだわ」

「そんな、他人ひと事ごとみたいに……」マリアローズは愕がく然ぜんとした。他人事みたい、じゃない。実際、他人事なのだ。だって、魔女は空を飛んでいる。飛べるのだ。もしエルデンがぶっ壊れて墜つい落らくしても、魔女には関係ない。超ちよう賢けん者じゃ

モーグとエヴァンジェリン然しかり。踊り羊然り。もちろん、キング・グッダーも。サフィニアだって飛べる。魔術士たちは。あとは、アジアンくらいか。魔女だの何だのはあてにならないとしても、サフィニアとアジアンで何人かは救えるかもしれない。どう説得するのかはさておき、なんとか他ほかの魔術士にも協力してもらって、ここにいる者たち全員が助かったとする。でも、それじゃダメだ。エルデンにいるのはマリアローズたちだけじゃない。
「……行かないと」

　マリアローズは駆かけだした。

　アジアンに腕をつかまれた。「行くって、マリア、どこへ……!?」

「決まってるだろ、銀の砦とりでだよ！　あそこには、きみの仲間だって──」

　光の柱が一いつ斉せいに爆はぜた。それぞれが何本にも分かれて無数の光の線になる。光の線は交こう叉さする。網あみ目め状になってあっという間に空を、いや、エルデンを包みこんでしまう。揺れが激しくなった。アジアンもろとも転んでしまいそうになる。転ばないけど。踏ふみとどまって、アジアンの手を振ふりほどく。走ろうとする。いきなりガガガーンと地面が裂けた。よりにもよってそれがちょうどマリアローズの真下で、しかも一いつ瞬しゅんの出来事だったものだから、「ふんっ」と足を開いて踏んばる羽目になった。おぅふっ。裂け目の幅はばはマリアローズの肩かた幅はばより広い。たぶん、倍近くある。いや、倍以上だ。股またが裂ける。裂けちゃう。アジアンが「つかまって！」と手を差しだしてきた。迷っていたら、強ごう引いんに抱だきよせられた。黒い翼つばさを羽ばたかせて、飛びあがる。キング・グッダーはすでに浮いている。「ヌウウウウウゥゥぅゥゥ。余の計画プランを狂くるわせるとは──下等な木こっ端ぱ魔術士風ふ情ぜいがァァァ！」とかなんとか言っているし、だいぶ腹に据すえかねているみたいだが、魔導王にさえリルコの魔術を抑おさえこむことはやっぱりできないらしい。「お魚ぎよぉぉぉっ……!?」カタリが裂け目にのみこまれそうになっている。「──カタリィィ……ッ！」マリアローズが身を乗りだして手をのばすと、アジアンがそっちに向かって加速した。
「クッ……！　でも、ここから間に合うか……!?　いや、間に合わせてみせ──」「はあぁぁぁぁっ……！」と、サフィニアが強きよう烈れつな旋せん風ぷうを起こした。カタリが木の葉みたいに巻きあげられる。「魚うおろ魚ろ魚ろ魚ろ魚ろ魚ろ魚ろ魚ろ魚ろ魚ろ魚

ろぉ……!?」「よし、これなら……！」アジアンが翼の角度を変える。ひっくり返るように、急な方向転てん換かん。カタリが近づいてくる。「カタリ……！」マリアローズが必死に差しのべた手は、でも、届かなかった。「まだだ……！」アジアンは黒こく翼よくを強く羽ばたかせる。上じよう昇しよう。同時に、左ひだり腕うで一本でマリアローズを抱きしめたまま、右腕をほどいた。黒い管がカタリをからめとる。「──魚うおぉぉっ!?　なんやコレェッ!?　気持ち悪っ……！」「我慢してくれ！　落ちて死にたくなければネ……！」「もももももももモチロンや！　我慢でもなんでもしたるわ！　もっかいアーニャちゃんに会わな！　せや、アーニャちゃんが銀の砦に……！」「銀の、砦……」マリアローズはアジアンにしがみついて、呟つぶやいた。銀の砦。あっちだ。城みたいに大きな建物だから、見える。今のところは崩くずれはじめているわけでも敵に襲おそわれているわけでもなさそうだが、見み渡わたせる範はん囲いのそこらじゅうで土つち煙けむりが上がっている。地割れ。陥かん没ぼつ。エルデンは崩ほう壊かいしつつある。「魚うおいぃぃぃぃぃっ、て、て、てッ、敵がくるでえ……ッ！」とカタリが叫んだ。マリアローズはハッとする。本当だ。敵。くる。飛んでくる。虫の大群みたいだ。いや、まだ遠いから虫みたいに見えるだけで、その正体は当然、虫なんかじゃない。悪魔どもだ。たしか、大地じ獄ごく竜りゆう騎き兵へい団だったか。アジアンが囮おとりになってどこかに誘ゆう導どうしたはずだが、何しろそのアジアンはここにいる。「あ、あかん！　このままやったら、わしはこのザマやし、マリアローズかて足手まといにしかならんやろ！　空の上なわけやし……！」「や、僕は地上でもわりとそうだけどね……」「でも！」アジアンはマリアローズを抱く左腕に力をこめる。「だからといって、下ろすわけには！　エルデンはもう保もたない……！」



それはたしかに、そうなんだけど。

飛燕とユリカが手に手をとりあって、刻一刻と広がる地面の裂け目から逃にげている。うぉん、うぉんっ！　三階建ての屋上でアルファがロム・フォウを呼んでいる。ロム・フォウはアルファのいる建物によじ登ろうとしている。ハニーメリーが「あっ……！」と深

い亀き裂れつに陥おちいりそうになって、危あやういところでピンパーネルがその手を引っつかんだ。「大丈夫！　ワタシが助けル……！」「いやッ、拙せつ僧そうの筋肉に任せいッ、ムハァ……ッ！」トワニングがピンパーネルの胴どうに腕を回して、ハニーメリーごと持ちあげた。「くうぅ！」ときゅーが指し示す方向に、トワニングはピンパーネルとハニーメリーを担かついで駆ける。何も担ぐ必要はないと思うんだけど。━と、きゅーが青い輝かがやきに包まれて、ふわっと浮きあがった。「きゅう!?　くうっ、きゅうきゅう……!?」（キューベルアドラス、どうか暴れないで！　ちゃんと安全なところまで運んであげるから！）エヴァンジェリンか。少なくともきゅーは助かる。喜ばしい、いいことなのだが、どうやらきゅーは納なつ得とくできないようで、ふるふる頭を振っている。涙なみださえ流している。「くうぅぅっ！　くうぅうぅっ、くうぅぅぅぅううぅ……っ！」自分だけ助かっても意味がない、仲間もーいつ緒しよじゃないと。そういうことか。もう、きゅーってば。こっちまで泣けてくるじゃないか。泣いてる場合じゃないんだけどさ。トマトクンは死んだリルコの前に立ちつくしている。「……トマトクン！」とサフィニアに声をかけられて、やっと我に返ったみたいだ。「━ああ。とりあえず、ここから離はなれ━」その途と端たん、トマトクンの身体が沈しずんだ。穴があいたのだ。トマトクンが落ちてゆく。「むう……」なんか、そのわりには落ちついちゃってるんだけど。落っこちても死なないと思ってるから？　死にはしなくても、離ればなれになっちゃったらまずいじゃないか。「……っ……！」サフィニアが頭を下にして垂直猛もう速そく降下。すっ飛んでゆく。サフィニアはトマトクンを抱きとめた。「━おお。すまんな、サフィニア」「……い、い、いいえっ！　むしろ……ごちそうさまというかっ、それよりも……！」

「ツオオォォォォォォウ……ッ！」

　トワニングがジャンプして、割れ目を跳とび越こえた。でも、またすぐ割れ目が。

「ヌオッホオオォォォォォォォォォウ……ッ！」

　その先にも、割れ目が。今度の割れ目はかなり大きい。

「ちょっ！　無理……！」ハニーメリーがめずらしく悲鳴をあげた。ピンパーネルは目をつぶって、トワニングにつかまっている。

「なんのォォォォォォォ……！　拙僧の筋肉にかかれば……ッ！」

　トワニングの筋肉が金色に光る。いや、筋肉が光っているわけではないのだろうが、トワニングが筋肉筋肉しているせいで、どうしてもそう見えてしまう。

「トォォォォォォリャアアアア
アァァァァァァァァァァァァァァァァァァ……ッ！」

　光り輝く筋肉が、舞まった。

「ウヒャッ！　オッサン、無む駄だに大活かつ躍やくだなァ
……ッ！」と飛燕が歓かん声せいをあげた。

　まあ、決して無駄ではないと思うけど。そう信じたいけど。

　トワニングは見事に割れ目を跳び越して両足で着地し、その衝しよう撃げきで地面が崩れた。

「ノォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ
ウ……ッ!?」

「──え、そん、な……」

　マリアローズはまばたきをした。トワニングがピンパーネルを右みぎ肩かたに、ハニーメリーを左肩に担いだまま、壊こわれた舗ほ装そう材や地じ盤ばんごと落下してゆく。

「髭ひげ……！」とトマトクンが叫んだ。

「トワニィーング……ッ！」とロム・フォウが。アルファが吠ほえた。

「きゅう……！」きゅーが青い輝きの中で激しく身をよじった。

「ピーンプッ！　ハニーメリィーッ！」とカタリが声を張りあげた。

　ユリカが振り向いて目を瞠みはった。「トワニング……!?」

　引き返そうとするユリカを飛燕が止めた。「ダメだ、ユ
リィ！　ッぶねえって……！」

「わたしが……！」サフィニアはトマトクンを抱いたまま、魔術で

何か、なんとかしようとしたのだろう。でも、トワニングとピンパーネルとハニーメリーはもう。

「大いに感謝せよォォ」

　王が嗤わらう。

　ゲヘラゲヘラ嗤う。

「余に最上級の感謝と忠誠と奉ほう仕しを捧ささげるのだァ。それは汝うぬら虫けらにも遥はるかに劣おとる哀あわれですらないヴァーカと紛まがい物どもの義務であァーる」

　テーブルか何かでもひっくり返すように、王が両腕をガバーッと持ちあげる。

「グッダァァァァァァァァァァァァ
リィィィィィィィィィィィィィィフト……ッ！」

　トワニングとピンパーネル、ハニーメリーだけじゃない。舗装材も地盤も停止した。そして一転、上昇しはじめる。

「ヌオオォォ!?　ムオオオオォォォォォ……ッ!?」

「…………ッ！」

「きゃあぁ!?」

　トワニングもピンパーネルもハニーメリーも、何がなんだかわからず多かれ少なかれパニクっているようだが、それはこっちだってそうだ。あのとんでもない王が、キング・グッダーがトワニングたちの命を救ってくれるなんて思いもよらなかった。そうとう恩着せがましいことを言っていたような気もするけれど、そのへんはまあ聞かなかったことにしてしまえばいいだろう。

　ともあれ、トワニングとピンパーネルとハニーメリーは無事だ。それが何よりも大切なことだ。

　でも、だから万ばん事じ解決とは当然いかない。というか、問題はほとんど解決していないと言ってもいいというか、残念ながらそう言うしかない。

　とてつもない音を立てて、エルデンの端はしのほうが欠け落ちた。端のほうといっても、数百メーテルはあるだろう。

　エルデンの崩落が本格的に始まっている。

　マリアローズはアジアンの首にかじりつくようにして何か言おうとした。だけど何を言えば？　外がい套とうの中からクルルが顔を出して、マリアローズを見つめている。そうだ。そうだよ。銀の砦だよ。行くんだ。行かないと。急がないと。でも、行ってどうなる？　どうする？　何ができる？

「クァハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハァァ」

　王が首を左右に曲げ、両眼から赤とも黄色ともオレンジ色ともつかない光をあふれさせて、両手の指を折ったりのばしたりした。

「予定よりはやや早いが、やむをえんかァ！　きたれ、ナ・イン……！　余のもとに！　九く頭ず竜りゅう型超ちよう弩ど級きゅう飛行戦せん艦かんマキシマムＡＭドラゴンとなりてェェェェェェ！　今こそ蘇よみがえり、余のために目覚め、働くのだァァ、ナ・インよォォォォォォォォォォォ……！」

『薔薇ばらのマリア19．たとえ明日あしたすべてを失うとしても』了

あとがき

　各種新人賞に投とう稿こうしていたころも順じゅん風ぷう満まん帆ぱんとは言いがたかったのですが、おめでとうございます、角川学園小説大賞で特別賞ということになりました、といったような電話を受けてからも、試練はつづきました。受賞作がカテゴリーエラー、つまりライトノベルではない、スニーカー文庫では出せないので、何か別の小説を書いてほしい、と言われまして、出した企き画かくがのちに某ぼうレーベルから刊行される某シリーズの原型となったお話です。主人公が二十代後半の青年で、妙みようにアダルトな雰ふん囲い気きだったものですから、これでいいのかなあと思いながらも当時の担当編集者がこれでいいんだと言うのでまあいいんだろうと思っていたらぜんぜんよくありませんで、当時の編集長に「おまえ一回東京こい」と呼ばれまして、行ったら会社の会議室で「おまえはライトノベルをわかっていない。ライトノベルとはこれこれこういうものである」という講義を受ける羽目になり、ほらな、やっぱりだめだっただろ、なんかだめな気がしたんだよ……でも、だったらこういうのがあるんだけど、と、電車の中かどこかで担当編集者にざっくり話して聞かせたのが、何を隠かくそう『薔薇のマリア』だったのです。

　そしてめでたく企画が通って、さあやるぞ、という段になってからも紆う余よ曲きよく折せつがありました。たとえば、１巻のつもりで書いた原げん稿こうがなぜか雑誌に載のることになって、別に１巻を書かないといけなくなったりとか。元１巻はＶｅｒ０としてちゃんと刊行されましたが、最初から雑誌連れん載さいと並行してお話を絡からめつつ進めるという形式は、頭がいいわけでも小説を書くのがうまいわけでもない自分にとっては大きな負担といえば大きな負担で、そのぶん貴重な経験になったとはいっても、『薔薇のマリア』という作品にとってはどうだったのか。いつも無理をして、絶えず背せ伸のびをして、無茶をして、がむしゃらに書いてきたので、今から振ふり返かえればもっとこうすればよかったとか、こんなふうにしたかったとか、思うところがたくさんあります。僕は後こう悔かいはしないのですが、反省はけっこうするのです。ときには悶もん絶ぜつするくらい、激しく反省します。『薔薇のマリア』を書くのは、正直に言って、本当に苦しかった。自分が未熟で、下手で、いつまでたっても自分が望むようには成長できなくて、最初の担当編集者に「いやあ、しかし、うまくなったねえ」と

言われたときも、そうかなあ、そうでもない気がするなあ、としか思えませんでした。この気持ちはいまだに変わりません。『薔薇のマリア』１巻が二〇〇四年十二月発売なので、そろそろ丸九年。仕事として小説を書きはじめてから十年目に入ろうとしていて、今や中ちゆう堅けんだとかベテランだとか言われたりもするのですが、そんな実感は皆かい無むです。

たぶん『薔薇のマリア』のせいなのではないかと思います。『薔薇のマリア』は常に僕の前に立ちはだかる壁かべで、どうやっても乗のり越こえられないものだから、自分が小さく、無力に感じられてしかたない。原稿を書きあげてから致ち命めい的てきなミスを発見して、深夜に転がりながら泣なき叫さけんだことがあります。病は気からといいますが、体調を崩くずして、起きあがれなくなったこともあります。いろいろな検査を受けまくったら腫しゆ瘍ようマーカーで危険な数値が出て、一ヶ月だかあけてから再検査しろと言われてその間気が気でなく、すぐにもう一回検査を受けて問題ない数値だったのでとりあえずほっとして、でもこれで大だい丈じよう夫ぶなんだろうかと不安になって眠ねむれない夜を過ごしたりもしました。今となっては笑い話ですが当時の自分は深刻で、悪い病気だったらどうしよう、余命一年とかだったらそれまでに何を書こう、やっぱり薔ば薇らマリを終わりまで書くべきだろうか、他ほかに書きたいものはないのか、などと大いに悩なやんだものです。

ですが最大の懸け念ねんは、このシリーズを完結まで持ってゆけるか、ということでした。ありがたいことに、中ちゆう盤ばんまでは数ヶ月ごとに全巻増刷がかかるという状じよう況きようがつづいたのですが、爆ばく発はつ的な売れ行きとはいえない。そうなれば、巻数がかさむごとに売れなくなることは目に見えている。実際、そうなりました。打ち切られたらどうしよう。いきなり次で、とか、あと二冊で、とか宣告されたら、とうていまとめきれない。どうしよう。

じつはシリーズを始めたときに「最低本編二十冊プラス外伝数冊」という規模の物語だと担当編集者には話していました。そろそろ終わらせたらどうだろう、という話が出はじめてからも、僕はこの線は譲ゆずれない、と頑がん固こに言い張って、関係者各位に大変迷めい惑わくをかけてしまったのですが、自分の力ではどうしてもそれだけの分量が必要だと考えざるをえなかったのです。最終的には編集部も営業サイドも僕のわがままを聞き入れてくださって、本当に心から感謝しています。それからもちろん、ＢＵＮＢＵＮさ

んをはじめ、本書の制作、出版、販はん売ばいに関かかわったすべての方々、そして今、本書を手にとってくださっている皆みな様さまにも感謝と愛を。お陰かげ様さまでついに『薔薇のマリア』全巻がＢＯＯＫ☆ＷＡＬＫＥＲを皮切りに電子書しよ籍せき化されることになりました。こちらもよろしくお願いします。

　次巻で『薔薇のマリア』は完結します。

　本当に終わるのだろうか、と思っている自分がいます。

　終わるだろう、と思っている自分もいます。

　信じがたいことに、いくらか予定外の要素はありつつも、当初の構想どおりに物語は進んで、終着点にたどりつこうとしています。

　あと少しなので、最後までおつきあいいただければ幸いです。

十文字　青

カバー・口絵・本文イラスト / BUNBUN

デザイン / 朝倉哲也 + design CREST

薔ば薇らのマリア

19．たとえ明日あしたすべてを失うしなうとしても

十じゆう文もん字じ　青あお

平成25年10月1日　発行

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『薔薇のマリア　19．たとえ明日すべてを失うとしても』

平成25年10月1日初版発行

発行者　山下直久

発行所　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ

〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3

03-3238-8745（営業）

編集　角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見1-8-19

03-3238-8694（編集部）

http://www.kadokawa.co.jp/

BOOK☆WALKER